

第326図 第120号住居址出土遺物（1/3）

④ 第124号住居址（第325図）

遺構 当住居址は第120号住居址の西に位置し、南東部は第119号住居址と同一床面にて重複する。

プランは北東部コーナーと東と考えると隅丸長方形を呈し、規模 $6.2 \times 5.1m$ を測る。長軸方向はN-28°-Eである。

壁高は10~15cmを測る。床面は西にやや傾き、ピットが多く検出されている。床面は全体に軟弱である。

カマドは検出されていない。主柱穴はどれと決め難い。

遺物 遺物は土師、須恵の小片が出土するのみである。

時期は不明である。

④ 第125号住居址（第327・328図）

遺構 本住居址は第127号、128号住居址の南にあり、西には第126号住居址が近接する。

プランは隅丸長方形を呈し、規模9.5×8.2mを測る大形の住居址である。長軸方向はN-51°-Wである。壁高は25~30cmを測る。周溝が北西南側を除いて検出されている。南西側の周溝は西で壁より20cmほど内に入っている。後述するが遺物に時期差が認められる点を考えると同一床面の重複住居址の可能性が強い。

床面はほぼ平坦で全面に固く堅緻である。カマドは北隅にあり、焼土が残るのみである。焼土に混じって礫がみられる。

主柱穴はP₂、P₃、P₄、P₇、P₈の4本が検出されている。

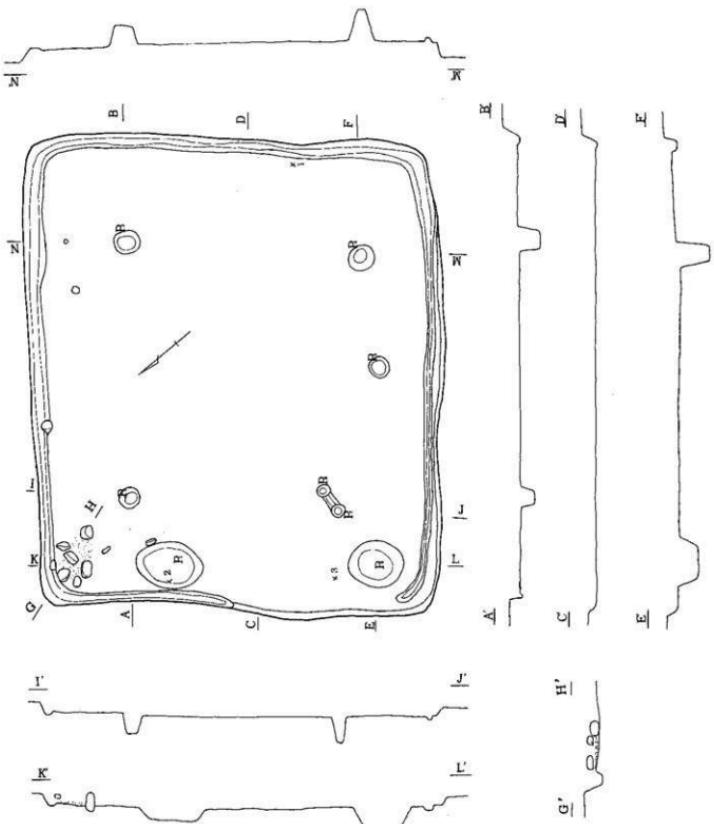
南東壁ぎわ中央床面より灰釉皿（第328図-10）、P₁壁ぎわから灰釉壺（13）、P₆の東より土師の壺（3）が出土している。

遺物 図示したものは土師と灰釉のみであるが、須恵もある。甕と壺、高台付壺が出土している。

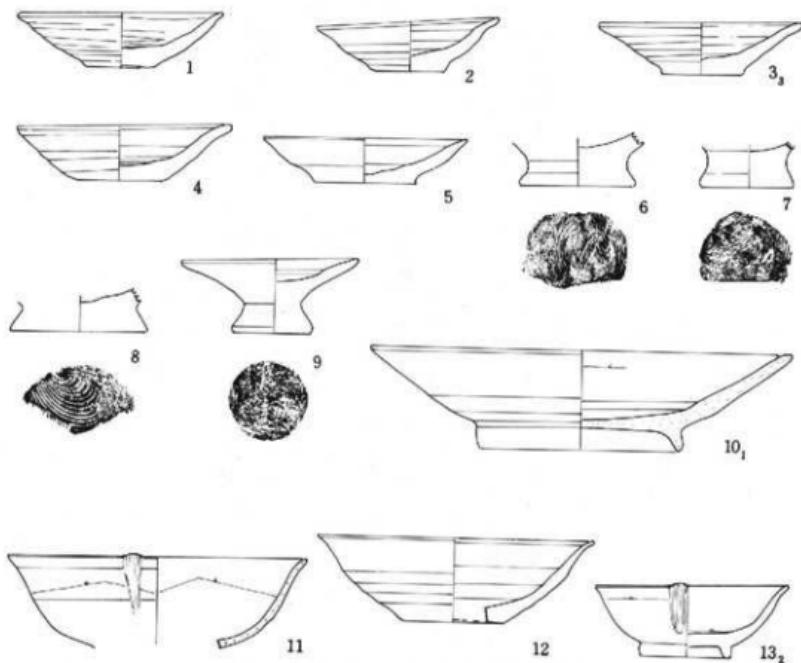
土師は1~8以外にはハケ目を持つ小形甕がある。1~5は小形の壺である。6~9は柱状高台を持つもので9は段皿である。内面黒色処理はみられない。

灰釉は段皿（10）と壺（11~13）それに瓶が出土している。灰釉は1~9より古い時期（奈良・平安V~VI）の所産と考えられる。

本址の最終時期は奈良・平安Ⅷ期に属するものである。



第327图 第125号住址实测图



第328図 第125号住居址出土遺物（1/3）

④ 第126号住居址（第329、330図）

遺構 本住居址は第125号住居址と西に接して検出されている。

プランは隅丸方形で規模は $4.3 \times 4.2\text{m}$ を測る。長軸方向は $4.3 \times 4.2\text{m}$ である。

壁高は北東部で35cm、南西で20cmである。周溝が北西から北東部にかけてL字形にみられる。

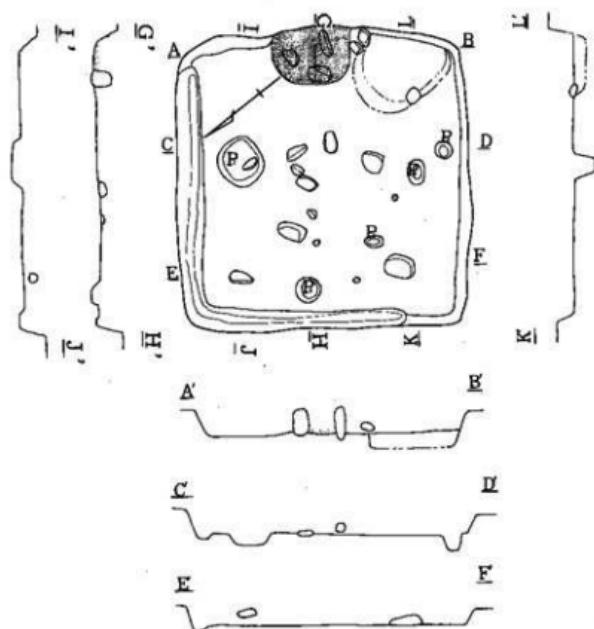
床面は南西にやや傾き、全体に固く堅緻である。中央部を中心に礫が乱雜に検出されている。P₄の西には平盤な石がすえられた状態で検出されている。

カマドは南西壁中央に造られており、袖石が両脇にみられるが封土は残っていない。

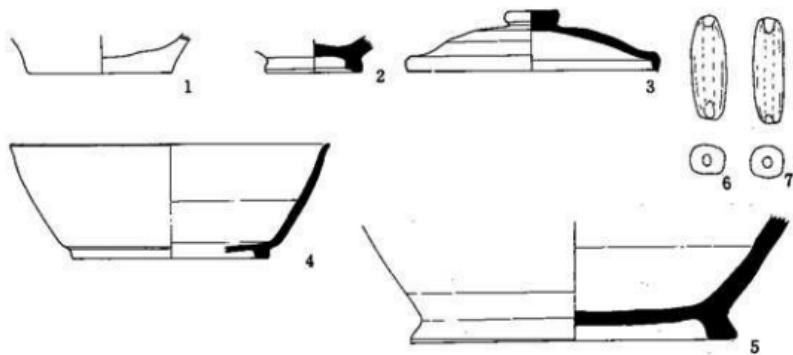
主柱穴として確実なものはP₃ 1本である。

遺物 遺物は少ない。土師と須恵があり灰釉はみられない。

土師は1の甕の外に、壺がある。須恵は図示したもの以外に高台を持たない壺が出土している。



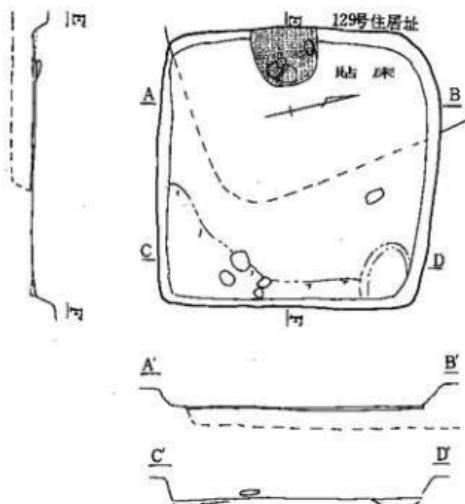
第329図 第126号住居址実測図 ($S = 1/80$)



第330図 第126号住居址出土遺物 (1/3)

土器（6・7）が2個出土している。

時期は奈良・平安Ⅲ期に属する。



第331図 第127号住居址実測図 (S = 1/80)

⑤ 第127号住居址 (第331図)

遺構 本住居址は第125号住居址の北東にあり、西には第128号住居址がある。西側大半は亦生期の第129号住居址に貼床している。

プランは隅丸方形で、規模は $4.0 \times 4.0\text{m}$ である。長軸（カマド）方向はN-78°-Wを測る。壁高は北で30cm、南で25cm前後である。第129号住居址との床面差は25cmを測る。床面は軟弱で貼床もわずかに痕跡を認める程度である。

カマドは西壁中央にあり焼土を残すのみである。柱穴は検出されていない。

遺物 遺物は少ない。土師の壺と須恵の壺・甕があるが図示できるものはない。

打製石斧と敲打器が各1点ずつ出土している。

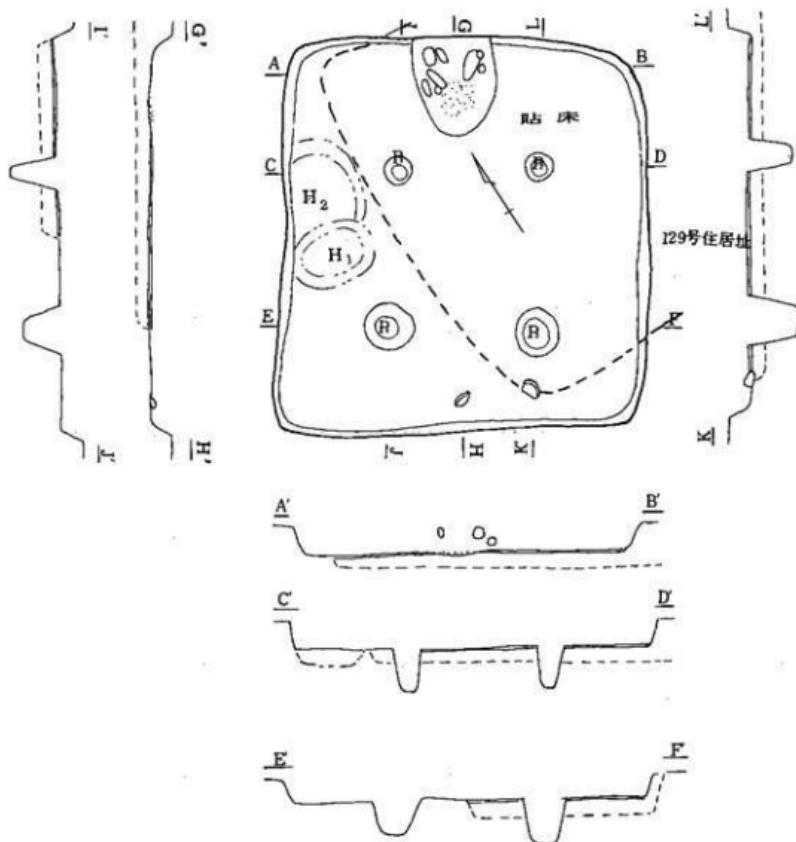
時期は不明である。

⑤ 第128号住居址（第332・333図）

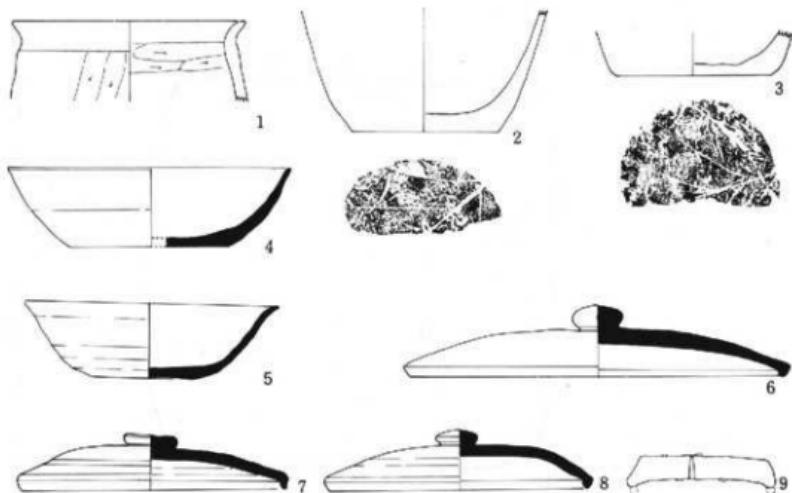
造構 本住居址は第125号住居址の北東に近接し、東大半は第129号住居址に貼床しており、東には第127号住居址がある。

プランは隅丸方形を呈し、規模は $5.6 \times 5.2\text{m}$ を測る。長軸方向はN- 32° -Eである。壁高は35~30cm、第129号住居址との床面差は20cmほどである。

貼床は所々にタタキが良く認められるが、全体に軟弱である。カマドは北東壁中央に造られており。袖石は認められない。



第332図 第128号住居址実測図 (S = 1/80)



第333図 第128号住居址出土遺物（1/3）

主柱穴は4本である。

遺物 遺物は少ない。土師と須恵で灰軸はみられない。

1～3は土師の長胴形の甕である。

須恵は環（4・5）と蓋（6～8）、甕がある。环はいずれも回転糸切糸技法によって切り離される。

鉄器は麻皮剥器（9）が1点出土している。

時期は奈良・平安Ⅱ期に属する。

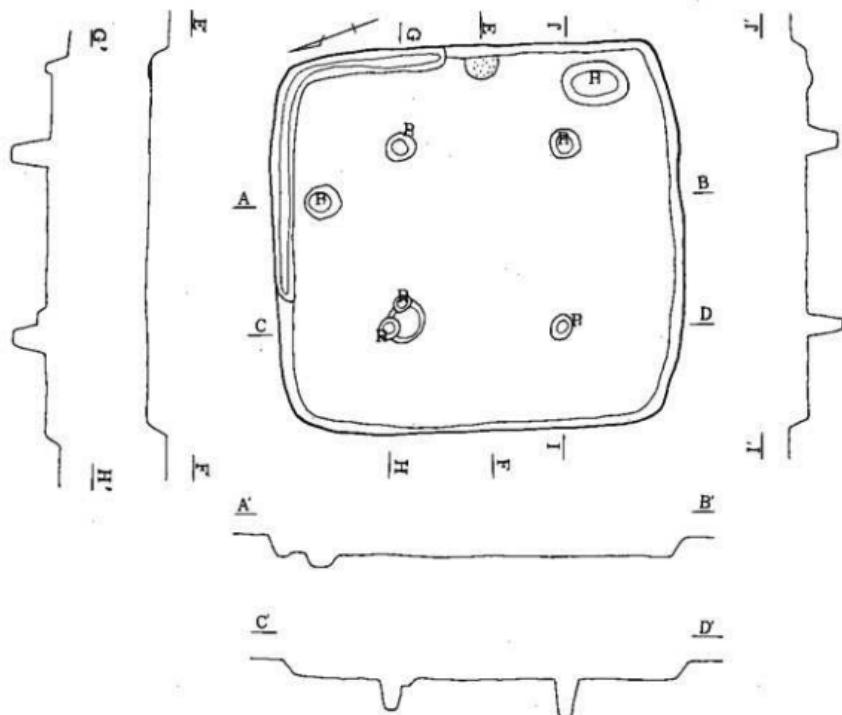
㊯ 第130号住居址（第334図）

造構 本住居址は第127号、128号、131号住居址の北東に位置している。

プランは隅丸方形を呈し、規模は $5.9 \times 5.5m$ を測る。長軸方向はN-17°-Eである。

壁高は25～30cmを測る。床面はほぼ平坦で全体に固く堅緻である。カマドは東壁中央に造られわずかに焼土を残すのみである。

主柱穴は4本である。



第334図 第130号住居址実測図 (S = 1/80)

遺物 遺物は土師の小片がわずか出土した外は、編物用鍛石が3点出土するのみである。
時期は不明である。

⑤ 第131号住居址（第335、336図）

遺構 本住居址は第125号、126号住居址の北西に位置し、東には第128号、127号住居址、北西には第42号住居址がある。北東部は第132号住居址に貼床している。

プランは隅丸方形で規模は4.0×3.8mを測る。長軸方向はS-70°-Eである。壁高は30cm前後、第132号住居址との床面差は25cmを測る。

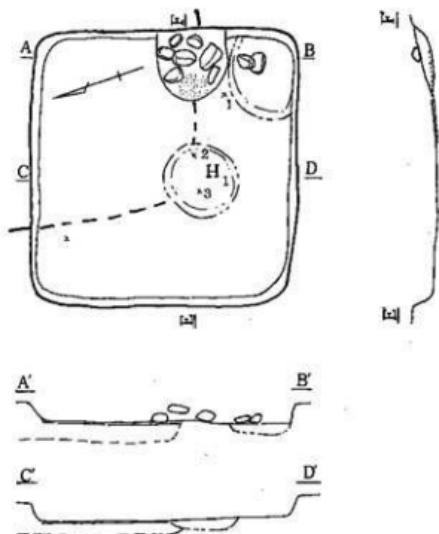
貼床は軟弱で痕跡をとどめる程度であるが、他は固く堅緻である。カマドは東壁やや南寄りに

造られている。左側の袖石はみられず、
封土は残っていない。

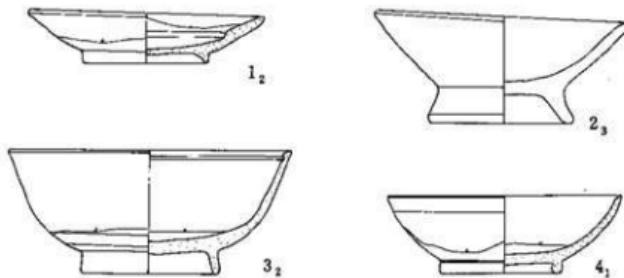
柱穴は検出できなかつた。ほぼ中央に
灰だまりがあり、灰軸の塊(第336図-3)
と段皿(1)と土師の壺(2)が出土し
ている。またカマド右手前より灰軸塊(4)
が出土している。

遺物 遺物は少ない。図示したもの以
外では、須恵の甕、土師の壺がある。

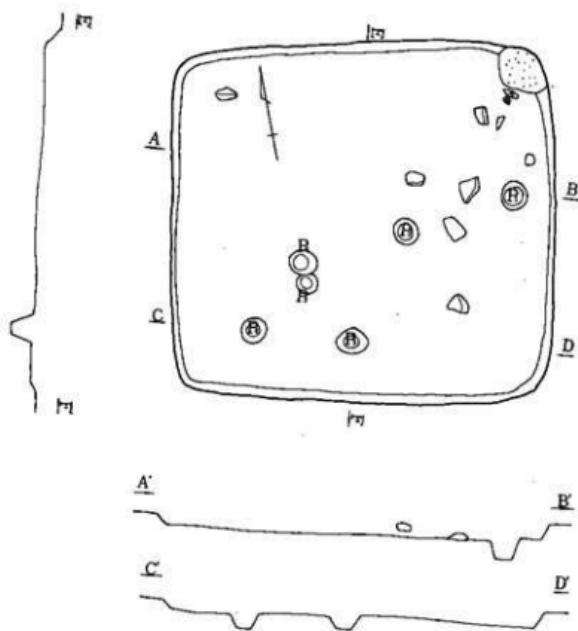
時期は奈良・平安VI期である。



第335図 第131号住居址実測図 ($S = 1/80$)



第336図 第131号住居址出土遺物 (1/3)



第337図 第137号住居址実測図 ($S = 1/80$)

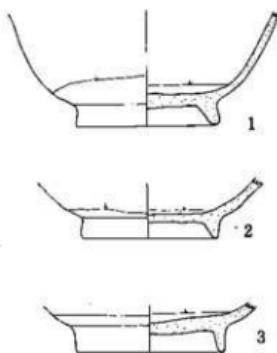
◎ 第137号住居址 (第337・338図)

遺構 本住居址は第138号住居址とともに調査区域の遺構の中では、最も北西に検出されたものである。

プランは隅丸方形を呈し、規模は $5.5 \times 5.1\text{m}$ を測り、長軸方向はN-75°-Eである。

壁高は15~20cmで床面は南東にやや傾いている。タタキはあまり顕著ではない。

カマドは北東隅にあり焼土が残るのみである。柱穴はP₁, P₄の2本が考えられる。



第338図 第137号住居址出土遺物
(1/3)

遺物 遺物は少ない。1～3は灰釉の壺である。
他には、土師の壺・甕、須恵の甕がみられる。
打製石斧3点、磨製乳棒状石斧1点が出土して
いる。

時期は奈良・平安V～VI期である。

㊯ 第138号住居址（第339・340図）

遺構 本址は第137号住居址の北東に位置してい
る。

プランは南東部がやや張り出しが、隅丸方形を
呈し、規模は3.9×3.7mを測る。長軸方向はN－
73°－Wである。

壁高は15cm前後である。周溝が北側と南側にみ
られる。

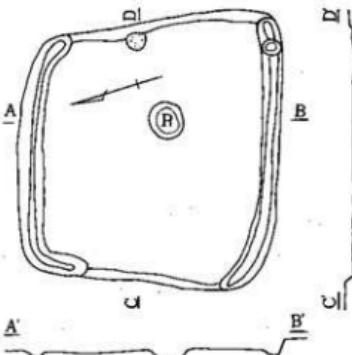
床面は凹凸があるが全体に堅緻である。カマド
は東壁中央よりやや北寄りに焼土が残っている。

主柱穴は検出されていない。

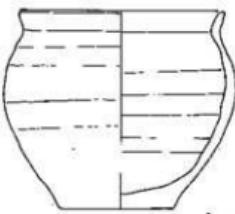
遺物 遺物は少ない。土師が主体である。須恵
は高台付壺、灰釉はハケ塗りの壺の破片が出土す
るものである。

土師は図示した外の長胴甕と高台を持たない甕
がある。1はロクロ整形による小形甕、2・3は
壺で内面黒色処理される。

時期は奈良・平安IV期である。



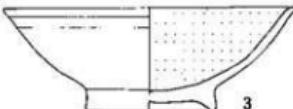
第339図 第138号住居址実測図 (S = 1/80)



1



2



3

第340図 第138号住居址出土遺物 (1/3)

(4) 時期不明の住居址

今まで誌してきた住居址の外に確認にとどまったもので時期不明の住居址が4軒ある。

第91号住居址は第94号住居址の南にあり一部落ち込みが確認されただけのもので、大半は除外地に続くものである。遺物は出土していない。

第133号住居址は調査区南東部の畑に位置している。根菜類の栽培のため搅乱が激しく一部床面を確認したものである。

第134号住居址は第76号住居址の東除外地畑の断面に落ち込みを確認したものである。

第135号住居址は第72号住居址の北に同一床面にて重複するもので、大半は除外地に続いている。

なお、第44号・53号住居址は精査の結果、住居址として認めることができなかつたため欠番となっている。さらに第109号住居址は第99号住居址と同一住居址と整理の段階で認定したため欠番となる。

2) 土壙 (第341~346図)

土壙が69基確認されている(欠番5個ある)。住居址内に検出されたものを付属するものか、土壙とするかは離しい作業である。それ故土壙としたものの中にも住居址施設のものもあつたり、その逆の例も多いに考えられることをことわっておきたい。

遺物を伴うものが少なく時代を認定できたものは、縄文(7、10、24)3基、平安(1、12、51、55)4基計9基だけである。多くは縄文時代のものと考えられる。

プラン等は土壙一覧表にまとめてあるので参考とされたい。プランは円形、梢円形を呈すものがほとんどである。平安時代のものには方形のものと円形のものがある。断面形は種々ある。

以下若干の土壙について誌すこととする。

(1) 第1号土壙 (第341、346図)

第15号、16号、51号住居址の空間部にあり、覆土を第1号柱穴址が掘り込んでいる。

プランは西側がやや不整であるが、隅丸長方形を呈し、規模は192×83cmを測り、長軸方向はN-E 20°-Wである。断面形はタライ形で深さ22cmである。

覆土は自然堆積を示し、底面南側には自然の礫が露出している。南壁ぎわや西寄りにⅢ層黒褐色土に落ち込むように、灰釉の壺(第346図-1)が出土している。

時期は奈良・平安VI期である。

(2) 第7号土壙 (第341、346図)

第38号住居址の東域に検出されたもので、プランは円形を呈し、規模は77×68cmである。断面形はドラム缶形で深さ52cmを測る。

内部より縄文の小形深鉢 (第346図-1) が出土する。口唇下に一条沈線を横走させ、脇部は縄文地に竹管の波状文が施される。

(3) 第24号土壙 (第342、346図)

第61号住居址の南域にあり、円形を呈す。規模は98×87cm、深さ48cmを測り、壁はゆるやかで鉢形の断面を持つ。底には縄文深鉢土器4個体 (第346図-2~5) がつぶれ込んで出土している。びっしりと敷き並べた状態で検出されおり故意に壊して埋設したものである。縄文中期後葉I期曾利I式の良好な資料である。

(4) 第51号土壙 (第343、346図)

第99号住居址東域に検出されたもので円形を呈す。規模は78×76cmで断面皿形で深さ18cmである。底より須恵の坏 (第346図-7) が出土している。奈良・平安II期に属する。

(5) 第54号土壙 (第343、346図)

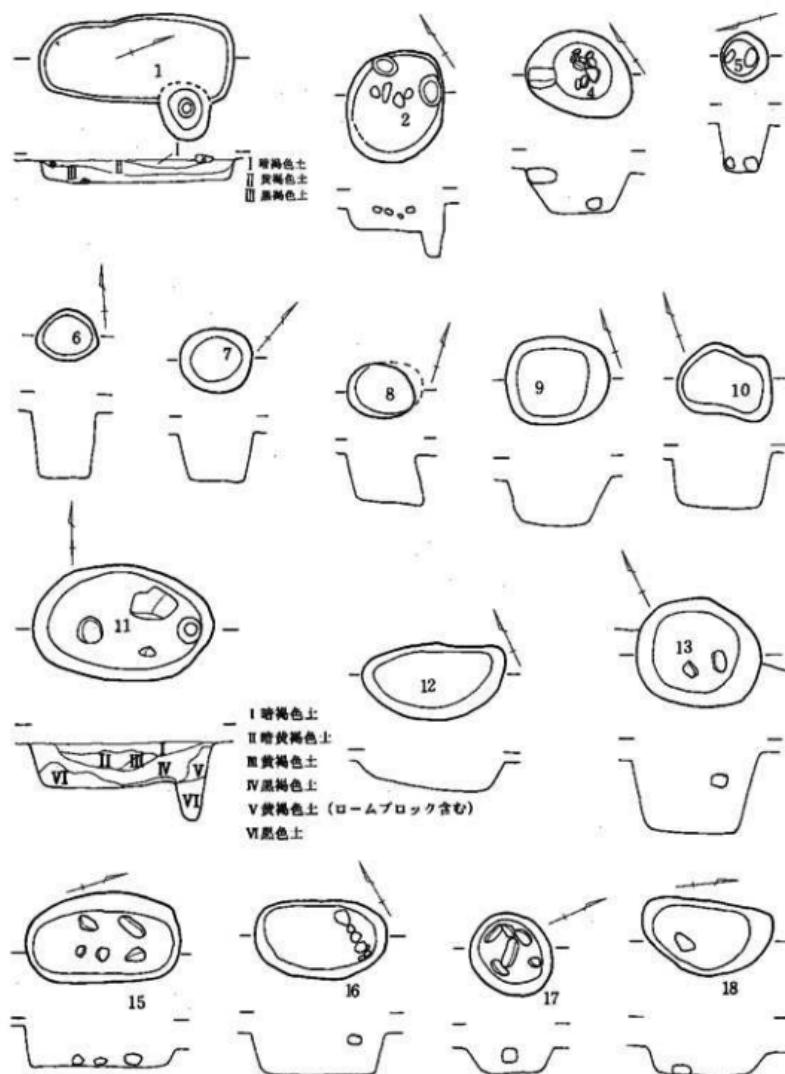
第111号住居址の南側を壊して造られた土壙である。長方形を呈し、規模は260×160cm、深さ33cmを測る。覆土は炭化物をわずかに含む黒褐色單一層である。底は平坦である。

中央北寄り底からわずかに浮いて灰釉の小瓶 (第346図-8)・壺 (9)・皿 (10)、刀子 (11) の4点の副葬品があり、墓である。時期は奈良・平安VI期である。

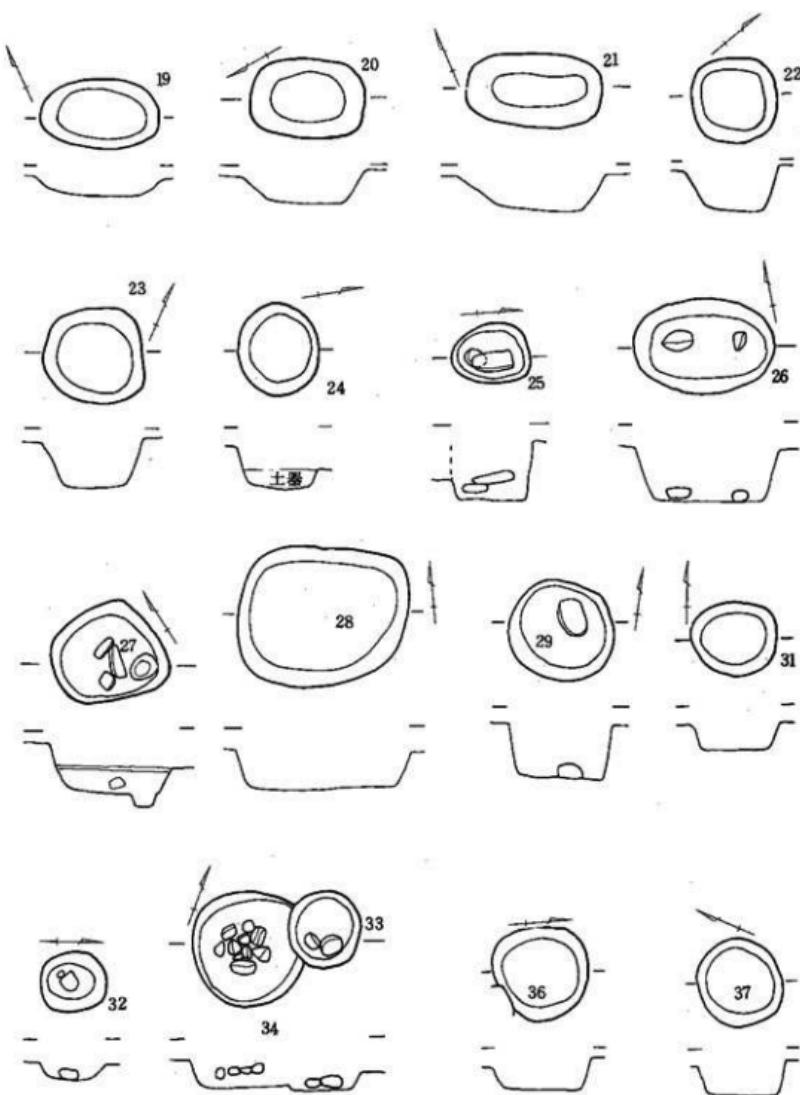
番号	位 置	平面形	断面形	口径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)	時代	備 考
1	15号と51号住の間	隅丸長方形	タライ形	207×94	192×83	22	平安	第1号柱穴址が覆土振り込む
2	9号住カマド南	円形	タライ形	120×105	102×83	25		北東部ピットもつ 覆土中
4	38号住内	円形	鉢形	110×90	60×57	48		底近くに石組あり
5	"	円形	ドラム缶形	52×50	38×35	50		底に石あり
6	"	円形	ドラム缶形	65×57	52×42	68		
7	"	円形	ドラム缶形	77×68	53×45	52	縄文	縄文土器
8	"	楕円形	台形	68×55	68×52	48		北東部袋状となる
9	37号住内	隅丸方形	鉢形	115×93	73×70	48		
10	32号住内	不整椭円形	ドラム缶形	104×68	85×53	50	縄文	縄文土器
11	47号住内	楕円形	タライ状形	190×123	163×103	47		覆土中自然石あり
12	40号住南	長楕円形	皿形	150×82	124×58	38	平安	土師甕あり・須恵

番号	位 置	平面形	断面形	口径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)	時代	備 考
13	27号住北壁	円形	ドラム缶形	133×118	90×85	73		覆土中自然石あり
15	49号住内	橢円形	タライ形	165×93	143×63	42		底に自然石あり
16	"	橢円形	タライ形	140×80	118×64	42		覆土上層に礫あり
17	"	円形	皿形	90×80	75×58	28		覆土中に配石あり
18	"	不整橢円形	皿形	140×78	102×63	25		底に自然石あり
19	49号住南	橢円形	皿形	127×73	93×52	32		
20	"	隅丸長方形	鉢形	123×83	78×53	33		
21	"	長橢円形	鉢形	143×80	100×33	33		
22	56号住北	円形	鉢形	92×90	67×63	38		
23	"	円形	鉢形	105×100	78×72	52		土師甕破片
24	61号住南域	円形	鉢形	98×87	70×63	48	縄文	縄文土器4個体つぶれて入れ込まれている
25	62号住南西角	橢円形	ドラム缶形	84×68	68×50	63		覆土下部に配石あり
26	62号住内	橢円形	タライ形	148×100	122×64	53		底に自然石あり
27	75号住内	不整円形	鉢形	112×102	84×85	52		覆土中に配石あり 東側にピット持つ
28	"	隅丸方形	タライ形	180×145	155×113	34		
29	"	円形	ドラム缶形	115×105	95×82	53		底に自然石あり
31	89号住北	円形	タライ形	90×82	68×54	26		
32	"	円形	皿形	68×62	48×36	15		底に自然石あり
33	"	円形	皿形	82×76	64×60	35		土壤34を切る底に石あり
34	"	円形	皿形	122×120	102×108	30		覆土中に配石あり
36	78号住北壁	円形	タライ形	100×98	78×72	33		
37	79号住南東壁	円形	タライ形	96×90	72×70	27		
38	79号住内	橢円形	ドラム缶形	96×78	74×54	48		
39	84号住内	円形	ドラム缶形	58×43	45×36	62		
41	83号住内	円形	ドラム缶形	85×75	68×58	72		
42	"	円形	ドラム缶形	78×72	48×45	53		
43	85号住と86号住中間	不整橢円形	皿形	232×175	208×152	13		
44	95号住内	円形	ドラム缶形	72×72	50×52	40		
45	103号住東壁	橢円形?	タライ形	125×?	103×?	32		
46	"	円形?	タライ形	130×?	105×?	25		
47	99号住内	円形	タライ形	85×80	60×52	25		

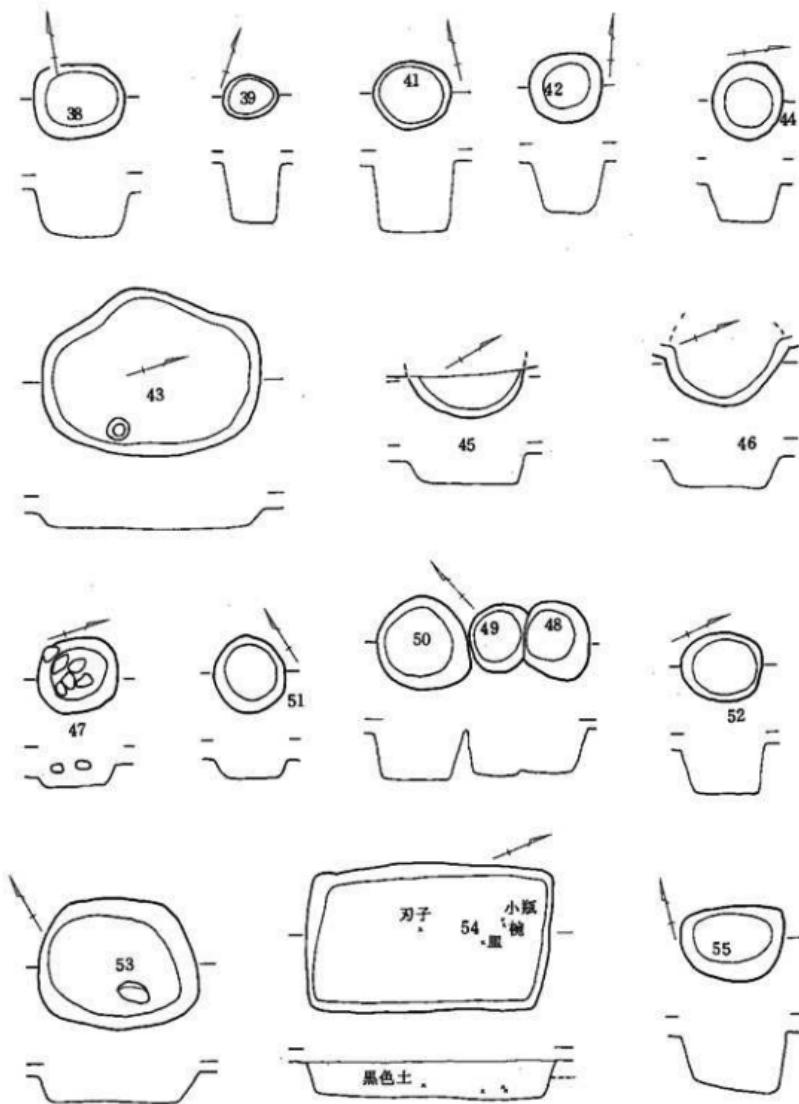
番号	位置	平面形	断面形	口径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)	時代	備考
48	99号住内	円形	ドラム缶形	85×75?	52×50	45		土壤49と重複
49	"	円形	ドラム缶形	73×65?	53×50	45		土壤48と重複
50	"	不整円形	ドラム缶形	100×95	72×70	45		
51	"	円形	皿形	78×76	58×52	18	平安	須恵壺・土師壺破片
52	"	円形	ドラム缶形	85×73	68×58	42		
53	111号と114号住の中間	不整椭円形	皿形	168×138	135×104	33		土師壺・土師壺破片
54	111号住の南を 切っている	長方形	タライ形	260×160	240×128	33		刀子・壺・水瓶出土
55	103号住の東	梢円形	ドラム缶形	110×80	82×50	65	平安	底傾斜する。須恵器
56	110号住内	梢円形	鉢形	95×68	62×48	45		
57	111号住と104号住の中間	ハート形	皿形	208×110	192×88	23		底傾斜する
58	108号住内	梢円形	皿形	142×98	110×56	35		
59	115号住北東壁	梢円形	皿形	120×98	85×70	35		
60	124号住南	梢円形	鉢形	210×130	145×72	55		底傾斜する
61	111号住西	隅丸方形	タライ形	120×115	88×88	43		
62	114号住北	梢円形	タライ形	153×130	132×110	12		
63	"	梢円形	ドラム缶形	148×102	110×65	65		
64	124号住西	梢円形	鉢形	113×82	80×52	40		
65	124号住北西壁	梢円形	タライ形	182×101	162×88	28		124号住と重複
66	116号住の西	隅丸方形	皿形	200×138	183×122	42		
67	116号住の北	梢円形	皿形	302×140	270×115	33		底中央部高くなる
68	118号住内	梢円形	皿形	102×87	85×70	30		土壤69と重複する
69	"	梢円形	皿形	85×68	70×53	15		
70	118号住と124号住の中間	梢円形	皿形	145×105	118×78	13		
71	124号住西	梢円形	ドラム缶形	70×58	45×35	50		
72	118号住西	円形	皿形	133×113	103×86	33		底傾斜する
73	118号住と121号住の中間	長梢円形	皿形	200×90	185×70	18		
74	"	不整円形	皿形	180×160	158×138	8		



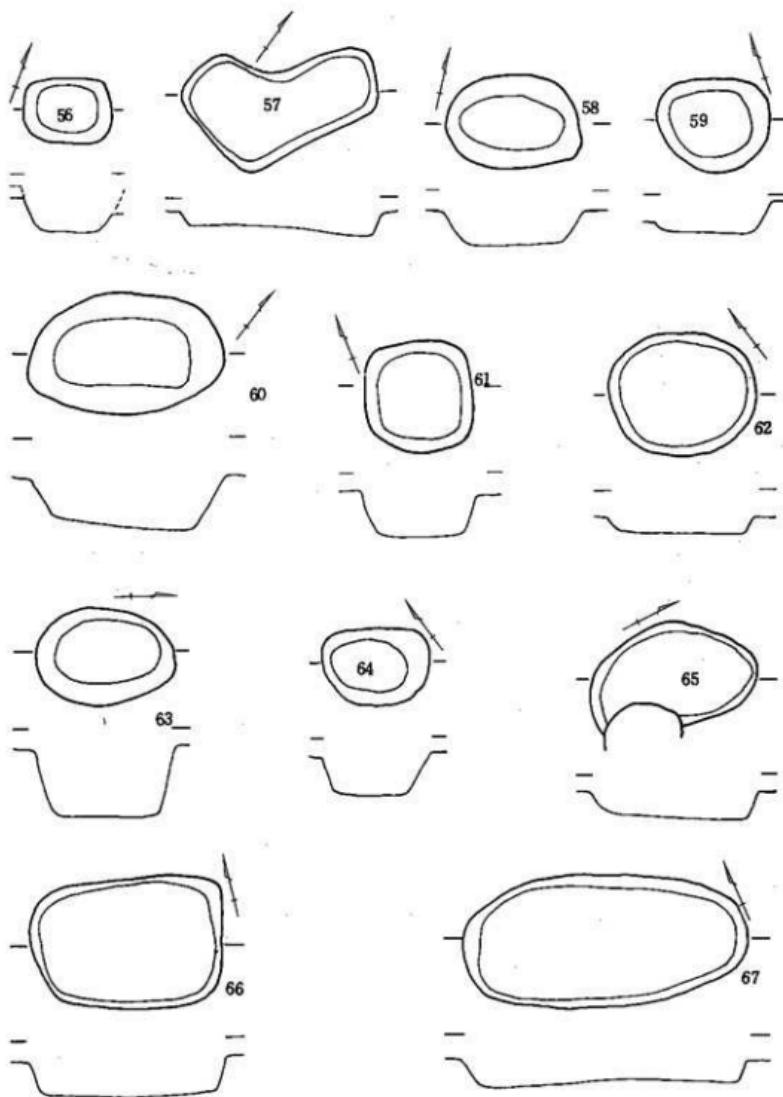
第341図 土壤実測図 ($S = 1/60$)



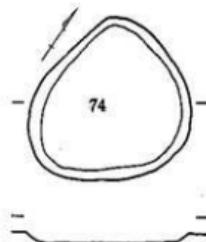
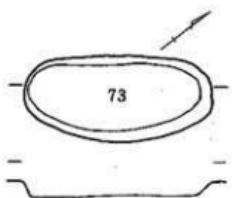
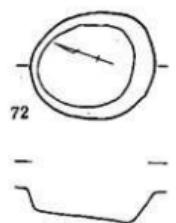
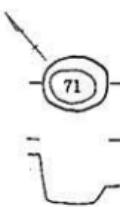
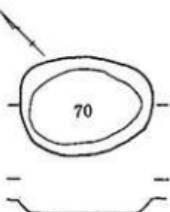
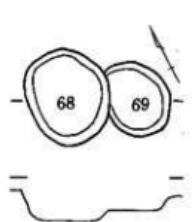
第342図 土壤実測図 ($S = 1/60$)



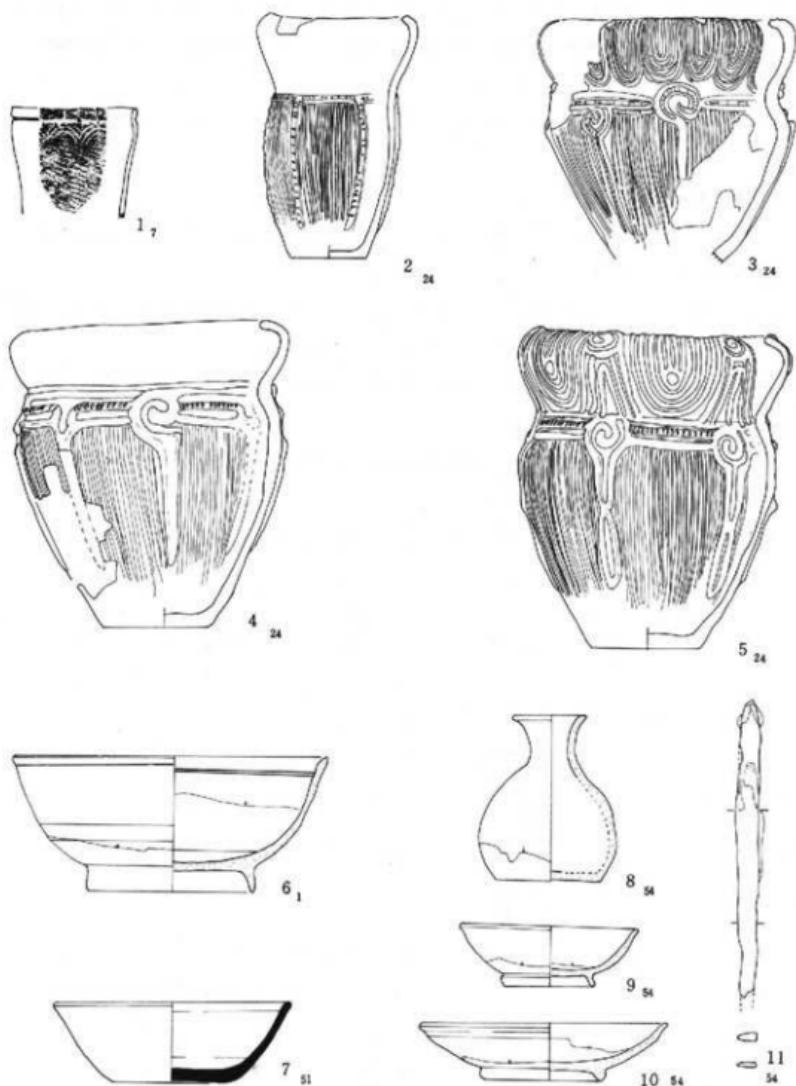
第343図 土壌実測図 ($S = 1/60$)



第344図 土壌実測図 ($S = 1/60$)



第345図 土壌実測図 ($S = 1/60$)



第346図 土壌出土遺物（1～5は1/6他は1/3）

3) 挖立柱式建物址

掘立柱建物址が3基確認された。検出された住居址からすると少ない。縄文、弥生、古墳、奈良・平安時代の住居址が複雑な重複をみせ、検出が困難なことも一因と考えられる。また開田によって破壊されたものもあると思われる。

第121・123号住居址周辺、第116号住居址西にも柱穴が検出されているが規則性を持たないため、遺構としてはない。

(1) 第1号掘立柱式建物址 (第347図)

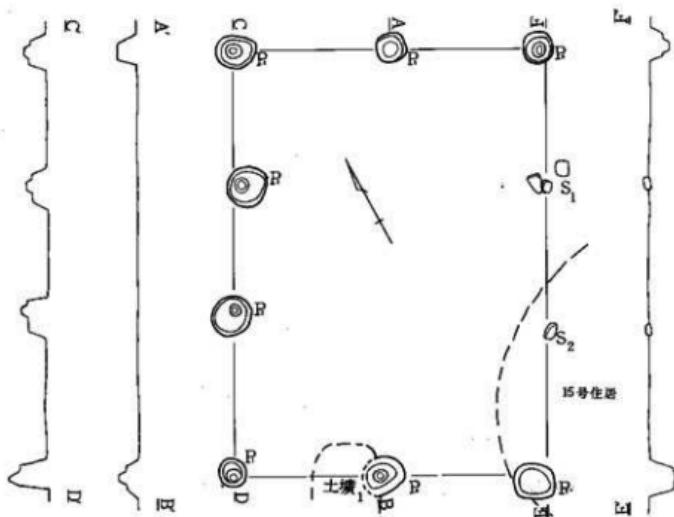
本址は第15号、51号住居址の間に検出されたもので、両住居址の覆土、また南側は第1号土壤の覆土を掘り込んで造られている。

長軸(略南北)6m、短軸(略東西)4.5mを測る測柱式である。長軸方向はN-28°-Eを測る。東例は両脇は柱穴で中2個は礎石となっており珍しい例である。

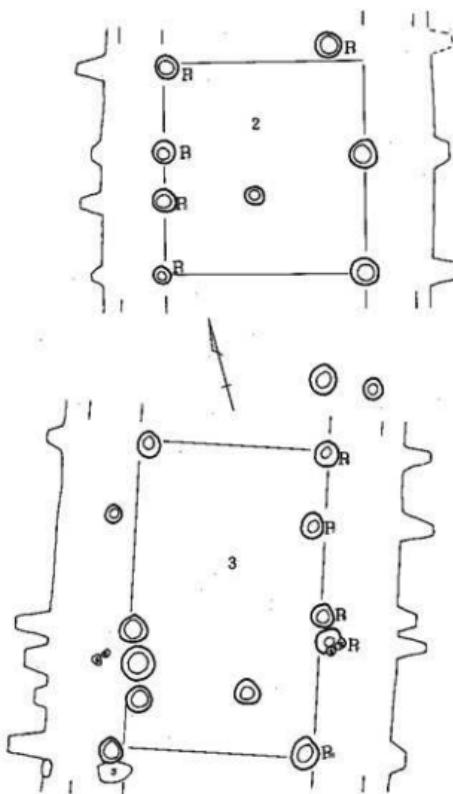
柱間は長軸西列で南より2.4-1.8-1.8m 東列で2.1-2.0-1.9mである。短軸南列は東より2.4-2.1m、北列2.3-2.2mを測る。

各柱穴の掘形は円形ないし梢円形で、埋土は黒色土1層のみで柱痕は底面においてP₇を除き確認された。柱痕は15~20cmを測る。

本址に伴う遺物はない。第1号土壤を切っていることから奈良・平安VI期以降である。



第347図 第1号掘立柱式建物址実測図 (S = 1/80)



第348図 第2号・3号掘立柱式建物址実測図 ($S = 1/80$)

(2) 第2号掘立柱式建物址 (第348図)

本址は第42号住居址の南西に検出され、大半は縄文期の第48号住居址の覆土を掘り込んでつくられている。南には第3号址がある。

南北3m、東西2.9~2.8mを測る測柱式で北東隅はずれている。長軸方向N-15°-Eである。東西間に柱穴はみられない。長軸西列は南より1.0-0.7-1.3m、東列は1.7mである。

各柱穴の掘形は円形を呈し、埋土は黒色土1層で柱痕は確認できなかった。

縄文土器は出土するが本址に直属するものはなく時期は不明である。

(3) 第3号掘立柱式建物址 (第348図)

本址は第2号址の南に検出されたもので測柱式であるが、不規則である。南北4.4m、東西2.5~2.7mである。長軸方向はN-20°-Eである。第2号址同様東西間に柱穴はない。柱間は東列で南より2-1.3-1.1m、西例は不規則である。

柱穴の掘形は円形を呈し、埋土は黒色土1層で柱痕は確認できなかった。

時期は第2号址同様直属する遺物なく不明である。

4) 壊穴址 (第349図)

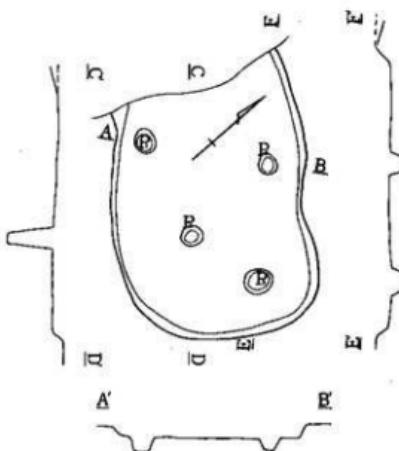
本址は第4号住居址の北東に検出されたもので、西側は搅乱を受けている。炉もなく床面らしきタタキもないことから壊穴址としたものである。

プランは不整橿円形で、規模は長軸は不明、短軸は2.8mを測る。壁高は20cm前後で壁はなだらかである。覆土は炭化物をわずかに含んだ暗褐色土1層である。底面はほぼ平坦でタタキはみられない。焼土の痕跡も検出されていない。

4個のピットが不規則に

みられる。

内部からは、縄文時代中期後葉の土器の細片がわずかに出土している。



第349図 壊穴址実測図 (S = 1/80)

5) ロームマウンド

(1) 第1号ロームマウンド

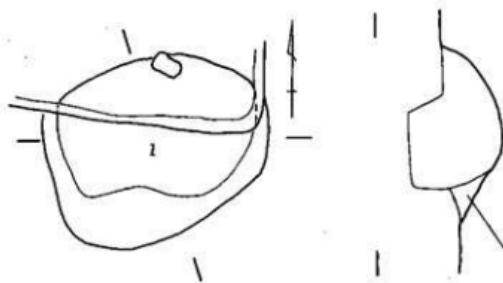
(第350図)

本址は第61号住居を掘り込んで造られ、北側は第62号住居址によって切られている。

外形は $3.1 \times 2.5\text{m}$ で黒色バンドは北側にはみられない。

内形 $2.9 \times 1.9\text{m}$ を測る。マウンド部は上部を削られており定かでないが、丸味を持っていたものと思われる。

黒色土中より縄文中期後葉の土器が出土している。



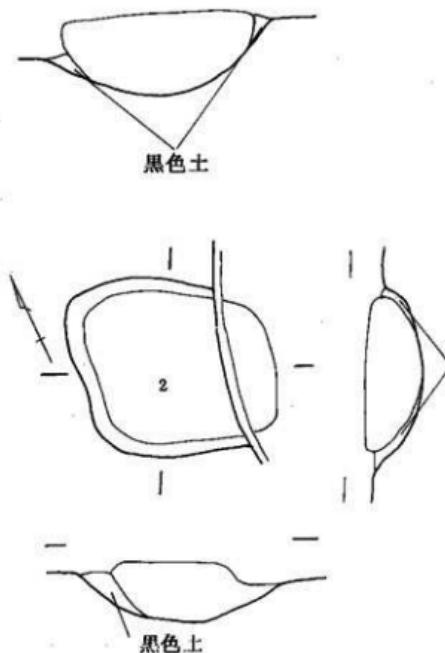
(2) 第2号ロームマウンド

(第350図)

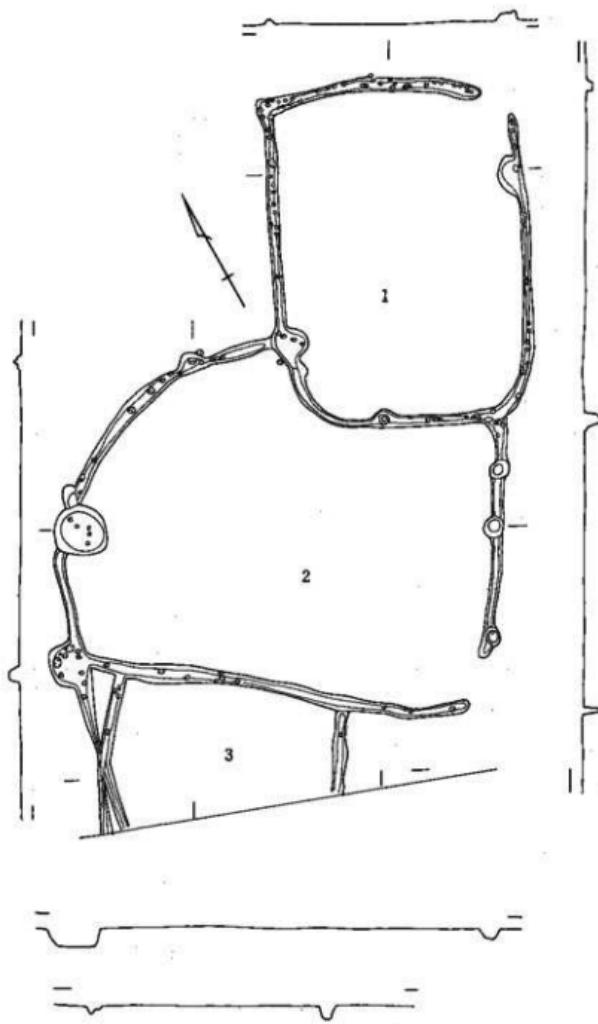
本址は第65号住居址の南域を掘り込んで造られ、東側は第58号住居址にマウンド部を削られている。規模は $2.9 \times 2.4\text{m}$ を測る。

黒色バンドは東には認められない。

遺物は第1号址同様黒色バンド中より縄文中期後葉の土器片が出土している。



第350図 第1号・2号ロームマウンド実測図 ($S = 1/80$)



第351図 第1号・2号・3号方形構状遺構実測図 ($S = 1/120$)

6) 方形溝状遺構（第351図）

本址は第12号住居址の西に検出されている。遺構が密集する中で当址から西はしばらくの間遺構の空白地帯となっている。

ローム層を掘り込んで、上幅20~40cmの溝が方形状に検出された。深さは一定せず深い所は40cm、浅い所は15cmほどで、内部に小ピットを伴う。

溝で囲まれた内部は特に施設はみられない。溝内埋土は黒色1層である。

類例を見ない遺構のため方形溝状遺構と名づけたものである。

1号が2号を切っているようにみえるが1号の内部には溝が検出されていない。また3号の溝も2号内部ではなく一連のものと考えるのが妥当であるが便宜上北から1号・2号・3号とした。

1号は北東部、2号は南東部にて溝が断続している。

1号は7.4×5.3mを測る。2号は東西9.5m、1号の南からの南北距離は6mを測る。3号は井を狹んだ南除外地へ続くものと考えられ、東西5.2mである。西側は溝が交叉する。

本址に伴う遺物は検出されていないため、時期は不明である。

7) 単独埋甕遺構（第352図）

第36号住居址の南西、水田の地場下にロームを掘り込んで縄文土器の深鉢が埋設されていた。

開田時の取地場にあたる位置で、住居址全体が削りとられた可能性もあるが、一応単独埋甕として報告することとする。

深鉢の胴下部で上部は削られている。底部はない。幅広な隆帯をワラビ手状にはわせている。縄文中期後葉の所産と考えられる。



第352図 単独埋甕出土
土器(1/6)

8) 溝状遺構

第11号住居址の北東より第35号住居址、第14号住居址、第18号住居址、第20号住居址の東を通って南に走る溝状遺構が検出されている。上述した住居址をすべて縫している。断面は皿状を呈し、埋土は黒色土1層である。遺物は全く出土していない。時期は不明である。

5 奈良・平安時代の時期区分について

今回の調査によって検出された奈良・平安時代の住居址は54軒である。住居址から出土した遺物は多量で良好なセット資料を持つものある。

近年、大規模開発に伴い県内において多くの資料が得られ、詳細な編年が行われて該期の様相が次第に明らかになってきている。当遺跡も何段階かに細分される可能性があるが、浅学の身ではとてもそこまで及ばないのが正直な所である。

先史の編年を参考しながら当遺跡においては大略Ⅶ期、(奈良Ⅱ期、平安Ⅴ期)に区分している。平安時代は灰釉陶器を基準として区分してある。

奈良時代は前半・後半の2区分とし、奈良時代前期を奈良・平安Ⅰ期(以下〇期とする)、後半をⅡ期とした。その区分根拠はロクロ整形の回転糸切り技法の出現によっている。

今回の調査においては、Ⅰ期の住居址は確認されていないが、区分上Ⅰ期を設けてある。

平安時代はⅤ期(Ⅲ～Ⅶ期)に区分した。

Ⅳ期は黒窯90号窯期・光ヶ丘1号窯期、Ⅴ期折戸53号窯式の初期・大原2号窯期、Ⅵ期折戸53窯式第3、4段階・虎渓山1号窯期、Ⅶ期折戸53号窯式第5・6段階・丸石2号窯期をそれぞれあてはめている。

長野県史に対応させると、Ⅲ期—県史平安Ⅰ・Ⅱ、Ⅳ期—県史平安Ⅲ、Ⅳ期、Ⅴ期—県史平安Ⅴ期、Ⅵ期—県史平安Ⅵ期、Ⅶ期—県史平安Ⅶ期となるものである。

- 主な参考文献 1 藤沢良祐「瀬戸古窯址群Ⅰ」瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要1 1982
2 前川 要「猿投窯における灰釉陶器生産最盛末期の諸様相」
瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅲ 1984
3 「長野県史 考古資料編」長野県史刊行会 1988
4 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3—塩尻市内その2—吉田川西遺跡」長野県埋蔵文化財センター 1989

6まとめ

今回検出された遺構は以下のとおりである。

住居址 135軒 縄文時代 59 弥生時代17、古墳時代1、奈良・平安時代-54
時期不明 4

土 壤 69基

堀立柱式建物址 3棟

堅穴址 1基

ロームマウンド 2基

方形溝状遺構

単独埋甕遺構 1

溝状遺構 1

以上のように各時期にわたって多くの遺構が検出され、それに伴う遺物も多く出土しており、さまざまな問題が浮かびあがってきてている。詳細な分析を行い明らかにする点が多くあるが、浅学と時間的制約の前ではいかんとも仕難い所である。今後先輩諸氏にゆだねることし、若干の問題提起にとどめることとする。

すでに述べてきた所であるが、今回の調査は反目遺跡の一部の区域の調査であったが、これだけの成果をあげてきた訳で、当遺跡の持つ規模の大きさと重要さは図り知れないものがある。

段丘に沿って西側は100mほど伸びる可能性がある、南東部は現住宅地にまで及び第II節遊光遺跡と一体のものとして捉え、集落構造を明らかにする必要がある。

各時代の立地についてふれることとする。縄文期は段丘縁辺に沿って集落が構成され台地内部までは遺構が造られていない。それに反し弥生時代は東側に寄る傾向がみられ、段丘縁辺には見られない。奈良・平安時代になると東側は遺構分布は薄いがほぼ全域に住居址がみられる。

以下各時代毎に若干ふれて行くこととする。

縄文時代の住居址は59軒検出されている。前期末葉から中期後葉Ⅲ期までの住居址が確認され、ほぼ間断なくこの台地に生活が営まれたことが理解できる。全体の調査ではないが中でも藤内期、中期後葉期にピークがみられる。今回の調査では後葉Ⅲ期までの集落構成をみせているが、後出する住居址があるのか興味深い。

第46号住居址で発見された石壙は興味深い。集落のほぼ中央、内奥部に位置しており、個々の住居址ではなく、集落の中での特殊な遺構としての性格が強いものである。

出土土器はわずかであるが、前期末の大歳山式土器が注目される。中期後葉Ⅰ期までは井戸尻・曾利文化圏の様相をみせるが、Ⅱ期からは上伊那独特の土器様相を持つ点は、該期の他の遺跡と同様である。

弥生時代の住居址は17軒確認されている。すべて後期のものである。出土土器は岡谷市の橋原式の影響を受けた甕が多く出土しており非常に注目される。その反面壺は橋原式的なものもあるが、大半が長石を多量に含み内面はく落する当地方特有のものである点興味深い。

出土土器は今後細分される可能性がある。すでに指摘されているとおり、短線斜線文から波状文へ移行する傾向は当遺跡でもうかがわれる。住居址の形態変化とともに併せて検討する必要がある。

炉の形態には2箇所に炉を持つものとそうでないものがあり、前者はすべて大形住居址にかぎられている。さらに2個の炉の位置が直線状となるものと、L字形となるものがある。

炉が1箇所のものにも柱穴線上の外にあるもの、線上のもの、内側にくるものの三種類があり、外に位置するものが多い。内側にくるものは住居址プランがやや橢円形に近くなる傾向がみられ前期中期の影響を持つものと考えられ、住居址の形態変化によって土器の細分が可能になるものと思われる。

古墳時代の住居址は今回一軒検出されたのみである。調査区域外にある可能性もあるが、段丘下でも奈良・平安時代の住居址に混じて一軒確認されたのみである。上伊那をみてても該期の後、奈良時代へつながる集落の例がとぼしい傾向があり今後古墳集落の研究上一つの鍵となるであろう。

奈良・平安時代の住居址は54軒検出されている。今回の調査では奈良時代前半のものがない点前述の問題と併せ考える必要がある。

奈良時代後半から間断なく集落が構成されているが、奈良・平安V期に減少する傾向がみられる。

大形住居址で礎石を持つ家の存在（墨書き持つ関係も含め）は今後の集落構造を考える上で注目すべきことである。

この時期については多くの問題を含んでいるが、明確な時期区分がなされない現時点では無理がある。資料提示にとどめておきたい。

反目遺跡・縄文時代住居址一覧表

番号	平面形	主軸	規模	炉	柱穴	埋甕	時期	備考
15	円形	N-55°-E	4.5×4.4	掘炬建状石圓炉 石一部残して抜き取られる	5	正位1(石なし) 入口 逆位1(石なし) 炉と南東壁中間	後II III	周溝全周する
16	隅丸長方形	N-20°-W	4.8(?)×4.4	掘炬建状石圓炉 (炉石一部残して抜き取られる)	4	正位2(新に石あり) 入口 逆位1 炉の西	後III	南西部17号住に切られ、北西部は同一床面にて50号住と重複する 入口施設あり
19	不明	不明	5.3×?	不明	4 (現2)		後I	北16号住、西17号住、南東18号住に切られる
22	隅丸方形	N-40°-W	4.1×?	掘炬建状石圓炉 (炉石すべて抜かれる)	4 (現3)	正位(石あり) 入口 逆位(石なし)	後II	西は21号、南は23号住に切られる
24	隅丸長方形	N-52°-W	4.8×4.0	掘炬建状石圓炉 (炉石すべて抜かれる)	4 (現2)	不明	後III	南東部21号住に切られる
28	不明	不明	不明	不明	不明	正位	後II	23号住中に埋甕のみ検出
29	五角形 (不整円形)	N-18°-E	4.0×4.4	掘炬建状石圓炉 (北の炉石抜かれている)	4	正位2(石なし) 入口	後II	39号住を切り21号住と接する 建替住居
30	不明	N-57°-W?	不明	不明	不明	正位(石なし) 入口	後II	北西部23号住に切られ、北西部にて同一床面で26号住と重複する
32	円形	N-22°-W	5.9×5.9?	円形石組炉(埋設土器あり)	多柱穴 8?	なし	藤内	南西部を31号住に切られる
34	椭円形	N-24°-W	5.4×4.8	円形石組炉(炉石抜かれる)	6?	なし	藤内	北西部33号住に切られる 建替の可あり
39	不明	不明	不明	石組炉	不明	不明		21号住に東側(炉半分)南側を29号住に切られる

番号	平面形	主軸	規模	炉	柱穴	埋 瓢	時期	備 考
37	隅丸長方形	不明	5.9×4.5	なし	4?	なし	後 I	
38	不明	不明	5.3×?	方形石組炉	4 (現存 3)	なし	井 戸 尻	
39	不明	不明	不明	石組炉	不明	不明	藤内	東を21号、南東部を29号住に切られる
40	不明	N-25°-E	不明	掘炬達状石組炉 (北を除き炉石抜かれる)	2	なし	後	南側は開田時に削られている
43	不明	N-8°-W	不明	掘炬達状石組炉 (炉石はみられない)	4 (現存 3)	正位(石不明) 入口	後 II	開田時に大半壊される
46	六角形?	N-28°-E	5.6×5.4 (?)	掘炬達状石組炉 (炉石すべて抜かれる)	6	正位(石なし) 入口	後 II	炉の奥に石壇あり。西41号住に切られる
47	円形	N-4°-E	4.5×4.5	掘炬達状石組炉	5	正位(石なし) 入口	後 III	
48	五角形 (くずれる)	N-39°-E	6.1×6.5	掘炬達状石組炉 (炉石一部抜かれる)	6	正位(石あり) 入口	後 II	
50	不明	不明	不明	不明	不明	不明	後	16号住同一床面にて重複し、南半は17号住に切られる
51	円形	N-50°-E	5.1×5.0	掘炬達状石組炉	5	正位(石なし) 入口左	後 II	焼失家屋 西壁を據って49号住のカマド造られる
52	隅丸長方形	N-4°-W	5.5×6.2	掘炬達状石組炉 (炉石すべて抜かれる)	4	正位(石あり) 入口	後 II	
57	不明	不明	不明	不明	不明	不明	後 I	16・50・51・49号住に切られ床面のみ

番号	平面形	主軸	規模	炉	柱穴	埋壠	時期	備考
60	円形	N-30°-W	3.6×3.8 (?)	掘炬鍵状石囲炉 (炉石南側抜かれる)	4 (現存3)	正位(石なし) 入口	後II	北西にて69号を 切り東は61号を 切る 西は59号に切ら れる
61	不明	不明	不明	石組炉(?)	不明	正位(石なし)	後I	北・西を60・ 69・62号に切ら れ、東側は65号 に貼床の可大
64	円形?	不明	不明	不明	現存2	不明	井戸尻 後I (?)	南半は58号に北東 部は68号に切ら れ、南西部は65号 に貼床の可大
65	隅丸形	不明	?×6.3	不明	現存2	不明	井戸尻	東側は58号に切 られ、西は61号 の貼床可大
66	円形 (多角形?)	N-85°-E	5.6(?)×5.6	構円形石組炉	5	不明	後I	西側は66号住に 切られる
68	隅丸方形 (不整)	N-27°-E	4.6×4.8	掘炬鍵状石囲炉 (東側を除き炉 石抜かれる)	4	正位(石あり) 入口 逆位 炉西	後II	南にて64号、北 にて74号を切 り、北東部は67 号に貼床される
69	五角形	N-90°-E	5.3×5.6 (?)	掘炬鍵状石囲炉 (炉石すべて抜 かれる)	6	正位(石あり) 入口 逆位炉と南西壁 中間	後II	南側60号に切ら れる
70	不整構円形	N-16°-W	4.2×5.5	掘炬鍵状石囲炉 (炉石すべて抜 かれる)	4	正位2(ともに 石なし) 入口右 逆位2炉西	後III	
71	不明	不明	不明	不明	不明	なし	井戸尻	床面のみ
74	隅丸形	不明	不明	不明	現存2	不明	後II 以前	西は62号、南～ 東は67号・68号 に切られる
78	六角形	N-2°-E	5.8 (?) ×4.7 (?)	構円形石組炉 (東を除き炉石 ない)	4 (現存3)	不明	後II	東側は77号位に 貼床される

番号	平面形	主 軸	規 模	炉	柱穴	埋 窑	時 期	備 考
79	橢円形(?)	N-30°-E	5.4×4.2 (?)	橢円形石組炉	3	逆位 炉の西	後 I II	西は同一床面にて80号と重複する
80	不明	N-54°-E	不明	六角形石組炉 (埋設土器あり)	不明	正位(石なし)	後 II	東79、西81号と同一床面にて重複
81	不明	N-55°-W	不明	地床炉	4		貉沢	北にて84号を切った状態だが貼床があったと考えられる 80号住と同一床面にて重複する
83	不整円形	N-48°-W	6.2×6.2 (5.7×5.4)	橢円形石組炉 (埋設炉一部残して炉石抜かれる)	多柱 穴	正位(石なし) 入口左 逆位(石なし)	後 II	建替か重複
84	不明	不明	不明	不明	不明	逆位	後 II	北東部は85号に切られる。東は93号、南西は81号に切られた状態で検出されたが、遺物からは貼床があったものと考えられる
88	円形?	N-57°-W	?×4.7	掘炬鍵伏石組炉 (炉石すべて抜かれる)	現存 2	不明	後 II	東側は調査不能
92	隅丸方形 (?)	不明	?×4.7	地床炉(?)	3		後 II?	南西壁はなし
93	不整橢円形	N-28°-W	5.5×4.3	方形石組炉	4		井戸 尻 I	入口施設あり
94	隅丸方形	不明	6.0×5.7	なし	1		藤内 I	
97	不明	N-53°-W	4.9×?	石組炉(炉石すべて抜かれる)(?)	4		後 II	東は同一床面にて103号と重複する
99 (109)	不明	不明	不明	石組炉(炉石一部残して抜かれる)	?		後 I	北は106号・105号に、南は103号に切られる

番号	平面形	主軸	規模	炉	柱穴	埋甕	時期	備考
102	橢円形	不明	6.5×5.5	地床炉	4		藤内	
103	不整円形	N-56°-W	6.2×5.7	橢円形石組炉	多柱穴		井戸尻II	98号住が重複
106	五角形	N-4°-E	5.3×5.0	掘炬達状石甕炉 (炉石抜かれ る)	5	正位2(石あり) 入口	後II	建替あり
108	隅丸形	不明	5.8×?	不明	不明	不明	後	東側未調査
110	隅丸形	N-29°-E	5.4×?	方形石組炉(炉 石一部抜かれ る)	不明		藤内II	東側未調査
112	不整円形	N-20°-E	3.6×3.6	地床炉	4 (?)		井戸尻期	
113	円形(?)	不明	不明	円形石組炉(炉 内埋設土器あ り)	2 (現存)	逆位(石なし) 炉の東	後I	南を108号、西 を106号に切ら れる
115	不整橢円形	不明	5.7×4.9	地床炉	不明		後I	
116	円形	N-42°-E	5.0×5.0	地床炉	4		前期末	
117	円形	不明	3.6×3.2	なし	3 (現存)		新道	
119	不明	不明	3.9×?	方形石組炉	不明		不明	東120号に切ら れ、全体に124 号に重複
121	橢円形	不明	6.6×4.3	石組炉2	7		井戸尻	
122	不明	不明	不明	地床炉	不明		不明	
123	不整橢円形	N-25°-W	5.8×4.5	円形石組炉(埋 設土器あり)	6		井戸尻	
136	円形	N-20°-E	5.6×5.4	方形石組炉(埋 設土器あり)	4		後I	

時期については特にことわりのないものは中期に属する。

反目遺跡縄文時代住居址別石器集計表

種別 住居址	打製 石斧	磨製石斧			大型 製石場	小形 製石場	石錐	磨打 器	骨 器	鐵 器	磨石	特殊 磨石	凹石	石皿	橫 刀	形石錐	石礫	石錐	兩端 及び 輪廓	その他	計	
		定角	船刃	乳棒																		
15号住	床面	2						2							2	1	2		1		10	
	フク土																1				1	
	計	2						2							2	2	2		1		11	
16号住	床面	12	1	1				3							1		1	3			21	
	フク土	11	2	1	3		1	3									2		2		22	
	計	23	2	1	4		1	6							1	2	1	5			43	
19号住	床面	1																			1	
	フク土																				1	
	計	1																				
22号住	床面	2						3				2			2							9
	フク土							2	1			1							1			5
	計	2						5	1			3			2	1						14
24号住	床面	1	1	1				1										1				4
	フク土	8	1		1			1	1										1			12
	計	9	1	1	2			1	1	1								1	1			16
29号住	床面	6		1	1	1		1									1	1				11
	フク土	17		1	1	1		3		1		1						4				28
	計	23		2	2	2		4		1		1					1	1				39
30号住	床面	1		1																		2
	フク土	2																				2
	計	3		1		-																4
32号住	床面	3						3	1			1			1	1						10
	フク土		1		1																	1
	計	3	1		1			3	1			1			1	1						11
34号住	床面	3						10								2						15
	フク土																					
	計	3						10								2						15
37号住	床面	3						1								1						5
	フク土																					
	計	3						1								1						5
38号住	床面	1		1	1			2				1										5
	フク土																					
	計	1		1	1			2				1										5
39号住	床面	3	1		1			3								1	2					10
	フク土																					
	計	3	1		1			3								1	2					10

種別 住居址	打製 石器	磨製石斧			大形 石器	小形 石器	石錐	敲打器	骨 器	海門器	磨石	特殊 磨石	田石	石墨	横 刃石器	石砍	石錐	削器 及び 擦器	その他	計	
		定角	始刀	乳棒																	
40号住	床面	1																		1	
	フク土																				
	計	1																		1	
43号住	床面					1														2	
	フク土																				
	計					1														2	
45号住	床面	1												1		1	1	1		5	
	フク土	1																		1	
	計	2												1		1	1	1		6	
47号住	床面	4	1		1				5		1	1	1							13	
	フク土	6	1			1			4										2	13	
	計	10	2		2				9		1	1	1	2						26	
48号住	床面	10			1	1			1	9	2	1		1	8	2				35	
	フク土	12	2			2			1	4	4	3	1		2			1		30	
	計	22	2		1	3			2	13	6	4	1	1	10	2		1		65	
51号住	床面	11									1	1						2		15	
	フク土	1																		1	
	計	12									1	1						2		16	
52号住	床面	6	1	1	2	4					3						1	6	1		21
	フク土	4	1	1			2	1										1			8
	計	10	2	2	2	6	1			3						1	7	1		29	
57号住	床面	3			1	1	1				1									6	
	フク土																				
	計	3			1	1	1				1									6	
60号住	床面	1								2										3	
	フク土	13	1			1	2			2										18	
	計	14	1			1	2			4										21	
61号住	床面	4									1	1						1		7	
	フク土	7								5		1			1					14	
	計	11								5	1	2			1		1			21	
64号住	床面	2				1														3	
	フク土	2																		2	
	計	4				1														5	
65号住	床面	7	1	1		2								1						10	
	フク土	6								2										8	
	計	13	1	1		2				2					1					18	

種別 住居	打製 石斧	磨製石斧				剥石刃 大形粗 石點	小形 石點	石鏟	鏟 打擊	特 殊打擊	磨石	特殊 磨石	圓石	石皿	橫 刀 刮石器	石礫	石錐	剝離 及び 縫隙	その他	計
		定角	始刃	乳棒	計															
66号住	床面	5		1	1			1							1					9
	フク土																			
	計	5		1	1			1							1					9
68号住	床面	11		1	1			1	5	1						2				21
	フク土	8							1	2										11
	計	19		1	1			2	7	1					2					32
69号住	床面	12	1	2	3				4						3					22
	フク土																			
	計	12	1	2	3				4						3					22
70号住	床面	5							1						2			1		9
	フク土																	1		1
	計	5							1						2		1	1		10
71号住	床面	1													1					2
	フク土							2							1					3
	計	1						2							2					5
74号住	床面	1													2		1			4
	フク土	5																		5
	計	6													2		1			9
78号住	床面	6								3	1				2		1			13
	フク土																			
	計	6								3	1				2		1			13
79号住	床面	2													1			1		4
	フク土																			
	計	2													1		1			4
80号住	床面	2	1	1							1									4
	フク土																1			1
	計	2	1	1							1									5
81号住	床面	10	1	1	2	3			7	7					2					31
	フク土																			
	計	10	1	1	2	3			7	7					2					31
83号住	床面	2	1	1	2					3	1									8
	フク土																			
	計	2	1	1	2					3	1									8
84号住	床面	1	1		1															2
	フク土																			
	計	1	1		1															2

住居番号	種別	磨製石斧			大形石器	小形石器	石錐	裏打器	側面打削器	端打削器	圓石	特殊磨石	石道	横刃石器	石鏟	石錐	削器及び油器	その他	計		
		打製石斧	定角	鈎刃	乳棒	計															
88号住	床面	2		1	1	2					3				1					8	
	フク土																				
	計	2		1	1	2					3				1					8	
92号住	床面	2		1	1	1					1				1					5	
	フク土																				
	計	2		1	1	1					1				1					5	
93号住	床面	1																		1	
	フク土																				
	計	1																		1	
94号住	床面	7		1	1	1					5				1			3		17	
	フク土	3				1														4	
	計	10		1	1	1					5				1			3		21	
97号住	床面	8	1			1					4	3	1		1						18
	フク土	1									1										2
	計	9	1			1					5	3	1		1						20
99号住	床面	8				1									2		2	1			14
	フク土	4				1	1														5
	計	12				1	1	1							2		2	1			19
102号住	床面	1		1	1	1					1										3
	フク土																				
	計	1		1	1	1					1										3
103号住	床面	2				1											1				4
	フク土																				
	計	2				1											1				4
106号住	床面	7				1									3						11
	フク土	4		1		1	1				1				1						8
	計	11		1		1	2				1				4						19
108号住	床面	4													1			1			6
	フク土																				
	計	4													1			1			6
112号住	床面										1										1
	フク土																				
	計										1										1
113号住	床面	7		1	1	1					5										13
	フク土																				
	計	7		1	1	1					5										13

種別 住居社	打削 石斧	磨製石斧				圓石點 大型標	小形 石器	石錐	鑿打器	骨 敲打器	磨石	特殊 磨石	圓石	石直	橫刃 形石器	石錐	削器 及び 標器	その他	計	
		定角	始刃	乳錐	計															
115 号住	床面	1						1	1					1						4
	フク土																			
	計	1						1	1					1						4
117 号住	床面																			
	フク土	2	1		1					2										5
	計	2	1		1					2										5
119 号住	床面				1															1
	フク土																			
	計				1															1
121 号住	床面	9	1		1	2					1			1	1	1	1			16
	フク土	5								5										10
	計	14	1		1	2				5		1		1	1	1	1			26
123 号住	床面	6						1	1			1								9
	フク土	5		1	1															6
	計	11		1	1			1	1			1								15
136 号住	床面	4						1	1											6
	フク土																			
	計	4						1	1											6

反目遺跡・弥生時代住居址一覧表

番号	平面形	主軸	規模	炉	柱穴	時期	備考
1	隅丸長方形	N-49°-W	5.7(5.2) ×4.2	西 外 石組埋甕炉 東 外 地床炉 北に枕石	4	後前	
3	隅丸方形	N-60°-W	5.1×4.9	西 外 埋甕炉	4	後前	
4	隅丸方形	N-22°-W	3.7×3.3	東 地床炉	0	後	
5	隅丸長方形	N-58°-W	7.2×6.6	東 外 埋甕炉 西 北西隅 埋甕炉	4	後前	2号住に貼床される
6	隅丸長方形	N-55°-W	()×6.2	東 外 埋甕炉 西 外 地床炉	4	後前	床面やや浮いて7号住カマドあり
8	梢円形	N-68°-W	6.6×5.9	西 外 地床炉	4	後前	
10	隅丸長方形	N-80°-E	5.7×4.6	西 線上 石組埋甕炉	4	後前	9号住に貼床される
11	隅丸長方形	N-32°-W	4.4×3.7	北西 外 埋甕炉	4	後前	入口施設痕あり
12	隅丸方形	N-60°-W	8.2×7.0	東 内 埋甕炉 北西隅 埋甕炉	6	後前	中央部搅乱される
41	隅丸長方形	N-76°-W	8.2×7.0	東 内 埋甕炉 北西隅 埋甕炉	6	後前	中央部搅乱される
45	隅丸長方形	N-74°-W	8.8×7.3	西 線上 埋甕炉 東に枕石 南壁東寄り 埋甕炉 北に枕石	現況2	後前	中央部42号住に接してつくられる

番号	平面形	主軸	規模	炉	柱穴	時期	備考
58	隅丸方形	N-19°-E	8.2×8.1	西 外 埋焼炉 東に枕石	4	後	南壁中央に入口施設痕あり
59	隅丸長方形	N-76°-W	5.7×4.8	西 外 埋焼炉	4	後	入口施設の可大
111	隅丸長方形	N-58°-W	6.2×5.4	北西 内 石組炉 (コ字形)	6	後前	
118	隅丸長方形	N-7°-E	4.7×4.1	北 内 鍵手石組炉	4	後	
129	隅丸方形	N-89°-E	5.9×5.6	西 外 埋焼炉	4	後	
132	隅丸長方形	N-75°-W	5.6×4.9	西 線上 石組炉	4	後新	

炉の内、外、線上は柱穴を結んだ場合の表現である。

反目遺跡弥生式土器観察表

出土地	標 本 号	器 種	法 量	残存状態	文 横	調 整	胎上・色調
1号住	167-1	甕 (印2)	() 19.6 () (10.5)	底部から胴 尖部	腹部波状文底部二段 の短縦文	内外面ともヨコナデ	
	-2	甕	() () 7.8 (5.0)	底部のみ		外面 ヨコナデ 内面 タテナデ	黄褐色 砂粒多く テラザ 内面一部は く落あり
	-3	甕	() () 7.3 (4.9)	底部のみ		外面 タテヘラミガキ 内面 タテヘラミガキとヨコナデ	白黄褐色 胎土良好 焼成良好
	-4	甕	() () 6.1 (3.0)	底部のみ		外面 タテヘラミガキ 内面 ヨコナデ	白黄褐色 砂含む 焼成良好
	-5	甕	-	破片	口唇部タテの沈線 頸部波状文	内外面ともヨコナデ	赤褐色 わずか芯粒 含む 焼成普通
3号住	170-1	甕 (印)	() 14.5 () (11.7)	胴下部のみ	無文	外面 斜位のナデ 内面 ヨコナデ	白黄褐色 砂粒含む 焼成普通
	-2	小形甕	(9.2) - 4.5 9.8	胴部から口 縁半分欠	無文	内外面ともヨコナデ	灰褐色 霧母含む 胎土良好 焼成良好
	-3	台付甕	14.5 - 7.0 17.3 307.90cal	口縁から胴 部わずかに 欠	無文	外面 口唇部ヨコナデ 脇上部 斜位のハケ 下半部ヘラ ミズギヤク 脇部タテナデ 内面 脇部ヨコナデ 脇部粗いヘ ラケズリ 脇部ヨコナデ	赤褐色ないし灰褐色 砂粒含む一部テラザ 焼成普通
	-4	高甕	13.5 - 6.8 10.8 33470cal	肩部光欠	無文	外面 肩部下部は一部ヘラミガキ ヘラミズリ粗粒す 全体に 斜位のナデ 脇部タテナデ 内面 環ともヨコナデ	白黄褐色 砂粒含む 内面テラザ 植成 普通
	-5	甕	20.6 23.0 () (22.2)	胴下部が底 部欠	頸部から胴上部に 三段の櫛状工具に よる横位の直縦文	外面 上半部ヨコナデ 下半部 粗粒す 一部ヘラミガ キヤクナデ 内面 上部ヨコナデ 下部斜位ハ ケゴ一端ヘラケズリ粗あり、 内面に輪積痕残す。	赤褐色一部黒色 砂 粒わずか含む 焼成 良好
	-6	甕	() () 7.3 (2.8)	底部光		外面 タテナデ 内面 ヨコナデ	白黄褐色 砂粒わず か含む 烧成良好
	-7	甕	() () 7.5 (2.6)	底部光		外面 タテナデ 内面 ヨコナデ	白黄褐色 胎土良好 焼成良好
	-8	甕	() () 4.6 (3.5)	底部のみ		外面 タテナデ 内面 ヨコナデ	白黄褐色 砂粒わず か含む 烧成良好
	-9	甕		破片	口唇部連続の44円弧 文	内外面ともヨコナデ	黒褐色 大粒な長石 多く含む内面はく落 あり
	-10	甕		破片	口唇部タテの沈線	内外面ともヨコナデ	赤褐色 胎土 烧成 良好
	-11	鉢		破片	無文	外面 ヨコ・タテのハケ目 内面 ヨコナデ	白黄褐色 胎土 烧成 良好
5号住	174-1	甕 (印1)	23.2 28.5 () (12.4)	胴上部よ り上口縁一 部欠	無文	外面 ヨコのハケ目 脇部にヘラ ミズギヤク 内面 ヨコナデ 脇部に一部ヘラ ミガキあり	白黄褐色 大粒な砂 粒含む 烧成良好
	-2	甕 (印2)	() 21.8 () 15.5	底部から胴 尖下部	底部から胴上部三 段の波状文	外面 ヨコ・ナメのナデ一部へ ラミガキあり 内面 ヨコナデ 脇部丹念な ヘラミガキ	赤褐色ないし白黄褐 色 霧母含む 烧成 良好

出土地	標 団 番 号	器 品	法 量	残存状態	文 標	調 整	粘 土・色 調
5号住	174-3	壺 (1)	() 22.0 6.6 (22.8)	口縁部欠 刷下部半分 欠	頸部に2段の粗底状 文 胴上部2段の連續性 円弧文	外面 頸部刷上部斜位及びタテの ハケ 刷下部ヨコナデ 内面 頸部から胴上部ヨコナデ	白黄褐色 褐上部微化 物付着 大粒な長石多く 含む 内面明下部は く薄 焼成普通
	-4	壺	() () 5.6 (3.5)	底部のみ		内外ともヨコナデ	白黄褐色 わざかに 長石含む 焼成良好
	-5	壺	() () (11.8) (3.2)	底部半分		外面 ヨコナデ	赤褐色 大粒な長石 含む 内面はく薄
	-6	壺	() () 5.7 (4.6)	底部のみ		外面 斜位のナデ	白黄褐色 長石多い 内面はく薄
	-7	壺 (4)		頸部から胴 上部均破片	頸部2段の粗底状 文 化後一部破文となる	外面 斜位のハケ 内面 口部ヨコのハケ	白黄褐色 長石含む 内面はく薄あり
	-10	鉢		破片	無文	内外ともヨコナデ	白黄褐色 長石わざ か含む 焼成良好
	6号住	178-1	壺 (卯)	23.2 - () (20.0)	刷下部以下 欠 口部一 部のみ	頸部に2段ないし三 段の斜走短縞文	外面 口縫部ヨコナデ 脊部タテ ナデ-新へラケズリ 内面 口縫部ヨコナデ 脊部ヨコ のヘラケズリ
6号住	-2	壺	(15.8) - () (10.3)	口縫部 口縫半分欠 状文	口縫部ヨコナデ 口縫半分欠 状文	外圧 タテ、ヨコのナデ 内面 口縫部ヨコナデその下部ヨ コの弁念なヘラミガキ	白黄褐色 わざかに 含む 長石良好 焼 成良好
	-3	壺	() () 9.0 (2.8)	底部のみ		内外ともヨコナデ	赤褐色 大粒な長石 多量に含む 一部内 面はく薄
	-4	壺	() () 7.4 (2.8)	底部のみ		内外ともヨコナデ	白黄褐色 細粒化 わざか含む 焼成良好
	-5	壺	() () 4.5 (2.2)	底部のみ		内外ともヨコナデ	赤褐色 脱土微 焼成良好
	-6	壺	() () 7.5 (3.8)	底部のみ		内外ともヨコナデ	白黄褐色 や含む 焼成普通
8号住	180-1	壺	() () 10.4 (3.2)	底部のみ		外面 ヨコナデ 内面 タテ・斜位のハケ	白黄褐色 長石含む 焼成良好
	-2	壺	() () 6.2 (3.8)	底部のみ		内外ともヨコナデ	白黄褐色 長石大粒 含む 烧成良好
10号住	182-1	壺 (卯)	() () 28.6 (17.0)	頸部から胴 下部	頸部から胴 無文	外面 頸部ヨコナデ 刷下部タテ のハケ 内面 ヨコ・斜位のハケ	赤褐色 硬板化 焼成良好
	-2	壺 (3)	17.0 - () (19.9)	底部欠	頸部二段の4条の継 似波状文(1回每逢 続しない)	外面 口縫部へラケズリの後ヨコ ナデ 脊部斜位・タテのハ ケ 内面 ヨコ主体のハケ	赤褐色 脱土微 焼成良好
	-3	壺 (3)	22.5 22.2 () (20.4)	底部欠 一 部口縫欠	底部欠	外面 ヨコナデ 脊部へラケズリ 内面 ヨコナデ	2と同一製作と考え られる頸部波状化物 付着
	-4	壺 (1)	(18.8) (18.6) () (13.2)	口縫から胴 尖部均破片	頸部三段の4条の波 状文	外面 口縫部ヨコナデ 脊部斜位の ハケ 内面 口縫部ヨコナデ 脊部ヨコ のヘラミガキ	赤褐色 形状含む 焼成良好
	-5	壺 (2)	(15.5) () () (5.2)	口縫部分破 片	無文	外面 ヨコナデ 内面 ヨコヘラミガキ	暗黄褐色 硬板化 含む 烧成良好
	-6	壺	() () 7.4 (7.8)	底部半分		外面 刷部ヨコナデ 底ヨコナデ 内面 タテヘラミガキ 底ヨコヘ ラミガキ	黒褐色 長石含む 焼成良好 廉物化物外 面付着
	-7	壺	() () 6.6 (5.3)	底部のみ		外面 タテヘラミガキ 内面 ヨコヘラミガキ	白黄褐色 大粒な 長石含む 烧成良好

出土地	埠 号	器 様	法 量	残存状態	文 標	調 査	胎 土・色 調
11号住	185-1	壺 (炉)	() 23.5 () (14.5)	胴部部	腹部から胴上半にかけて最底三段の波状文(文様すればはつきりしない)	外面 すべて不明 内面 ヨコナデ	白黄褐色 砂粒含む 焼成不良で外面はすれています
	-2	小形壺	(13.5) (12.4) () (0.8)	胴下半部欠く片	胴部二段の複合波状文	外面 口頭部ヨコナデ 脇部タテ 内面 *	白黄褐色 砂粒含む 焼成普通
	-3	壺	(18.5) (16.8) () (7.3)	胴上半部以上	胴部二段に4条の波状文	外内面ともヨコナデ	黄褐色 霜母含む 焼成普通
	-4	壺	() (17.3) () (6.6)	胴下部のみ	胴下部のみ 半分の破片	外内面ともヨコナデ	赤褐色 細砂含む 焼成普通
	-5	壺	() () 6.3 (9.8)	底部とざか	底部とざか な胴下部	外面 タテナデ 内面 ヨコナデ	灰黒色 大粒な長石含む 焼成良好
12号住	187-1	壺 (炉)	() 20.6 () (15.0)	頭部から胴上半部	無文	外面 脇部へラクズリ 脇部へラ ミガキ 脇部下ホコナデ 内面 粗いヘラクズリ	黄褐色 長石含む 焼成良好
	-2	壺 (1)	(16.8) (16.6) () (17.3)	胴下部以下	頭部に9条一段の波状文 胴上部斜走短縦文	外面 口縁ヨコナデ 脇部から脇 タテのヘラミガキ 内面 ヨコの丹念なヘラミガキ	黄褐色 削り跡等で 薄手に因る焼かれる
	-3	壺 (2)	(15.6) (14.2) () (8.5)	口縁から胴上部	頭部に二段の波状文	外面 ヨコナデ 内面 ヨコヨコナデ下部斜走のハケ	白黄褐色 砂土良好 焼成普通
41号住	198-1	壺 (炉1)	() (34.2) () (22.2)	胴部のみ	無文	外面 斜位のハケ 内面 ヨコ主体のハケ調整の後斜 位のヘラミガキが一部行われる	赤褐色ないし黒褐色 砂粒わずか含む 焼成良好 外面一部焼 化物付着
	-2	壺 (炉2)	() (5.8) () (10.8)	頭部部	頭部に5条の波状文 その下に同一工具によると思われる一段の斜走波文焼成感 く文様ははっきりしない	外面 脇上部不明 脇下部斜位 のハケ 内面 ヨコナデ	赤褐色ないし黒褐色 砂粒少し 焼成感くはく落あり
	-3	壺 (2)	() () () (7.3)	頭部上部	無文	外面 斜位のナデ 内面 ヨコナデ 脇横痕明顯	白黄褐色 細砂わずか含む 焼成普通
	-4	壺 (3)	13.4 () () (6.4)	口頭部	無文	外内面ともヨコナデ	白黄褐色 長石含む 焼成普通
	-5	壺 (4.5)	13.2 19.3 7.3 27.7	口縁から胴部半分欠	頭部上部に3段の5 条(?)の波状文	外面 底部付近に一部へラミガキ あるも全体はナツケ ナツヅケ 内面 外部とも化粧土を用いている	黄褐色 長石含む 焼成感強内一部はく落
	-6	壺 (6)	(15.2) 38.0 () (28.3)	胴中央より 上口縁1部 のみ胴部1 部欠	はく落あり文様は はつきりない 頭部に ヨコの斜走波文 胴上部に2段に4円弧 見られる	ナツヅケと思われる。	赤褐色 大粒な長石 多量に含む 焼成普通、外内頭部 中心にはく落 内面全面にはく落
	-7	壺 (6)	(18.8) (18.2) () (12.8)	胴下半部欠 く半分のみ	頭部に9条3段の波 状文(回転台使用)	外面 口頭部タテのハケ 脇部斜 位な斜位のヘラミガキ 内面 ヨコ主体の丹念なヘラミガ キ	黒褐色 わずか長石 含むが胎土良好 焼成良好
	-8	壺 (7)	17.8 17.7 () (15.3)	胴中央より 上口縁1部 のみ	頭部9条3段の波 状文(回転台使用)	外面 脇部タテのハケ波状文を切 る。 頭部丹念なヘラミガキ 内面 ヨコ主体の丹念なヘラミガ キ	白黄褐色ないし黒褐 色わずかに長石含む が胎土良好 焼成良好 7と同製作の 可能性ある
	-9	壺 (8)	() () 6.3 (14.8)	胴下部以下 胴部3%		外面 タテナデ 内面 ヨコナデ	白黄褐色 砂粒多し 焼成普通
	-10	壺 (8)	(19.3) - 7.3 20.8	口頭部一部 のみ	9条の横走波文を基 部に配しその上下に 同一工具による横走 短縦文	外面 口頭部ヨコナデ、脇部タテ のハケ ヘラクズリ痕残る 内面 ヨコナデ	赤褐色 砂粒含む 焼成良好頭部に炭化 物付着

出土地	神戸番号	器種	法量	残存状態	文様	調査	胎土・色質
41号住	198-12	鉢		破片		外面 タテのハケ 内面 ヨコのハケ	赤褐色 胎土深む 焼成良好
	-13	素		破片	口唇二段の波状文	外面 頭部クテのハケ 内面 口ヨコヨコナデ 頭部ヨコの ヘラミガキ	灰白色 細砂粒含む 焼成良好
45号住	193-1	甕(伊)	16.2 16.2 () (12.8)	肩下部欠 口縁部一部 削走短縦文のみ	頭部に二段の5条の 削走短縦文	外面 ヨコないし斜のナデ 内面 ヨコナデ	赤褐色 長石含む 焼成普通
	-2	甕(伊)	() 21.4 () (15.2)	頭部	頭部から頭上部に開 存凹陥の8条の削走 短縦文	外面 ヨコないし斜位のナデ 内面 ヨコのヘラミガキ	赤褐色ないし白黄色 細砂粒含む 焼成普通
	-3	器台? (1)	() () 16.0 (14.8)	鉢脚部と体 下部	4条の横走沈縫がH字 等間隔に六股めぐ り、その上に二段の 一組の横走沈縫文	外面 タテナデ 内面 ヨコナデ	赤褐色 大粒な長石 多く含む 焼成良好 底内面ザラザラ
	-4	甕	() -7.0 (16.0)	頭部から頭 部半分欠 口唇欠	頭部一段の波状文(予 て文様不明確)	内外面ともヨコナデ	赤褐色 砂粒多く含 む 焼成普通 外表 面すり付ザラザラ
	-5	小形台 付甕 (2)	8.8 9.6 () (12.4)	口唇一部欠 脚部	無文	外面 口唇稍痕残すヨコナデ 頭部ヘラケズリの後ヨコハケ 内面 口唇部ヘラケズリ 脚部ヨ コナデ 内面に輪輪状残す	白黄褐色 長石わざ か含む 焼成良好 頭上部に炭化物付着
	-6	鉢? (5)	() () (9.3) (13.4)	口唇部欠	無文 脚部に1cm幅の1周 するはく薄底あり。	外面 タテナデ 底部付近はタテ ヘラケズリ 内面 ヨコナデ 底面に成形痕残し一部ヘラ切あり	白陶褐色 砂粒多 い 焼成良好 外表面炭化物付着
	-7	甕	(16.2) (18.0) () (7.8)	肩上部より 上半分	頭部に二段の8条 (?) の連続削走 短縦文	外面 タテのハケ(文様前) 内面 ヨコナデ	白黄褐色 胎土深む 焼成良好堅歯
	-8	甕	() (15.5) () (7.7)	頭部半分	肩上部に4条の波状 文(残存一段)	外面 タテナデ 内面 ヨコナデ	赤褐色 砂粒わざか 含む 焼成良好
	-9	台付甕 (6)		脚部 脚部欠		外面 ヘラケズリ 内面 ヨコナデ	赤褐色 長石多し 焼成普通
	-10	?(脚)		脚半分		外面 タテナデ 内面 脚ヨコナデ	白黄褐色 細砂粒含 む 焼成普通
58号住	196-1	甕 (9)	23.0 19.8 () (18.6)	底部欠 唇半分欠	頭部に四段の波状文 一部重複(下が上を 切る)	施文後斜位のハケ 肩下部 斜位のヘラミガキあり 内面 ヨコのハケの後 ヨコ主体 のヘラミガキ	白黄褐色 砂粒わざ か含む 焼成普通
	-2	器台か 高环 (2)	() () () (9.2)	脚底部 壺底欠	脚部三角形形状のつば を持つ。内面丸底	内外面 ヨコナデ	白黄褐色 長石含む 焼成普通
	-3	甕 (1)	26.4 () () (14.2)	肩上部より 上口縁半分 欠	頭部に現存四段の波 状文一部下が上を切 る	外面 口縁部施文後タテのハケ 脚部斜位のハケ 内面 口縁部ヨコヘラミガキ 脚 部ヨコナデ	赤褐色ないし灰白色 細砂粒含むが胎土良好 焼成堅歯
	-4	甕 (4)	() () 7.3 (2.1)	底部のみ	木葉底	内外面ナデ	赤褐色 大粒な長石 含む 焼成普通
	-5	甕 (4.6)	14.7 14.4 () (14.1)	底部欠 唇一部欠	頭部に4条一段その 下6条2段の波状文 (断絶3回)	外面 施文後ヨコのハケ 脚部ヘ ラケズリの後ヨコ、斜位の ハケ 内面 丹念なヘラミガキ	白灰色 細砂長石わ ずか含む 胎土良好 焼成良好
	-7	甕 (3)	(19.7) (16.2) () (14.6)	底部欠 分	半 それで不明瞭2条の 波状文三段	外面 一部タテのハケあり 内面 ヨコナデ	暗褐色 砂粒含む 焼成不良
	197-8	甕 (9.9.10)	(27.5) (27.4) () (32.5)	底部欠 %	口唇下に10条の波状 文その下に6条5重 縫、その下に二段10 条の波条文	タテ、斜位のハケ(施文後) ヨコのハケ	暗褐色 色風呂褐色 砂粒含む 化粧土 焼成堅歯 内面炭化物付着

出土地	押番号	器種	法量	残存状態	文様	調整	胎土・色調
58号住	197-9	高环 (10)	() () () (4.2)	脚底部脚部 部欠		外面 ヨコ、タテのハケ 内面 ナデ	赤褐色 長石含む 燒成良好
	-13	要 (8-12)	(20.5) 19.8 () (20.7)	底部欠 口 縫一部のみ 脚部一部欠	文様すれて不明瞭 縫一部のみ 脚部一部欠	外面 不明 内面 ヨコナデ一部へラケズリ痕 残す	白黃褐色 砂粒含む 燒成不良
	-14	要 (9)	() () 9.2 (9.0)	脚下部以下		外面 斜位のハケ 内面 はく落のため不明	赤褐色 破紋(長石 大粒)多し 燒成良 好
	-15	鉢 (6)	(19.6) - 9.2 11.0 (9.2)	口縫16欠	無文	外表面ヨコナデ	白黃褐色 砂粒含む 燒成普通
	198-16	要 (15)	(19.0) () () (9.5)	口頭部折立 部一欠	すれて文様不明瞭 折立部タガの竹青花 縫8条の大波状の下 に三段の重複する波 状文下部に大波状文 あり	外面 不明 内面 はく落のため不明	赤褐色 大粒な長石 多く含む 燃成普通
	-17	要 (15)	() (37.3) 13.2 36.0	口頭部欠脚 16枚		外面 タテのナデ 内面 はく落のため不明	赤褐色 大粒な長石 多く含む 外面化粧土 燒成良好
	-18	要 (17)	(21.4) () () (14.7)	口頭部 16 欠	文様すれて不明瞭 頭上部に大波状文2 段脚上部に二段の斜 走短縫文	外面 すれて不明 内面 ヨコナデ(一部はく落)	赤褐色 大粒な長石 含む 燃成普通
59号住	-19	要	(13.5) - 5.4 14.4	口頭部16欠	無文	外面 斜位・タテのハケで一部タ テのヘラミガキ 内面 ヨコのハケ下跡タテのヘラ ミガキ	赤褐色ないし白黄色 胎土緻密 燃成良 好 口頭部化粧物付着
	-21	手づく ね土器	() () 3.2 (2.9)	体部欠		外表面ともナデ	赤褐色 砂粒含む 燒成普通
	203-1	要 (6)	(20.5) 20.5 () 19.7	脚下部欠 口縫16欠	頭部に三段に7条の 波状文	外面 口唇ヨコナデ 腹部斜位の ハケ 一部タテのヘラミガ キあり 内面 ヨコのヘラケズリ	赤褐色ないし黒褐色 胎土緻密 燃成良 好
	-2	要	(15.8) (15.5) () (16.8)	底部欠半分 の破片	頭部に三段に10条の 波状文(下が上を切る)	外面 タテ斜位のナデ 内面 丹念なヘラミガキ	黄褐色 指砂粒含む 燒成普通 外表面部に炭化物付着
	-3	要	() (20.2) () (13.0)	頭脚部半 部	頭部三段(現存) 7 条以上の波状文	外面 斜位のハケ一部あり 内面 ヨコの丹念なヘラミガキ	黄褐色 長石わざか 含む 燃成普通
III号住	-4	要	() (18.3) () (12.2)	頭脚部半分 の波状文	頭部現存二段の8条 の波状文	外面 ヨコナデ 内面 ヘラケズリの後ヨコナデ	黄褐色 長石わざか 含む 燃成普通
	-5	鉢	(10.9) - 5.1 6.3	口部一部 欠	二段に10条の波状文	外面 ヨコナデ底脚付跡タテのヘ ラミガキ ヘラケズリ痕残 す 内面 ナデ	白黃褐色 黄母含む 燒成良好
	205-1	要 (2.5)	(21.8) (19.8) () (22.0)	底部欠16	有設口縫 頭部2段 5条の大波状文	外面 口唇ヨコナデ 腹部斜位 後斜位のハケ 内面 ヘラケズリ痕を残す ヨコ ナデ	白黃褐色 砂粒含む 燒成普通 外表面化粧物付着
112号住	-4	要 (3-4)	18.8 19.3 () (12.3)	口縫から脚 失部 口縫 一部欠	口縫に二段の波状文 文様すれて不明瞭	外面 ヨコナデ(?) 内面 ヨコナデ	赤褐色 砂粒多し 燒成不良 外表面化粧物付着
	-5	要 (7)	20.4 19.3 () (10.4)	口頭部	口縫下に斜走短縫文 頭部一般波状文その 下に2段(現存) 斜 走短縫文	外面 斜位のハケ一部にみられる 内面 ヨコナデ	赤褐色 砂粒多し 燒成不良
113号住	207-1	高环 (1-2)	14.5 - 7.2 13.3 12.7 686.82cm	一部口縫欠	無文 外面不規形	外面 ヘラケズリ痕あり 一部化 粧土はく落 ヨコナデ 内面 口縫部ヨコナデ環下部ヨコ 及びタテのヘラミガキ	赤褐色 長石含む 燒成普通

出土地	標 回 番 号	器 種	法 量	残存状態	文様	調 査	地 土・色 調
10号住	207-2	甕 (3)	() () 7.4 (3.5)	底部のみ		内外面ともヨコナデ	白黄褐色 粗砂粒含む 焼成普通
	-3	甕 (5)	() () 6.5 (6.3)	底部のみ		外面 タテのヘラケズリ 内面 ヨコナデ	暗褐色 鉛土灰密 焼成堅難
15号住	209-1	甕 (6)	16.8 16.2 () (16.3)	胴下部欠	頸部三段の波状文	外面 口唇ヨコナデ 脊部斜位のハケ 内面 丹念なヨコのヘラケズリ 部があり	灰白色及び黄褐色 鉛土灰密 焼成良好
	-2	甕 (6)	() (20.0) () (12.4)	胴尖部分		外面 脱下部斜位のハケ 内面 ヨコのハケ	黄褐色 大粒な長石わずか含む 焼成良好
	-3	甕	(19.0) (17.6) () (18.7)	底部欠%	頸部三段5条の粗波状文	外面 口唇ヨコナデ 脊部一部に斜位のハケ 内面 ヨコナデ一部ヨコのヘラミガキあり	白黄褐色 砂粒含む 焼成普通
	-4	甕	(18.5) () () (0.5)	胴上半部%	頸部にラフな波状文 積存三段	外面 距離後タテのハケ 内面 ヨコのハケ一部あり	黄褐色 砂粒含む 焼成普通
	-5	甕	() (25.7) () (14.2)	胴上半部のみ%	10条の波状の下に斜走弦文さらにその下部に円弧文	外面 ヨコナデ ハラケズリ痕残す。はく落している	黄褐色 砂粒含む 焼成普通
	-6	鉢	14.2 () () (3.6)	底部欠%	無文	外面 ヘラミガキの後ヨコのハケ 内面 斜位のハケ	赤褐色 鉛土良好 焼成普通
	-8	甕	() () 7.8 (3.5)	底部のみ		それで不明 内面 はく落のため不明	白黄褐色 大粒な長石含む 焼成悪い
	-9	甕	20.6 18.9 () (18.8)	底部欠全体に一部を欠く	頸部に二段の波状文	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	白黄褐色 大粒な長石含む 焼成普通
	-10	甕	(21.0) (23.2) () (12.5)	胴上部以上%	頸部に現存三段のラフな波状文	外面 施文後タテのハケ口唇はヨコナデ 内面 ヨコのハケ一部ヘラが切る	黒色ないし暗褐色 鉛土灰密 焼成良好
	-11	甕	(18.6) (44.0) () (30.0)	胴尖部以上 口頭部 脱部欠	頸部に横走斜波状文の上と下に一段の波状文	外面 それでいて不明 内面 はく落のため不明	赤褐色 大粒な長石わずかに含む 焼成普通
132号住	212-1	鉢 か 高 环 (1)	28.2 - () (12.4)	底部(脚部) 欠%	頸部と体上部横指横走弦文	外面 斜位のナデ 内面 ヨコナデ	黒褐色ないし黄褐色 大粒な長石多く含む 焼成普通
	-2	甕 (1-2)	(16.4) (14.0) () (10.2)	胴下部以下に%	頸部に波状文一部重複する	外面 ヨコナデ 内面 ヨコのヘラケズリの後ヨコナデ	白黄褐色 長石わずかに含む 焼成良好
	-3	甕 (3)	(16.2) (17.0) () (19.0)	底部欠%	頸部に5段の波状文(2段は重複)	外面 ヨコナデ 内面 口唇ヨコナデ 頸部ヘラケズリの後ヨコナデ	
	-4	甕 (4-5)	(28.4) (34.8) 7.5 42.8	口縁から胴部欠	縫文強く不明瞭 4段の波状文一部は重複	外面 口唇ヨコナデ 施文後ヨコナデないし斜位のハケ 一部輪積痕残す。口唇部ヨコナデ 頸部一部ヨコのハケ	黒褐色ないし黄褐色 鉛土灰密 焼成堅難
	-5	高环 (6)	(19.4) () () (14.0)	口縁一部のみ脚部欠	無文	外面 頸部ヨコ本体から脚部タテのヘラミガキ 内面 体部ヨコのヘラミガキ他はナデ	黒褐色ないし暗褐色 大粒長石含む 焼成良好
	-6	甕 (5)	(15.8) () () (7.3)	口頭部折立 頸部のみ	文様 はく落で不明瞭 折立部タテの次第 頸部に波状文と後脚部横弦文	外面 不明 内面 口唇部ヨコナデ体部はく落のため不明	赤褐色 大粒な長石含む 焼成普通

反目遺跡時代以降住居址一覧表

番号	平面形	長軸方向	規模	入口	カマド	柱穴	時期	備考
2	隅丸方形	N-68°-W	4.5×4.3	北東隅	4	奈・平VII	5号住貼床	
7	不明	不明	不明	東(石芯)	不明	不明	6号住中に作られる	
9	隅丸長方形	N-69°-W	5.7×4.9	北東隅	4	平安後	10号住に貼床	
13	隅丸長方形	N-50°-W	6.0(?) ×4.8(?)	北西中央	1 (現存)	古墳IV	南東大半は未調査	
14	隅丸長方形 (?)	不明	不明	西	2 (現存)	奈・平III	東から南は攪乱のため不明	
17	隅丸長方形	N-80°-W	7.0×5.6	西中央?	4	奈・平III	北西部は55号住の上に貼床	
18	隅丸方形	S-56°-W	4.3×3.9	南・東中央	4(現存3)	奈・平II~III	南部一部壊される	
20	隅丸長方形	N-62°-W	3.9×2.8	西中央	なし	不明		
21	隅丸方形	N-16°-E	5.0×4.8	西中央	4	奈・平II		
23	?	?	(6.6 ×6.2)	北西南東		奈・平III 奈・平VII	二軒が同一床面にて重複	
25	不整隅丸方形	N-9°-E	4.0×3.9	東中央	西中央	4	奈・平II	入口施設あり
26	隅丸長方形	N-67°-W	5.2×4.3		西中央	3	奈・平III	
27	隅丸方形	N-38°-E	5.5×5.3		北西中央	4	奈・平III	
31	隅丸方形	S-85°-E	3.6×3.5	東中央	1	奈・平III		
33	隅丸方形	S-62°-E	6.2×5.7 (5.0)	南東やや南寄り	4	奈・平III		
35	隅丸長方形	S-71°-E	5.3×4.3		東中央	4 (6)	奈・平VI~VII	
36	隅丸長方形	N-15°-E	6.4×5.0 (?)		西中央(?)	4	奈・平III	
42	隅丸方形	S-66°-E	5.1×5.0	南東やや南寄り	4(現存3)	奈・平III		
49	隅丸長方形	N-76°-W	8.7×7.6	北東隅	6	奈・平VII	大形	

番号	平面形	長軸方向	規模	入口	カマド	柱穴	時期	備考
54	隅丸長方形	S-63°-E	5.0×4.1		南東中央	4	奈・平II	
55	隅丸長方形	N-23°-E	4.3×3.6		西やや南寄り	不明	奈・平III	
56	隅丸方形	N-82°-W	4.3×3.9		西やや南寄り	1	奈・平II	
62	隅丸方形	S-80°-E	8.3×7.8	西	東中央	8個 礎石 (基)	奈・平IV～V	礎石持つ住居
63	隅丸方形	N-8°-E	4.3(4.1) ×4.0		西中央	2	奈・平IV～V	西67号の上に カマドを造つ てある
67	隅丸長方形	S-15°-W	4.1×3.3		東中央	1		東に63号のカ マドがつくら れる。 68号に貼床
72	隅丸	不明	3.9×?		不明		平安	北±135号と同 床面にて重複 西は調査区域外
73	不明	不明	不明		不明		不明	わずかな壁と 床面のみ
75	不整隅丸方 形	N-15°-E	4.2×4.0		西中央	1	奈・平V	
76	隅丸方形	S-20°-W	5.8(?)× ? 5.7		南東中央?	1	奈・平IV	南側は除地の ため未発掘
77	隅丸長方形? ?	不明	7.3 (?)×?		北西	2	奈・平IV	東76号に切ら れる
82	隅丸方形	N-10°-E	4.6×4.2		西中央	4	奈・平II	
85	不整隅丸方 形	N-80°-W	5.7×5.3	東	西中央	4	奈・平II	入口施設可大
86	隅丸長方形	N-81°-W	?×4.5		北東隅	4(現 存3)	奈・平IV	南側は搅乱
87	不明	不明	不明		西		不明	88号に貼床 南90号に切ら れる
89	隅丸形	不明	4.0×?		西		不明	88号に貼床

番号	平面形	長軸方向	規模	入口	カマド	柱穴	時期	備考
90	不明	不明	不明		不明	不明	不明	87号を切る
95	隅丸長方形	N-65°-W	5.4×4.8		北西中央	2	奈・平VI～VII	
96	隅丸長方形	N-57°-W	10.5(?) ×8.9	北東 中央	北西中央	8個 礎石 (北西 部欠)	奈・平II～III	大形の礎石住居
98	不明	不明	不明		北西	不明	奈・平IV	103号住と同一 床面にて重複
100	不明	不明	不明		西	4?	奈・平IV	105号住に貼床 99号住と同一 床面にて重複 東にも焼土あり (カマド)重 複住居の可大
101	隅丸方形	N-70°-W	5.9×5.4		西やや南寄 り	4	奈・平III	東側104号に貼 床される。
104	不整隅丸長 方形	N-81°-W	6.0×4.4		西中央	2	奈・平III	西101号に貼床 する
105	隅丸方形	S-30°-W	2.2×2.0		東南寄り	1	奈・平III	100号住に貼床 される
107	不明	不明	不明		不明	不明	不明	床面のみ
114	隅丸方形	N-80°-W	4.7×4.5	東中 央	西中央	4	奈・平III～ IV	
120	隅丸形	不明	不明		北西隅?	不明	奈・平IV	大半は除地の ため未調査
124	隅丸長方形	N-28°-E	6.2 × 5.1?		不明		不明	119号と同一床 面にて重複
125	隅丸長方形	N-51°-W	9.5×8.2		北隅	4	奈・平VII 旧 (奈・平 V～VI)	住居址重複の 可大
126	隅丸方形	S-50°-E	4.3×4.2		南東中央	1		
127	隅丸方形	N-78°-W	4.0×4.0		西中央		不明	西は129号住に 貼床
128	隅丸方形	N-32°-E	5.6×5.2		北東中央	4	奈・平II	東大半は129号 住に貼床

番号	平面形	長軸方向	規模	入口	カマド	柱穴	時期	備考
130	隅丸方形	N-17°-E	5.9×5.5		東中央	4	不明	
131	隅丸方形	S-70°-E	4.0×3.8		東やや南寄り		奈・平VI	
137	隅丸方形	N-75°-E	5.5×5.1		北東隅	2	奈・平V～VI	
138	隅丸方形	N-73°-W	3.9×3.7		東やや北寄り		奈・平IV	

反目遺跡 土師器・須恵器・灰釉陶器観察表

出土地	標 本 番 号	器 形	法 量	容 量	残存状態	器形の特徴	圖 形	胎 土	胎 土 外
2号住	214-1	皿	(10.5) (4.0) 2.6	%	体部は直線的に外反する平底	ロクロナデ・底部切離し後へラケズリ		赤褐色 粘砂粒 含む 焼成普通	
	-2	壺 (灰)	14.7 7.3 5.8	391.08	%	丸株を持って立ち上がり体部は直線的に外反し口唇はく字形に外反する。高台が付く。高台に割み一つ持つ。	ロクロナデ 回転糸切の後高台内辺ロクロナデ	灰白色・輪乳白色に近い	
	-3	壺 (灰)	() (6.5) 4.3		高台部分体部一部	体下部に粗点を持ち丸株を持つて外反する。強く外反する高台を持つ。	ロクロナデ・高台付けた後内辺回転へラケズリ	乳灰色	
	-4	皿	(11.0) 5.1 3.2		口縁光沢	柱状高台で体部は強く外反する。	ロクロナデ 回転糸切	赤褐色 霧母含む 焼成普通	
	-5	折縁壺 (灰)	(11.5) (6.8) (2.7)		%	強く外反した体部内屈した後口縁が外反する三角形状の高台を持つ。内面強く屈曲を持つ。	回転糸切りの後内辺回転へラケズリ	灰白色 轮乳白色	
	-6	皿 (灰)	(11.9) () (2.3)		%	体部丸株を持って外反し、口縁は薄く外反する。内面に屈曲を持つ。	ロクロナデ	灰白色 轮乳白色	
	-7	壺 (灰)	(16.0) (8.0) 5.8		体底部光沢一部	丸株を持って立ち上がった後体部は直線的に外反する・外反する高台を持つ。	ロクロナデ 回転糸切りの後高台内辺回転へラケズリ	白黄色 轮や緑色を帯びる	
	-8	手づね	3.8 3.0 1.3		完	体部直立する		白黄褐色・霧母含む 焼成良	
9号住	217-1	皿	(9.8) 3.2 2.9		口縁光沢	直線に強く外反した体部はく字形に外反する。	ロクロナデ 回転糸切	赤褐色 霧母含む 焼成普通	
	-2	壺	4.1 (2.2)		体部欠	三角形状の高い高台を持つ。	ロクロナデ 切り離し不明。高台内辺ロクロナデ	赤褐色・胎土堅密 焼成普通	
	-3	壺 (灰)	() () (1.4)		縁部欠	つまみ脚は宝珠形を呈し内面や外回む	ロクロナデ・天井部回転へラケズリ	灰黑色・胎土堅密 焼成良好	
	-4	壺 (灰)	11.0 5.7 3.5	146.07	体筋一部欠	丸株を持って立ち上がり中央でそぞぞくに外反する。輪花は3箇所三角形状の高台持つ	ロクロナデ 高台周辺はナデ	乳白色 轮は内面のみ	
	-5	広口瓶 (灰)	9.3 () (4.9)		口縁部光沢	口縁は直立する	ロクロナデ	灰白色・輪は緑色を帯びる	
13号住	219-1	甕	18.5 7.3 30.2		口縁光澤下部 残欠	球状にふくらむ肩部は肩尖部に最大径を持ち口縁はく字形に外反する。	ロクロナデ副部は肩尖部で上下はヨコハケ・ヘラケズリが残る。内面はヨコのハケ・底部は手持ちのヘラケズリ	黄褐色 霧母多量に含みキラキラする 焼成良好	
	-2	高炉	14.0 (11.2) 12.3	419.27	口唇一部欠 脚部一部のみ	強く外反した体部は直立し口縁は薄く外反する	体下部から脚上部はく落する。外面口縁はヨコナデ體部丹念なヘリミガキ 脚部はタテのヘラケズリの強ナデ 内面は丹念なヘラミガキ脚部はタテのヘラケズリ端部はヨコのヘラミガキ	外面黄褐色内面 赤褐色・長石わずか含む 焼成堅密 脚部に一筋丹影がある	
	-3	甕	(17.2) () 10.8		脚上部光沢	脚上部にわざかに腰を持ち口縁は外反する	外面 タテのヘラケズリの後タテのハケ内面口縫部はヨコナデ・脚部斜位のハケの後タテのヘラミガキ	白黄褐色・長石わずか含む 焼成良好	
	-4	甕	() () (17.3)		脚下部のみ光沢	底部は強く収束する	外面 ハラケズリの後タテのハケ内面脚部ヨコナデ下部斜位のハケ	黒褐色・大粒な長石多量に含む 焼成良好	

出土地	博回番号	器種	法量	容量	保存状態	器形の特徴	調査	胎土外
13号住	219-5	瓶	13.2 2.8 10.4	598.05	完	口縁から後々に肥厚し瓶部附近にてやや丸味を持つ吹成する。單孔で内面からそぎ状	外面 体下部にヘラケズリ痕を残す。 タテのヘラミガキ 口縁はヨコナデ 内面 ヨコはヨコ体部はタテのヘラミガキ	黄褐色・長石わずかに含む・焼成良好
	-6	环	(12.4) — 5.4	%		丸底で口縁は外反する。体部に沈痕がある。	外面 口縁ヨコナデ、体部はヘラケズリ痕残す。 内面 口縁ヨコナデ体部は丹念なヘラミガキ	赤褐色・長石多し・焼成良好
	220-7	瓶	(23.4) (4.0) 23.8	%		底部から直線的に外反し肩部にて直立ぎみとなり口縁は外傾する。單孔である。	外面 口縁ヨコナデ 腹上部はハケ削下部はタテのヘラミガキが後から施される 内面 ヨコ主体の丹念なヘラミガキ	白黒褐色・長石わずかに含む胎土微密 焼成良好
	10	鉢	(21.2) — 11.3	%		丸底から直線的に外傾し腰部にてやや内面しお縁は外反する	外面 ヘラケズリ痕残る。ナデを行なうが体部一部にヘラミガキあり 内面 体央部へラミガキ他はヨコナデ	白黒褐色・砂粒含む・焼成良好
	-11	手づくね	3.6 3.0 4.0		完	体部はほぼ直立する		白黒褐色・長石わずかに含む・焼成良好
	-12	手づくね	1.8 — 2.4		完	球状を呈す	内外面ともひび割れがみられる	白黒褐色・焼成普通
	223-1	甕	() 6.7 (10.3)		肩下部少	底部から直線的に外傾する	外面 タテのハケ 内面 タテのナデ	黄褐色・長石含む・焼成良好
	-2	环	() 6.0 (1.3)		口縁欠少	上げ底	ロクロナデ 回転糸切離し	青黒色・長石わずか含む・軟質
	226-1	甕	18.2 8.4 21.3 (20.3)		口縁少 肩部少	環状にふくらむ肩部は尖部にて最大径をもち底を帯つロ輪部は短く外反する	外面 口部回転ヨコナデ・肩部2段のタテのハケ。底は手持ちヘラケズリ 内面 口部回転ヨコナデ・腹上部ヨコのハケ下部はタテのヘラケズリ	暗褐色・砂粒わずか含む・焼成良好
	-2	环	(15.2) 6.5 4.8		体部少	体部は直線的に外傾する	ロクロナデ 内面墨色処理痕みられない	赤褐色・胎土微密 焼成不良で外延すれている
17号住	-3	环	12.5 6.2 3.0		底少、体少	直線的に外傾し口縁は内そぎ状	ロクロナデ 底部回転糸切高台内辺部回転ヘラケズリ	赤褐色・胎土微密 焼成不良 内外ともほく落があり
	-4	甕 (須)	() () (1.8)		焼跡少	つまみ部は内部がくぼむ	ロクロナデ火井部回転ヘラケズリ	青黒色・長石わずかに含む・焼成普通
	228-1	甕	() 6.3 (4.8)		肩下部少	肩部の立ち上がりははっきりしない	外面 ハケ底に木葉痕 内面 ナデ	暗褐色・長石わずかに含む・焼成普通
	-2	环 (須)	12.5 6.3 4.0	273.53	体部一部欠	付け高台	ロクロナデ 回転糸切り高台内辺部回転ヘラケズリ	灰黑色・胎土含む・焼成は普通
	-3	环 (須)	() 8.2 (2.2)		口縁少 %	付け高台	ロクロナデ 回転糸切り高台内辺部回転ヘラケズリ	灰白色・胎土良好 焼成普通
18号住	-4	环 (須)	() 5.4 (1.3)		口縁欠		ロクロナデ 回転糸切り	灰褐色・長石含む・焼成良好
	-5	長頸甕	() () (6.0)		頸部のみ		ロクロナデ	乳白色・自然胎綠色をおびる

出土地	井戸番号	鉛種	法量	容量	残存状態	器形の特徴	調査	施土外
21号住	232-1	錠	(12.2) 7.3 14.2 (13.6)	口縁欠、崩部 34欠	口部頗る最大径頸央部・平底	ロクロナダ・底部回転糸切	青褐色・施土無 色・焼成度	
	-2	錠 (原)	(18.5) — 2.8	つまみ部欠少	頸部は内傾する	ロクロナダ・天井部回転ヘラケズリ	灰黒色・砂粒わ ずか含む・焼成 良好	
	-3	錠 (原)	15.3 — 2.7	完	つまみ部は扁平でわずかに内部 くぼむ	ロクロナダ・天井部・回転ヘラケズ リ	灰黒色・長石多 く含む・焼成度 好	
	-4	环 (原)	(12.4) (6.6) 4.2	3%	体部はほぼ直線的に外傾する	ロクロナダ・底部回転糸切	青褐色ないし灰 黒色・長石多量 に含む・軟質	
	-5	环 (原)	12.3 8.7 4.2	269.21	体部一部欠 強く側曲した体部はわずかに外 反する。付け高台	ロクロナダ・底部回転糸切り・回転 ヘラケズリ	青黒色・長石多 く含む・焼成度 好	
	-6	环 (原)	(11.8) (4.9) 4.6	274.49	丸柱を持って立ち上がった体部 は直線的に外傾する	ロクロナダ・底部回転糸切	青黒色・長石多 く含む・焼成度 好	
23号住	235-1	錠	(20.0) () 11.8	胴上部4% 胴下部	長胴錠	外面口唇ヨコナダ胴部タテのハケ 内面 ヨコのハケ	暗褐色・長石含 む・焼成良好	
	-2	錠	() 6.2 (4.8)	胴下部		外面斜位のハケ 内面ヨコのハケ 底木座痕	暗褐色・施土無 色・焼成良好	
	-3	錠	() 8.2 (5.6)	胴下部4%		外面タテのハケ 内面ナダ 底木座痕	白黄褐色・大粒 な長石含む・燒 成良好	
	-4	錠 (原)	() (10.0) (5.1)	胴下部4%		ロクロナダ・底ハケ	墨灰色・施土無 色	
	-5	环 (原)	() 5.4 (1.0)	底4%		ロクロナダ・底回転糸切	白灰色・施土無 色	
	-6	环 (原)	() 6.3 (1.3)	口縁欠		ロクロナダ・底転糸切	灰白色・長石含 む	
	-7	环 (原)	() 6.8 (1.8)	口縁欠4%		ロクロナダ・底回転糸切	灰黒色・砂粒多 く含む	
	-8	环 (原)	12.9 6.0 3.3	体部4%欠	体部直線的	ロクロナダ・底回転糸切	白黄褐色・砂粒 含む・軟質	
	-9	环 (原)	(11.2) (6.0) 3.5	底欠、4%	体部直線的	ロクロナダ	白黄色・わざか に砂粒含む・軟 質	
	-10	环 (原)	(13.8) (6.8) 3.9	4%	体部立ち上がり丸柱持つ	ロクロナダ・底回転糸切	白灰色・砂粒わ ずかに含む・軟 質	
	-11	环 (原)	(12.9) 6.3 3.0	底一部欠 体部4%	体部直線的	ロクロナダ・底回転糸切	白色・砂粒含む 軟質	
	-12	环	15.8 7.5 4.2	448.34	底一部欠 体部4%	体部わずかに丸柱持つ	ロクロナダ・底回転糸切 内面墨色研磨 (一部外面口縁黒色)	暗褐色・長石含 む・焼成良好
	-13	环	() 4.8 (2.1)	口縁欠		ロクロナダ・底回転糸切	暗褐色・露骨長 石含む・焼成良 好	

出土地	博 国 番 号	器 様	法 量	容 量	残存状態	器形の特徴	調 整	胎 土 外
23号住	235-14	环	13.3 6.0 3.7 (3.3)	口縁部分的に半分欠	体部丸味持つ	ロクロナデ・底回転糸切り 内面ヨコのヘラミガキ	赤褐色・細砂粒含む・焼成良好	
	-15	段皿 (灰)	11.2 5.2 2.7	口縁少欠	付け高台 高台直立する	ロクロヨコナデ・底ロクロナデ	白灰色・稍白色 内面一部緑色おびる・底内面無釉	
	-16	環	15.0 7.5 5.5	底部一部欠 体部一部	付け高台・高台外反する	ロクロヨコナデ・底回転ヘラケズリ	白灰色・純白色 内面底と外面無釉	
	-17	香炉蓋 (灰)	12.8 — 4.7	体部少欠	つまみ部定珠形・豊高高くドーム状となり、端部外反する 体尖部三ヶ所窪の目造形	ロクロヨコナデ・天井部回転ヘラケズリ	白黄色・無釉	
	-18	壺 (頃)	() () (6.8)	体部少		ロクロヨコナデ	灰白色	
	-19	皿	(10.4) 5.0 3.7	口縁少欠	柱状高台・体尖部にて屈曲し口縁外反する。	ロクロヨコナデ・底回転糸切り	赤褐色・胎土緻密・焼成良好	
	-20	皿	9.5 4.7 3.6	口縁少欠	柱状高台	ロクロヨコナデ・底回転糸切り	白黄褐色・盤足多く含みキラキラする・焼成良好	
	-21	环	() 5.6 (4.6)	体部一部	柱状高台	ロクロヨコナデ・底回転糸切り	赤褐色・細砂粒含む・焼成不良	
	25号住	239-1	壺 () (11.0)	胴上部少	口縁はほぼ水平に強く外反する	内面ともタテのハケ口縁内面はヨコナデ	暗褐色・内面白黄褐色・當母多く含む・焼成良好 外面炭化物付着	
	-2	环 (頃)	13.1 5.6 4.2	体部少欠	体部外傾する	ロクロナデ 底部回転糸切り	灰白色・大粒な長石含む・軟質	
26号住	-3	环 (頃)	(12.4) (6.0) 4.3	底部少	*	ロクロナデ	乳白色・無かい長石含む・軟質	
	-4	环 (頃)	(12.4) (6.2) 4.0	少	体部はやや丸味を持って外傾する	ロクロナデ・底部回転糸切	青黒色・長石含む・焼成良好	
	241-1	壺 ()	(12.5) 11.6	口縁から胴上部少欠肩下部から底部一部欠	胴部は珠状にふくらみ、口縁少く外反する	外面 タテ斜位のハケ目 内面 ヨコナデ 底木葉痕	暗赤褐色・長石わずか含む・焼成普通	
	-2	壺 ()	(11.3) 5.9 9.4	口縁光胴部少欠	*	外面 タテのハケ 口縁ヨコナデ 内面 ヨコのハケ 口縁ヨコナデ 底木葉痕を持ちのヘラでケズル	白黄褐色・砂粒含む・焼成普通	
	-3	环 ()	(13.1) (7.0) 3.5	少	器厚を減じて外傾する	ロクロナデ 内面墨色焰裡 底回転糸切り	赤褐色・胎土緻密・焼成普通	
	-4	环 (頃)	(13.3) 5.6 3.3	体部少	口唇わずか外反する	ロクロナデ 底回転糸切	灰白色・長石わずか含む・焼成普通	
	-5	壺 ()	(12.5) (8.5)	弓泡に同一破片あるも復元できず	底から丸味を持って立ち上がる	外面 タテのハケ目 内面 斜位のハケ 底は 手持ちのヘラケズリ	黄褐色・長石わずか含む・焼成普通	
26号住	-6	环 (頃)	(14.0) (4.2) 3.3	底無欠体部少	体部直線的	ロクロナデ	青黒色・當母含む	
	-7	环 (頃)	() 6.2 (2.0)	体部少		ロクロナデ・底回転糸切り	青黒色・大粒な長石含む	

出土地	探査番号	器種	法量	容量	残存状態	器形の特徴	調査	胎土外
26号住	241-8	片 (底)	() 4.9 (1.0)		体部欠く少		ロクロナデ・回転糸切	青黒色 胎土細密
	-9	片 (底)	() 6.0 (1.3)		体部欠く少		ロクロナデ・回転糸切り	灰白色・長石含む
27号住	244-1	甕	(16.0) () 8.3		胴下半部欠少	口縁短く胴部は球状となる	ロクロナデ	赤褐色・長石・雲母多く含みキラキラする・焼成良好
	-2	壺 (底)	(12.2) — 4.2		少	つまみ宝珠形、天井部水平に近く伸び縮縮は内屈する	ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	青黒色 胎土精練され焼成も堅硬
	-3	片 (底)	(13.5) () 3.3		底部欠少	体部は丸味を持って外傾する	ロクロナデ	灰白色 砂粒含む・軟質
31号住	247-1	甕	(24.1) (11.6) (32.3)		殆半に破片あるも復元できず	口縁はわずかに外反する	ロ鉛部ロコナデ 外面ハケ目・内面ヨコのハケ	黄褐色 大粒な長石 雲母含む 焼成良好
	-2	壺	() (13.8) (3.8)		口縁欠少		ロクロナデ 内面研磨	黄褐色・砂粒含む 焼成普通
	-3	甕 (底)	() (14.8) (7.0)		底部少	底から直線的に外傾する	内外ともタタキ目 内面ヨコのハケ	墨青色 胎土細密
33号住	249-1	甕	() 9.5 (7.0)		胴下折少 他に破片あるも復元できず	長脚甕	内外ともハケ目 底は木葉灰	黄褐色・砂粒含む・焼成良好
	-2	甕	() (9.6) 3.4		底部少	長脚甕	外側 ハケ目 内面 ヨコのハケ 底 木葉灰	*
	-3	甕	(12.8) (7.6) 10.8		底一部脚部分 口縁少	胴部は球状にふくらみ口縁短く外反する	外側 上部タテ・下部ヨコのハケ目 内面 ヨコナデのヘラケズリ直線	赤褐色 胎土好焼成普通 外面に炭化物付着
	-4	甕 (底)	(14.4) 6.0 8.7		口縁短脚部分	丸味を持ち外傾する胴部は内屈して底部を作り口縁は外傾する	シャープな作りである。 ロクロナデ 底回転糸切の後手持ちのヘラケズリ	墨色 砂粒の長石含むが胎土は堅硬
	-5	眞	(10.0) 4.2 2.2		口縁一部脚部少	口唇は壁厚を減ずる	ロクロナデ 底回転糸切の後ヘラケズリ	白黄褐色 胎土良好
	-6	片 (底)	12.6 5.0 3.4	233.15	完	丸味を持って外傾する。	シャープな作りである。 ロクロナデ底回転糸切りへラ記号あり	青褐色 胎土良好
	-7	片 (底)	(12.3) 5.8 3.4		口縁少	口唇下にて唇厚を減じて外反する	ロクロナデ 底回転糸切	青黒色 長石わずか含む
	-8	片	15.4 8.7 4.0		少	口唇内そぎ状となる	ロクロナデ 底回転糸切	白黄褐色・砂粒含む 焼成不良
	-9	片 (底)	12.3 6.1 4.0		体部欠少		ロクロナデ 底回転糸切	灰白色 砂粒含む 焼成悪く内外ともすれている
	-10	片 (底)	13.5 7.0 3.6		少		ロクロナデ 底回転糸切	青墨色・長石わずかに含む
	-11	片 (底)	(13.4) (5.6) 2.9		少	口唇わずかに外反する	ロクロナデ 底回転糸切	灰白色 大粒な長石含む

出土地	件 号	器種	法量	容量	残存状態	器形の特徴	調 情	施土外
33号住	249-12	环 (環)	(13.0) (6.6) 4.5	%			ロクロナデ 底回転糸切り	灰白色・大粒な 長石含む 粘質
	-13	环 (環)	(11.6) (5.8) 4.2	%			ロクロナデ 底回転糸切り	*
35号住	251-1	甕	() (11.8) (4.6)		尧同一破片あ るも復元でき ず底部下部	長胴甕	内外ヨコナデ	黄褐色・並石わ すかに含む・燒 成普通
	-2	甕	() 18.8 (3.0)			底部引	長胴甕	ロクロナデ 底回転糸切り
	-3	甕	() 7.8 (3.0)			底一部欠	長胴甕	内外ともナデ 底木葉痕
	-4	环	10.2 5.0 3.2 (2.8)		体部一部欠	ゆがんでいる。	ロクロナデ 底回転糸切り 内面底 円凸はげしい。内面黒色多い研磨は 顯著でない	黄褐色・大粒な 長石含む・燒成 良好
	-5	皿	(10.8) 3.7 2.5		口折一部のみ	厚い底から直線的に外傾する体 部は器底を餘々に彫じる	ロクロナデ 底回転糸切りの後ナデ	赤褐色・胎土致 密 燃成不良
	-6	环	() 5.6 (1.4)		体部欠		ロクロナデ 底回転糸切り 内面黒 色処理?	赤褐色・胎土致 密 燃成不良
	-7	环 (環)	() (10.0) (0.9)		底部引	付け高台	ロクロナデ 底回転ヘラケズリ	灰白色 胎土良 好
	-8	环 (環)	(11.0) -(2.8)		%底欠	強く屈曲した体部薄厚を減じて 外傾する	ロクロナデ	背面黒色 胎土精 練され堅密に焼 かれる
	-9	脱皿 (灰)	14.1 7.6 2.7	262.98	完	付け高台内そぎ状三角形で低い	ロクロナデ 底回転糸切り、高台に 全面回転ヘラケズリのため凹あり	乳白色・釉は白 色に近く内面は やや緑色をおびる
	-10	皿 (灰)	11.4 (6.3) 2.3		%	付け高台 高台内そぎ状三角形 で低い	ロクロナデ 全面回転ヘラケズリ	乳白色・釉は白 色
	-11	皿 (灰)	12.2 7.3 2.3		%	付け高台 高台ややつぶれる	ロクロナデ 底全面回転ヘラケズリ	灰白色 釉は白 色
	-12	塊 (灰)	15.3 8.3 6.6 (5.2)	619.24	体部%欠	付け高台・高台高く外傾するつ ぶれています	ロクロナデ 底全面回転 ヘラケズ リ	乳白色・釉は透 明度で内面やや 緑色をおびる
	-13	折鉢皿 (灰)	(10.8) () (1.9)		%底部欠		ロクロナデ	白黄色・釉は白 色
	-14	長瓶瓶 (灰)	() 9.1 (21.6)		口縁欠、瓶底 部一部欠	最大径は瓶上部・付け高台は低 く幅広	ロクロナデ 底全面回転ヘラケズリ	灰白色・釉は綠 色を帯び厚く油 脂紋となる ヘ ラケズリ
	-2	环 (環)	(12.9) (9.2) 3.5		%	強く屈曲して口縁は外反する付 け高台	ロクロナデ 底全面回転ヘラケズリ	青黑色 大粒な 長石含む
	36号住	253-1	甕	(18.3) () (4.6)		口縁部同一 破片あるも復 元できず	ロクロナデ	暗赤褐色 胎土 良好・焼成良好 内外とも炭化物 付着
	-2	环 (環)	(12.9) (9.2) 3.5		%	強く屈曲して口縁は外反する付 け高台	ロクロナデ 底全面回転ヘラケズリ	青黑色 大粒な 長石含む

出土地	辨証番号	器種	法量	容積	残存状態	器形の特徴	調査	胎土外
36号住	253-3	盃 (底) (3.4)	13.9 () (3.4)	34	つまみ部扁平 煙部は内傾する	ロクロナダ 天井部へラケリ	灰白色 軟質	
	-4	环 (底) 5.9 4.1	14.1 () 5.9 4.1	326.96	体部欠	ロクロナダ 底回転糸切り	青墨色・長石含む	
	-5	壺 (底) 6.5 4.3	() 6.5 4.3	口縁欠	付け高台で外傾する	ロクロナダ 全面回転へラケズリ	乳白色 無釉	
42号住	256-1	甌 () 7.8 (9.9)		側下部		外面 タテのハケ 内面 ナデ主体 底木漬痕	赤褐色・細砂粒含む・焼成良好	
	-2	盃 (底) () 2.7	13.2 () 2.7	端部一割欠	少がんでいる 煙部は直立する つまみ 備平で直状となる	ロクロナダ 天井部回転へラケズリ	青墨色・多量 砂粒含む	
	-3	盃 (底) () (2.3)	13.9 () (2.3)	1/2つまみ欠	煙部はほぼ直立する	ロクロナダ 天井部回転へラケズリ	灰白色・露地含 み鉛土漬痕・軟質	
	-4	环 (底) 8.3 (1.6)	() 8.3 (1.6)	体部欠	付け高台・底内面中央凹む 高台偏平	ロクロナダ 底回転糸切り 高台内 辺部回転へラケズリ	墨青色・黄泥わ ずか含む	
	-5	环 (底) () (8.9) (1.2)	() (8.9) (1.2)	体部欠	付け高台 高台偏平 底内面中 央凹む	ロクロナダ 底回転糸切り 高台内 辺部回転へラケズリ	墨青色・長石わ ずか含む	
	-6	环 (底) () 9.9 (1.9)	() () 9.9 (1.9)	体部欠	付け高台・底中央内面凹む	ロクロナダ 底全面回転へラケズリ	灰白色・胎土難 窓	
	-7	円盤環 (底) () () ()		脚台部破片	透しある		外 赤褐色 内 黒青色	
49号住	259-1	环	10.8 4.8 3.1	119.65	口唇一割欠	体部下わずかに屈曲する	ロクロナダ 底回転糸切り	赤褐色・わずか に砂粒含む・燒 成良好
	-2	环	9.6 5.1 2.7		口唇一割欠	体部は直線的に外傾する	ロクロナダ 底回転糸切り 内外(底外面)とも墨色処理	胎土難窓・燒成 良好
	-3	环	10.8 5.3 3.3		体部5%欠	体下部にてわずかに屈曲する	ロクロナダ 底回転糸切り 底内面 くぼむ	黄褐色・胎土難 窓・燒成良好
	-4	环	() 6.6 (1.5)		口縁欠 体部 底一部		ロクロナダ 底回転糸切り	黄褐色・胎土難 窓・燒成良好
	-5	环	(10.1) (4.1) 3.0		1/4	丸柱を持って外傾する	ロクロナダ	白黄褐色・胎土 良好・燒成良好
	-6	环	9.8 () (2.2)		1/4底欠		ロクロナダ 口唇内面 面取り	赤褐色・胎土難 窓
	-7	壺	(14.4) 7.0 4.2		体部5%欠	柱状高台 口唇わずかに外反	ロクロナダ 底回転糸切り 内外面はく落あり	黄褐色・砂粒わ ずか含む・燒成 普通
	-8	壺	(15.5) 7.0 4.0	285.71	体部5%	柱状高台 口唇わずかに外反	ロクロナダ 底回転糸切り 内外面はく落あり	赤褐色・細砂粒 含む・燒成良好
	-9	壺	() 7.4 (1.5)		体部欠	柱状高台 底内面くぼむ	ロクロナダ 底回転糸切り	黄褐色・胎土難 窓・燒成良好

出土地	井戸番号	器種	法量	容量	残存状態	器形の特徴	測定	地土外
49号住	259-10	壺	15.7 7.3 5.2		体部彫欠	柱状高台 口唇外反する	ロクロナデ 底回転糸切り 内外面ともくろあり はく落すれているが内外(底)面とも黒色処理	暗赤褐色・大粒な長石わずかに含む、焼成普通
	-11	壺	10.4 3.6 5.8	76.14	体部彫欠	柱状高台 体部直線的に外傾する。口唇内面直取	ロクロナデ 底回転糸切り	黄褐色・砂粒わずか含む・焼成良好
	-12	壺	() 4.6 2.2		体部欠	柱状高台 底内面5mm程の孔がある。	ロクロナデ 底回転糸切り三条への記号内外体部底に黒色部がみられる。	赤褐色・粘土鐵岩・焼成良好
	-13	壺	() 4.6 (2.2)		体部欠	柱状高台	ロクロナデ 底回転糸切り	黄褐色・粘土良好・焼成不良
	-14	壺	(14.6) () (3.2)		%底部欠	口唇玉巻状	ロクロナデ 内面口唇下に一系沈縛を持つ	灰白色・輪は透明質内面緑色をおびる。
	-15	壺	(17.3) () 4.3		%底部欠	口唇玉巻状	ロクロナデ 内面口唇下に一系沈縛を持つ	青黒色・輪は白色に近い・内面緑色をおびる
	-16	壺	(武) 10.1 5.1 3.3	97.58	完	口唇わずかに外反する 高台は低く内そぎ三角形状	ロクロナデ 底回転糸切りの後、両回転ヘラケズリ	黄褐色・輪は白色
	-17	長頸瓶	(武) 8.8 () (1.7)		口頸部分	わずかに受け口状を呈す	ロクロナデ	灰白色・輪白色 内面凸つ状となる
	-18	土製品	(4.0) 4.0 2.4		嘴部欠	平面前端形 削面三角形 立面かまぼこ形で反射面わずかにくぼむ		赤褐色・砂粒含む・焼成良好
260-19	広口瓶	(武)	18.1 () 12.0		%以上% (武)	口縁外反し口唇直立する	ロクロナデ	灰白色・輪白色に近い
	-20	広口瓶	(武)	20.8 () (6.0)	%	口縁外反 口唇わずか内凹する。わずかに受け口状となる	ロクロナデ	乳白色・輪白色 内面厚く緑色をおびる
	-21	広口瓶	(武) (15.2)		%以上%他に破片あるも復元できず	口縁外反し口唇は直立しわずかに受け口状となる。肩強く張る	ロクロナデ	灰白色・輪白色で一部薄黄色となる
	-22	広口瓶	() (18.8) (3.3)		底部% 21の底と思われる	付け高台 低く内そぎの平面	ロクロナデ	*
	-23	広口瓶	() (14.5) 7.8		体下部彫他に破片あるも復元できず	付け高台 低く内そぎの三角形	ロクロナデ	乳白色・輪白色 内面厚く緑色を呈す
	-24	広口瓶	() 15.2 (6.0)		底部%	付け高台 低く外傾し扁平	ロクロナデ	灰白色・輪白色
	-25	手づくね	2.0 1.8 1.8		完		ロクロナデ 内外(底)面黒色処理	黒色・粘土緻密
54号住	262-1	壺	(12.9) 8.5 4.0		底%、体部	付け高台 高台形で外反し底面や内側する。強く体部は屈曲する	ロクロナデ 底回転糸切りの後高台内辺部回転ヘラケズリ	青黒色・粘土鐵岩
	-2	壺	(12.8) (9.0) 3.8		%	付け高台 高台形で外反し、底面や内側する。体部は強く屈曲し口唇は内そぎ状となる	ロクロナデ 底回転ヘラケズリ	青黒色・長石含む
	-3	壺	() (9.5) 1.5		%体部欠	付け高台 高台形で外傾する	ロクロナデ 底回転糸切り 高台内辺部回転ヘラケズリ	灰白色・粘土鐵岩 軟質

出土地	井 回 数 番 号	器 種	法 量	容 量	残存状態	器形の特徴	調 整	胎 土 外
54号住	262-4	JF (颈)	() 8.0 2.2		口縁欠	体部は直線的に外傾する	ロクロナデ 底回転糸切り	青黒色・胎土緻密
	-5	环 (颈)	() 7.2 (2.8)			体部立ち上がりは丸味をもつ	ロクロナデ 底回転糸切り	灰白色・胎土緻密
	-6	JF (颈)	() 8.2 (2.2)		肩口縁欠	体部立ち上がりは丸味をもつ底 内面はくぼむ	ロクロナデ 底回転糸切り	白黄褐色・砂粒 わずかに含む
	-7	盡	(15.0) -	3.2	%	つまみ脚は偏平で丸味を持つ。 底部は内屈する。	ロクロナデ 天井部回転ヘラケズリ	青黒色・大粒な 長石多量に含む
	-8	盡 (颈)	(14.6) -	2.6	底部一體%	つまみ脚は宝珠形 端部は直立 する	ロクロナデ 天井部回転ヘラケズリ	灰白色・胎土緻密
	-9	塊 (底)	(14.5) (8.2) 6.4		%	器厚は徐々に減少して口唇わず かに外反する。付け高台 高台 は高く外反する	ロクロナデ 高台内辺部回転ヘラケ ズリ	灰白色 無釉
55号住	264-1	盡	(14.8) 7.1 14.4		底一部欠 部%	丸味を持った胴部は尖部にて最 大径を持ち頸部に腰を持ち、口 縁は外反する	ロクロナデ 底回転糸切りの後 持ちのヘラケズリ	赤褐色・砂粒含 む・焼成良好
	-2	盡	17.1 () (10.0)		肩上無%	最大径は胴部口縁はわずか外傾 し頸部に腰を持つ	ロ管内外 ヨコナデ、 胴部内外 タテのハケ	黄褐色・長石量 非常にキラキラ する 焼成良好
	-3	JF (颈)	() (8.8) 5.0		底一部欠、高 台一部のみ 体部一部口縁 欠	底部強く屈曲で立ち上がる 付け高台 高台は台形で外傾す る	ロクロナデ 底回転糸切り 高台内 辺部回転ヘラケズリ	灰白色・細砂粒 含む
56号住	267-1	环 (颈)	12.2 6.8 4.2 (3.7)		体部%欠	ゆがむ	ロクロナデ 底回転糸切り	黒青色・大粒な 砂粒多量に含む
	-2	环 (颈)	() (5.0) (2.1)		%口縁欠		ロクロナデ 底回転糸切り	青黒色・大粒な 長石含む
	-3	盡 (底)	12.9 -	3.7	%	体部直線的 つまみ脚偏平な宝 珠形	ロクロナデ 天井部手持ちヘラケズ リの後ナデ	灰白色・長石含 む 烧成やや甘 い
	-4	环 (颈)	() 9.0 (1.2)		体部%欠	付け高台 高台台形で底内傾	ロクロナデ 底回転糸切りの後回転 ヘラケズリ	墨青色・長石多 く含む
	-5	長腰盡 (底)	() () (5.8)		口頸部%	肩強く張る	ロクロナデ	灰白色・胎土緻 密
	-6	長腰盡 (底)	(11.0) () (6.7)		口頸部%	口縁強く外反し口唇は内傾す ずか受け口状を呈す	ロクロナデ	青黒色・胎土緻 密・濃緑色の自 然釉
62号住	271-1	盡	15.4 8.8 16.8		口縁、胴部一 部欠	胴部は球胴状で最大径となる	ロクロナデ 底回転糸切り	赤褐色・砂粒含 む・焼成良好
	-2	盡	16.4 8.7 16.6		口縁、胴部% 欠	胴部は球胴状で最大径となる	ロ管内部ロクロナデ 体部外周タテ のハケ 下部はく落のため不規 則内面は一部へヶ後はナデ 底木炭痕	暗褐色・長石量 多く含む 烧成普通
	-3	盡	(-) 9.3 (18.8)		胴下部	長腰盡	外面 タテのハケ 内面 ヨコナデ 底木炭痕	黒褐色・砂粒含 む・焼成普通
	-4	盡	(15.8) 9.0 17.8		口縁一部、胴 部%	胴部は球胴状で最大径となる	ロクロナデ 底回転糸切りの後手持 ちヘラケズリ (?)	白黄褐色・砂粒 雲母含む・焼成 普通

出土地	辨団番号	器種	法量	容量	残存状態	器形の特徴	調査者	地外土
62号住	272-5	甕	12.0 7.0 (11.8)		口縁一部欠 肩下部底部少 欠	縁の張りは少なく口縁は外反す る	内面ともすれていて不明。口縁はヨ コナゲ	白黄褐色・大粒 な辰石含む・燒 成普通
	-6	甕	(10.8) 6.3 11.2		肩尖部より上 部3%	*	外面それいがタテのハケが一部 認められる 内面ナゲ 口縁内外ヨ コナゲ	黒褐色・砂粒合 む・焼成普通
	-7	甕	11.0 (-) (8.2)		肩上部	口縁は短くわずかに外反する	内外面タテのハケ	赤褐色・砂粒含 む・焼成普通
	-8	甕	- (9.2) (5.5)		肩下部3%	*	外面ナゲ 内面ヨコのハケ	黄褐色・砂粒含 む・焼成良好
	-9	甕	- 6.4 (11.2)		肩尖部一部	*	外面タテのナゲ 内面ヨコナゲ	赤褐色・胎土微 青・焼成普通
	-10	环	12.4 5.9 4.3	268.29	体部一部欠	体部はやや丸味を持って外傾す る	ロクロナデ 底回転糸切り 内面黒色処理 ヨコ主体のヘラミガ キ	赤褐色・雲母多 く含む・焼成良 好
	-11	环	12.0 5.8 4.3	261.15	体部3%欠	*	ロクロナデ 底回転糸切りの後縫込 部手持ヘラケズリ 内面黒色処理 線文状となる外面口 縁にもわずか墨色及 ぶ	黄褐色・雲母多 く含む・焼成良 好
	-12	环	13.2 5.4 4.2	269.65	体部一部欠	体部は直線的に外傾する	ロクロナデ 底回転糸切り 内面一部墨色がみられる。ヨコ主体 の丹念なヘラミガキ	赤褐色ないし黄 褐色・雲母多く 含む・焼成良 好
	-13	环	13.2 5.4 4.0	250.84	体部3%欠	*	ロクロナデ 底回転糸切りの後縫込 部手持ヘラケズリ 内面及び外表面墨色 処理 内面口縁はヨコヘラミガキみら れるが体部はナメ主体で一部タテ。ヨ コのヘラミガキ見られる	赤褐色・砂粒含 む・焼成普通
	-14	环	12.7 5.8 4.5	275.46	体部3%欠	*	ロクロナデ 底回転糸切り 内面墨 色処理 部外面上及び 口縁部ヨコ のヘラミガキ体部は暗文状となる	暗褐色・砂粒含 む・焼成良 好
	-15	环	13.1 6.6 3.5	259.46	口縁と底3%欠	*	ロクロナデ 底回転糸切り 内面黒色処理 口縁ヨコ体部斜位 のヘラケズリ	赤褐色・胎土良 好・焼成良 好
	-16	环	12.4 6.2 4.0	231.95	体部3%欠	体部やや丸味を持って外傾する	ロクロナデ 底回転糸切りの後縫込 部手持ヘラケズリ 内面黒色処理斜 面あり	赤褐色・砂粒含 む・焼成普通
	-17	环	(12.) (5.6) 4.5	%	*	ロクロナデ 底回転糸切り 内外面 墨色処理 斜面みられない	灰白色・砂粒含 む・焼成良 好	
	-18	环	(12.6) (6.3) 3.8	口縁一部底3%	*	ロクロナデ 底回転糸切り 内面研磨	赤褐色・細砂粒 含む・焼成良 好	
	-19	环	(13.1) 6.2 4.3	口縁3%底3%	*	ロクロナデ 底回転糸切り 内面墨 色処理 研磨わずか	白黃褐色・雲母 含む・焼成普通	
	-20	环	(12.8) (6.0) 3.2	%	*	ロクロナデ 底回転糸切り 内面墨 色処理 研磨わずか	赤褐色・砂粒含 む・焼成良 好	
	-21	环	() 6.5 3.0	口縁3%	*	ロクロナデ 底回転糸切り全面回転ヘ ラケズリ 内面斜位右回りの線文	赤褐色・長石豐 度含む・堅密	
	-22	环	() 5.0 1.5	口縁3% 体底 部一部欠	*	ロクロナデ 底回転糸切り	赤褐色・砂粒含 む・焼成普通	
	-23	环	() 5.7 (1.2)	底のみ	*	ロクロナデ 底回転糸切り 内面墨 色処理研磨わずか	赤褐色・胎土致 密・焼成普通	

出土地	碑 号	器種	法量	容量	保存状態	器形の特徴	調 整	胎土外
62号住	272-24	环	() 5.4 (1.2)		底のみ		ロクロナデ 底回転糸切り 内面丹念なヘラミガキ	黄褐色・胎土黒 金・焼成普通
	-25	环	() 7.0 (1.3)		底のみ	付け高台	ロクロナデ 底回転糸切り 高台内 凹斜 ロクロナデ 内面墨色処理 底なし	赤褐色・胎土黒 金・焼成普通
273-26	环 (墨書き)	12.5 7.1 5.0	349.80	口縁一部欠	丸珠を持って立ち上がった体部 はほぼ直立し口唇はわずか外傾 する		ロクロナデ 底回転糸切り 内面墨 色処理底あり 外面には黒色處理 墨書きある	黄褐色・細砂含 む・焼成普通
	-27	环 (墨書き)	12.5 6.1 4.3 (4.0)	219.96	壳	丸珠を持って体部は外傾する	ロクロナデ 底回転糸切り 内面墨 色処理底あり 外面には黒色處理 一部見られる 体部に墨書きある	赤褐色・雲母多 く含む・焼成良 好
	-28	环	16.2 6.2 4.7	41.012	体部彫欠	*	ロクロナデ 底回転糸切り 内面墨 色研磨口縁部に一部黒色處理有 る 底と体部2箇所に墨書きある	赤褐色・長石雲 母含む・焼成良 好
	-29	环 (墨書き)	12.2 5.5 4.0	195.41	体部彫欠	体部や丸珠を持って外傾する	ロクロナデ 底回転糸切りの後手持 ちハラカズリ 内面 黒色研磨 底 に墨書きあり	赤褐色・雲母多 く含む・焼成良 好
	-30	环 (墨書き)	13.3 6.1 4.0	231.24	底一部欠	*	ロクロナデ 底回転糸切り 内面墨 色研磨 底に墨書きあり	黄褐色・砂粒含 む・焼成普通
	-31	环 (墨書き)	(12.0) () 2.4		口縁%		ロクロナデ 内面黑色研磨 体部に 墨書きあり	赤褐色・雲母含 む・焼成普通
	-32	环 (墨書き)	14.0 6.4 4.2	%	体部や丸珠を持って外傾する		ロクロナデ 底回転糸切り 内面墨 色研磨底一部外縁に及ぶ 香あり	赤褐色・長石雲 母含む・焼成良 好
	-33	环 (墨書き)	(12.7) (5.8) 3.8	%		*	ロクロナデ 内面黑色研磨 の確 体中央に墨書きあり	赤褐色・雲母含 む・焼成良好
	-34	环 (墨書き)	() 6.0 (1.5)		底と一西体部		ロクロナデ 底回転糸切り 内面墨 色研磨 底に墨書きあり	赤褐色・雲母含 む・焼成普通
	-35	环 (墨書き)	() 5.8 (0.8)		底%		ロクロナデ 底回転糸切り 底に墨 書きあり	赤褐色・胎土黒 金・焼成普通
	-36	环 (墨書き)	() (6.3) 1.0		底%		ロクロナデ 底回転糸切り 内面墨 色研磨 底に墨書きあり	赤褐色・胎土黒 金・焼成良好
	-37	环 (墨書き)	() (6.2) (1.8)		底と体部一部	付け高台	ロクロナデ 内面黑色研磨 底に墨 書きあり	赤褐色・焼成良 好
	-38	环 (墨書き)	() 5.3 1.9		底鉢欠		ロクロナデ 底回転糸切り 内面墨 色研磨 底に墨書きあり	赤褐色・砂粒含 む・焼成普通
274-39	环 (策)	12.8 6.4 4.1 (3.7)		口縁%欠	内面底くぼむ		ロクロナデ 底回転糸切りの側面部 ヘラカズリ 溝な造り 内面あばた 状にはく落ちあり	灰白色・長石多 く含む・軟質
	-40	环 (策)	13.4 7.2 4.0		体部一部		ロクロナデ 底回転糸切り 粗な作 り	灰白色・大粒な 長石含む・軟質
	-41	环 (策)	(13.3) (5.5) 4.3		%	体部直線的	ロクロナデ 底回転糸切り	灰白色・大粒な 砂粒含む・軟質
	-42	环 (策)	12.1 5.0 3.9	243.68	口縁一部欠	*	ロクロナデ 底回転糸切り	青黒色・長石含 む

出土地	鉢 国番号	器種	法量	容量	残存状態	器形の特徴	調 整	鉢 外
62号住	274-43	壺	(38)	13.0 — 2.8	縦部とつまみ部ほぼ半分欠く	縦部短く直立する	ロクロナデ 天井部回転ヘラケズリ	暗褐色・大粒な長石含む
	-44	香炉壺(灰)	11.3 — 2.0	片		縦部直立する	ロクロナデ	灰白色・輪外のみ緑色をおびる
	-45	壺	12.9 6.1 3.2	口縁5%欠	体部に丸味を持つ 付け高台 高台三角形状	ロクロナデ 底回転糸切りの後高台 内邊部回転ヘラケズリ 内面墨色研磨	非褐色・砂粒含む・焼成普通	
	-46	浅壺(灰)	(19.0) 7.2 4.5	片		口部玉縁状を呈す、高台三角形状でわずか内屈する	ロクロナデ	乳白色・輪透明質度(内も)にはみられない・内面綠色おびる
	-47	壺	13.6 6.8 3.0	口縁5%欠	付け高台高台三角形状で外反する	ロクロナデ 底回転糸切りの後は逆全面ロクロナデ 内面黑色研磨	赤褐色・砂粒含む・焼成普通	
	-48	壺(灰)	(14.4) 7.4 2.6	口縁一部崩は片	付け高台 高台台形で外傾する	ロクロナデ 底回転糸切りの後高台 内邊部回転ヘラケズリ	白灰色・輪内面のみ全面綠色を呈す	
	-49	壺(?)	() (6.2) (1.4)	底肩部一部	付け高台 高台外反する	ロクロナデ 底回転糸切りの後高台 内邊部回転ヘラケズリ	乳白色・輪内面全体部のみで綠色を呈す	
	-50	壺	15.4 7.4 5.5	口縁5%欠	口縁部わずかに外反する 付け高台 高台外反する	ロクロナデ 底回転糸切りの後高台 内邊部回転ヘラケズリ 内面(外側一部)黒色処理、研磨痕著しない	赤褐色・砂粒多く含む・焼成普通	
	-51	壺	15.2 8.4 5.7	完	付け高台 高台強く外反する	ロクロナデ 底回転糸切りの後高台 内邊部ナデ 内面 黒色研磨 あばた状のはく離全面に及ぶ	赤褐色・砂粒含む・焼成普通	
	-52	鉢	(18.4) 8.6 6.7	体部% 底%	体部直線的で口唇わずかに外反する	ロクロナデ 底回転糸切りヘラ記号あり 内面黑色研磨顕著でない	赤褐色・砂粒含む・焼成普通	
	-53	雙耳壺(灰)	19.3 () (5.8)	口縁片	口唇直立し受け口状となる	ロクロナデ	赤褐色・内面自然釉	
	-54	雙耳壺(灰)	(24.2) () (11.0)	肩より上%	口唇直立しわずかに受け口状を呈す	ロクロナデ	赤褐色・胎土良好	
275-55		壺(灰)	33.0 () (10.5)	肩以上%他に四一破片あるも復元できず	口唇直立し、肩強く張る	ロクロナデ	黒褐色・大粒な長石含む	
	-56	壺(灰)	() () (9.0)	瓶部下から胴央部到處に同一破片あるも復元できず	肩が強く張る	外面 タタキ目 内面 ヨコのハケ	黒褐色・粒石わずかに含む・外面自然釉一部あり	
	-57	四耳壺(灰)	() () (9.3)	口縁尖部のみ	突唇付	外面 タタキ目 内面 ハケ	灰白色 脱土良好	
	-58	四耳壺(灰)	() () (7.3)	口縁上部のみ	突唇付	外面タタキ目 内面 タテ・ヨコのハケ	黒灰色・胎土良好	
63号住	278-1	环(墨青)	(14.7) 5.4 4.8	体部%	体部直線的に外傾する	ロクロナデ 底回転糸切 内面墨色 研磨(すれている)	赤褐色・大粒な砂粒含む・焼成普通	
75号住	286-1	壺(灰)	13.2 5.9 4.6	293.35 体部%欠	体部丸味を持って立ち上がる 付け高台 高台三角形状で内側する	ロクロナデ 底回転糸切り 高台外 内邊部回転ヘラケズリ	白灰色・輪はつけがけで白色ぼい	

出土地	拂図番号	器種	估量	容量	残存状態	器形の特徴	調査	出土外
75号住	286-2	环	() 7.4 (3.2)		口縫欠	付け高台 高台直立し内面内そぎとなる	ロクロナデ 底回転糸切りの後高台 内近部回転ヘラケズリ 内面研磨 建文	黄褐色・大粒な長石含む・焼成良好
	-3	环	() 7.1 3.8		体部%口縫欠	付け高台 内そぎ三角形状の高台はわずか外傾する	ロクロナデ 底回転糸切りの後中心部残して回転ヘラケズリ	黄褐色・大粒な長石含む・焼成良好
76号住	289-1	甕	(17.7) () (13.0)		胴尖部より上 % % % %	最大径胴部に溝つ。肩部下に腰を持つ	ロクロナデ 外面胴部内面口縫部 カキ目	白黄褐色・砂粒含む・焼成良好
	-2	甕	(15.6) () (7.3)		胴上部より上 % % % %		外面 口縫ヨコナデ 脇部タテのハケ 内面 口縫部ヨコのハケ 脇部ナデ	白黄褐色・砂粒わずか含む・焼成良好
	-3	甕	() (10.8) (3.0)		底部%		外面 タテのヘラケズリ 内面 ナデ	黒褐色・大粒な砂粒含む・焼成普通
	-4	甕	() (10.1) 4.0		底部%	底厚い	外面 タテのハケ 内面 ヨコのハケ	赤褐色・砂粒わずか含む・焼成良好
	-5	甕	() 6.5 (3.5)		底部と一部胴 下部	凹凸はげしい	外面 タテのハケ 内面 ナデ	黒褐色・大粒な長石含む・焼成良好
76号住	-6	甕	12.5 5.9 4.7 (4.3)	292.21	体部一部と口 縫部%欠	体部丸味を持って外傾する	ロクロナデ 底回転糸切りの後手持 ヘラケズリ 黒色処理研磨顯著でない	赤褐色・胎土緻密・焼成普通
	-7	环	(14.8) () 4.0		底部欠%	"	ロクロナデ 内面黒色処理 研磨著でない	赤褐色・紫母含む・焼成普通
	-8	环(墨書き)	(13.5) 5.7 3.8		口縫部一部	体部直線的に外傾する	ロクロナデ 底回転糸切り 内面黒色処理研磨なし 体部墨書きあり	赤褐色・紫母含む・焼成良好
	-9	环(墨書き)	(12.7) 5.8 3.9	257.99	体部%	"	ロクロナデ 底回転糸切り 内面黒色処理 研磨なし 体部墨書きあり	赤褐色・紫母含む・焼成良好
	-10	环(墨書き)	(15.8) () 4.2		直部%	"	ロクロナデ 内面黒色処理研磨なし 体部墨書きあり	白黄褐色・砂粒多く含む・焼成良好
76号住	-11	环	() 6.0 1.4		直部%欠	"	ロクロナデ 底回転糸切り 内面黒色処理 研磨わずか	赤褐色・砂粒わずか含む・焼成普通
	-12	甕(腹)	() 5.6 1.0		直部	"	ロクロナデ 底回転糸切り	白黄褐色
76号住	-13	环(腹)	(7.2) () 4.0		底部欠%	口唇わずかに外反する	ロクロナデ	乳白色・輪ハケ 黒・黄色味を呈す
	-14	环	(13.6) 7.3 5.5		体部%	体部直線的に外傾する 付け高台 高台高くわずか外傾する	ロクロナデ 底回転糸切りの後高台 内近部回転ヘラケズリ 内面黒色処理 接合した底部破片はまた黒色処理がみられない。研磨わずか	白黄褐色・胎土良好・焼成普通
76号住	-15	环	() 7.0 (1.4)		底のみ	付け高台 内そぎ三角形状でわずか外反する	ロクロナデ 高台付けた後底全面回転ヘラケズリ 内面黒色処理研磨 放射状暗文	白黄褐色・胎土良好
	-16	环	() 7.1 (2.0)		底体下部%	付け高台 高台内そぎ三角形状でわずか外傾する	ロクロナデ 底回転糸切り 高台内 邊縫回転ヘラケズリ 内面黒色研磨 放射状暗文	白黄褐色・胎土良好・焼成良好
76号住	-17	長頸瓶(灰)	() () (5.0)		胴部%	"	ロクロナデ	乳白色・輪内面無釉一部綠色をおびる

出土地	番 号	器 形	法 量	容 量	残存状態	器形の特徴	調 整	地 土 外	
77号住	291-1	壺	(22.0) () (10.8)		肩上半部3% 口縁わずか外反する	長颈壺	ロ底部内外ヨコナダ 外面脚部は斜位のハケ内面はヨコナダ	白黄褐色・大粒な良石含む・焼成普通	
	-2	壺	16.5 () (15.8)		肩下半部欠3%	く字に口縁外反する	長颈壺	外面 ロ縁ヨコナダ 脚部斜位及びタテのハケ 内面 ロ縁のヨコのハケ 脚部ナダで一部ヨコのハケ	黄褐色・長石含む・焼成良好
	-3	壺	() 6.6 (3.4)		肩下部と底部 約	底内面中心向かってぼむ		ロクロナダ カキ目 底回転糸切り	赤褐色・胎土良好・焼成良好
	-4	壺	13.2 6.6 4.4		%	体部わずかに丸味を持つ	ロクロナダ 底回転糸切り縁辺部手持ちヘラケズリ 内面墨色処理研磨蓋でない	赤褐色・胎土良好墨色含む・焼成良好	
	-5	环 (環)	(10.3) 6.0 3.2		口縁一部	厚手の底から唇厚急に減する	ロクロナダ 底回転糸切りヘラ削り 体部に墨書きあり	白黄褐色・彩紋わずかに含む・焼成普通	
	-6	环	() 5.4 (1.5)		底のみ		ロクロナダ 底回転糸切り	白黄褐色・胎土良好・焼成普通	
	-7	环	() 5.7 1.0		底のみ	極端な上げ底となる	ロクロナダ 底回転糸切り 内面墨色研磨	赤褐色・胎土良好・焼成良好	
	-8	环 (環)	() 5.2 (1.7)		底と体部一部		ロクロナダ 底静止糸切り	灰黒色・大粒な良石含む	
	-9	壺	(12.1) 7.0 3.0		口縁一部欠	付け高台。高台台形で外反する	ロクロナダ 底回転糸切りの後高台内面ヨコナダ 内面墨色研磨 内面あばた状のはく落あり	赤褐色・墨色多く含む・焼成良好	
	-10	壺 (皮)	() 7.7 (3.5)		口縁欠3%	付け高台 高台台形で強く外傾する。	ロクロナダ 底回転糸切り 高台内面ヨコナダ	白灰色・緑色を帶内面は全面外側体央部より上	
82号住	293-1	环 (甲斐型 と墨色 土器の 新変型)	(11.8) 5.3 4.6 (4.2)		口縁のみ	体部は直線的	ロクロナダ 底へラによる丹念なミガキ、外面下部斜位のヘラミガキ、口縁はロクロ目挫り。 内面墨色研磨 放射状に近い噴文、手筋は甲斐型環の手筋である。墨色土器との新変型として注目したい。	赤褐色・口縁は墨色墨色含む。盤底に施かれる	
	-2	环 (環)	(13.0) (7.6) 3.6		%	体部は強い屈曲の後直線的に伸びる。付け高台高台白形で外傾する。	ロクロナダ 高台内面ヨコ回転ヘラケズリ	青黒色・胎土良好	
85号住	295-1	壺	() 9.3 7.3		肩下部3%		底木墨痕 外面タテのナダ 内面 ヨコのハケ	赤褐色・長石含む・焼成普通	
	-2	壺 (?) (環)	() 7.4 (4.4)		肩下部3%		ロクロナダ 底回転糸切り	墨灰色・長石含む	
	-3	环 (環)	(14.7) (7.6) 4.0		%	体部やや丸味を持つ 口唇外反する	ロクロナダ 底回転糸切り	灰黒色・胎土良好	
	-4	环 (環)	() (7.0) (1.0)		底3%		ロクロナダ 底回転糸切り ヘラ記号	白灰色・軟質	
	-5	环 (環)	12.8 () (2.9)		体部3%	体部強屈曲して外傾する	ロクロナダ	黒灰色・長石含む	
	-6	环 (環)	() 9.5 (1.3)		底3%	付け高台	ロクロナダ 底回転糸切り 高台内面ヨコ回転ヘラケズリ	灰白色・胎土良好	

出土地	辨 認 番 号	器 種	法 量	容 量	残 存 状 態	器形の特徴	調 査	胎 土 外
85号住	295-7	环	() 9.1 (1.5)	底36%	付け高台	ロクロナデ 底回転糸切り 高台内 辺部回転ヘラケズリ ヘラ記号	白黄色・胎土良 好・軟質	
	-8	皿 (須)	(14.5) — (2.1)	つまみ欠3%	端部直立する	ロクロナデ 天井部回転ヘラケズリ	青墨色・大粒な 長石含む	
	-9	皿 (須)	(15.2) — 3.7	3%	つまみ留平でわずかにくぼく 端部わずか内屈する	ロクロナデ 天井部回転ヘラケズリ	端部墨青色地は 赤褐色・胎土良 好・軟質	
	-10	短颈甌 (須)	(10.2) — (4.5)	肩以上3%	肩はなで肩 口唇内傾する	ロクロナデ	青墨色 内外面 一部自然輪	
	-11	皿 (須)	() 6.5 (2.8)	底部のみ	付け高台 高台は幅広で外傾す る 底は内傾	ロクロナデ 底全面回転ヘラケズリ	墨青色・胎土良 好・自然輪一部	
86号住	297-1	环	() 5.7 (1.3)	底部		ロクロナデ 底回転糸切り ヘラ記 号	赤褐色・長石多 く含む・燒成普 通	
	-2	环	12.5 4.8 3.2	体部3%	体部屈曲した後直線的に外傾す る	ロクロナデ 底回転糸切りの後手持 ヘラケズリ 外面部ナヂワク 内面研磨あり	暗褐色・砂粒多 く含む・燒成普 通	
	-3	皿 (須)	(15.0) 7.2 3.5	体部3%	付け高台 体部は直線的で口唇 わざか外反する 高台形で外面に接持つ	ロクロナデ 底回転糸切り 回転ヘ ラ削り	白黄色・胎黄色 を呈す	
96号住	302-1	环	9.8 5.4 3.0	完	底内側中央くぼむ	ロクロナデ 静止糸切	赤褐色・砂粒含 む・燒成良好	
	-2	环	11.0 4.6 3.5	3%	口唇わずか外反する	ロクロナデ 底回転糸切り	白黄褐色・砂粒 含む・燒成良好	
	-3	环	() 5.4 (1.5)	口縁欠		ロクロナデ 内面(外面底部)黒色 処理研磨なし	白黄褐色・砂粒 粉含む・燒成良好	
	-4	环	() 8.7 (2.8)	高台部3%	足高高台	ロクロナデ 外面5条の凹線もつ る	赤褐色・砂粒含 む・燒成普通	
	-5	皿 (須)	(11.9) 6.2 2.3	汚口縁部は3%	付け高台・体部やや丸味を持つ 高台底く三角形で外傾する	ロクロナデ 底回転糸切り高台内辺 部ロクロナデ	乳白色・胎白色	
	-6	皿 (輪花) (須)	12.2 6.2 2.6	106.08	口縁部3%	付け高台 高台内そぎ三角形状 で外面直立する 口縁外反する。 輪花4箇所	ロクロナデ 底回転糸切り 高台内 辺部ロクロナデ 高台内面ヘラケズ リ	白灰色・胎白色 一部緑色をおび る
	-7	折腰皿 (須)	11.6 6.5 2.0	76.72	3%欠	付け高台 高台底く三角形状で 内そぎ	ロクロナデ 高台内辺部ロクロナ デ 高台内面ヘラケズリ	白灰色・胎白色
	-8	皿 (須)	(12.3) 6.6 2.4	底部3% 体部3%	付け高台 高台底内そぎ三角形 状	ロクロナデ 内辺部ロクロナデ	白灰色・胎白色	
	-9	碗 (輪花) (須)	(15.6) 7.5 5.3	口縁3% 他は3%	付け高台 高台わずか外傾する 輪花4箇所(?)	ロクロナデ 内辺部回転ヘラケズリ 高台内辺部ロクロナデ	白灰色・胎透明 質・緑色をおび る	
	-10	碗 (須)	() 7.8 (3.1)	底3% 体部一部 部	付け高台 高台外傾する	ロクロナデ 底回転ヘラケズリ 高 台内辺部ロクロナデ	乳白色・胎外面 なし	
	-11	碗 (須)	() 7.0 (2.8)	口縁欠3%	付け高台 高台直立する	ロクロナデ 底回転糸切り 高台内 部ロクロナデ	乳白色・胎綠色	

出土地	井 土 号	種 種	出 量	容 量	残存状態	器形の特徴	調 整	地 士 外
95号住	302-12	加 (灰)	() 8.4 (2.7)	口縁欠片	付け高台 高台直立する	ロクロナデ 底高台ロクロナデ	乳白色・現脱釉	みられない
96号住	305-1	平 瓶 (灰)	2.0 3.7 4.7	完	シャープな造りである。口縁は外傾し口唇にて外反する。高台は白形 扱手は上面やや丸味を持つ。体部は直線的に外傾し上面はふくらむ	ロクロナデ 高台内辺部回転ヘラケズリ	白灰色・稚綠色を帯び上面と口頭部内面のみみられるハケ盛り	
	305-2	甕 (墨) (灰)	(18.0) () (5.5)	肩上部3/4	口縁把厚し外反する	外腹口縁ロクロナデ 脊部タテのハケ 内面 口唇ロクロナデその下頭部ヨコのハケ体部ヨコナデ	暗褐色・胎土良好・焼成良好	
	-3	环 (灰) (灰)	13.0 8.2 3.7 (3.4)	持	体部直線的	ロクロナデ 底回転糸切り	白灰色・砂粒含む・軟質	
	-4	环 (墨) (灰)	(12.6) 6.3 4.0	底% 体部3/4		ロクロナデ 底回転糸切り 底に墨書きあり	青黒色・細胞粒含む	
	-5	环 (灰)	(12.2) (5.2) 4.2	持		ロクロナデ 底回転糸切り	墨青色・長石多く含む	
	-6	环 (灰)	13.4 9.0 4.0	328.94 体部部分的に 欠	付け高台	ロクロナデ 底高台付けた後全面回転ヘラケズリ	墨青色・長石多く含む	
	-7	环 (灰)	() 5.8 (2.5)	底と体部一部		ロクロナデ 底回転糸切り	青黒色・砂粒含む	
	-8	环 (灰)	() 6.2 (0.7)	底と体下部		ロクロナデ 底回転糸切り	灰白色・砂粒含む・軟質	
	-9	环 (灰)	() (8.7) (1.0)	底	付け高台 高台台形で外反する 底面くぼむ	ロクロナデ 底回転糸切り中心部渡して回転ヘラケズリ	暗赤褐色・胎土良好	
	-10	甕 (灰)	() 4.9 1.6	底	付け高台・高台台形で外反する	ロクロナデ 高台内辺部回転ヘラケズリ	白灰色・胎土良好	
	-11	环 (灰)	() 7.1 (1.0)	底	付け高台 高台台形で外傾し底面くぼむ	ロクロナデ 底高台付けた後全面回転ヘラケズリ	青黒色・長石含む	
	-12	甕 (?)	() 10.8 (2.0)	底	付け高台 高台台形で外傾し底面くぼむ 高台ぶれる	ロクロナデ 底回転糸切り高台内辺部回転ヘラケズリ	墨青色・長石含む	
	-13	瓶	(14.6) 5.4 6.7	体部は3/4	付け高台 突解跡々に残して直線的に体部作じる	ロクロナデ 底回転糸切り高台内辺部回転ヘラケズリ	墨青色・長石多く含む	
98号住	309-1	甕	14.7 8.1 16.4	口縁・胴部一部欠	肩上部に最大径を持つ	口縁内外ヨコナデ 外面タテのハケ 暗褐色・砂粒多めの後底部付近ヨコのハケ 内面脇に墨書きあり 底ハケ		
	-2	甕	(12.2) () (7.0)	肩上部3/4	口縁短くわずかに外反する	口縁内外ヨコナデ 脊部内外ともタチナデ	墨褐色・わずかに砂粒含む・焼成良好	
	-3	环	10.0 4.0 3.0	持	体部に丸味を持つ	ロクロナデ 底回転糸切り	暗褐色・砂粒含む・焼成普通	
	-4	环	12.0 () (3.7)	底欠片	口縁下に腹を持つ	ロクロナデ	漆褐色・胎土鐵密・焼成良好	

川土地	標 記 番 号	器 種	法 量	容 量	残存状態	彫形の特徴	調 整	施 土 外	
98号住	309-5	16 (墨)	(12.4) (5.5) 4.0	13.0	288.46	底一部欠け 口縁汚染	体部は丸柱を持ち口唇はわずか 外反する	ロクロナデ 底回転糸切り 内面墨色処理(外面一部)研磨なし	黄褐色・砂粒含む。焼成普通
	-6	16 (墨)	5.2 4.3	14.6 (5.7) 5.1	369.45	口縁汚染		ロクロナデ 底回転糸切り 内面半分(外面口縁一部)墨色処理 研磨なし。体部に墨書あり	赤褐色・大粒な 砂粒含む・焼成 良好
	-7	16 (墨)	5.1 3.7	13.2 (5.1) 3.7	252.68	%	体部直線的(付け高台の転用)	ロクロナデ 底回転糸切り 線近く ぼみを持ヶゼリがある 高台のそれ たものを利用したと思われる。 内面墨色処理 口縁部一部研磨 底 内面に刻痕あり	黄褐色ないし赤 褐色・砂粒含む 焼成普通
	-8	坪				体上部にてわずかに崩壊する		ロクロナデ 底回転糸切り 内面墨色処理 研磨顕著でない	白黄褐色・施土 良好・焼成普通
	-9	墨 (灰)	6.4 2.6	13.2 (6.4) 2.6	174.46	口縁汚染	付け高台 高台外間に腰を持ち 外傾する	ロクロナデ 底全面回転ヘラケゼリ	灰白色・釉白色 で線状模様を呈す。 内面は全面釉
	-10	墨 (灰)	7.0 3.0	(14.9) (7.0) 3.0		口縁汚染はない	付け高台 高台内湾する	ロクロナデ 底全面回転ヘラケゼリ	暗褐色・釉白色 ないし透明質
	-11	墨 (灰)	5.6 2.4	(11.3) (5.6) 2.4		底汚染はない	付け高台 外面直立し腰を持ち 内面そぎ	ロクロナデ 底高台内凹部ロクロナ デ	淡黄色・釉白色 黄色をおびる
	-12	墨 (灰)	6.1 3.0	13.9 (6.1) 3.0		口縁一部欠底 は一部のみ	付け高台 高台内外傾し、腰 を持つ。口唇わずか外反する	ロクロナデ	灰墨色・釉白色
	-13	坪	() 6.0 (1.8)			底のみ	付け高台 高台外反する	ロクロナデ 底全面回転ヘラケゼリ 内面墨色研磨	白黄褐色・焼成 良好
	-14	坪	() 6.7 (2.2)			底と体下部	付け高台・高台内そぎ三角形状	ロクロナデ 底全面ヘラケゼリ 内面墨色処理 研磨なし	赤褐色・砂粒多く 含む・焼成普通
	-15	坪	() 5.8 (1.7)			底と体下部	付け高台 高台内そぎ三角形状	ロクロナデ 底全面回転ヘラケゼリ 内外面墨色処理(外面底も)底外面 餘き研磨	品色・砂粒わずかに含む・焼成 普通
	-16	塊	15.2 () 5.4			底欠け	口縁下に腰を持つ	ロクロナデ 内面墨色(うすくなっ て)研磨	白黄褐色・施土 極密・焼成良好
	-17	塊	15.0 7.0 4.9	419.27		口縁汚染	体部丸味を持つ・付け高台で外 反する	ロクロナデ 底回転糸切り 高台内 凹部ロクロナデ 内面墨色研磨	白灰色・施土極 密・焼成良好
	-18	塊	14.8 6.5 4.8	405.38	%	底欠け	体部丸味を持つ・付け高台高台 外側直立し内そぎ三角形状	ロクロナデ 底回転糸切り高台内 凹部ロクロナデ	赤褐色・外面口 縁一部黒色・大 粒な砂粒含む・ 焼成普通
	-19	塊 (灰)	(16.4) (8.0) 5.3			引	付け高台 高台高く外面に腰を 持つ	ロクロナデ 底全面回転ヘラケゼリ	灰墨色・釉淡黃 色
	-20	塊 (灰)	15.8 () 3.5			底部欠け	口唇外反する	ロクロナデ	白灰褐色・釉白色
	-21	塊 (灰)	() 8.0 2.2			口縁欠け	高台高く外面腰を持つ	ロクロナデ 底全面回転ヘラケゼリ	灰白色・釉淡黃 色
	-22	短筒壺 (灰)	9.8 () 6.5			口縁と肩	肩の張りは強くない。耳を一つ 持つが当初は双耳と思われる	ロクロナデ	黒青色・外自然 釉をおび灰黃色 を呈す
	-23	瓶 ()	13.6				上部に最大径を持つ	ロクロナデ	灰白色・施土 で淡緑色

出土地	押出番号	器種	出量	容量	残存状態	断面の特徴	調査	地土外
100号住	313-1	甕	()	5.6 (4.5)	底と胴下部	胴部は直線的に伸びる	ロクロナデ 底回転糸切り	明褐色・胎土緻密・焼成良好
	-2	环	(12.7) (5.8) 4.4	%	体部丸抜持ち口唇わずか外反する	ロクロナデ 底回転糸切り 内面黒色研磨(ナデ)	白黄褐色・砂粒含む・焼成普通	
	-3	环(須)	(13.6) 6.7 3.9	%	口縁一部体部	体部直線的	ロクロナデ 底回転糸切り	灰白色・砂粒含む・軟質
	-4	环(須)	12.3 5.9 4.3	%	体部%	体部丸抜持つ	ロクロナデ 底回転糸切り	白灰色・砂粒含む・軟質
	-5	环(須)	(13.3) () (4.1)	%	底欠%	口縁下に縫を持つ	ロクロナデ	白灰色・胎土緻密・軟質
	-6	鉢(?)	() 5.6 (2.3)	%	底部のみ		ロクロナデ 底回転糸切り	白黄褐色・胎土緻密・焼成良好
	-7	环	() 5.0 (2.0)	%	底と体下部		ロクロナデ 底回転糸切りヘラ記号	明褐色・砂粒含む・焼成良好
	-8	設置(灰)	(13.2) (6.9) 2.5	%	付け高台 高台低く内そぎ三角形状	ロクロナデ 高台内辺部回転ヘラケズリ	乳白色・稚白色	
	-9	設置(灰)	16.2 7.8 3.2	%	付け高台 高台高く外傾する	ロクロナデ	乳白色・輪读褐色底内面無釉	
	-10	桶(灰)	() 7.2 (4.0)	%	口縁欠%	付け高台 高台高く外縫を持つ	ロクロナデ	乳白色・稚白色一部黄色をおびる
	11	桶	() 6.8 (2.8)	%	底部と体下部	付け高台 高台低く内そぎ三角形状	ロクロナデ 高台内辺部ロクロナデ 内面墨色処理研磨なし	明褐色・砂粒含む・焼成普通
	-12	瓶(灰)	() 13.7 (5.8)	%	胴下部% 底一部	付け高台 高台低く右形外傾する	ロクロナデ	白灰色・稚白色上部からの焼れ
	-13	桶(灰)	() 7.2 (2.0)	%	底部と体下部	付け高台 高台高く外傾する	ロクロナデ 高台内辺部回転ヘラケズリ	白灰色・無輪
100号住	316-1	甕	(13.0) () (6.0)	%	胴上部%	口縁強く外反する	外面 口唇ヨコナデ胴部タテのハケ 内面 口縁ヨコのハケ胴部タテのナデ	赤褐色・胎土緻密・焼成良好
	-2	甕	() 9.0 (10.0)	%	胴下部	長脚甕	内外面タテのハケ 外面胴下部ヨコ のハケ 底木葉痕	緑褐色・砂粒含む・焼成良好
	-3	甕	() 7.1 (6.0)	%	胴下部	長脚甕	内外面タテのハケ 底木葉痕	暗褐色・胎土緻密・焼成良好
	-4	环(須)	(12.0) 6.0 4.0	%	口縁一部のみ	体部わずかに丸抜もつ	ロクロナデ 底回転糸切り	白灰色・胎土緻密・軟質
	-5	环(須)	() 6.0 (2.8)	%	口縁欠%		ロクロナデ 底回転糸切り	白灰色・胎土緻密・軟質
	-6	桶(灰)	() 7.0 (2.0)	%	口縁欠%	付け高台 高台外面直立する	ロクロナデ 底全面回転ヘラケズリ	白黄色・稚白色

出土地	標 団 番 号	形 態	法 量	容 量	残存状態	器形の特徴	調 整	施 土 外
HII号住	316-7	环 (奥) (6.8) (1.0)			底欠	付け高台 高台台形	ロクロナダ 底回転糸切り	灰黑色・施土無 き
	-8	長巻瓶 (奥) () 7.9			口環部欠	口縁強く外反し口唇は直立する。 わずか受け口状となる	ロクロナダ	白灰色・袖外墨 赤褐色・内面透 明質
	-9	壺 () 18.2 (2.5)			底欠	付け高台 高台台形で外反する	ロクロナダ 高台内辺部ロクロナダ	青黒色・施土無 き
III号住	318-1	环 () (3.5)			底欠少		ロクロナダ	赤褐色・施土無 き・焼成良好
	-2	环 (奥) 8.5 (2.2)			底と体下部欠	付け高台 高台台形で外傾する 底内面くぼむ	ロクロナダ 底回転ヘラケズリ	墨青色・長石含 む
	-3	壺 () 11.7 (3.0)			底のみ	付け高台 高台幅広台形で底面 くぼむ	ロクロナダ 底中心斜いて回転ヘラ ケズリ	墨青色・長石含 む
III号住	321-1	环 11.3 5.2 4.2 (3.8)			口縁一部欠	体部直線的	ロクロナダ 底回転糸切り 内面墨色無施墨なし	白黄褐色・砂粒 含む・焼成普通
	-2	环 11.2 5.0 2.4			%	"	ロクロナダ 底回転糸切り	赤褐色・砂粒含 む・焼成普通
	-3	环 (奥) 12.6 7.0 4.2 (3.8)	281.66		体部少欠	"	ロクロナダ 底回転糸切り	白灰色・長石含 む・軟質
	-4	环 (奥) (14.6) (8.0) 4.6			%	体部丸味もつ	ロクロナダ 底回転糸切り	白灰色・砂粒含 む・軟質
	-5	壺 () 7.0 (3.0)			口縁欠	付け高台 高台高外傾する	ロクロナダ 底高台内辺部ロクロナ ダ	黄褐色・施土無 き・焼成良好
III号住	324-1	壺 27.0 (9.5) 29.3			底部一部のみ 胴上部 一部欠	直線的に胸部は外傾し口縁部是 大径となる 口唇わずか外反する	外面 口縁指痕痕す。頸部ヘラケ ズリ 頸部タテのハケ 内面 口縁ヨコのハケ 脊部ナダ	暗褐色・砂粒含 む・焼成良好
	-2	壺 (11.5) (6.2) (11.6)			%	最大径胴上部に押つ。口縁わず かに外反する	頸部胴上部ヘラケズリの後タテのハ ケ 内面頸部ヨコのハケ 脊部タテのハ ケ 底木製底	暗褐色・砂粒含 む・焼成普通
	-3	壺 () 9.0 (2.9)			底のみ		外面 タテのハケ 内面 ヨコのハケ 底木製底	暗褐色・砂粒含 む・焼成普通
	-4	环 (13.6) 5.8 4.2			体部%	体部直線的	ロクロナダ 底回転糸切り	赤褐色・砂粒含 む・焼成普通
	-5	环 (奥) () 5.9 3.2			口縁欠%		ロクロナダ 底回転糸切り	白黄色・砂粒含 む・軟質
IIII号住	326-1	壺 () 9.3 (5.7)			胴下部%		内外面ともタテのナダ	赤褐色・施土無 き
	-2	环 10.8 4.8 3.5	151.61	完		体部直線的	ロクロナダ 底回転糸切り	黄褐色・細砂粒 含む・焼成良好
	-3	环 11.0 4.4 3.1	135.88	完		体部や丸味もつ	ロクロナダ 底回転糸切り	赤褐色・砂粒質 含む・焼成良好

出土地	排 番 号	器 種	当 量	容 量	残存状態	器形の特徴	調 整	胎 土外
120号住	326-4	环	10.2 5.8 3.4 (3.1)		体部汚欠	体部直線的	ロクロナデ 底静止糸切り	赤褐色・砂粒含む。焼成良好
	-5	環 (灰)	(17.2) () (4.5)		底部欠け	体部丸味持つ	ロクロナデ	白灰色・輪白色
	-6	环 (頃)	() 9.0 (2.0)		底部と体部	付け高台 高台台形で外反し、底面くぼむ	ロクロナデ 底回転糸切り 高台内 辺部回転へラケズリ	青黒色・長石わずか含む
	-7	环	(10.7) 6.2 5.6	192.72	体部汚欠	付け高台、足高高台	ロクロナデ 底回転糸切り 高台内 辺部 ロクロナデ 内面黒色研磨、底外面にも黒色一部あり	赤褐色・砂粒含む、焼成良好
	-8	短瓶底 (灰耳)	() () (6.2)		肩と腰上部汚	耳を持つ(現存1)	ロクロナデ	白灰色・胎土緻密
135号住	328-1	环	10.8 3.6 2.9	66.37	口縁汚欠	体部直線的	ロクロナデ 底回転糸切り	黄褐色・砂粒含む、焼成普通
	-2	环	9.8 3.8 2.9 (2.3)	53.80	口縁一部欠	口縁外反する	ロクロナデ 底回転糸切り	黄褐色・細孔散在
	-3	环	10.8 4.2 2.7	74.77	壳	口縁わずかに外反する	ロクロナデ 底回転糸切り	白黄褐色・胎土良好、焼成良好
	-4	环	11.4 4.6 2.9	93.68	底一部と口縁 汚欠		ロクロナデ 底回転糸切り	白黃褐色・胎土良好、焼成普通
	-5	环	(11.0) 5.4 2.4		底汚、口縁汚		ロクロナデ 底回転糸切り	赤褐色・砂粒わずか含む、焼成普通
	-6	环	() 6.0 (2.6)		底のみ	柱状高台	ロクロナデ 底回転糸切り	白黄褐色・胎土緻密、焼成良好
	-7	环	() 5.0 (2.2)		底のみ	柱状高台	ロクロナデ 底回転糸切り	白黄褐色・胎土緻密、焼成良好
	-8	环	() 7.2 (1.4)		底のみ	柱状高台	ロクロナデ 底回転糸切り	白黄褐色・わずか長石含む、焼成普通
	-9	段皿	9.6 4.1 4.1 (3.7)	31.45	壳	柱状高台	ロクロナデ 高台端部削りする	赤褐色・細砂粒含む、焼成普通
	-10	段皿	(22.0) (10.7) 5.3		1/4	付け高台 高台外傾する	ロクロナデ	灰褐色・輪白色
	-11	塊 (輪花)	16.0 () (4.8)		底部欠け	高台持つと思われる 輪花4個	ロクロナデ	白黄色・輪白色
	-12	塊	(14.8) (5.4) 5.6		1/4	口縁外反する	ロクロナデ	白黄褐色・胎土緻密、焼成良好
	-13	塊 (輪花)	10.3 4.8 4.0 (3.7)	130.81	口縁一部欠	付け高台 口縁外反する 輪花 4個	ロクロナデ	白灰色・輪白色

出土地	擇 回 番 号	器種	法量	容量	保存状態	器形の特徴	測 定	附 註
II号住	330-1	甕	() 7.6 (1.8)	-	底のみ	-	ロクロナデ 底回転糸切り	赤褐色・砂粒含む・焼成普通
	-2	甕 (底)	() 5.0 (1.8)	-	底のみ	付け高台 高台台形で外反し底内傾する	ロクロナデ 底回転糸切り 高台内辺部回転ヘラケズリ	灰黒色・胎土鐵物
	-3	甕 (底)	13.4 -	3.2	%	つまみ部偏平 端部はほぼ直立する	ロクロナデ 天井部回転ヘラケズリ	黒青色・長石多量に含む
	-4	片 (底)	(17.0) (10.0) 6.1	-	%	体部直線的 付け高台 高台台形で外傾する	ロクロナデ	青黒色・胎土鐵物
	-5	甕 (底)	() 17.5 (6.2)	-	底と肩下部%	付け高台 高台台形で外傾する	ロクロナデ 底回転糸切り 高台内辺部回転ヘラケズリ	白灰色・長石わずか含む
III号住	333-1	甕	(12.5) () (4.3)	-	刷上部%	口縁わずか外反する	口付内外面ロクロナデ 外面タテ内面ヨコのハケ	赤褐色・胎土鐵物・焼成良好
	-2	甕	() 7.8 (6.6)	-	刷下部%	-	刷内外ナデ 底は木葉痕	暗褐色・大粒な長石含む・焼成良好
	-3	甕	() 8.4 (2.3)	-	刷下部%	-	刷内外ナデ 底は木葉痕	赤褐色・胎土鐵物・焼成良好
	-4	片 (底)	15.0 8.5 4.3	-	%	体部丸味もつ	ロクロナデ 底回転糸切り	青黒色・胎土鐵物
	-5	片 (底)	13.6 5.8 4.0	-	%	体部凹欠	ロクロナデ 底回転糸切り	灰白色・長石含む
	-6	甕 (底)	20.2 -	3.7	%	つまみ部空珠形、端部内脛する	ロクロナデ	黒青色・砂粒含む・上面自然釉かかる
	-7	甕 (底)	14.2 -	3.0	%	つまみ部偏平 端部わずかに内脅する	ロクロナデ 天井部回転ヘラケズリ	青黒色・砂粒含む
	-8	甕 (底)	14.0 -	3.2	%	つまみ部空珠形 端部内脅する	ロクロナデ 天井部回転ヘラケズリ	黒青色・砂粒含む
IV号住	336-1	段甕 (底)	12.5 6.6 2.8 (2.5)	124.55	完	付け高台 高台内そぎ三角形状で直立する	ロクロナデ 底高台内辺部回転ヘラケズリ	白黄褐色・胎白色
	-2	甕	13.5 7.5 6.0 (5.3)	-	口縁汚	付け高台 高台高く外反する	ロクロナデ 底回転糸切り高台内辺部回転ヘラケズリ	赤褐色・砂粒含む・焼成普通
	-3	甕 (底)	15.2 7.4 6.6	534.58	体割は3%	付け高台 高台高くほぼ直立する	ロクロナデ 底高台内辺部回転ヘラケズリ	白黄色・胎白色一部緑色おびる
	-4	甕 (底)	12.5 6.5 4.1	232.72	完	付け高台 高台ほぼ直立する	ロクロナデ	乳白色・透明質綠色おびる
V号住	338-1	甕 (底)	() 7.8 (6.2)	-	口縁欠	付け高台 高台高く外傾する	ロクロナデ 高台内辺部回転ヘラケズリ	乳白色・胎白色
	-2	甕 (底)	() (7.2) (3.0)	-	底部と体部一部	付け高台 高台高く外傾する	ロクロナデ 高台内辺部回転ヘラケズリ	白黄色・胎白色

出土地	排 固 番 号	器 様	法 量	存 量	残存状態	器 形 の 特 徴	調 整	地 士 外
IP号住	338-3	壺 (灰)	() 7.8 (2.5)		底部	付け高台 高台高く直立する	ロクロナデ 底内邊部内輪へラケズリ	白灰色・輪白色 外面現況無點
IP号住	340-1	壺	10.8 6.0 10.6	811.34	口縁彎欠	球體状	ロクロナデ 外面成形復跡残る 底回転糸切り	赤褐色ないし墨 褐色・胎土鐵 色・焼成普通
	-2	壺	16.4 7.4 5.3	352.53	完	体部わざか丸味持つ。付け高台 高台内そぎ三角形状で外傾する	ロクロナデ 底内邊部内輪へラケズリ 内面墨色研磨 (外面口縁部も黒色)	白灰色・墨粒含 む・焼成普通
	-3	壺	15.6		体部一部	付け高台 高台内そぎ三角形状 でわざか外傾する	ロクロナデ 底全面回転へラケズリ 内面墨色研磨	白灰色・墨粒含 む・焼成普通
土壤1	346-1	壺 (灰)	16.7 8.9 7.2		完	付け高台、高台高く直立する 内面口唇下に2条の沈縫あり	ロクロナデ 底全面回転へラケズリ	灰白色・輪淡黃 色
土壤S1	-7	壺 (灰)	12.5 6.0 4.2		彌		ロクロナデ 底回転糸切り	青黒色・長石多 量に含む
土壤S4	-8	小瓶 (灰)	3.8 5.7 8.8		完	どっしりとした底部を持つ	ロクロナデ 底回転糸切り	灰白色・輪淡綠 色
	-9	壺	9.5 4.8 3.1		完	付け高台 高台外傾する	ロクロナデ 底全面回転へラケズリ	白灰色・輪白色
	-10	壺 (灰)	13.2 6.5 3.0		完	付け高台 高台底外面に縫を持つ	ロクロナデ 底全面回転へラケズリ	白灰色・輪淡綠 色

第2節 遊光遺跡

1 位置と地形（第1・3図）

当遺跡は駒ヶ根市東伊那栗林に所在し、西の住宅地、湿地帯をはさんで反目遺跡がある。大略は第1節反目遺跡においてふれているので省略することとする。

遺跡は反目遺跡と一体のものとして考えられるものである。反目遺跡から続く段丘はその平坦面を一段と広げている。遺跡の南には天王川がこの段丘を切っている。

調査区は水田であり、遺構検出面は削りとられている。

2 歴史的環境（第2図）

周辺の遺跡については第1節反目遺跡においてふれている。ここでは当遺跡の南端遊光城について若干ふれることとする。

当遺跡は段丘上に展開する大規模な遺跡で、現在は畠となっている。畠の中には東西に走る起伏があり、段丘西端には削り出し遺構が認められ、「馬瀬口」と呼ばれている。さらに段丘下には壙状遺構と土堤が一部残っている。一昨年の反目南遺跡の調査の折に確認されたもので、「遊光城」と呼ぶこととしたものである。この城址が当段丘上のどの範囲までに及ぶかは不明であるが、この台地全体に今でも、土器に混じって中世陶器が出土しておりかなりの広範囲にわたるものと考えられる。

今回の調査で中世の堅穴住居址が確認された点も城との関連で注目される。

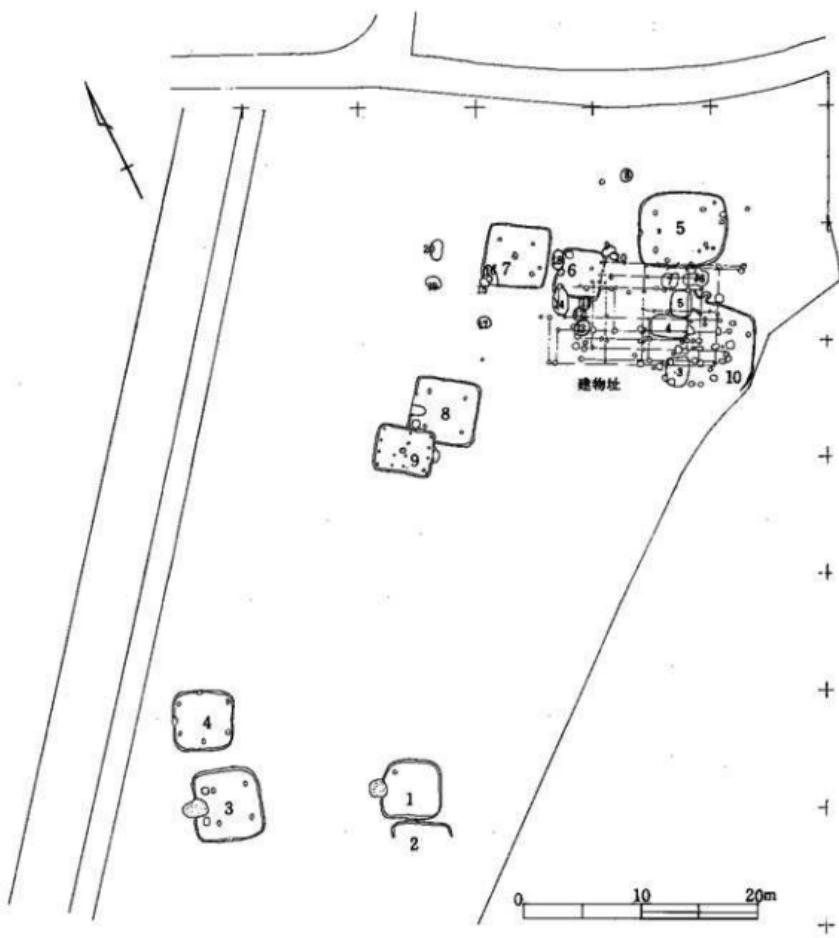
3 調査概要（第2・353図）

第2図に示すとおり水田地区の南側は埋立保存をしている。遺跡の大部分畠地帯は当初計画では、は場整備の対象地区となっていたが、実施時点では対象外とされ遺跡の破壊から当面免れたことは嬉しいことである。

このように今回の調査は限定された範囲のものであった。調査区域の北東部を起点にし、10cm毎のグリットを設定したが、重機によって耕土を剥ぎ、全面発掘を当初から行った。

調査区域は三枚の水田からなり起点側は、開田時遺構が削りとられ、わずかに壁を残す程度であった。

検出された遺構は住居址10軒と建物址1棟、土壙18基である。



第353図 遊光遺跡遺構概略図

4 遺構と遺物

1) 住居址

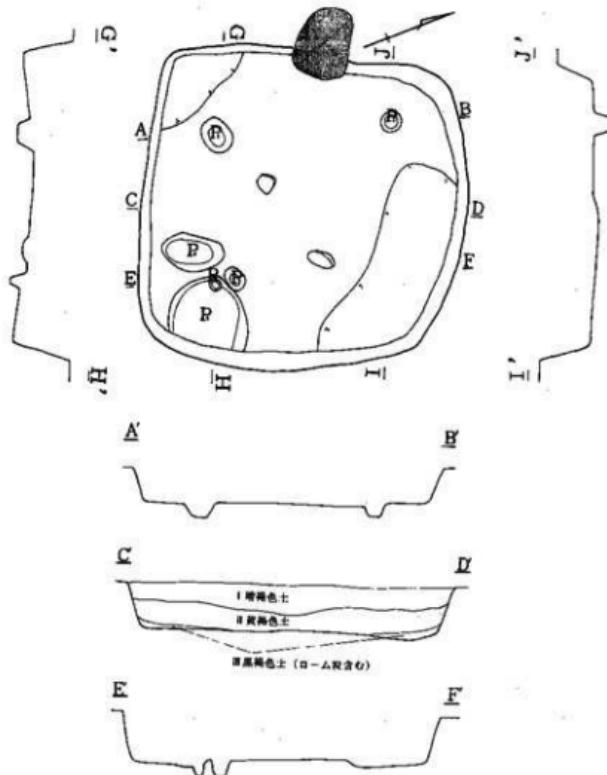
(1) 第1号住居址 (第354~356図)

遺構 本住居址の南には第2号住があり、西には第3号・4号住居址がある。

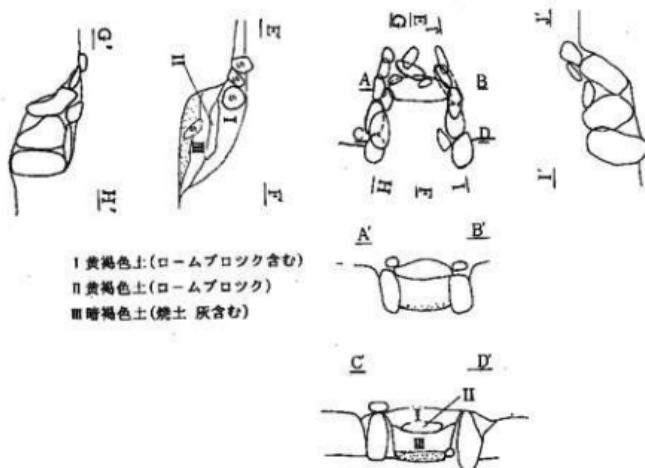
プランは隅丸方形で規模は4.6×4.6mを測る。長軸(カマド方向)はN-60°-Wである。

壁高は65~70cmと深い。覆土は壁ぎわにローム粒を含む暗褐色土がわずかにあり、その上に黄褐色土・暗褐色土と自然堆積をみせている。

床面は壁ぎわが凹み荒掘りの痕跡の可能性が強い。中央部は固く堅緻である。



第354図 第1号住居址実測図 (S = 1/80)



第355図 第1号住居址カマド実測図 (S = 1/40)

カマドは西壁中央に位置し、壁を60cm掘り込んで造られている。袖石は80cmと長く両袖ともしつかりとした石組である。焚口部は50cm、奥で30cmと狭まっている。支脚石、天井石も完全に残された良好なカマドである。封土はロームである。

主柱穴は3本検出され、南東部には検出されていない。

遺物 遺物は少ない。土師と須恵があり灰軸は出土していない。

土師は1の壺の外にハケ目を持つ小形壺と壺がある。

須恵は2の壺と甕がある。

敲打器1点が出土している。

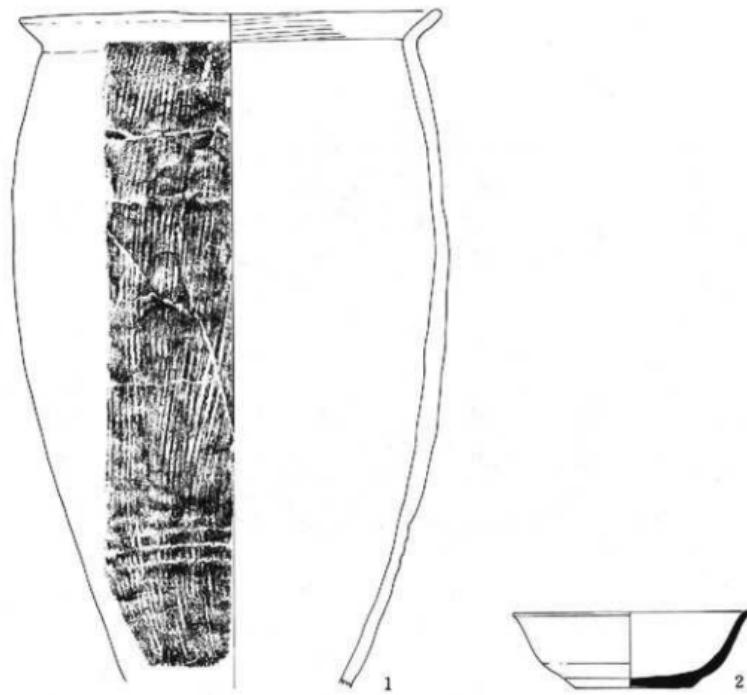
時期は奈良・平安Ⅲ期（反目遺跡の時期区分による）である。

(2) 第2号住居址（第357図）

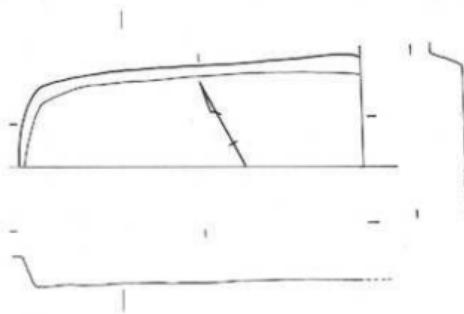
遺構 本址は第1号住居址の南にあり、南と東側は開田時に破されている。北西一部が検出されただけのもので、プラン等はまったくわからない。

壁高は50cmほどである。

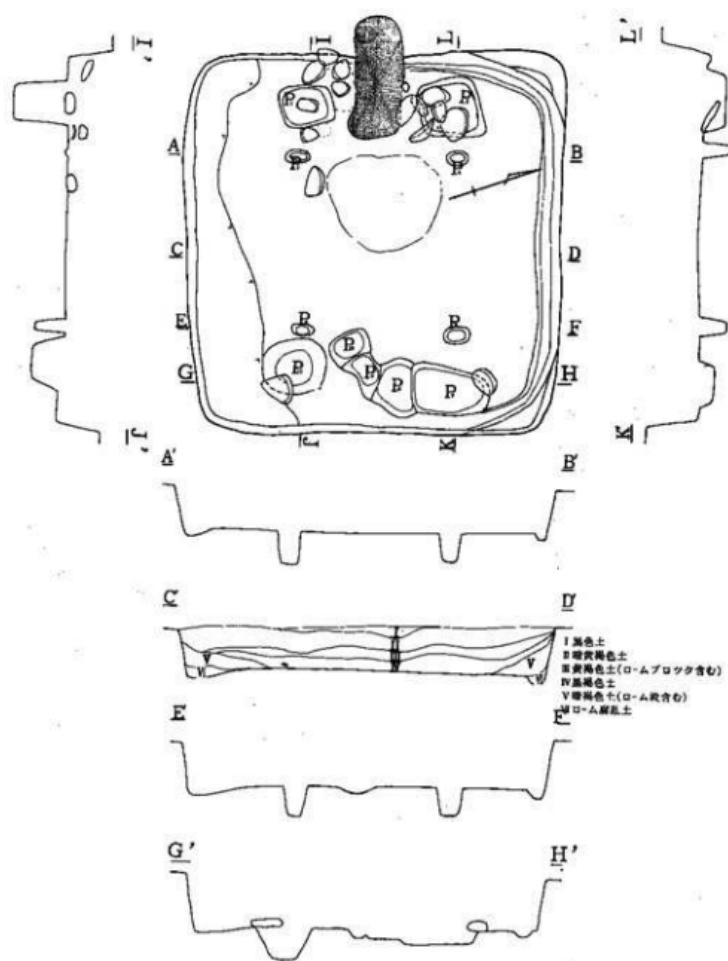
遺物は土師器が少量出土するのみで時期は不明である。



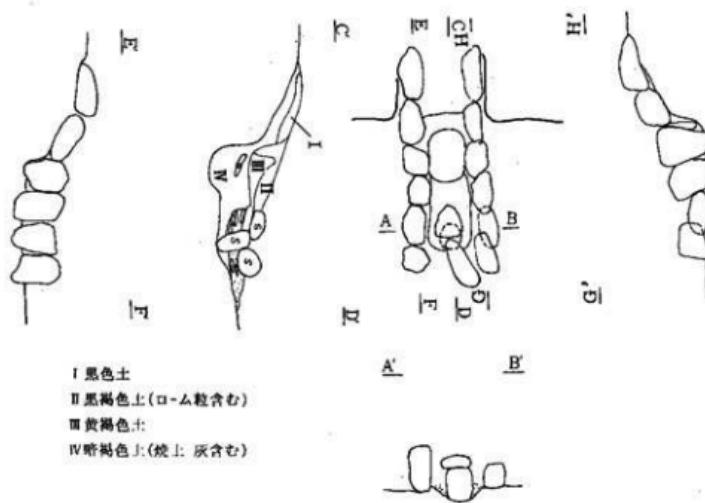
第356図 第1号住居址出土遺物（1/3）



第357図 第2号住居址実測図（S = 1/80）



第358図 第3号住居址実測図 ($S = 1/80$)



第359図 第3号住居址カマド実測図 (S = 1/40)

(3) 第3号住居址 (第358~364図)

遺構 本住居址は第1号・2号住居址の西に位置し、北には第4号住居址がある。

プランは $5.3 \times 5.3\text{m}$ を測る隅丸方形である。長袖（カマド）方向は $N - 70^\circ - W$ である。

壁高は65cm前後と深い。北側には周溝がある。南側の床面は壁に向かって傾くなり、ローム腐乱土が入り込んでいる。荒掘りの痕跡と考えられる。床面は堅く堅緻である。

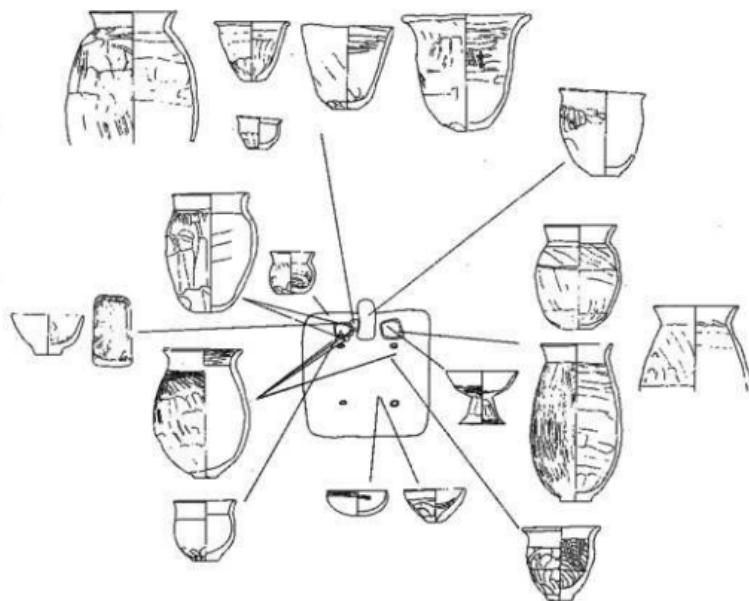
カマドは西壁中央にあり、壁を70cm掘り込んで煙道部を作っている。焚口から煙道まで170cmを測り、幅は70cmと細長いものである。袖石はしっかりと石組され、支脚石も残っている。天井石は検出できなかった。封土はロームである。

主柱穴は4本で、柱穴の掘形は長楕円形である。

カマドの両脇に方形の小堅穴（P₁、P₂）があり、当初土壤としていたが、内部の土器と住居址のものが接合するものがあり、時期差もみられないこと、また第8号住居址にも同様な小堅穴を持つことから整理の段階で当住居址に伴うものとした。貯蔵施設と考えられる。

カマドの手前からカマドP₁、P₂にかけて大きな自然石が床面よりやや浮いて多量に出土している。遺物は礫の下部より多量に出土している。

遺物は豊富で、完形及びそれに近いものが多く出土している。第360図に示すとおりカマドの左



第360図 第3号住居址遺物出土状況図

側からP₁にかけて最も多くみられ、壁からなだれ込むような状態で検出された。又P₂よりも高环(14)、長胴甕(2)が礫に埋められたような状態で出土している。さらにP₁の西壁ぎわより、小形甕(6)、鉢(19)、砥石(21)、P₄の東より小形甕(7)、P₅の南からは瓶(16)と壺(17)が検出されている。1の甕はP₁とカマド脇、P₄の東からの接合資料である。

遺物 すでに述べたとおり遺物は豊富で良好なセット資料となっている。土師以外に須恵と灰釉が少量覆土中より出土している。

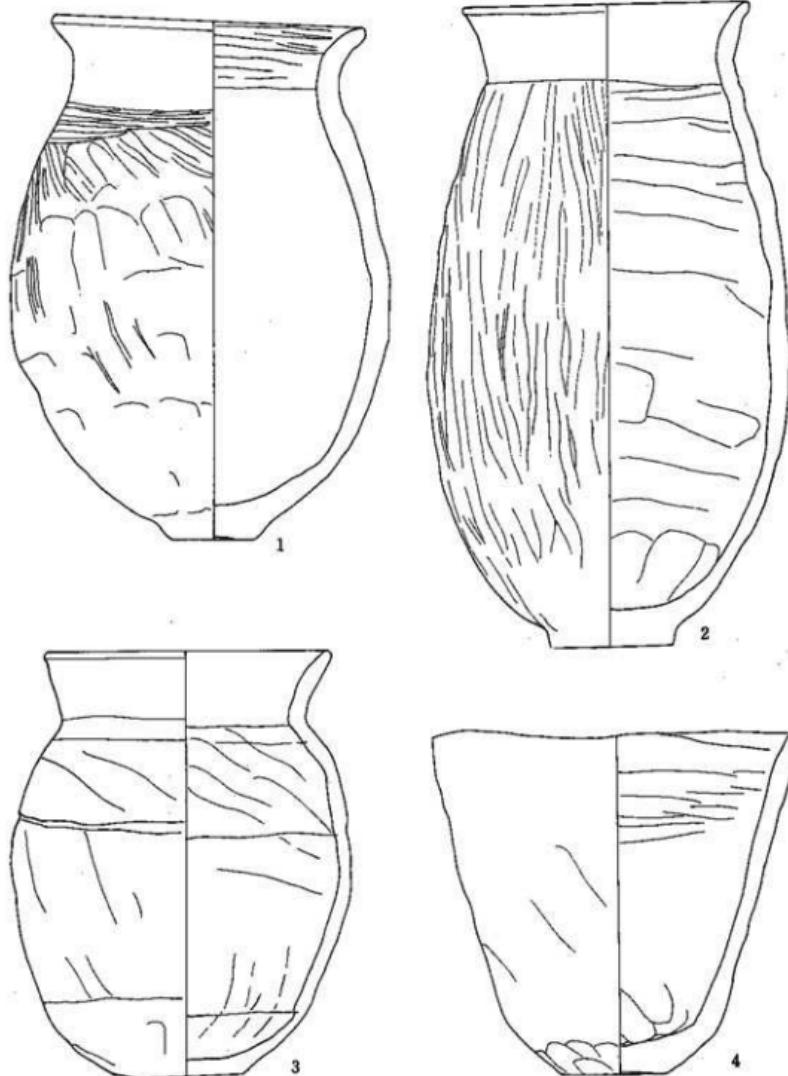
1から13は甕で小形のものと大形のものとがあり、6、13は中でも特に小形のものである。大形のものは底部の作りが悪く不安定なものが多い。4は底から直線的に外傾するものである。

14は高环、17・18・20は壺で内面黒色研磨されている。15・16は瓶、19は鉢である。

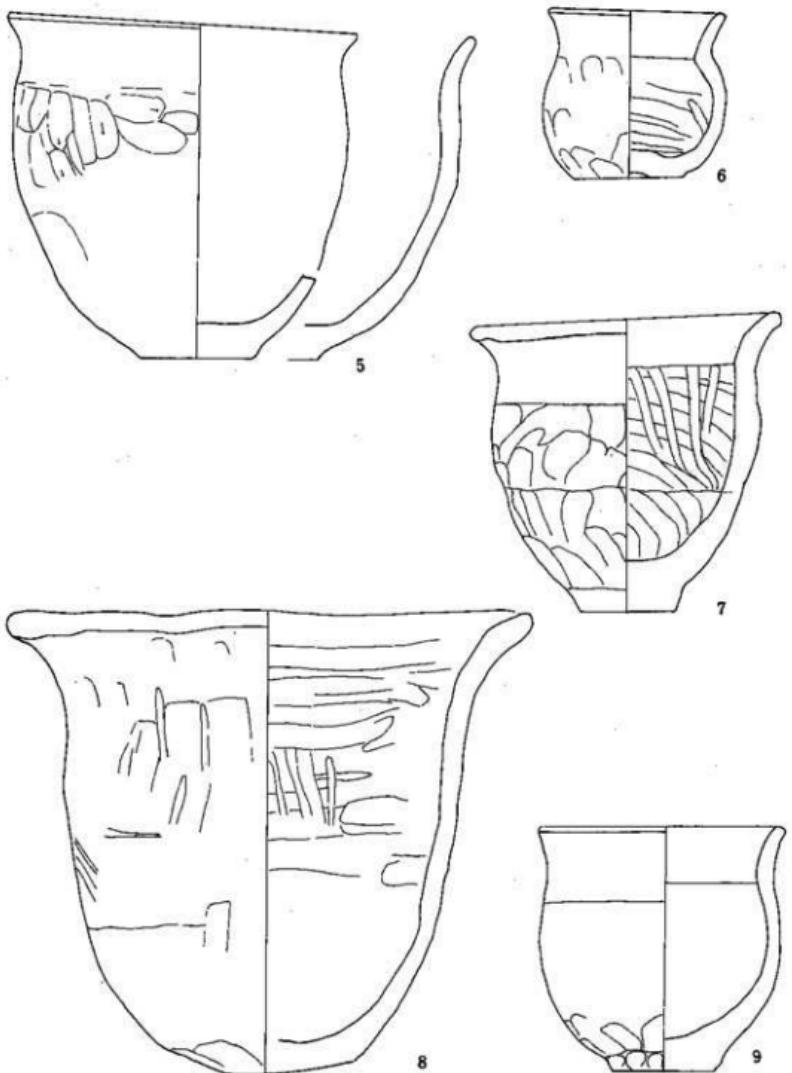
21は砥石である。

覆土中より打製石斧3、敲打器1、凹石1の計4点の石器が出土している。

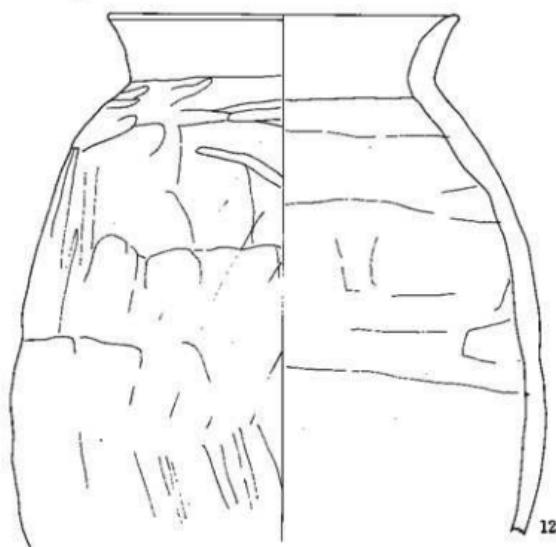
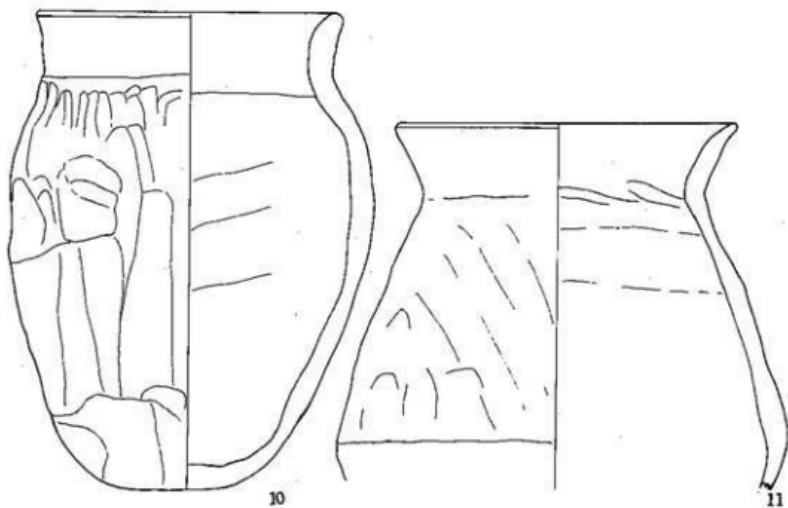
時期は古墳時代IV期前半に属する。



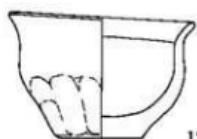
第361図 第3号住居址出土遺物（1/3）



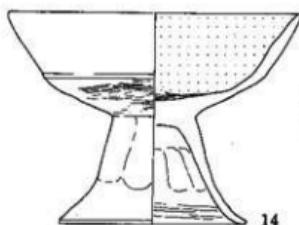
第362図 第3号住居址出土遺物 (1/3)



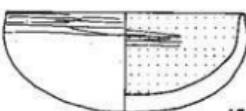
第363図 第3号住居址出土遺物（1/3）



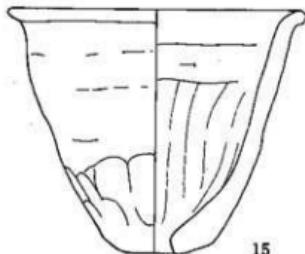
13



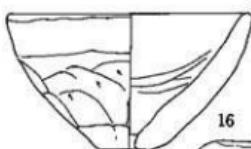
14



17



15



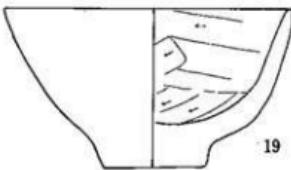
16



19



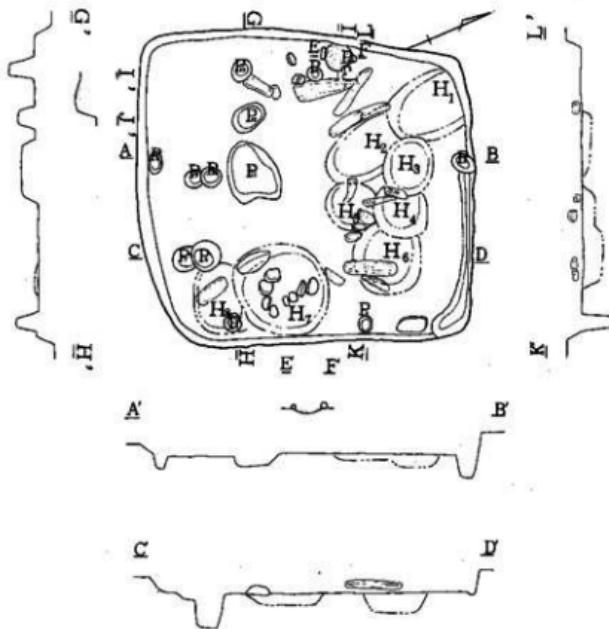
21



20



第364図 第3号住居址出土遺物（1/3）



第365図 第4号住居址実測図 ($S = 1/80$)

(4) 第4号住居址 (第365・366図)

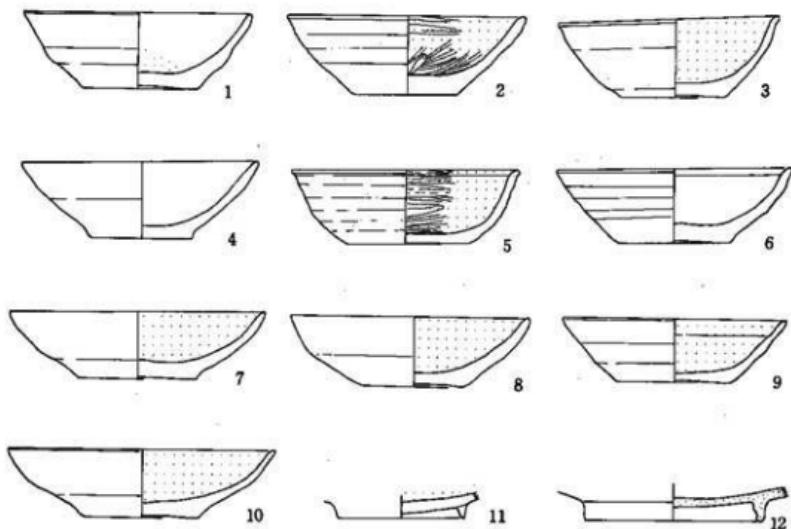
遺構 本址は第3号住居址の北に位置している。

プランは隅丸方形で規模は $4.8 \times 4.5\text{m}$ を測る。長軸方向はN-68°-Wである。

壁高は北側で30cm、南に行くに従い低くなり15cmほどである。床面は灰だまりが北側中心に掘り込まれており、良好でない。床面よりやや浮いて炭化材が検出されており焼失家屋である。

カマドは北西壁中央にあり焼土が残るのみである。南東側灰だまりH₇より並んで石が検出されている。P₈・P₇・P₉・P₁₀の動き南側にわずかな段差がみられる所から重複住居の可能性もあり、古いカマドの可能性が強い。

主柱穴は東から南にかけて6本検出されている。P₄・P₅・P₁₂が現住居に伴うものと思われる。



第366図 第4号住居址出土遺物（1/3）

遺物 遺物は多い。土師が主体で、須恵は壺の破片が小量、灰釉は12の壺と瓶の破片がある。土師は壺が多いが他に長胴壺と小形壺がみられ、ハケ目調整のものである。壺は高台を持つものはみられず、内面黒色処理されるものが多い。

覆土中より石器9点が出土している。内訳は打製石斧6、敲打器2、特殊磨石1点である。

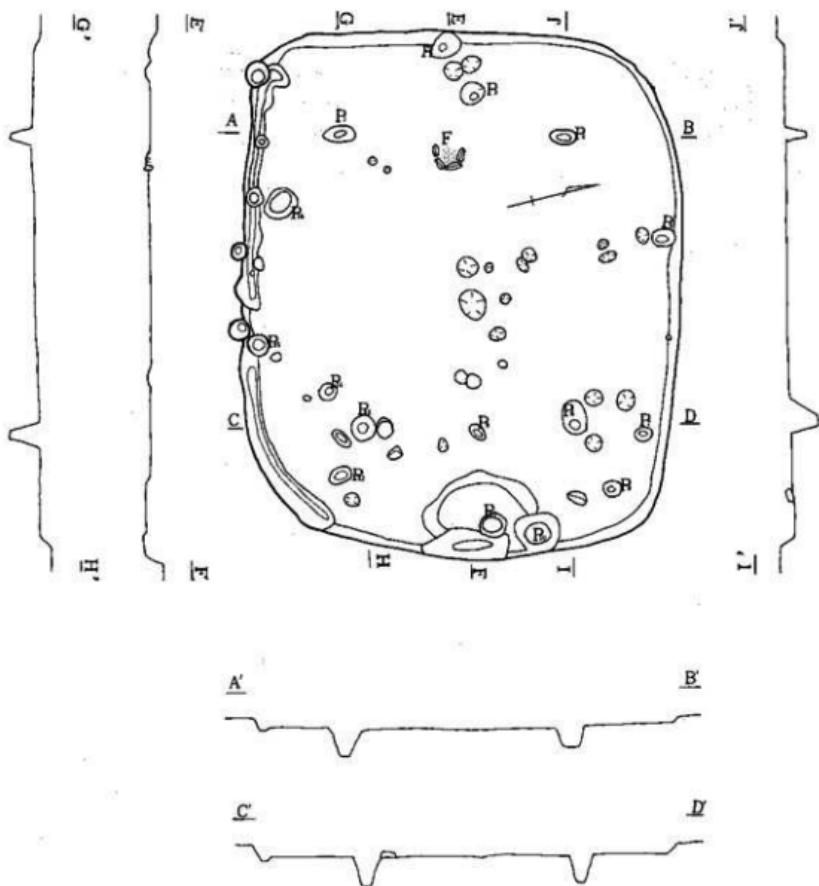
時期は奈良・平安IV期からV期にかけのものである。

(5) 第5号住居址 (第367・368図)

遺構 本址は調査区では最も東に検出されたものである。開田時にかなり削られており、壁高は10~15cmである。

プランは隅丸長方形を呈し、規模は7.5×6.2mを測る大形の住居址である。長軸方向はN-78°-Wを測る。覆土は水田の地場下となって固いにがり土である。床面は小ピットが多く穿れるが固く堅緻である。

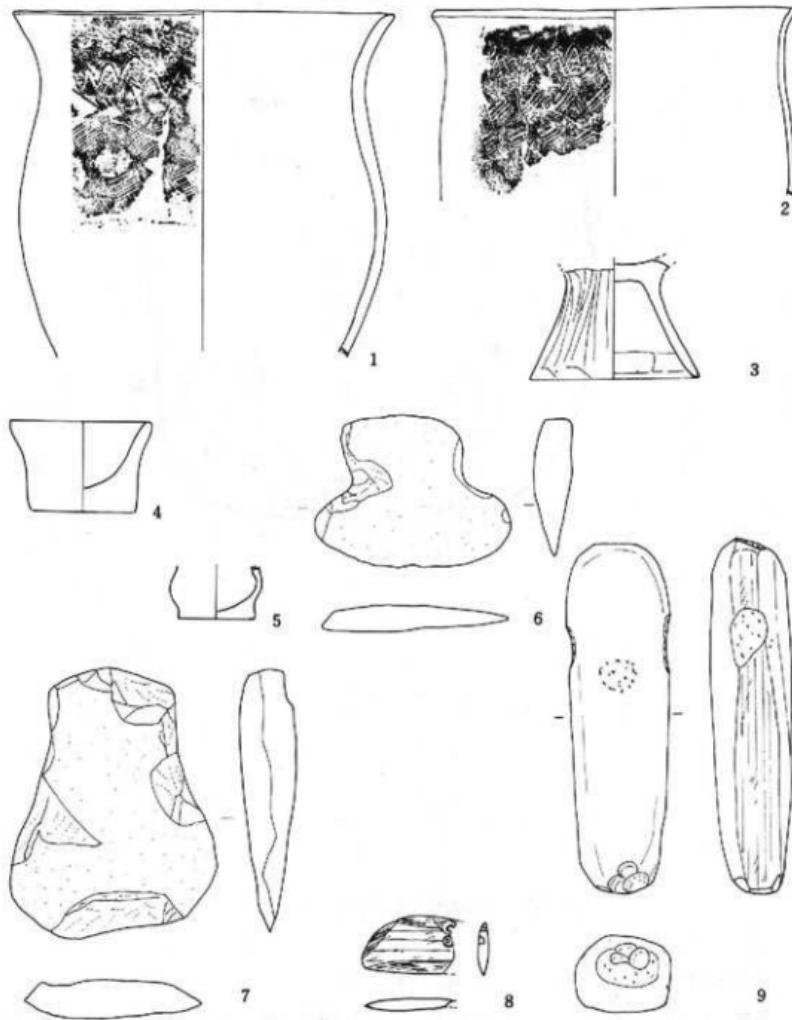
炉は西側P₁、P₄線上よりやや内側に位置しており、4個の石でコ字形を作っている。西には炉石がない。内部は焼土が固く焼きしまっている。



第367図 第5号住居址実測図 ($S = 1/80$)

主柱穴は P_1 、 P_4 、 P_6 、 P_{13} の4本が検出されている。

遺物 土器は多いが復元できるものはない。1・2は甕で黒褐色ないし暗褐色を呈し、固く焼かれている。ともにハケ目が斜位に施されている。口縁の反りはわずかで頭部に一段の波状文、その下部に短線斜走文が2~3段みられる。3は高环の脚部で赤褐色に固く焼かれる。脚部外面



第368図 第5号住居址出土遺物（1/3）

はタテの丹念なヘラミガキがみられる。端部内外はヨコのハケ目調整が施されている。4は手づくね土器で白黄褐色に固く焼かれる。他に大形の壺がある。大粒な長石を多量に含み内面ははく落している。

石器は4点出土している。6は有肩石斧、7は楔形の打製石斧である。8は磨製の石包丁で半折である。9は敲打器で頭部から4cmの所から2cmほどの抉り部がみられる。着柄痕と考えたい。

時期は弥生時代後期前半である。

(6) 第6号住居址 (第369~370図)

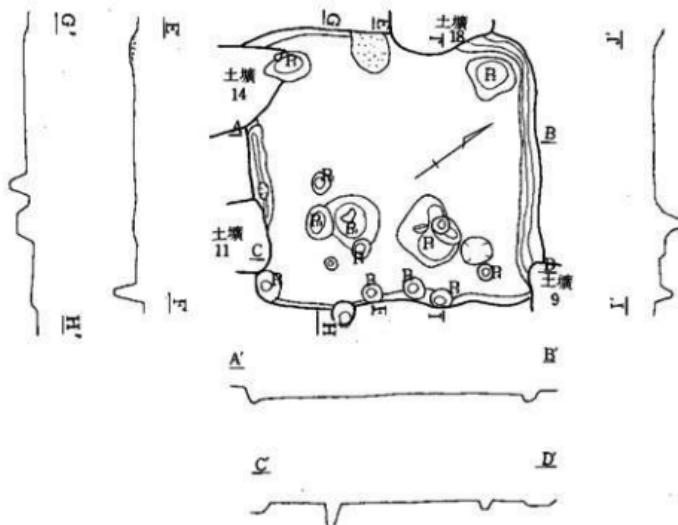
遺構 本址は第5号住居址の東に位置し、西には第7号住居址がある。南側は土壇11・14があり壁は不明確である。

南東部のコーナーの存在、周溝からして、プランは隅丸方形を呈し、規模は4.0×3.8mを測る。長軸方向はN-35°-Eである。

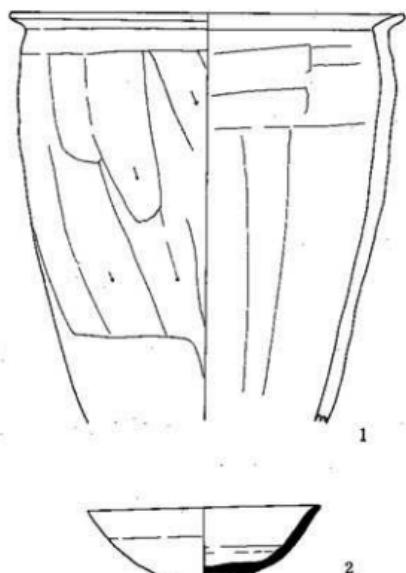
現存壁高は10cm前後で、床面はやや軟弱である。北東と南西側には周溝がみられる。

カマドは西壁中央に造られ、柚石は検出されていない。

主柱穴はP₁、P₂、P₄、P₆の4本があり、南東壁中央部の4本は入口施設に伴うものと考えられる。



第369図 第6号住居址実測図 (S = 1/80)



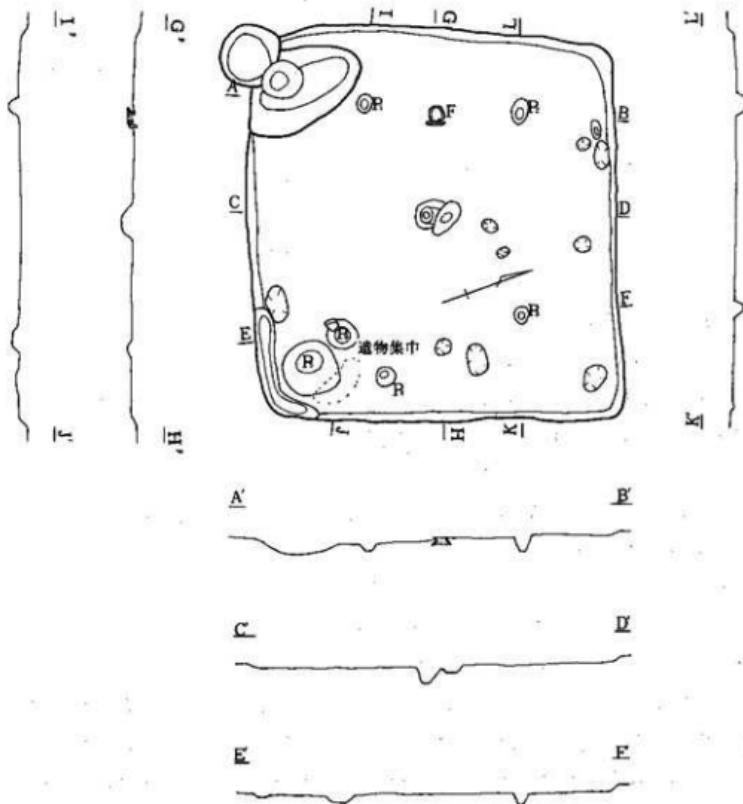
第370図 第6号住居址出土遺物（1/3）

遺物 主体は土師の甕である。図示したもの外に小形のものがある。土師では他に壺があり、内面黒色処理のものもみられる。

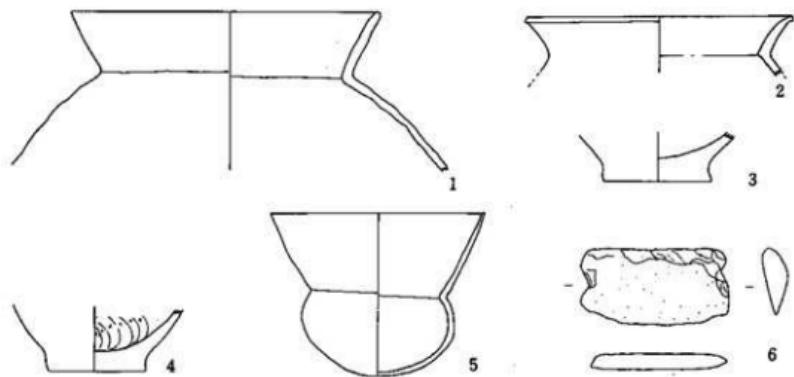
須恵は2の壺と甕が出土している。

灰釉は壺と瓶が少量みられる。

時期は奈良・平安Ⅲ～Ⅳである。



第371図 第7号住居址実測図 (S = 1/80)



第372図 第7号住居址出土遺物 (1/3)

(7) 第7号住居址 (第371・372図)

遺構 本住居址は第6号住居址の西にある。

プランは隅丸方形を呈し、規模は $5.6 \times 5.1\text{m}$ を測る。長軸方向はN-71°-Wである。

現壁高は5~10cmで壁はなだらかである。床面は全体に固く堅緻である。南東部に周溝がわずかにある。

P₁、P₂の中間線上やや内側に埋甕炉がある。東に枕石を据えている。古墳時代前期には地床炉が多くみられることは知られているが、埋甕炉は例が少ない。

主柱穴はP₁、P₂、P₃、P₆の4本である。

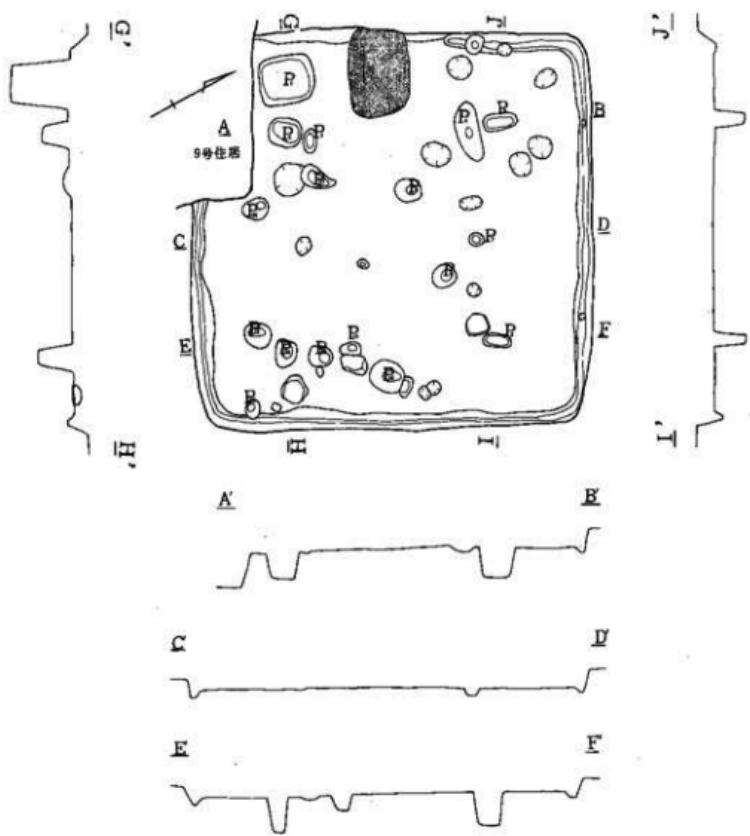
P₄の南床面より甕 (第372図-2・4) と壇 (5) が出土している。

遺物 遺物は少ない。図示したもの以外は甕の破片である。

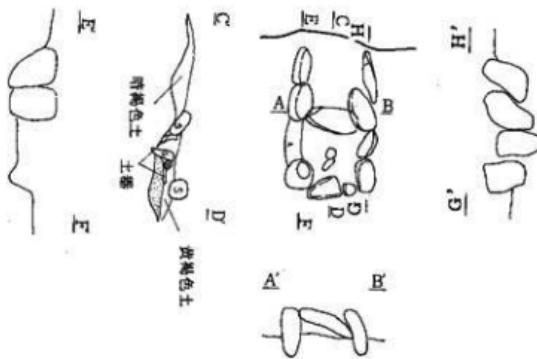
1は埋甕炉に使用されたもので胸央部より下を欠く。口縁はく字に外反し胸部は強く張る。赤褐色に固く焼かれている。2も同様の甕である。3、4は甕の底部である。5は壇である。床面に張りつくような状態で検出された。胎土は精練され極薄手橙色に固く焼かれている。口縁は強く張り出す。

6は打製の石包丁で硬砂岩製である。

時期は古墳時代II期古段階に属する。



第373図 第8号住居址実測図 ($S = 1/80$)



第374図 第8号住居址カマド実測図 ($S = 1/40$)

(8) 第8号住居址 (第373~375図)

遺構 当住居址は第7号住居址の南西に位置し、南西部はわずか第9号住居址に切られている。

プランは隅丸方形を呈し、規模は $5.7 \times 5.6\text{m}$ を測る。長軸方向はN- 27° -Eである。

壁高は $20\text{~}30\text{cm}$ である。床面は小ピットが多く穿れるが、全体に固く堅緻である。南西側を除いて周溝が周っている。

カマドは北西壁ほぼ中央に造られている。カマドの全長は 100cm 、左側には手前の袖石がなく抜かれたものであろうか。カマド内に落ち込むが、天井石が残されている。袖石はロームを封土としている。

主柱穴はP₃、P₅、P₉、P₁₅の4本である。

カマドの左側には第3号住居址同様方形の貯蔵施設を持つ。

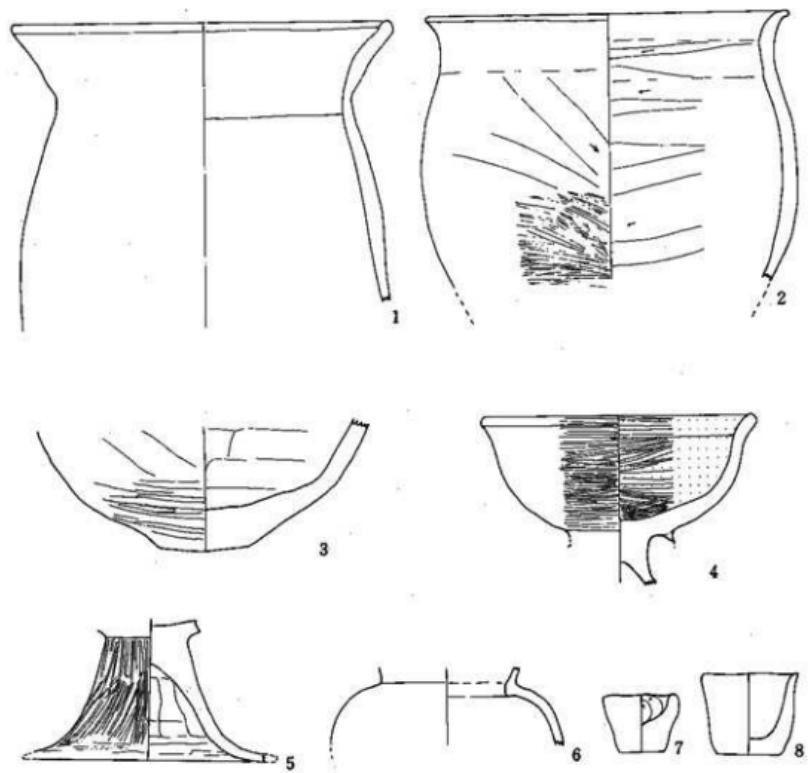
北西壁ぎわより編物用鍾石が集中して出土している。

遺物 土器は土師のみである。

1~3は甕、4・5は高壺である。6は壠であると思われる。7・8は手づくね土器である。

編物用鍾石が22個出土している。

時期は古墳時代IV期に属する。



第375図 第8号住居址出土遺物（1/3）

(9) 第9号住居址 (第376~378図)

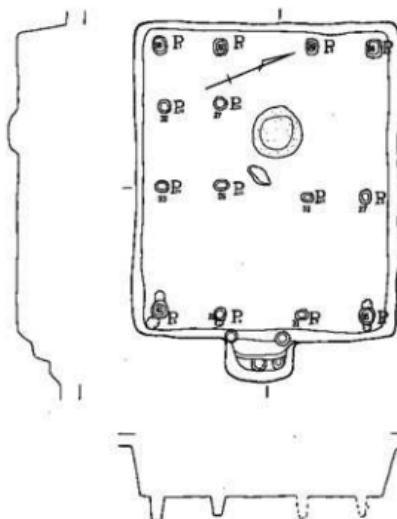
遺構 本址は第8号住居址の南西部を切つていて、4.5×3.6mを測る長方形の竪穴で、壁高は65~70cmを測る。

東側には入口施設用柱穴があり階段状となっている。

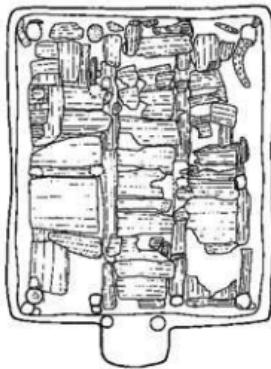
覆土は、検出面からロームブロック、焼土、灰の混合土がみられ、しまりがなく、当初攪乱を思わせるものであった。床面ぎわになって炭化物が混じるようになり床面には炭化材が全面に検出された。

板材、朽材等良好な状態であったため、団長と協議の結果、国立奈良文化財研究所の宮本長二郎氏の指導をあおぐこととなつた。

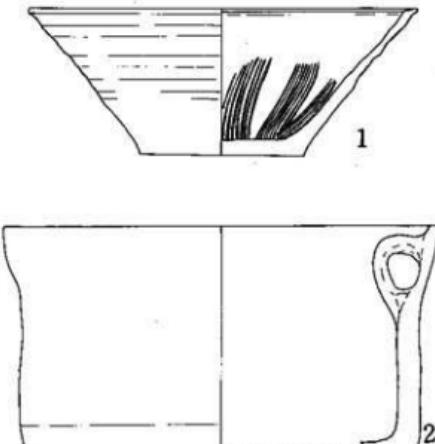
宮本室長の見解は、土をかぶせた陸屋根式構造を持つものとのことであった。



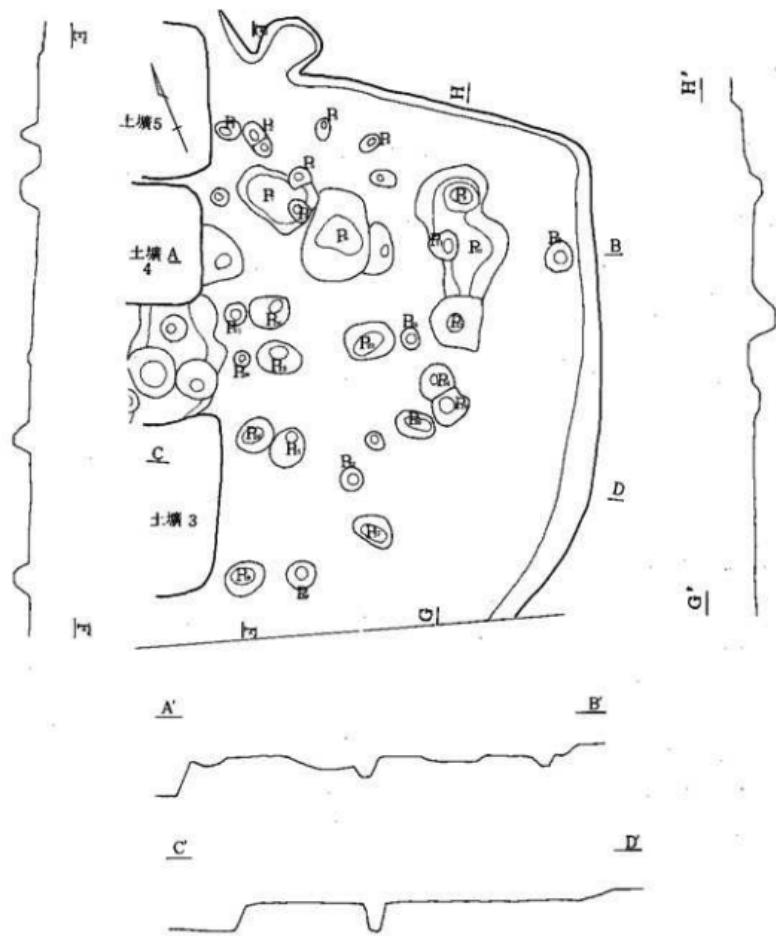
第376図 第9号住居址実測図 (S = 1/80)



第377図 第9号住居址炭化材
検出状況図 (S = 1/80)



第378図 第9号住居址出土遺物 (1/4)



第379図 第10号住居址実測図 ($S = 1/80$)

現地保存が出来ないため、全面採りあげて復元することとなり、発泡スチロールを用いて採りあり作業を行った。現在復元作業は中途である。

炭化材にと一緒に擂鉢（第378図-1）が飛び散った状態で又内耳土器が出土している。

炭化材を探りあげ精査した処、中央西寄りに地床炉が検出された。中世に同様な堅穴が良くみられるが、遺物を伴わず、火爐もないことが多く性格不明なもの多い。今回検出された遺構は擂鉢と内耳土器、炉を持つことから住居址として間違いないであろう。

炭化材及び住居址の構造については、付図にゆずりたい。

遺物 遺物は少ない。図示したもの以外に内耳土器と天目茶壺・甕の破片が出土している。

1は擂鉢で口縁部を所々欠くがほぼ完形に近くこれだけまとまったもの出土は珍しい。口径28cm、底径11.5cm、器高10.4cmである。底部からわずか反りぎみに口縁に至り口唇の反りはほとんどみられない。口唇上面は溝となる。体部外面はロクロ目が顕著である。内面は8条の櫛状工具によって右回りに11回かき上げられている。底にも交叉するように櫛目が施される。鉄軸が化粧がされている。多分片口と思われる。

2は内耳土器で外面には炭化物が付着する。口径は推定31cm、底径28cmを測り、器高15.7cmである。底から直立し口縁下部にてわずか屈曲して口縁に至る。

住居址の時期についてであるが、擂鉢が15世紀末の所産である所から同時期であると考えるのが妥当であろう。

備 第10号住居址（第379、380図）

遺構 本址は第5号住居址の南に位置している。西側は土壤3～5号と建物址の柱穴が掘られており壁は検出できなかった。又南側は開田時に破壊されている。

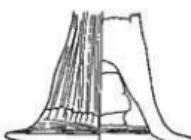
壁は東から北にかけて確認できたのみでプラン、規模は不明である。炉及びカマドは検出されていない。

床面は固く堅緻である。

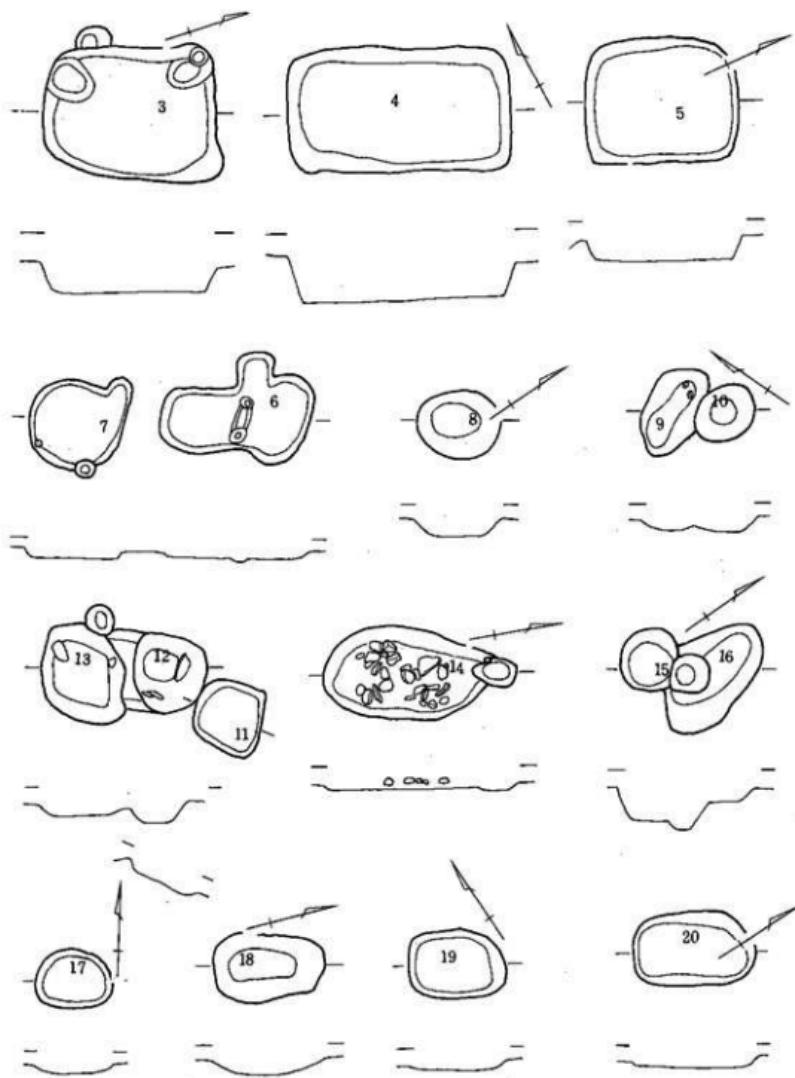
遺物 遺物は少ない。土師のみで図示できたものは第380図の高环の脚部のみである。

他には甕と环がある。

時期は遺物が少なく決め難い。古墳時代後半と思われる。



第380図 第10号住居址出土遺物
(1/3)



第381図 土壌実測図 ($S = 1/60$)

2) 土壙 (第381・382図)

土壙が6号・7号・10号住居址付近に集中して18基検出されている。

住居址同様、削りとられるものが多く底面をわずか残すものが多い。

3～5号土壙を除いて楕円形、円形を呈すものが一般的で、覆土はにぎり土1層で固くしまっている。開田時の仕業と思われる。

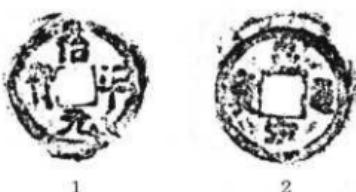
14号土壙は底から小礫が多量に検出されている。

3～5号土壙は第10号住居址の西側に検出されたものである。プランはともに長方形を呈し、断面はタライ状となる。覆土は上層ににぎり土があり下部は黒色土1層である。後述する建物址と一帯となる可能性もある。

10号土壙以外からは遺物を全く伴っていない。

10号土壙からは古銭3枚が出土している。第382図-2は2枚が重なっている。

1は「治平元宝」、2は通宝のみ判読できるだけである。一緒に出土したことから同時代のものと考えられる。



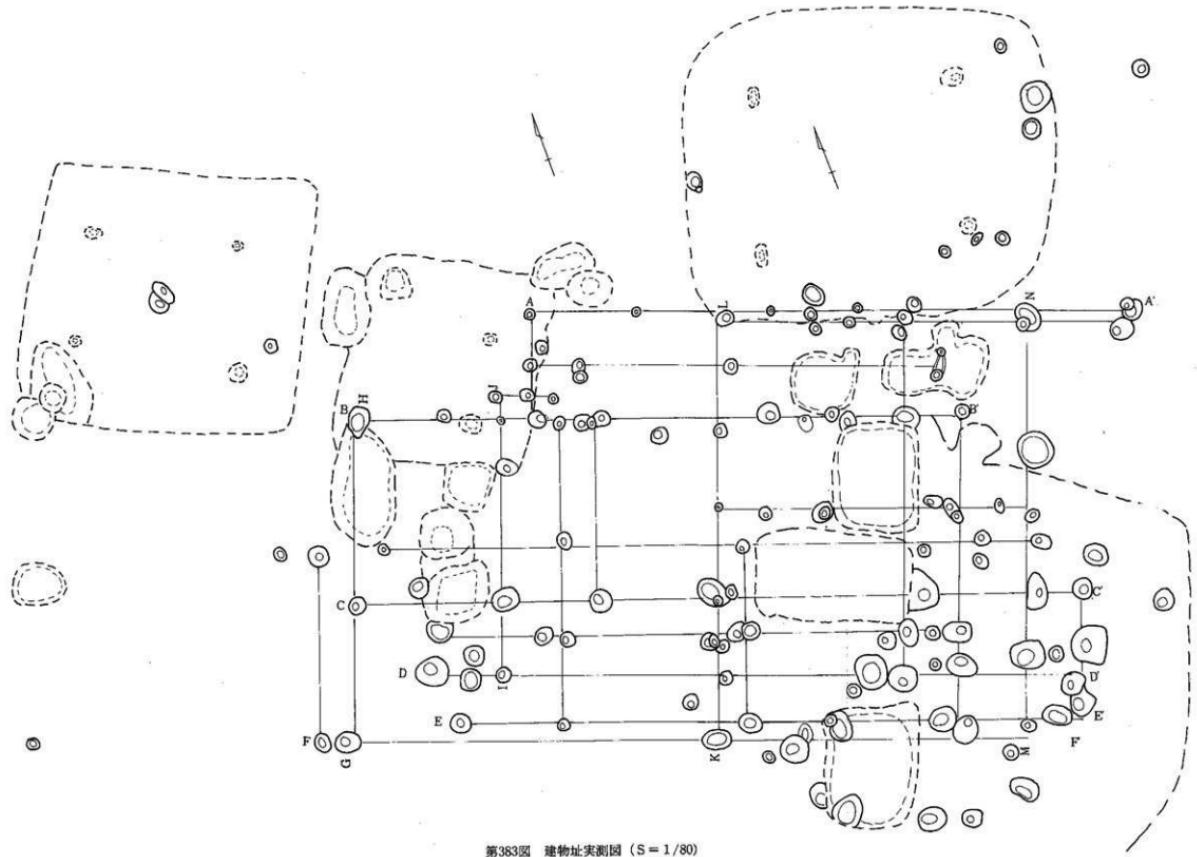
第382図 第10号土壙出土遺物（1/1）

3) 建物址 (第383、384図)

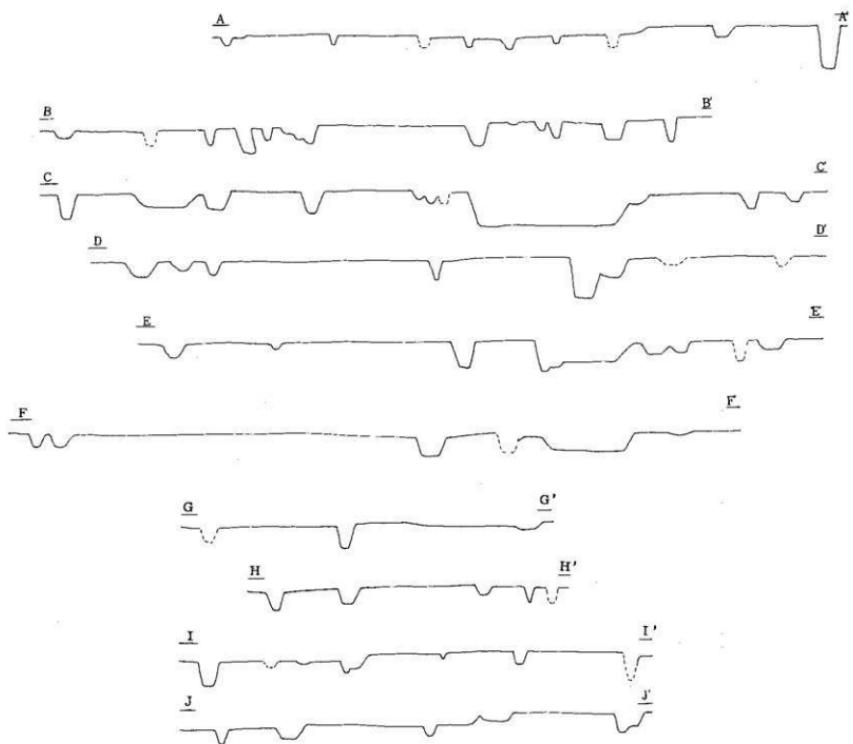
第10号住居址の西から第6号住居址にかけての広範囲にわたって柱穴が多く検出されている。列を通すものが幾つかみられるが、グルーピングできるものは見当たらず、全体を一つのものとして考えた方が良いものと考えられるため一括して資料提示しておくこととする。

柱穴の掘形は円形を呈すものが一般的で、覆土は黒色土1層である。柱穴痕を残すものはない。土壙3～5号はこの柱穴址群に付属する可能性もある。

遺物は当遺構に伴う明確なものではなく、時期は不明であるが、中世以降と考えられる。



第383図 建物址実測図 ($S = 1/80$)



第384図 建物址断面図 ($S = 1/80$)

5 まとめ

今回の調査は広範囲の遺跡の極く狭い範囲のものであったが、住居址10軒、土壙18基、建物址が検出され多くの成果を得ることができた。

時期が明確となった住居址は9軒で、弥生時代1軒、古墳時代4軒、奈良・平安時代3軒、中世1軒となっている。

弥生時代は後期前葉のもので、出土した甕は反目遺跡同様橋原式土器の影響を受けたものである。

古墳時代4軒の内1軒・第7号住居址は前期の住居址であり、この時期の住居址は市内では初めて、上伊那でもそう例は多くない。伊那市堂垣外1号住居址例が著明である。この時期の住居址の存在により、反目遺跡と一帯となったこの台地上に弥生時代後期から古墳時代にかけて連続して生活が営まれた可能性が示された。今後の調査によって空白を埋める時期の住居址の発見が期待される。

第3号住居址から出土した古墳時代IV期の資料は、量もさることながら器種がすべてそろっており、セット資料として価値のあるものである。

中世の第9号址は、上屋構造を考える上で、大きな問題を提起してくれた。陸屋根式住居の存在とともに、遊光城との関連で今後注目して行く必要がある。

当遺跡はすでにふれたとおり、今回の調査区の南側に広範囲にわったっており、良好な状態で保存されている。発掘調査によって明らかとなることが多いが、市内では数少ない手のつかない遺跡の一つである。開発の波から守って行くことが今後の大きな課題である。

遊光遺跡古墳時代以降住居址一覧表

番号	平面形	長軸方向	規模	入口	カマド	柱穴	時期	備考
1	隅丸方形	N-60°-W	4.6×4.6		西中央	3	奈・平Ⅲ	
2	隅丸形	不明	不明		不明	不明	不明	
3	隅丸方形	N-70°-W	5.3×5.3		西中央	4	古墳IV	
4	隅丸方形	N-68°-W	4.8×4.5		北西やや北寄り	3	奈・平 IV～V	
6	隅丸方形	N-35°-W	4.0×3.8	南東	北西中央	4	奈・平 III～IV	入口施設あり
7	隅丸方形	N-71°-W	5.6×5.1		埋甕炉西柱 穴線上より 中 枕石あり	4	古墳II	
8	隅丸方形	N-27°-E	5.7×5.6		北西中央	4	古墳IV	
10	不明	不明	不明		不明	不明	古墳後	

遊光遺跡 土師器・須恵器・灰釉陶器観察表

出土地 番号	押抜 番号	器種	法量	容量	残存状態	器形の特徴	調査	胎土外
1号住	356-1	甕	22.3 () 35.8			長胴甕	外面 口唇ヨコナデ 脇部タテのハケ 内面 口唇ヨコのハケ 脇部ナデ	暗褐色 砂粒含む 焼成良好
	-2	片 (底)	12.6 6.3 3.9		丸	底部下部にて屈曲する	ロクロナデ 底回転糸切	白灰色 砂粒含む 焼成良
3号住	361-1	甕	16.5 4.4 27.7		完形	長胴甕 脇尖部に最大径	外面 口唇ヨコナデ 脇部ヘラケズリ痕 内面 ヘラナデ及びヘラミガキ 口唇ヨコのナデ・ヨコヨコのヘラ ミガキ 脇部ヨコナデ 底 ナデ	暗褐色 大粒な 砂粒多量に含む 焼成普通
	-2	甕	15.3 6.4 34.2		完	長胴甕 口縁わずかに外反し 最大径下部にくる	外面 口唇ヨコナデ 脇部ヘラナ デ、ヘラミガキ 内面 ヨコナデ 底 ヘラケズリの後ナデ	暗褐色 大粒な 砂粒多量に含む 焼成普通
	-3	甕	15.0 5.8 22.7		完	最大径肩上部にくる 成形痕残す	外面 口唇ヨコナデ 脇部斜位のハ ケ 下部ヘラケズリ痕残す 内面 ヨコヨコナデ 脇部斜位のハ ケ 底 手持ちヘラケズリ	黄褐色ないし暗 褐色 砂粒わずか か含む 焼成良好
	-4	甕	19.3 5.6 17.8		完	脇部直線的に外傾する	外面 脇上部ヨコナデ 下部斜位のナ デ 内面 ヨコのハケ 斜位のハケ 底	暗褐色 砂粒多 量に含む 烧成良 好
362-5	甕	18.6 6.0 18.4 (17.4)			口縁と脇部均 欠	脇部上部にて直立し口縁は外反 する	外面 口唇ヨコナデ 脇部ヘラケズ リ痕残しヘラナデ、ヘラミガキ 内面 口唇ヨコナデ 脇部タテ・ ヨコのヘラミガキ 底 ナデ	赤褐色 砂粒多 量に含む 焼成良好
	-6	甕	9.6 6.6 8.8	350.79	完	脇部球状を呈す 中央底部くぼむ	外面 口唇ヨコナデ 脇部斜位のナ デ、ヘラケズリ痕残す 内面 口唇ヨコナデ 脇部ヨコ、斜 位のナデ 底	赤褐色 砂粒含 む 烧成良好
	-7	甕	16.3 5.0 15.8 (15.2)	III5.86	口唇一部のみ 残る	脇部上部にて直立し口縁外反す る	外面 口唇ヨコナデ 脇部ヘラケズ リ痕残す 斜位のナデ	黄褐色 砂粒含 む 烧成良好
362-8	甕	27.6 7.0 24.6			脇下部均 欠	丸底甕	外面 口唇ヨコナデ 脇部斜位タテ のハケ 脇部一部ヘラミガキ 内面 口唇ヨコナデ 脇上部ヨコの ハケ 脇下部から底ヘラナデ 底 ヘラケズリ	暗褐色 砂粒多 く含む 烧成普 通
	-9	甕	13.2 5.5 13.0	944.86	口縁脇上部均 欠	脇上部直立し口縁外反する	外面 口唇ヨコナデ 脇部タテのハ ケ ヘラケズリ痕残す 内面 口唇ヨコナデ 脇上部ヨコの ハケ 脇下部ナデ 底 木炭痕	暗褐色 砂粒含 む 烧成普通
	--10	甕	16.0 6.2 25.4		完	脇上部に最大径持ち口縁わずか に外反する 底丸底甕	外面 口唇ヨコナデ 脇部タテのハ ケ ヘラケズリ痕残す 内面 口唇ヨコナデ 脇上部ヨコの ハケ 脇下部ナデ	暗褐色 砂粒多 く含む 烧成良 好
--11	甕	18.2 () (19.5)			脇下部均 欠	脇尖部にて強く屈曲する	外面 口唇ヨコナデ 脇部斜位の ハケ 内面 口唇ヨコナデ 脇部ヘラケズ リ 脇部ナデ	黄褐色 砂粒含 む 烧成良好
	-12	甕	19.0 () (28.0)		脇下部	U縫部外反する 長胴甕	外面 口唇ヨコナデ 脇部ヘラケズ リ 脇部タテのハケ 内面 口唇ヨコナデ 脇部ヨコのハ ケ	暗褐色 砂粒含 む 烧成良好

出土地	辨	器種	法量	容量	残存状態	器形の特徴	調査	出土外	
3号住	-13	甕	9.8 4.2 6.8 (6.2)		肩部一部欠	肩上部直立し、口縁外反する	外面 口頸部ヨコナデ 腹部ナデ 下部にヘラケズリ痕残す 内面 口縁ヨコナデ 腹底部ナデ	赤褐色 粘土良好 焼成堅微	
	-14	高环	15.7 10.0 11.3		环部外欠 环部内欠	环部横を持つ	燒成基悪ている。内面墨色處理研磨一部 外面 ヨコヨコヘラミガキ 口縁部ナデ 腹外面 タチのヘラケズリのナデ 腹内面 タチのヘラケズリ 頂ヨコのヘラミガ キ	赤褐色 砂粒わ ずか含む 焼成 不良	
	-15	甕	(16.0) 5.0 13.0	972.30	口唇部外欠	腹部直線的に外傾し、口唇部外 する 単孔	外面 下部ヘラケズリ痕残る 口縁 はヨコナデ 内面 口縁ヨコナデ 腹部斜位のハ ゲ 底 ヘラケズリの後ナデ	白黄褐色 砂粒 多く含む 焼成 普通	
	364-16	甕	13.0 3.0 7.3	332.94	完形	単孔 口縫直立する	外面 ナデ下部ヘラケズリ痕残す 内面 外部ヘラケズリあり ナデ	白黄褐色 砂粒 含む 焼成普通	
	-17	环	12.6 — 5.3		口縫一部欠	口縫直立する 丸底	内外面 口縫ヘラミガキ 外面底ナ デ 内面 墨色研磨 内外面ともあばた伏剥落あり	赤褐色 粘土堅 密 焼成普通	
	-18	环	14.2 — 4.4		口縫外 体部外	口縫直立する 丸底	外面ととも口縫にヘラミガキ 外面 底ナデ 内面 黒色研磨	赤褐色 長石わ ずか含む 焼成 普通	
	-19	鉢	5.3 8.5		完	ゆがんでいる	外面 ナデ 内面 ハケ 底 ヘラケズリ	白黄褐色 砂粒 多量に含む 焼 成普通	
	-20	环	13.6 — 4.6	%		口縫直立する 丸底	内外面 口縫ヘラミガキ 内面 黒色研磨	黄褐色 長石わ ずか含む 焼 成良好	
	4号住	366-1	环	12.1 6.2 4.2	214.51	完	体央部にふくらみ持つ	ロクロナデ 底回転糸切 内面 底墨色處理	白黄褐色 雪母 多く含む 焼成 良好
	-2	环	12.8 5.5 4.2	226.89	口縫一部欠	体部直線的	ロクロナデ 底ナデ 内面 黑色研磨	赤褐色 雪母多 く含む 焼成普 通	
	-3	环	11.7 5.6 4.4 (4.0)	234.31	完	体部丸味持つ	ロクロナデ 底回転糸切 内面 黑色處理研磨顕著でない	黄褐色 外面口 部墨色 雪母 多く含む 焼成 普通	
	-4	环	12.5 5.5 4.2	266.58	体部外欠	口縫わずかに内傾する	ロクロナデ 底回転糸切	黄褐色ないし黑 褐色 砂粒含む 焼成良好	
	-5	环	12.2 6.5 3.9	252.72	完形	口縫わずか外反する	ロクロナデ 底回転糸切 内面 黑色研磨	暗褐色 砂粒含 む 烧成普通	
	-6	环	(12.5) 6.0 3.9	233.61	口縫外 体部外欠	体部丸味持つ	ロクロナデ 底回転糸切 内面 黑色處理研磨顕著でない	赤褐色 砂粒わ ずか含む 焼成 普通	
	-7	环	13.6 6.3 3.5		口縫外	口縫は直立ぎみとなる	ロクロナデ 底回転糸切 内面 黑色處理研磨顕著でない	白黄褐色 砂粒 含む 烧成不良	
	-8	环	12.8 5.4 3.7	%		体部丸味持つ	ロクロナデ 底回転糸切 内面 黑色處理研磨顕著でない	白黄褐色 砂粒 含む 烧成良好	
	-9	环	11.8 6.0 3.3	%		体部直線的	ロクロナデ 底回転糸切 内面 黑色處理研磨なし	赤褐色 雪母多 く含む 烧成普通	
	-10	环	14.1 5.9 3.7		体部外欠	体央部にて屈曲する	ロクロナデ 底回転糸切 内面 黑色處理研磨なし	黑褐色ないし白 黄褐色 砂粒含 む 烧成不良	

出土地	跡番号	器種	法量	容量	残存状態	器形の特徴	調査	出土外
4号住	-11	环	() 6.7 (1.2)		底のみ	付け高台 高台内そき三角形状	ロクロナデ 底凹軸糸切 高台内凹 部凹軸ヘラケズリ 内面 黒色研磨	赤褐色 砂粒わずか含む 燃成普通
	-12	環 (仄)	() 9.5 (1.3)		底のみ	付け高台 高台高く直立し内面 内溝する	ロクロナデ 底全面凹軸ヘラケズリ	黄褐色 脱白色 (外底に難なし)
6号住	370-1	甕	21.0 () 21.8		底欠% %	口縁強く外反する	外面 口唇ヨコナデ 脊部タテのハ ケ 内面 口唇ヨコナデ 脊部下部ヨコ のハケ 下部タテのハケ	
	-2	片 (仄)	12.5 5.0 3.8 (3.4)		体第一部欠	体部直線的	ロクロナデ 底凹軸糸切	灰黒色 長石含む 款質
7号住	372-1	甕	16.5 () (8.3)		口縁・胴上部 %	く字状に口縁外傾し、脇部は強 く張る	内外面 ナデ 脊部指痕残る	赤褐色 砂土良好 燃成普通
	-2	甕	14.0 () 3.1		口縁% %	く字状に口縁外傾し、脇部は強 く張る	内外面 ナデ	暗褐色 砂土肥密 燃成良好
	-3	甕	() 5.8 2.7		底部のみ		外側 ナデ 内面 ハケ 底 ナデ	赤褐色 長石わずか含む 燃成良好
	-4	甕	() 5.2 (3.3)		底部のみ		外側 ナデ 内面 ハケ 底 ハケ	赤褐色 砂土肥密 燃成良好
	-5	壺	11.3 — 8.5		口縁% %	丸底 口縁はラッパ状に強く開 く	外側 ハケ 内面 口縁ハケ 体部ナデ	橙色 砂土肥密 燃成良好
8号住	375-1	甕	20.0 () (16.0)		胴上部% %	長胴甕 口縁く字に外反する	内外面 ナデ	黄褐色 砂粒わずか含む 燃成普通
	-2	甕	19.2 () (14.2)		胴上部% %	口縁わずかに外反する	外側 口唇ヨコナデ 脱上部斜位ハ ケ 下部ラミガキ 内面 口唇ヨコナデ 脊部ヨコハケ	黄褐色 長石わずか含む 燃成良好
	-3	甕	() 4.8 (6.2)		胴下部 底	丸底風	外側斜位ハケ 底部付近ヘラミガ キ 内面 ヨコハケ 底 ヘラケズリ	黄褐色 長石多く含む 燃成良好
	-4	高环	14.2 () 8.2		脚欠% %	口縁外反する	内外面 丹念なヘラケズリ 内面 黒色研磨	赤褐色 一部口縁部黒色 薩摩含む 燃成良好
	-5	高环	() (13.4) (7.4)		环脚欠 脚欠		外側 ヘラミガキ 内面 脚部ハケとナデ 内面黑色 丸底	赤褐色 長石わずか含む 燃成普通
	-6	壺(?)	() () (4.0)		%	脚部丸味持ち口縁はく字に外反 する	内外面 ナデ	白黄褐色 砂土肥密 燃成普通
	-7	手づくね	3.8 2.5 2.8		完		指痕痕跡十 内外ナデ	白黄褐色 砂土肥密 燃成普通
	-8	手づくね	5.0 3.4 4.3		完		指痕痕跡十 内外ナデ	白黄褐色 砂土肥密 燃成良好

第3節 殿村遺跡

1 位置と地形（第1・385図）

当遺跡は駒ヶ根市東伊那伊那耕地に所在する。JR飯田線駒ヶ根駅より東へ約4kmに位置している。標高は606m前後である。

当遺跡は西を流れる天竜川によって形成された河岸段丘の第2段丘上にある。ここでは第1段丘はみられない。南は伊那山脈から流れ出す新宮川があり、段丘の南端に位置している。段丘面は北に行くに従い広くなり、唐沢川・天王川を経て遊光・反目南郷へと続いている。

当遺跡のすぐ東を走る県道伊那生田線の上は第3段丘面となっている。

今回調査区の東側を試掘した結果、黒色土が東に行くに従い深くなっている。旧い沢のあることがわかった。又北側も現水田面が段差をみせ段丘の開析がうかがわれる。

地質基盤は伊那礫層から成り、その上に新期ロームが堆積する。ローム層の厚さは3~4mである。その上に漸移層が10~20cm、そして現表土（黒色土）となるが、遺跡は水田のため、模式的なものとはならないのは当然のことである。

弥生時代以降は漸移層でプランを確認できたが、縄文時代の遺構はローム面まで下げる検出しなければならなかった。漸移層から縄文時代早期から前期の遺物が出土する。

2 歴史的環境（第2図）

周辺の遺跡については、第2節反目遺跡においてふれているので省略したい。ここでは当遺跡を含む東伊那遺跡の研究史にふれることとする。

東伊那遺跡とは、当遺跡とすぐ東の段丘上にある狐くぼ遺跡さらに山麓に広がる丸山遺跡、山田遺跡の4つの遺跡の総称である。段丘の発達に伴い遺跡が展開する代表的な遺跡群として古くから注目されていた。

駒ヶ根市に合併する以前の伊那村が昭和24年から26年にかけて発掘調査を行っている。合併前は伊那村の名称であったので「伊那遺跡」と呼称されていたことをことわっておきたい。

調査の結果は最高位に位置する山田遺跡から縄文時代の住居址6軒、丸山遺跡より縄文時代中期と弥生時代後期の住居址が各1軒ずつ発見されている。

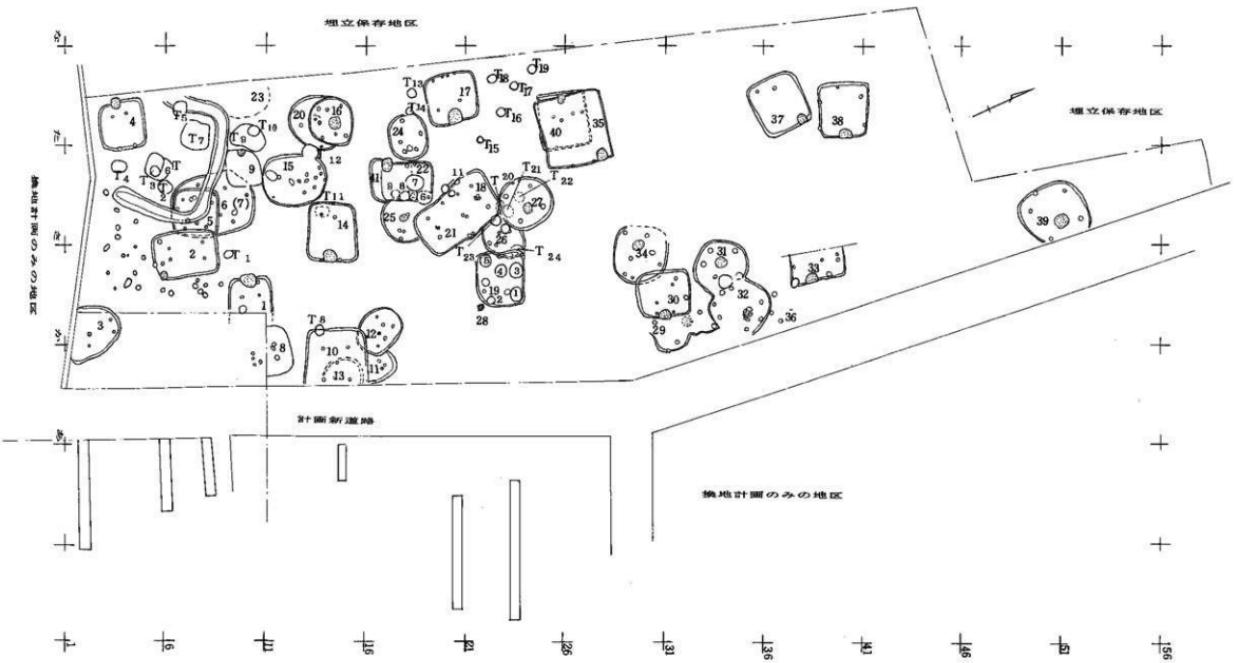
又狐くぼ遺跡からは弥生時代後期の住居址4軒、当遺跡から奈良時代末から平安時代初期の住居址1軒が確認されている。

狐くぼ遺跡はその後南端部に東中学校が建設されることとなり、弥生時代後期の住居址12軒が確認されている。現在遺跡の一画に弥生時代の住居址が復元されている。



第385図 殿村遺跡概況図 ($S = 1 : 3000$)

(●は埋立保存区域、■は換地計画のみ)



第386図 殿村遺跡遺構全体図 ($S = 1 : 400$)

当遺跡において確認された住居址について概要をまとめておくこととする。

プランは台形で規模は東壁3.25m、西壁2.75m、南壁3.5m、北壁3.75mを測り、小形の住居址である。壁高は17.8cmほどで壁はゆるやかである。床面は東壁近くを除き軟弱で柱穴は検出されていない。

カマドは東北隅部と西北隅部の2箇所にあり、前者が規模の大きさから主要なカマドとしている。構造は一部袖石と天井石が残るがくずれている。副カマドと考えられる西北隅のカマドは数個の石で簡単に囲んだものとされている。

遺物は灰釉陶器皿片と土師器・須恵器片が若干出土している。灰釉は高台付の皿で、土師片の中には内面に黒色を施すものがあるとされ、時期は奈良時代末から平安時代初期と推定している。この折表土から縄文時代中期後葉と弥生時代後期の土器が発見されている。

これは信濃に発表されたもの^{※1}の要約である。

今回かつての調査地点の箇所の特定を試みたが、位置関係を示す図面ではなく、地元の関係者もはっきりとは箇所を示すに至っていない。今回調査した東側畑の下の墓地付近であることだけはわかった。

※1 上川名昭「長野県上伊那郡伊那村遺跡第二次調査概報－(三) 殿村地区第1号住居址」

信濃第4卷11号 昭和27年

3 調査概要（第385・386図）

当遺跡は広範囲にわたり、またすでにふれた東伊那遺跡の一つである處から、極力埋立保存を行って保存を図るよう協力をお願いしたところ、北側については全面埋立保存が図られることになった。計画区の南側水田が高い部分について、発掘調査を行うこととなり、調査対象面積は4500m²である。

調査区の南端、計画新道路の東端を基点とし、道路に沿う形で算用数字と直交する略東西方向に50音順に2m毎のグリットを設定した。計画道路の東側については幅1mの試掘溝を設定した。

西側は重機によって耕土剥ぎを行い、遺構確認をもって拡張する方法を探ったが、最終的には遺構が全面に及んだこと、又縄文前期前半の遺物が広範囲から出土したため全面発掘となった。

東側試掘の結果は西側はすでに開田によってローム層にまで削平が及んでおり遺構は検出できなかった。東側道ぎわは黒色土が段々と深くなり2~4mに達し自然流路となっていた。

4 遺構と遺物

1) 住居址

(1) 桶文時代

① 第3号住居址（第387・388図）

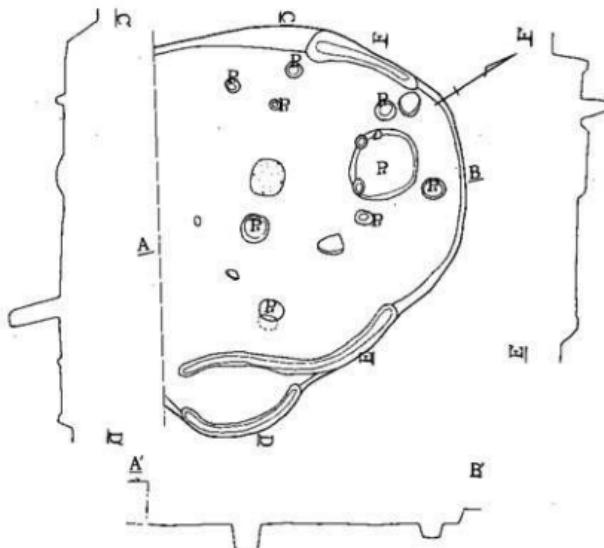
遺構 本住居址は調査区の南端に検出されたものである。南側は調査区域外となっている。

プランは円形か梢円形を呈すと思われるが定かでない。東側に張り出しを持った。東西張り出し部までの距離は5.7mである。内側に周溝がみられ、その距離は4.8mである。張り出し部にみられる周溝は住居址内部にみられないこと、又床面差も確認できないため重複とは考えにくく、本址に伴うものである。入口施設と考えたい。これに伴う主軸方向はN-52°-Wを測る。

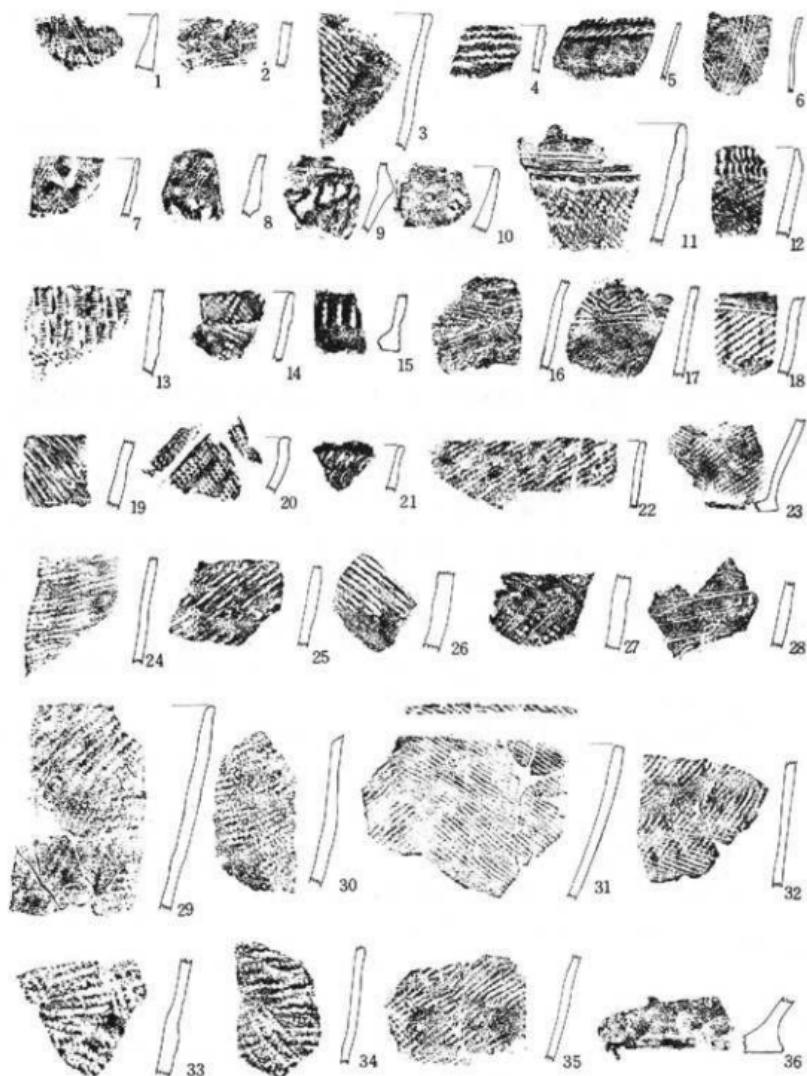
壁高はローム層を掘り込み西で40cm、東で20cmを測る。床面はほぼ平坦で全体に固くタタかれている。周溝は東側部分と西側に一部みとめられ、張り出し部にもみられる。

炉は地床炉で東西方向やや西寄りにあり、床面を10cmほど舟底状に掘りくぼめ焼土が充满している。

主柱穴は南側が不明であるがP₂、P₄、P₅、P₆があり多柱穴と考えられる。P₅の南に浅い径1mほどのピットがある。小堅穴の底かも知れない。



第387図 第3号住居址実測図 (S = 1/80)



第388図 第3号住居址出土土器 (1/3)

P₄の北、P₇の東床面上に平盤な花崗岩がみられる。

遺物は覆土下層全面から出土しており、まとまっての出土はみせていない。

遺物 土器はあまり多くない。すべて小破片で器形を知り得るものはない。

1～3・19は胎土中に纖維を含むもので第II類花積下層式に比定され、4片のみの出土である。

1・3・4は暗褐色、2は明褐色に固く焼かれる。1は交叉する条線がみられる。2は撫糸側面圧痕文があり裏面には擦痕を持つ。3・19は表面に貝殻条痕文を持つ。

4～10は第III類土器、広義の木島土器の範疇に入るものである。総じて薄手作りで4～7は極めて薄い。器内外に指頭圧痕を持ち、4は貝殻腹縁が4段横走している。清水ノ上貝塚に多く出土している。6～9は細線の格子目文を持つもので、8・9は頸部に隆蒂を作出し刻みを持つものである。

5は連続刺突文が2段横走している。第III類土器のうち5～10はa類、4の貝殻腹縁を用いるものをb類、5にみられる連続刺突文をc類とする。

20は白黄褐色に固く焼かれた胎土には纖維を含まない。内面には擦痕が斜走する山形状の波状口縁を持ち3段にわたって刺突文が施され一見貝殻腹縁文に似る。口唇上面にも同様施文がされる。瀬戸内羽島下層式に比定され第VII類に属する。21は第III類と同様の胎土・調整を持ち爪形文が2段に連続施文されている。一応第III-a類に含めておく。

11～16は神の木式土器第V類である。胎土中に纖維は含まず長石・雲母を含み暗褐色・黄褐色を呈し、焼成は良好である。有段口縁を持つものは11・14で11は櫛齒状工具による条線が口縁に施されその下部には単節斜縄文が施文される。14は口縁部か単節の羽状縄文を持つ。

13は櫛齒状工具を横にわずかに引いたもので櫛齒文としておく。12・15は櫛齒状工具刺突文を持つものである。

17・18は半截竹管による平行沈縫文を持つもので有尾式（第VI類）に比定される。胎土には纖維を含まず雲母・長石がわずかに含まれ固く焼かれている。

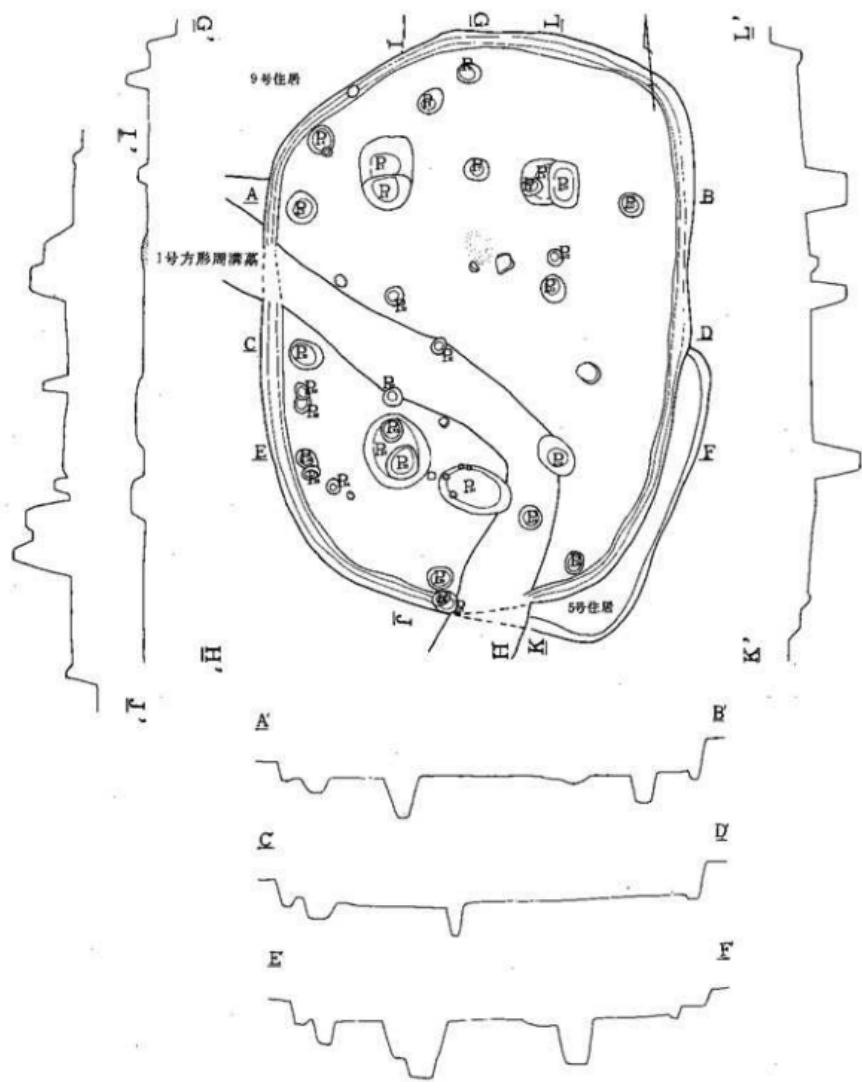
22～36は縄文施文される土器である。神の木式に比定され得るものもあると思われるが、14のように明確なもの以外をVII類として一括してある。胎土には纖維を含まない。焼成は良好である。

22、24～26は無節斜縄文、31・32は無節の羽状縄文で結節はみられない。33・34の単節羽状縄文にも結節はみられない。27・28は付加2条である。

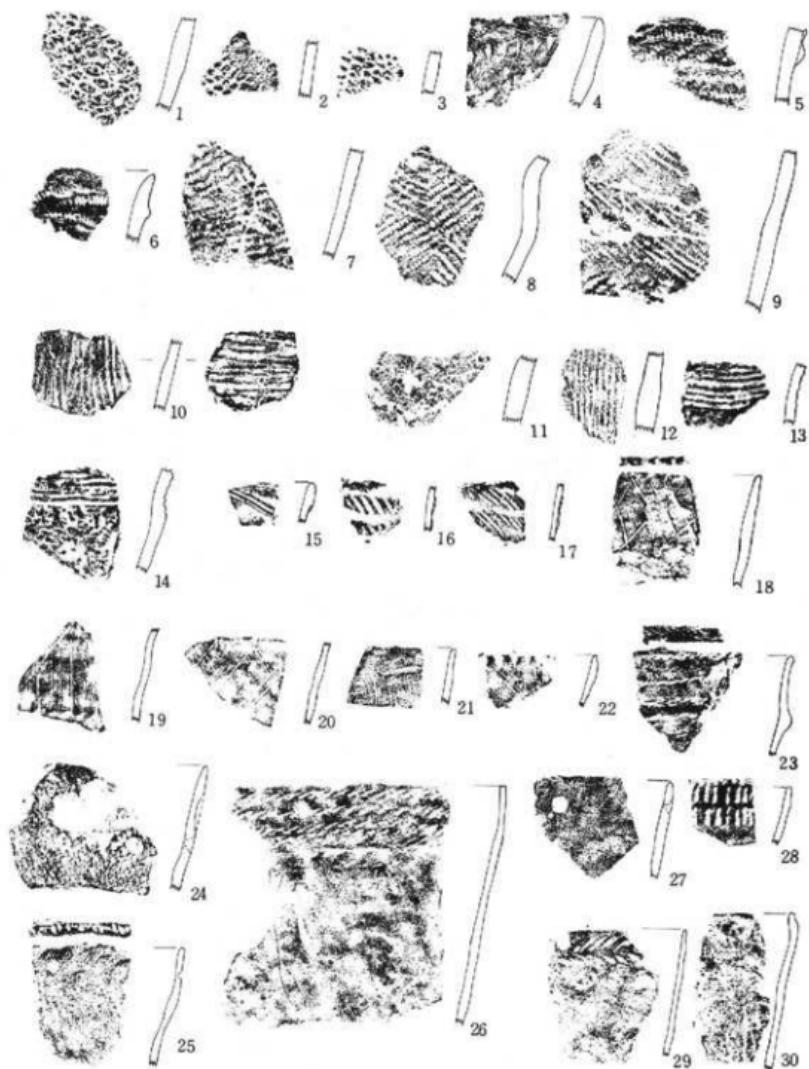
22は指頭圧痕を有し薄手である。関西系土器かも知れない。23・36は底部が強く張り出るもので該期の大きな特徴である。

出土遺物を総体的にみると縄文を持つものが最も多く8割ほどを占め、次に第III類がつづいている。

石器は小形石匙2、敲打器5、磨石4、特殊磨3、凹石1、横刃形石器1、石礫9、石錐1、削器4点の30点が出土している。その他黒耀石のフレイクが多数出土している。



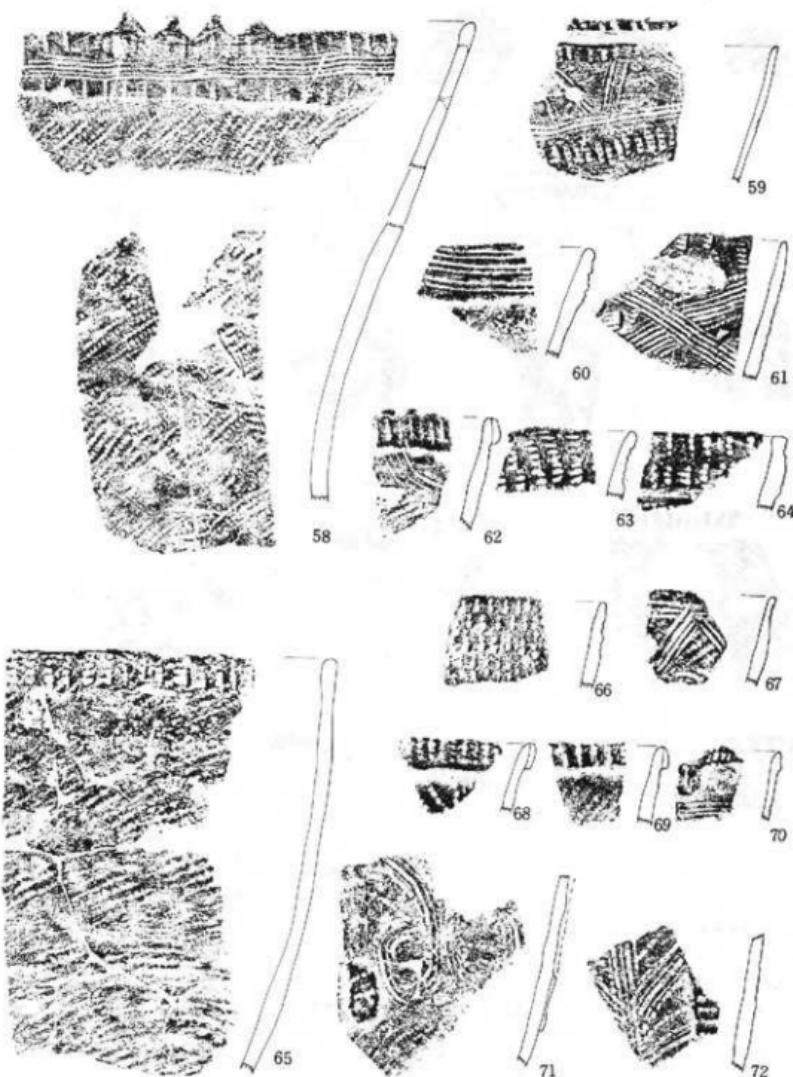
第389图 第6(7)号住居址实测图 ($S = 1/80$)



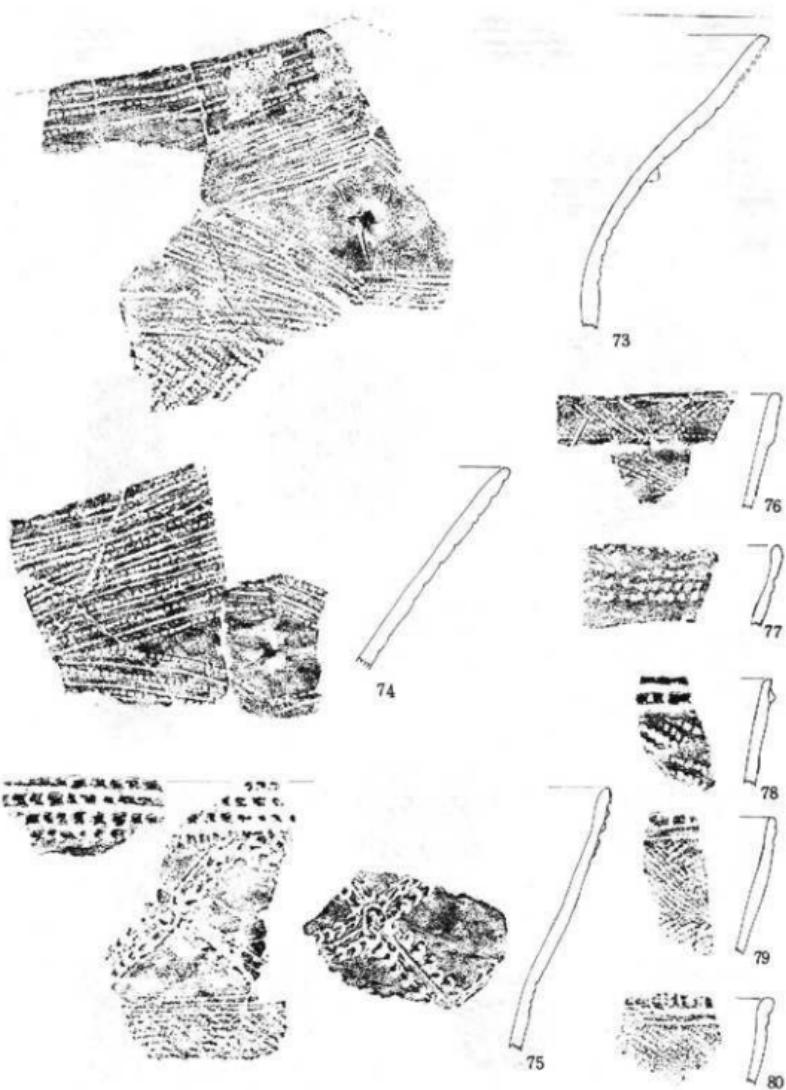
第390図 第6号住居址出土遺物（1/3）



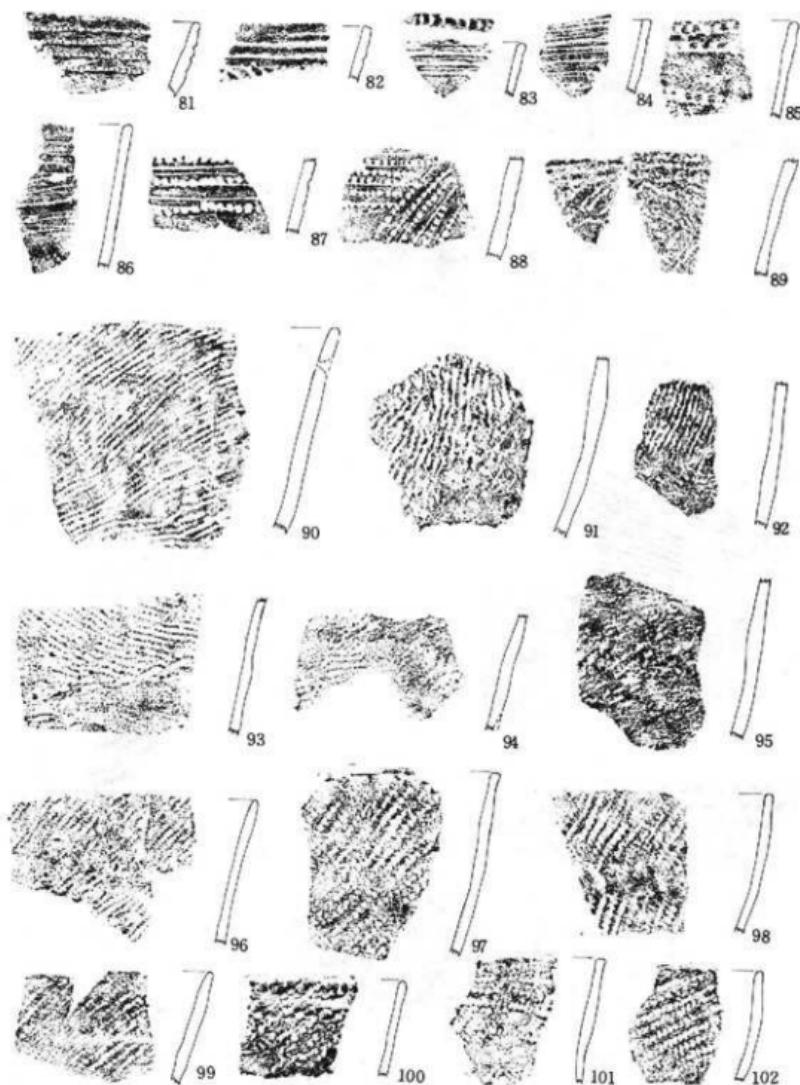
第391図 第6号住居址出土遺物（1/3）



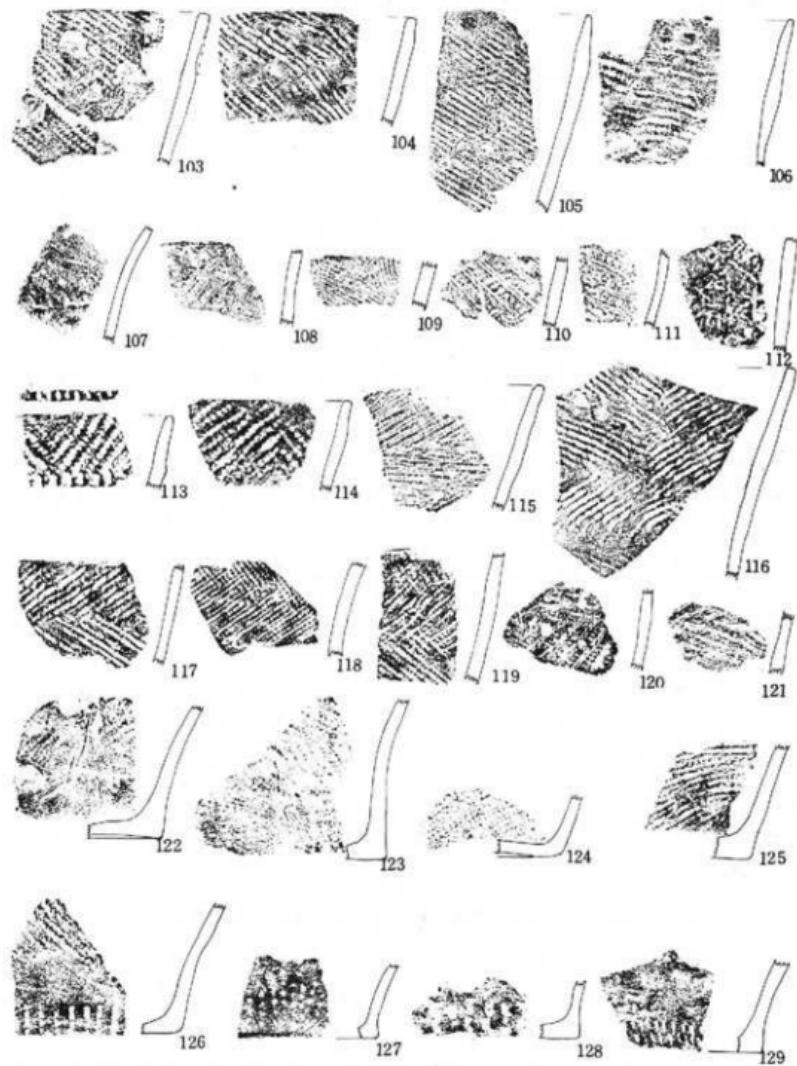
第392図 第6号住居址出土遺物 (1/3)



第393圖 第6號住居址出土遺物（1/3）



第394図 第6号住居址出土遺物（1/3）



第395図 第6号住居址出土遺物（1/3）

② 第6(7)号住居址(第389~396図)

遺構 本住居址は第3号住居址の北西にあり、北には第15号住居址が近接している。

本址北西には第9号住居址が貼床している。また南東部は本址の覆土を掘り込んで造られ貼床されている。また方形周溝墓によって埋められている。第5号住居址と床面差は15cm前後、第9号住居址とは10cmほどである。

第5号住居址の調査が進むにつれ、ほぼ全面が貼り床されていることがわかり、縄文前期の土器が出土することから下部の住居址を第6号住居址とした。また第5号住居址の北側にも暗褐色土の広い落ち込みが確認された。当初第6号住居址と同一と考えると大規模な住居址が想定される処から重複住居の可能性を考え第7号住居址として調査を行った。調査の結果、建替の可能性はあるが、炉が一つであり、周溝の切り合いもみられないこと、壁にも重複の痕跡をとどめないことから一つの住居址として扱うこととした。

覆土は暗褐色土が厚く堆積し、下層中央部にて5cmほど黒褐色土が逆レンズ状にみられた。遺物はこの暗褐色土に集中し、約20cmの厚みをもって堆積しており、いわゆる吹上パターンをみせるものである。

プランは梢円形を呈し、規模は8.2×6.0mを測る大形の住居址である。壁高は45cm前後を測り、床面はやや起状をみせている。全体に固くタタかれ堅致である。南西部は方形周溝が5~10cmほど掘り込んでいる。

深さ5~10cmほどの周溝が一周している。

炉は中央北寄りに位置し、床面をほんのわずか掘りくぼめた地床炉である。主柱穴はP₁・P₂、P₉・P₁₀、P₁₄、P₂₁・P₂₃の4本が考えられ、P₁₄を除くと重複しており建替の可能性が強い。住居址西半壁に沿ってピットが多くみられる。

遺物 出土土器が多い。本遺跡で出土した縄文早期から前期前半の土器が量は別にしてほとんどが出土しているので詳しくふれておくこととする。

1~6、10、11は縄文早期から早期末葉、第I類である。1~3は梢円押型文で明褐色に固く焼かれている。胎土中に細かい長石を含んでいる。織維痕は認められないが断面を観察すると所々に空洞がみられるのでわずかに織維を含んでいた可能性がある。1は裏面に擦痕を持つ。4は柏畑式土器である。

5・6は胎土中に細かい長石をわずかに含み、織維を少量混入している。焼成はやや甘く白黄褐色を呈している。口唇下に横走する粘土縫をはわせ格条体压痕文を施すものである。これらの土器は近年出土例が知られ注目されるものである。編年位置について花積下層式の初期段階に併



第396図 第6号住居址
出土遺物(1/3)

行するものもあるとされているが、一応縄文早期末として分類しておく。10~12はともに胎土に纖維を多量に混入するものである。11・12は厚手である。11は表裏面とも貝殻条痕文を有す。11は擦痕、12は絡条体条痕を持つ。

7~9、13・14は第II類花積下層式に比定されるものである。胎土に纖維を多量に混入し赤褐色ないし黒褐色を呈し焼成は良好である。13、14は胴くびれ部に横走する貝殻条痕文を持ち、胴部は単節縄文である。全体に裏面纖維痕をかき消すかのようにナデがみられる。

15~36はIII類土器、広義の木島式土器に比定されるものである。18のように中厚手のものもあるが、総じて薄手堅敏に焼かれている。胎土中に石英粒・長石粒・雲母を含むものa種と22、25、32のように精練された胎土を持つものb種がある。15~17は扁平な粘土紐を横走させその上を条線が施されるもので、木島式の中でも古い段階(III式)のものである。

18~22は細線が格子目状にみられるもので、22は口唇下に連続刺突文を持つ。木島式の新しい段階に属する。

22、26、29、32、33は口唇部に2段~4段の連続刺突文を横位に施すものである。23は短い縄文原体の押捺の可能性もある。他の刺突文の施文具は鋭利な物であるが何を用いたか不明である。

28、31は貝殻腹縁を用いたものである。24、27、25、30は無文で擦痕がみられる。24は擦痕が疑似縄文化している。35・36は底部で35は丸底に、36は尖底近い。

以上述べたIII類土器の内、15~17の条痕や、細線で施文されるものをa種、貝殻腹縁で施文されるものをb種、連続刺突文を持つものをc種とする。

37~42は第IV類で、中厚手の無文土器である。器厚は5~7mmを測る。胎土は長石・石英を含み赤褐色ないし暗褐色に焼かれている。纖維の混入がわずか認められるものもあるが、器面に纖維痕がみられるものはない。器内外面には纖維束による擦痕がみられる。

口縁は直線的に外傾するもので、37のように有段口縁風なものもみられる。

第V類土器は神の木式土器を一括した。44~71がそれである。やや薄手のものもみられるが5~7mmほどの中厚手のものが一般的である。胎土には長石・石英を多く含む。また雲母が多く含まれキラキラするものが半分ほどある。焼成は良く黄褐色、赤褐色に焼かれる。

文様構成等により分類でき得るが本報告では行っていない。

口縁形態は有段口縁のものとそうでないものとがある。43、58のように山形状突起を持つものもある。47・49・51のようにわずかに口唇が外反するものや54のように内屈するものもあるが、直線的に外傾するものが一般的である。口唇がやや内そぎ状となるもの、外がそれがれるものがある。

有段口縁を持つものとそうでないものとに文様構成上の規制はみられないが、爪形文を有するもの(43~47、49、51)には有段口縁のものが多いことが知られる。

口縁部文様は種々あるが胴部は単節斜縄文を施すものが一般的である。

口縁部文様は爪形文を持つもの、櫛齒状工具によって施文されるもの(58~70)、縄文が施文されるもの(51~57)とがある。48は特殊なもので竹管具による平行沈線が矢羽状に施される。

54は羽状縄文で結節はみられない。58・59は櫛齒文と条線の組合せたもの、60・67は条線のみである。71・72は同一個体で、口縁から懸垂する偏平面隆帯上に櫛齒状工具による列点状刺突文を持ち、櫛齒状工具による渦巻文、菱形文が配され、その脇を列点状刺突文がめぐっている。同一施文具の使用方法の変化がみられる好資料である。胴部は縄文が施されるもので、71の下部は縄文を地文としている。

73~88是有足式の範疇に入るもので第VI類とする。

第V類土器同様中厚手のものが一般的である。胎土には纖維はなく、ほとんど細かい長石を含むもので、第V類にみられた雲母の混入はみられない。焼成は全体に堅緻で赤褐色ないし黄褐色を呈す。口縁部は73・74を除き平縁を呈し、口縁が外反するものもない。有段口縁となるものは76・1例である。裏面はナデによる擦痕を持ち一部は条線化するものもみられる。

73・74は同一個体の大形破片である。胴部にて屈曲し口縁は大きく開き山形状口縁となる。

列点状刺突文と沈線を併用した文様を口縁に沿って施した後、菱形文を作り、胴部は単節羽状縄文を施す。菱形文の中心部に円錐状の突起を一つ持つ。突起の存在を除けば塩尻市翼屋敷第11号住居址出土土器と類似するものである。87は同様の施文を持つ。

76は有段口縁を持つ点、V類土器に近いが、列点状刺突文のある点本類に含めた。

75は口唇直下に4条の隆帯を横走させ半截竹管による連続押引文が施され、その下部はやはり同一の連続押引文によって菱形文が作られる。胴部は単節縄文が施され平行沈線によって口縁部文様帶と区画している。半截竹管工具によるものには81、85、88、89がある。

78は口唇下に隆帯を横走させ刻みを施すものである。

80は肥厚した口唇に爪形文を配し下部に沈線が横走する。79も同様な施文である。

82~84、86は竹管による平行沈線を持つものである。

胴部は第V類同様縄文施文される。

胎土に纖維を混入しないもので縄文が施文され、明確に類別化できないものを一括第VII類とした。90~125がそれである。大方が第V、VI類に含まれるものであろう。

口縁から縄文の施されるものは第V類神の木式と考えられる。

無節ないし単節の斜縄文、羽状縄文を持つものが多い。特殊なものとして107~112、115、121がある。107~109は単軸絡状体と思われる。110、111、115、121は付加二条、112は不明である。

中に薄手のものがあり關西系のものの可能性がある。

126~129は第V類神の木式の底部で縄文を施し櫛齒文を施すものである。

以上本址の出土土器をみてきたが、主体は類別化できない縄文施文を持つものが主体である。

今後該期の分類にはこの縄文施文土器の研究が最重要課題となる。

石器は土器同様多く、全部で206点出土している。内訳は石礫88、削器・搔器57、敲打器26、小形石匙11、磨石9、特殊磨石8、石錐6、石皿1である。

第396図に示した骨石製小玉が1点出土している。

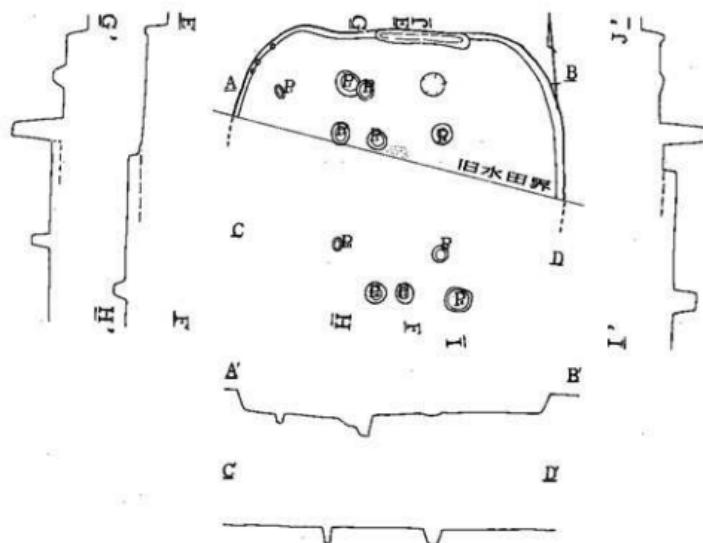
③ 第8号住居址（第397・398図）

遺構 本住居址は第11、12、13号住居址の南にあり、南側は開田時に削られ、ピットを残すのみである。

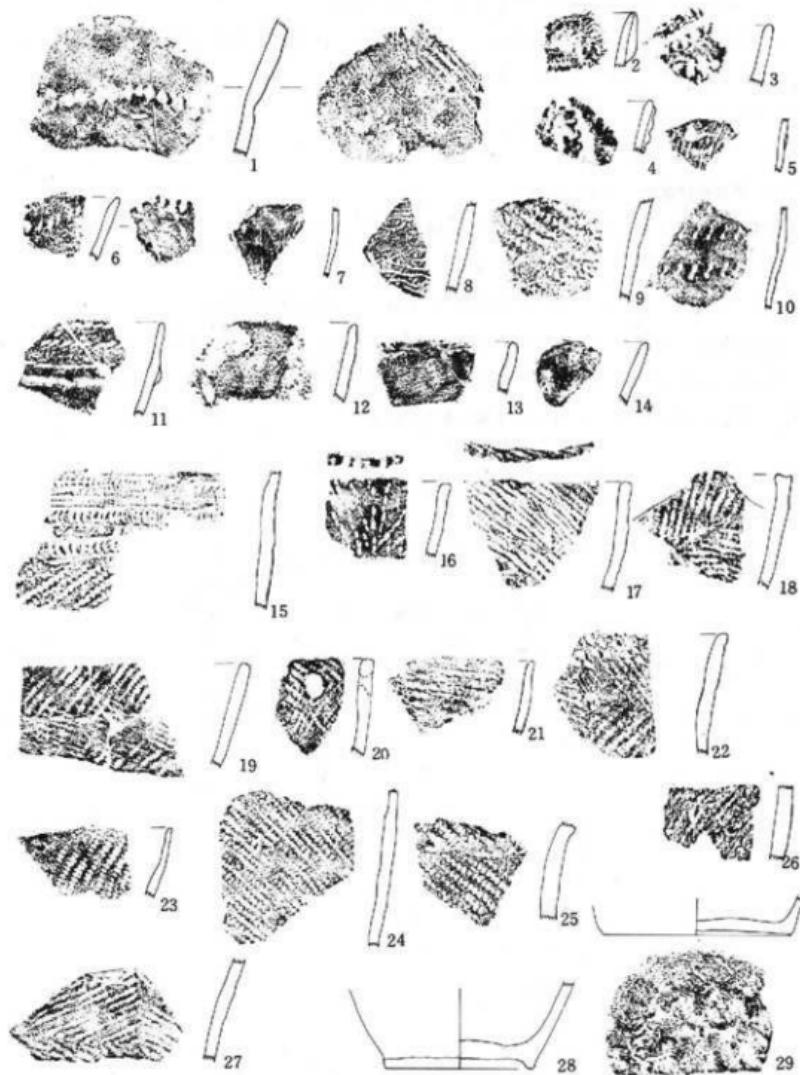
プランは残存する北側からすると隅丸形と思われる。規模は不明である。

壁高は30cm前後を測り、北側中央部に一部周溝がみられる。床面は固く堅緻である。

炉は東西方向中央P₅の東にあり、床面をわずかに掘り込んだ地床炉である。南側は削られていて、主柱穴はP₄、P₆、P₈、P₁₀の4本と考えられる。



第397図 第8号住居址実測図 (S = 1/80)



第398図 第8号住居址出土遺物（1/3）

遺物 残存面積の割に土器が多い。すべて破片でまとまって出土したものはない。

1は黒褐色に固く焼かれ、纖維の混入はない。表には連続刺突文を2段に施す。裏面には貝殻条痕文が斜走する。

2は山形状口縁の頂点から隆帯を垂下させ、直交するように横にもみられ、絡状体圧痕文が施文される。纖維をわずかに含み固く焼かれる。裏面には掠痕がみられる。

3は2同様山形口縁を示し口唇下と口唇上面に爪形文を持つ。纖維を含み固く焼かれている。

4はやはり山形口縁で頂点から刻みを持つ紐帶が垂下し、口唇には刻みを持つ。纖維がわずか混入され黒褐色で固く焼かれる。

1~4は縄文早期末の土器で1は胎焼式土器である。

8は纖維の混入がなく雲母を含み固い焼きである。撚糸側面圧痕文がみられる。9は束状に纖維の混入がみられ黄褐色に固く焼かれている。8・9は花積下層式に比定される。

5~7、10、11は第III類土器である。5・7はa類、6・10はc類、10はb類である。6は裏面にも刺突文がみられる。11は横走する隆帯を伴う。胎土的にはほとんどがa種で7のみb種である。

12~14は第IV類土器である。

15は黒褐色堅緻に焼かれ右開きc字状爪形文の下に単節縄文を施すものである。裏面は纖維束の横の掠痕がみられる。北白河下層II b式である。本遺跡では関西系（瀬戸内を含め）土器群を一括第VII類としている。

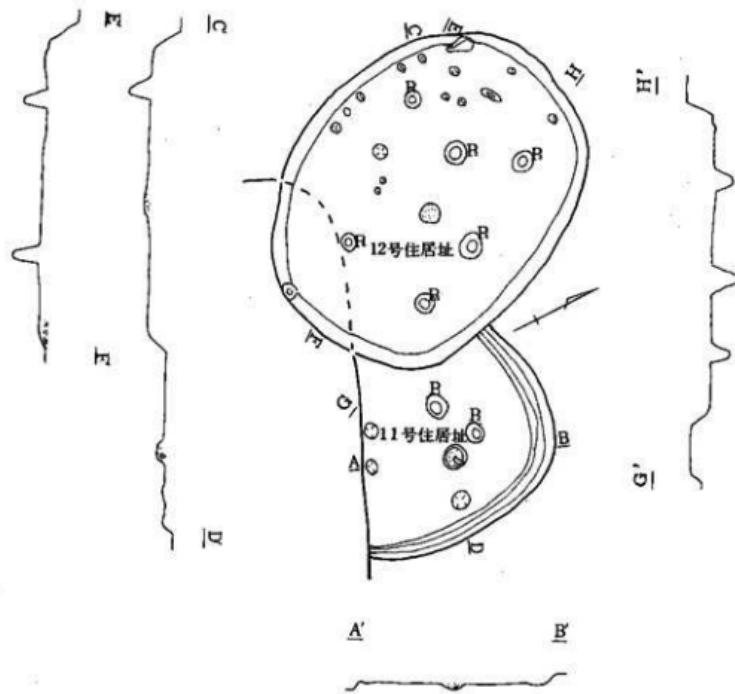
16は列点状刺突文を有し、有尾式に含まれるが、縦方向に施文される点がやや異なりをみせている。

17~27は第VII類である。22の口縁部破片は口唇下に三段の刺突文がみられる。26は異条斜縄文である。

28・29は底部である。28は白黄褐色に固く焼かれ極端な上げ底となっている。底外面はナデがみられる。29は長石、石英とともに雲母を多量に含んでいる。底には製作時に敷物をしたものか圧痕を持ち、一部ナデ消している。

本址出土の土器は縄文施文されるものが他址同様多いが第III類土器も3割ほどの比率を持つ。

石器は14点出土している。削器・搔器6、石礫4、敲打器2、磨石・石錐各1点である。



第399図 第11号・12号住居址実測図 ($S = 1/80$)

④ 第11号住居址 (第399・400図)

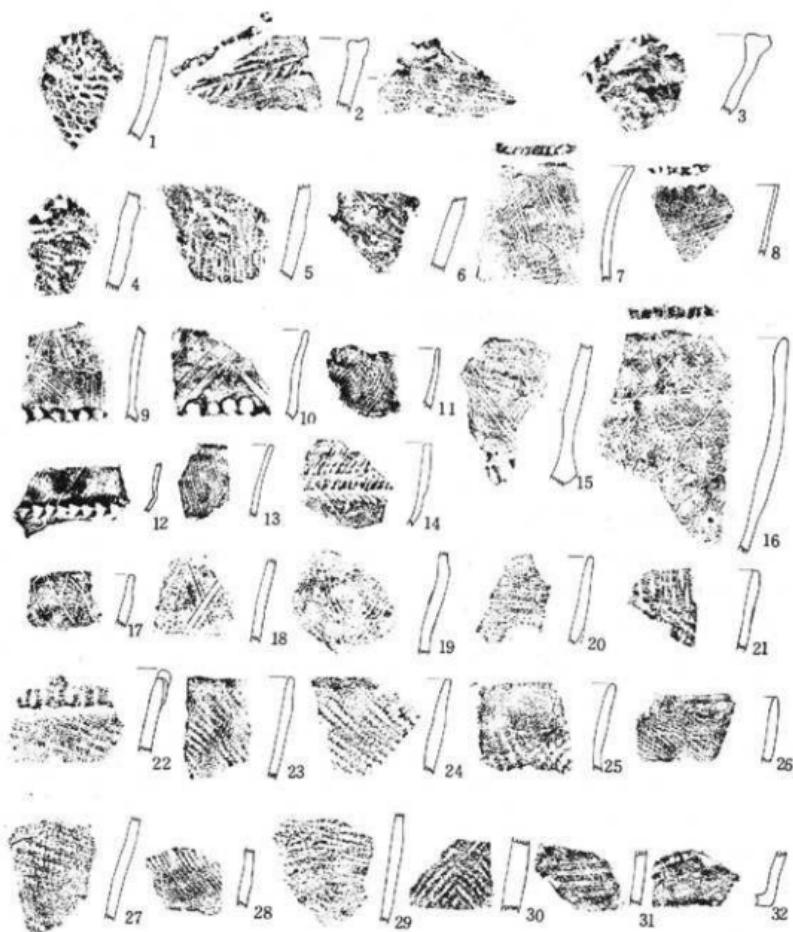
遺構 本住居址は西を第12号住居址に切られ、南半を第10号住居址に切られている。南にある第13号住居址との切り合い関係は不明である。

プランは残存の壁からしてほぼ円形を呈すと思われるが定かでない。規模は不明である。

壁高は15cm前後で残る床面は平坦である。全体に固くタタかれている。周溝が一周していたものと思われる。

炉はP₂の東に位置している。径30cmほどの円形に掘りくぼめられ、焼土が充満し細長い花崗岩が内より出土している。炉石の可能性もある。

主柱穴はP₁が考えられるが北東側にはみられない。



第400图 第11号住居址出土遗物 (1 / 3)

遺物 土器はすべて破片で器形を知り得るものはない。

1～3は第I類土器である。1は梢円押型文である。胎土中には石英・長石を含み明褐色に固く焼かれている。裏面には擦痕がある。2・3は細かい長石を含み黒褐色堅敏である。繊維の混入は2は束状に3はわずかにみられる。2は富士山形口縁で口唇と口唇下に刻みを持ち、表裏面とも条痕がみられる。3は丸形口縁で口唇に刻みを持っている。2・3は縄文早中期粘土器である。

4・5は中厚手でわずかに長石を含み、繊維の混入がみられる。ともに赤褐色を呈している。4は縄文が5は条痕がみられる。花積下層式に比定されるであろう。第II類に含まれものが他に10片ある。

7～19は第III類土器である。14がb類以外はa類である。胎土的には8・12がb種他はa種である。

21・22は神の木式土器の口縁である。21は地文が単節縄文で爪形文を口唇下に施す。22は有段口縁に櫛齒文を施し、下部付加縄文が施される。

23～32は第VII類土器である。全体的には第III類土器と第VII類土器がほぼ半々の出土である。

石器は削器・搔器12、石礫10、特殊磨石11、敲打器4、石錐4、打製石斧・磨製定角石斧・石錐各1点の計44点である。

⑤ 第12号住居址（第399・401図）

遺構 本住居址は東側の第11号住居址を切り、南西部は第10号住居址が貼床している。

プランは梢円形を呈し、規模は3.9×5.0mを測る。主軸方向はN-65°-Eである。

壁高は40cm前後を測り、第11号住居址との床面差20cm、第10号住居址とは10cmである。床面は炉に向かってややくぼみ、全体に固くタタかれている。

炉は中央やや東寄りにあり、径30cmほどの地床炉である。主柱穴は4本である。

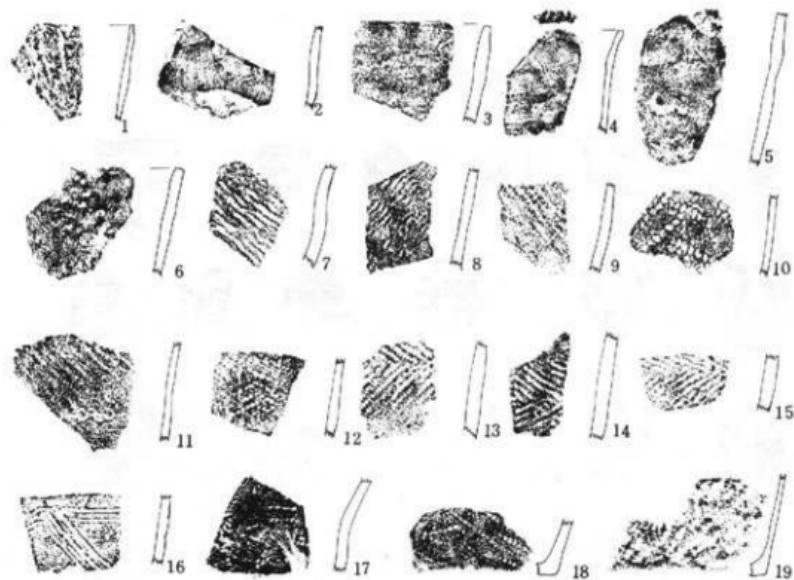
遺物 遺物は他址に比べ少なく、すべて小破片のみで、まとまっての出土はみせていない。

1・2・4は第III類土器である。1・2は細線を持つもの（a類）で、4は無文口唇に刻みを持つものでa類に含まれる。胎土的には1・4はa種、2はb種である。

3・5は無文土器、第IV類である。表裏面とも擦痕がみられる。

6～15、17～19は縄文施文されるものである。6・10は粘土が乾いてから施文したため縄文が不明瞭である。

19は底部破片で薄手で、赤褐色堅敏である。胎土は精練され器内外面に指頭圧痕がみられる。胎土焼成は第III類-b種に似たもので、清水ノ上貝塚出土の第II群3類土器と同類である。その点では第III類土器に含まれるものである。



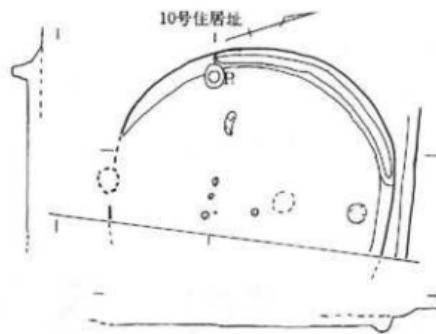
第401図 第12号住居址出土遺物（1/3）

16は竹管平行沈線を持つもので有尾式に比定される。裏面には擦痕がみられる。

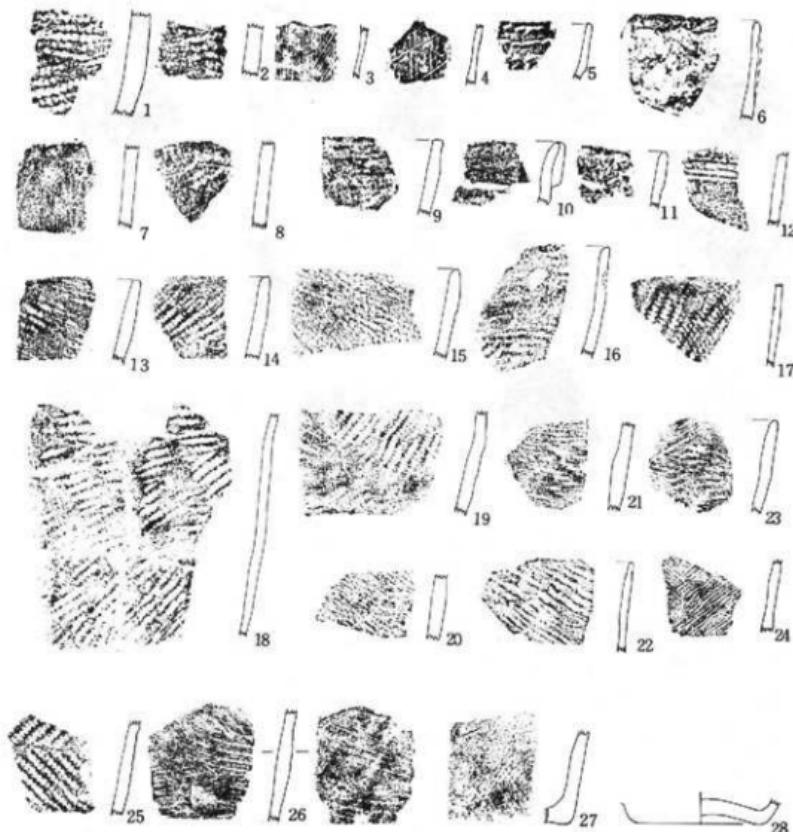
他は厚手で纖維を多量に混入した第II類土器と考えられるものが3点出土している。

本址出土の土器は縄文施文のもの圧倒的に多い。

石器は20点出土している。内訳は削器及び挿器10、石礫・敲打器各4、打製石斧・小形石匙各1点である。



第402図 第13号住居址実測図 ($S = 1/80$)



第403図 第13号住居址出土遺物 (1/3)

⑥ 第13号住居址（第402・403図）

遺構 本住居址は第11号住居址の北にあり、全面第10号住居址に貼床されている。東は未調査である。

第10号住居址との床面差は北で10cm、南でははっきりとしない。プランは円形を呈すと思われるが定かでない。北西部に周溝がみられる。

床面は堅密である。炉は検出されていない。柱穴は壁ぎわにP₁1本が検出されている。

遺物 1・2は胎土に纖維を混入し細かい長石粒を含んでいる。1は赤褐色、2は黒褐色を呈し、ともに堅密に焼かれている。第II類土器である。

3～6は第III類土器である。5は連続刺突文が3段に施される。3・4・6は細線状沈線が格子目状をなすものである。胎土的には3～5はb種、6はa種である。

7～9は中厚手無文土器である。表裏とも擦痕を持ち、7・8は雲母が含まれる。

10は神の木式、12は竹管沈線を持つもので有尾式である。

11はわずかに段を持ち、赤褐色堅密である。不明瞭ながら縄文が施される。清水ノ上第II群3類土器に類似するものである。

13～25は縄文を持つものである。18はやや薄手で長石・石英を多量に含んでいる。15は胎土が精練され黒褐色堅密である。裏面には幅広なナデがみられる。北白川下層II式の可能性がある。

26は表裏面に貝殻条痕文がみられ、胎土は精練され赤褐色で非常に堅密に焼かれている。北白川下層I式である。

本址出土土器は9割がた縄文施文を持つものである。

石器は21点出土している。内訳は石礫7、削器一様器7、特殊磨石3、磨石・敲打器各2点である。

⑦ 第15号住居址（第404～410図）

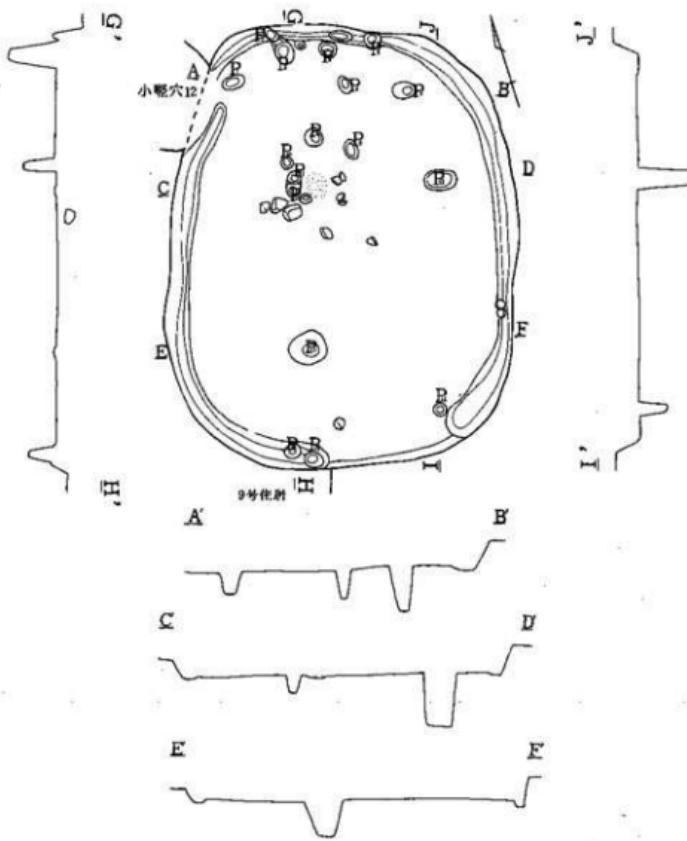
遺構 本住居址は第6号住居址の北に位置し、第12号小窓穴址をはさんで北西に第20号・16号住居址がある。

プランは梢円形を呈すが隅丸長方形に近いものである。規模は6.2×5.0mを測る。主軸方向はN-8°-Eである。北西壁は第12号小窓穴址と重複し壁は一部不明である。

壁高は北から東で35cm前後、南西部は20cmほどである。周溝は南側が一部欠けるが一周する。

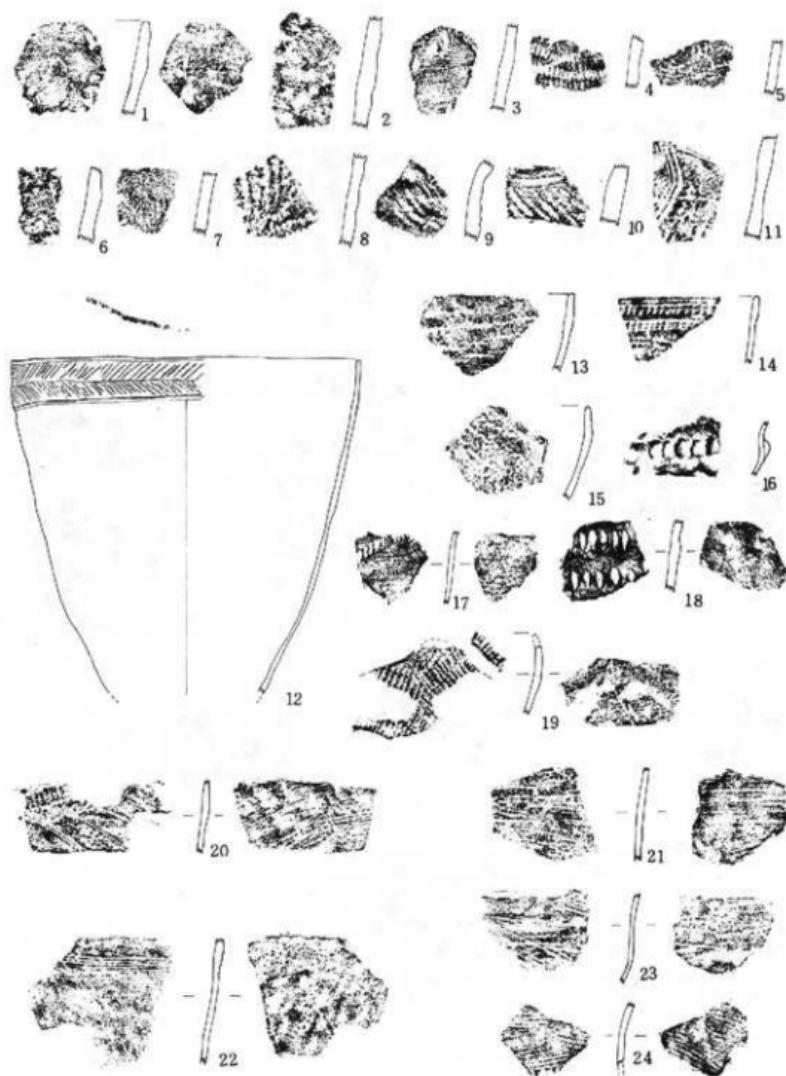
床面は炉に向かってくぼくなり、全体に良くタタかれ堅密である。炉は北西に偏しており、床面をわずかに掘りくぼめた地床炉である。

P₃、P₇、P₁₃、P₁₄、P₁₆、P₁₇は深い掘り込みを持つもので、主柱穴は多柱穴と考えられる。西側には柱穴が少ない。

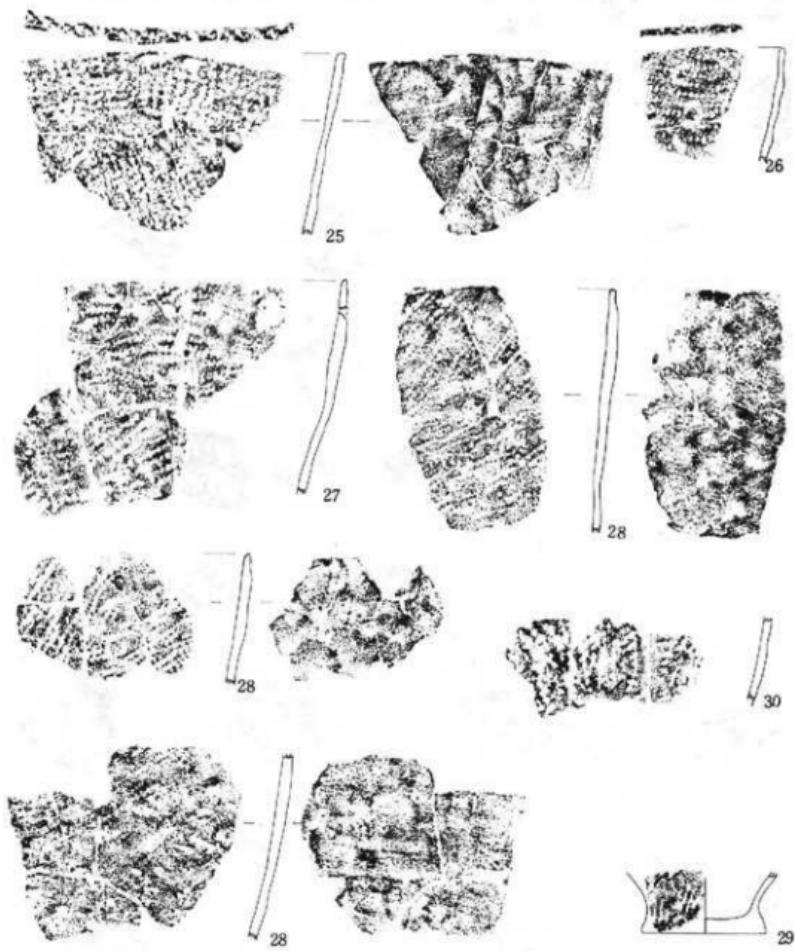


第404図 第15号住居址実測図 ($S = 1/80$)

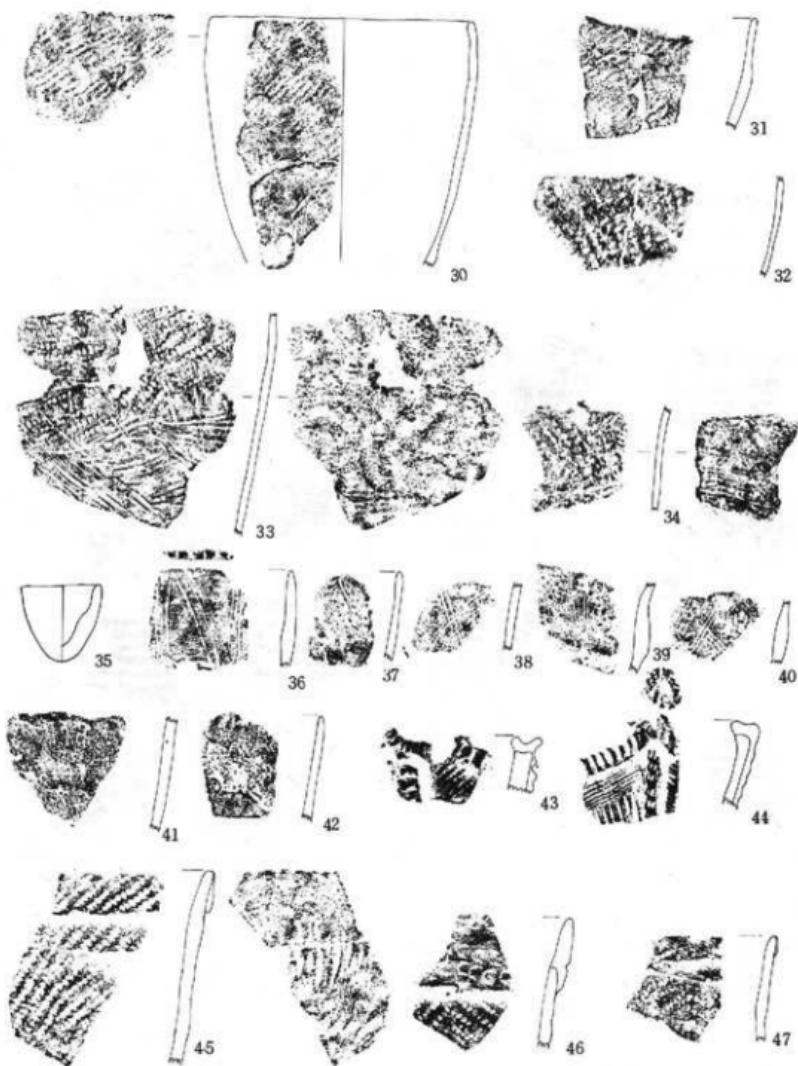
P₁₄の西床面よりやや浮いて深鉢(12)が横倒しの状態で30の縄文施文土器が炉から出土している。又炉の南床面より骨石製の管玉(第410図)が出土している。
他は擾土下層から床面にかけ出土するものである。



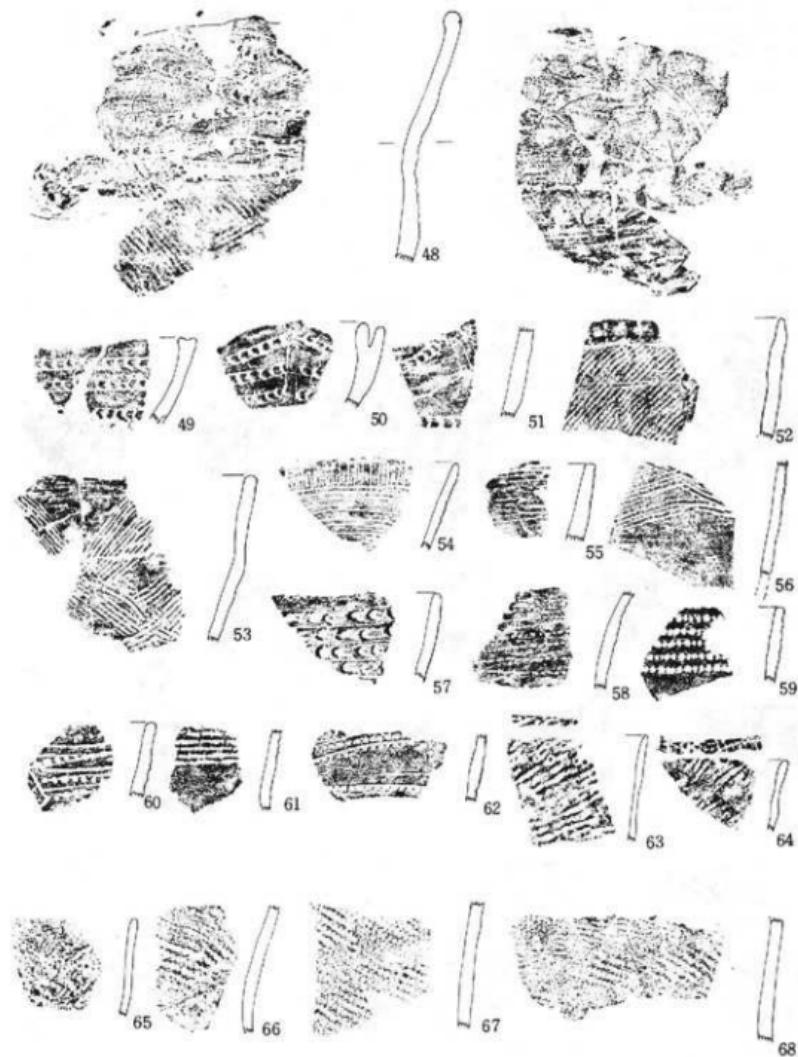
第405図 第15号住居址出土遺物 (12は1/6、他は1/3)



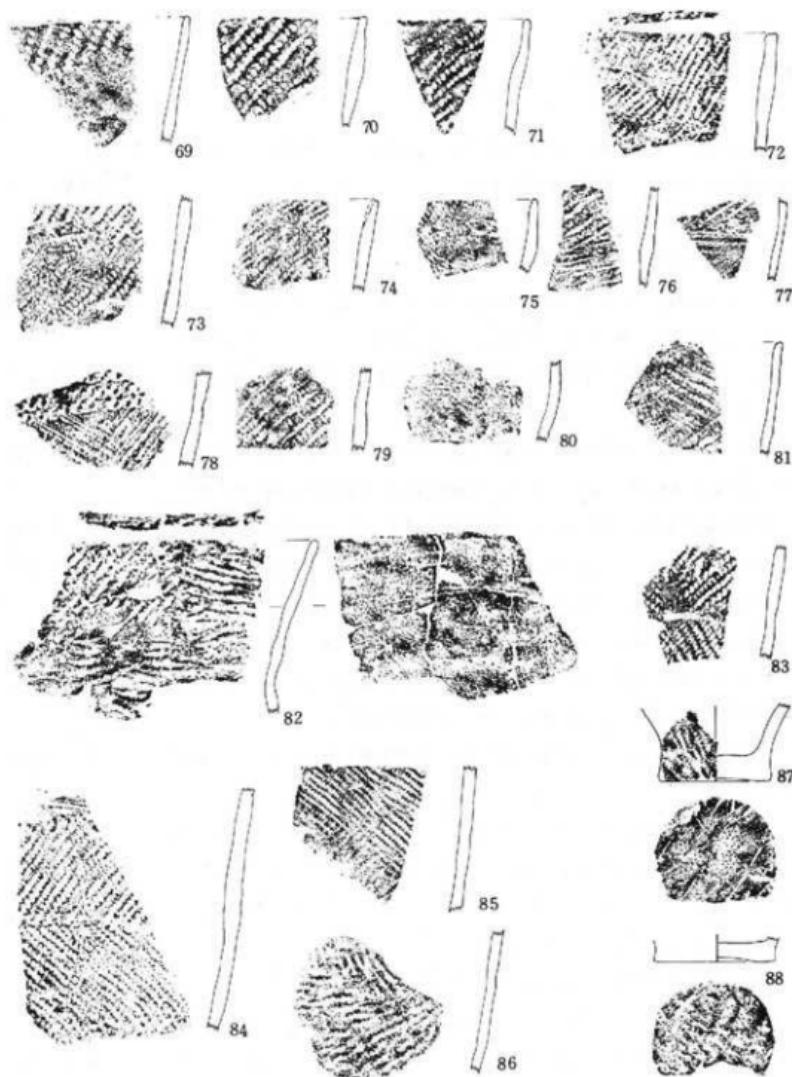
第406図 第15号住居址出土遺物（1 / 3）



第407図 第15号住居址出土遺物（1 / 3）



第408図 第15号住居址出土遺物（1/3）



第409図 第15号住居址出土遺物（1/3）

遺物 遺物は非常に多い。12のように完形に近いものや大形破片がかなりみられる。

1～10は胎土に纖維を混入するものである。2・10は束状の纖維痕が認められる。1は黒褐色極めて堅密に焼かれている。他は赤褐色ないし暗褐色を呈し、焼成は良好である。

4は縦状体圧痕文を持つものである。2、3、5～10は不明瞭ながら縄文施文がみられる。第II類に含まれる。

11は中厚手、長石粒を含み堅密に焼かれる。沈線による曲線文がみられる。裏面には擦痕がある。縄文早期末天神山式土器であろう。

12～17は第III類に含まれるものである。12は深鉢で底部は丸底に近いものと思われる。口縁3/5、胴部は1/2ほどが残っている。口径37cmである。口縁は直立し、胴部はやや丸味を持って底部に収束する。頸部にわずかな段を持ち口唇上面は平坦である。

器厚は4～5mmで指頭圧痕文を纖維束状のものによってナデ消している。胎土には長石・石英を含み中には大粒なものもみられる。黒褐色ないし白黄褐色に固く焼かれる。

口唇上面には器面に対し45°ほどの角度で連続する刻みが施される。口唇下と頸部段上とその中间部に横に貝殻腹縁文を連続施文して口縁部を2区画し、内部はやはり貝殻腹縁文が5mm間隔に矢羽状に施文される。胴部は無文である。III-b類a種である。

13～17は薄手で胎土はすべてb種である。13は貝殻腹縁文を横位に5段施されている。14は先割れ施文具を横位に施すものである。15は一見撚糸側面圧痕に見えるが、刺突状の所もあり施文具は不明である。17は連続刺突文(c種)を持つものである。

18は黒褐色堅密で胎土は精練されている。D型爪形文を持ち裏面には擦痕がある。北白川I式である。

19～21、23、24は薄手で長石・石英粒をわずかに含むが胎土は良く白黄褐色に固く焼かれている。器内外面に貝殻条痕がみられ、19・20は貝殻腹縁文が施されている。羽島下層II式に併行するものである。

22は指頭圧痕がみられ黒褐色堅密である。胎土には長石を含む。竹管具による平行沈線が二段に横走している。第III類に含まれるものである。

縄文施文されるもの(第VII類)の内、器厚2～5mmと他に比べ薄手で、器内外面に指頭圧痕を持ち、纖維束状のものによってナデを行うもの(25～34・82)が多くみられたので、第VII類より分離してふれることとする。ナデが強いため幅広な条痕となるものもある。

胎土は精練されるものb種(25～27、32、34)と長石・石英・雲母を多く含むものa種(28、



第410図 第15号住居址
出土遺物(1/1)

29、31、33、82) とがある。焼成はともに固く焼かれている。

口唇に縄文が施文されるもの (25、26、82) と不明瞭ながらまばらに刻みがみられるもの (27、30、31) とがある。口唇は外面そぎ状となるものが多く、口縁が内屈するもの (26、27、30、31) と直線的なものがみられる。

30は内屈する口縁から丸味を持って底部に収束する。82は頸部にて屈曲し胴部が張るものである。

縄文は乾いてから施文したためか全般に不明瞭である。30の無節斜縄文、82の羽状縄文以外は単節斜縄文である。

胎土の精練されたものは清水ノ上Ⅱ群3類に併行するものである。第VII類から分離して当遺跡第3類のd類としたい。胎土b種のものについては類例を待ちたい。

35はミニチュア土器で図上復元による。胎土は精練され固く焼かれる。一応第IV類としておく。

36~40は第III-a類a種であるが中厚手となるものである。

41・42は第IV類土器である。

43~47は第V類神の木式土器である。45は裏面にひっかき状痕を持つ。46は口縁部文様は有尾式に近いものであるが有段口縁を持つ点で本類に含めた。

48~62は第VI類有尾式の範疇に入るものである。48・49は同一個体と思われる。小さな山形状突起を持ち、頸部にて屈曲し胴部に至る。長石粒を含み、表面黒褐色・裏面赤褐色を呈し固く焼かれている。纖維の混入はみられない。裏面は纖維束のナデが行われ条痕化している。口縁部文様は突起下に菱形の頂点をおく菱形文を頸部には二段の横帯がなされ、その中を半截竹管具による爪形文が施されている。胴部は単節の羽状縄文である。50も同一施文であるが、なだらかな波状口縁を示し、口唇部は抉りがみられる。

52、58~62は列点状刺突文を持つもので52のみ縦方向に施文されその点では神の木式に類するものである。60、62は沈線が併用される。

53、55、56は平行沈線を持つものであるが、53はくずれているが櫛齒状工具によるもので神の木式に類する。

54は薄手の土器で口唇下に縦のその下部は横の沈線を施すもので類例をみない。

57は竹管沈線の中を先割状工具によって押引きするものである。

63~81、83~87は第VII類縄文施文されるものである。口唇に縄文施文されるもの (63、64、72) がある。

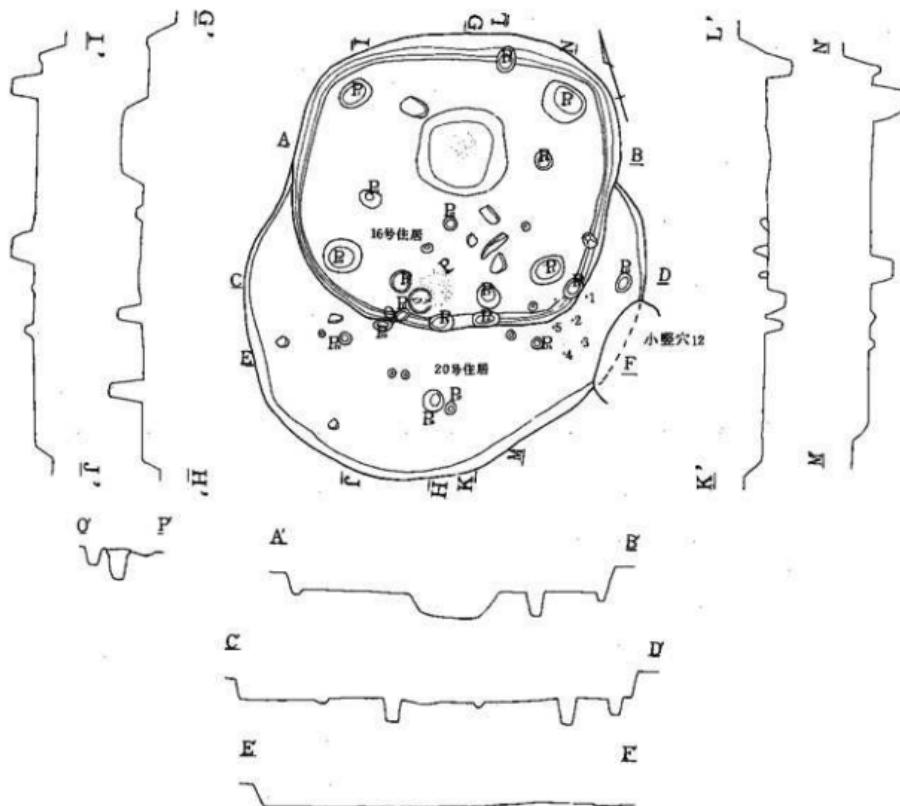
単節斜縄文が多い。81、83~86は羽状縄文である。75、76は異条斜縄文、77~79は付加条縄文で78にはループ文がみられる。78は神の木式に併行するものであろう。

87、88は底部である。上げ底で88は網代底、87は草本類の圧痕であろう。

本址より出土した土器は第Ⅶ類の多いのは当然であるが、第Ⅲ類も多くみられる。

石器は69点出土している。内訳は石磚28、敲打器16、削器一括器10、特殊磨石5、小形石匙・石錐各4、打製石斧・磨製始刃石斧各1点である。

炉の南床面より骨石製管玉が1点出土している。径9mm、長さ1.7mm、孔の大きさは4mmである。



第411図 第16号・20号住居址実測図 ($S = 1/80$)



第412図 第16号住居址出土遺物（1は埋甕、1/6）

⑧ 第8号住居址（第411・412図）

遺構 本住居址は第15号住居址の北西に位置し、北東には第24号住居址がある。南側にて第20号住居址を切っている。

プランは隅丸方形で規模は $4.3 \times 4.6m$ を測る。主軸方向はN- 20° -Eである。南にて第20号住居址と同一床面にて重複し切っている。覆土にての重複関係はつかめなかった。

壁高は40cm前後である。周溝が一周し第20号住居址の床面を切っている。床面は南にやや傾き全体に固く堅緻である。

炉は中央北寄りに位置し、掘炬縫状石圓炉で炉石はすべて抜かれている。焼土は底にわずか認められたのみである。

主柱穴はP₁、P₃、P₅、P₁₄の4本である。南側にあるP₇～P₁₀は入口施設に伴うものと考えられる。P₄、P₅、P₁₅は第20号住居址の柱穴である。貼床は特に認められなかった。

南壁ぎわP₉とP₁₀の中間に正位の埋甕（第412図-1）が埋設されている。上石はみられない。がいの北東壁ぎわ床面上に小形深鉢（2）が立った状態で出土している。

遺物 本址に伴う遺物は少ない。1、2の外は小破片がわずかに出土したのみである。繩文前期の土器が覆土より出土している。第20号住居址に伴うものと思われる。

1は埋甕で口唇部を欠くがほぼ完形で底部は穿孔されていない。把手を2個持つ大形の深鉢である。2は炉の脇から出土したもので、胴央部のみである。

時期は縄文中期後葉II期である。

石器は36点出土している。内訳は特殊磨10、敲打器9、石礫7、打製石斧3、横刃形石器・削器・搔器各2、小形石匙・磨石・石錐各1点である。すべて本址に伴うかは問題である。

⑨ 第20号住居址（第411・413・414図）

遺構 本住居址は第15号住居址の西に近接するもので、東壁は第12号小堅穴址と重複する。覆土においては重複関係はつかめなかった。北側は第16号住居址によって切られている。

プランは残存壁や第16号住居址中に残された柱穴から、梢円形を呈し規模は4.8（？）×6.0mを測るものと思われる。主軸方向はN-18°-Wである。

壁高は東で40cm、西は20cmである。床面は固く堅敏である。

第16号住居址の埋甕の北より床面をわずかに掘りくぼめて焼土が残されている。南東部は埋甕によって切られている。これが本址の炉と思われ地床炉である。

主柱穴は、P₁₅、P₁₆、P₁₈、P₂₀と第16号住居址に検出されたP₄、P₁₃を加え6本である。

東側床面より36（1・2・5）、37（3・4）が横つぶれの状態で出土している。

遺物 土器は36、37の外はすべて破片でまとまって出土しているものはない。第16号住居址より出土した当期の土器も本址に伴うものとして抜っている。

1は梢円押型文である。2は胎土に纖維を混入したもので絡条体圧痕文を持つものである。

3～10は胎土に纖維を混入するもので、長石粒を含んで黄褐色に焼かれている。焼成は総じて良好である。花積下層式に比定される第II類土器に含まれるものである。他に小破片が15片出土している。

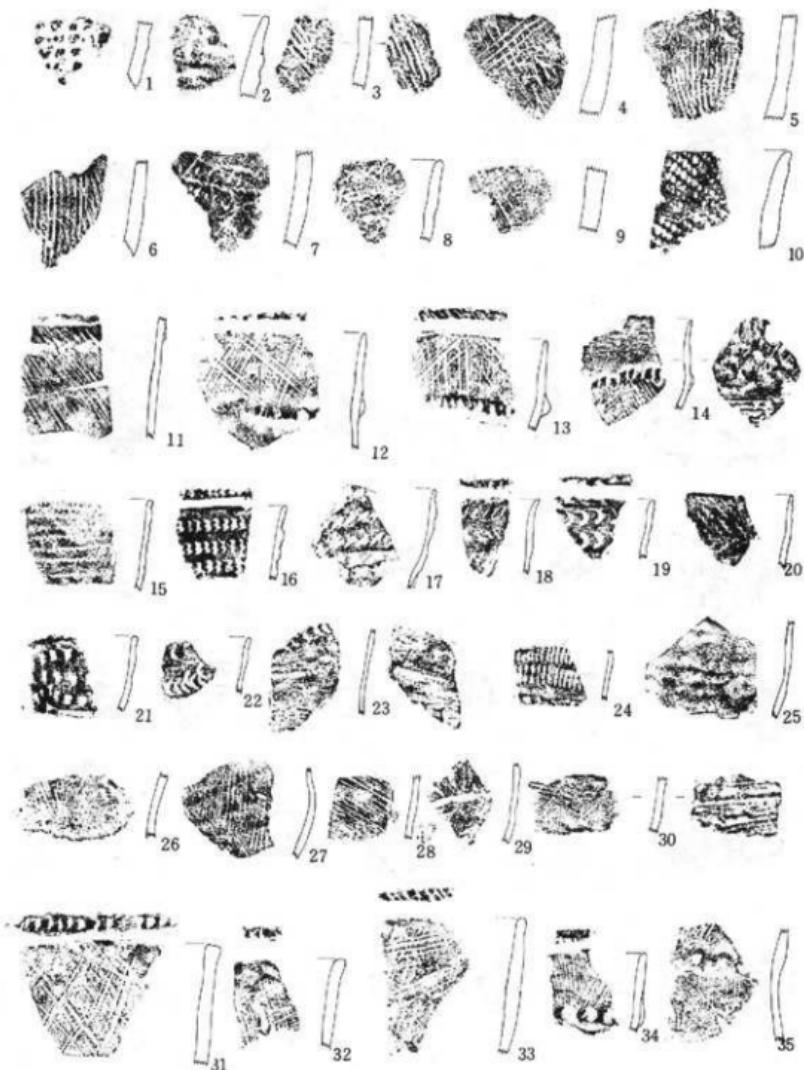
11～43は第III類土器である。36は口縁一部を欠いている。底は丸底に近いものと思われる。胎土には長石、石英を多く含む。中には大粒なものもみられる。器内外面には指頭圧痕を纖維束状のものでナデ消している。口径17.2cm、器高推定28cmである。

器厚は5mm前後ではほぼ一定している。外面上部は黒褐色ないし暗褐色、外面下部と内面は白黄色を呈している。焼成は良好である。内面下部には炭化物の付着がみられる。

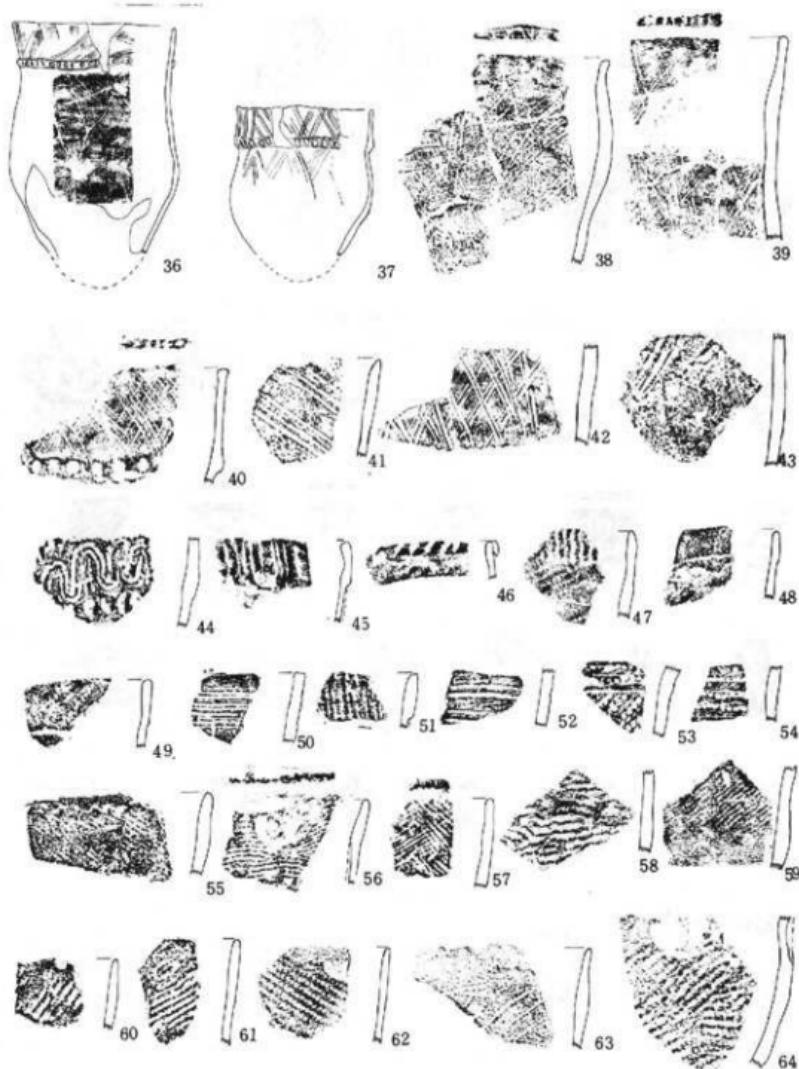
器形は頸部にてややくびれ口縁はわずかに外反する。胴下部にて最大径を持った後丸底の底部に収束する。頸部には刺突による刻みを持った隆帯が横走している。隆帯幅は5mm前後で口縁と胴部の接合の補強のためか口縁部方向からナデつけて接合させている。下部はナデがみられない。文様は口縁部胴部とも櫛状工具による集合細線文が綾形状に重複して施される。

37は口縁一部と胴下部を欠いている。器形は36と同様と思われる。口径14.4cm、器高は推定18.5cmを測り36に比べるとややすんぐりした感を受ける。口唇上面に部分的に刻みがみられる。

胎土、調整、隆帯手法は36と同じである。36に比べ内面がザラザラして混入物が突出している。



第413図 第20号住居址出土遺物（1 / 3）



第414図 第20号住居址出土遺物 (36・37は1/6 他は1/3)

37は細線文が半截竹管具による平行沈線で行われている。この施文方法の違いは他のIII-a類にもみられる。

11は偏平な粘土紐帯を持つもので木島式の古い段階に属するものである。

12~14、26~28、31~43はa類細線文を持つものである。口唇に刻みを持つものが一般的である。

胎土的にはa種のもの(12~14)に薄手のものが多い。薄手a種のものは頭部に隆帯を持つものが一般的であるに反し、b種中厚手のものには明らかに隆帯を持たないもの(38、39)がある。

15、16、18、20、24は貝殻腹縁文を持つb種、17、19、22、23は連続刺突文c種である。

44~49は第V類神の木式である。44には流水文がみられる。46は薄手で折り返し口縁で本類とは分離されるものかも知れない。

50~54は第VI類有尾式の範疇に入るものである。

55~64は第VII類である。

本址出土土器全体では、第III類とVII類がほぼ同様な比率で出土している。

石器は21点出土している。内訳は敲打器7、削器・搔器4、磨石・石礫各3、特殊磨石2、小形石匙・特殊敲打器各1である。

⑩ 第23号住居址(第415~417図)

遺構 第15号住居址西及び第20号住居址の南(9~10-ち・つG)の黒色土下層から漸移層にかけて多量の遺物が出土した。

プランがつかめなかつたが、多くの遺物が出土するため第23号住居址として調査を進めたものである。ローム層まで掘り下げた結果、わずかにくぼむが、床面らしきタタキや炉・柱穴を検出することはできなかつた。

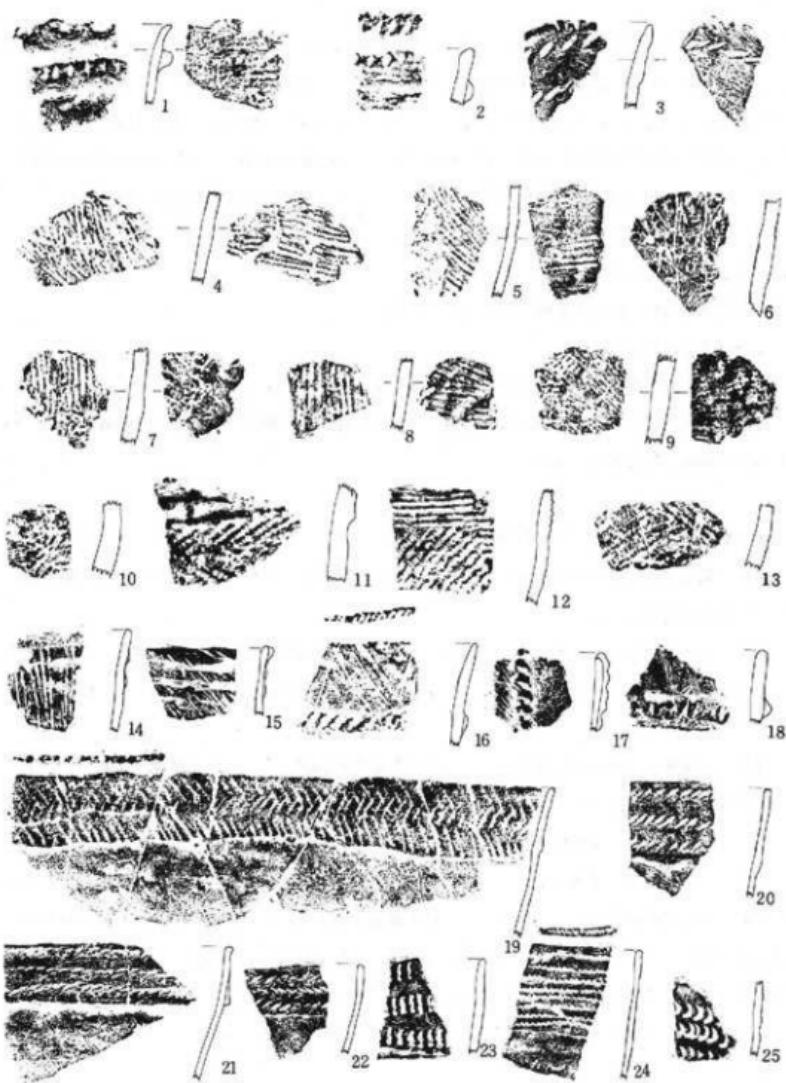
遺物 遺構として確認はできなかつたが、石器を含め1600点余にのぼる遺物が小範囲から出土しているので、一括報告することとする。遺物包含層は15~20cmで層位的にとらえることはできなかつた。ほとんどが第IV層漸移層出土のものである。

1、2、11は胎土に纖維を混入し粘土紐帯を持つものである。1は薄手、2は中厚手でともに長石粒を含んで堅敏に焼かれている。ともに表裏面ともナデによる擦痕がみられる。1は口唇上面に指頭によって小刻みな波状をみせている。2は口唇外面と上面に刺突による刻みを持つ。紐帯は幅1cmほどの断面カマボコ形を呈すもので1には刻みがみられる。

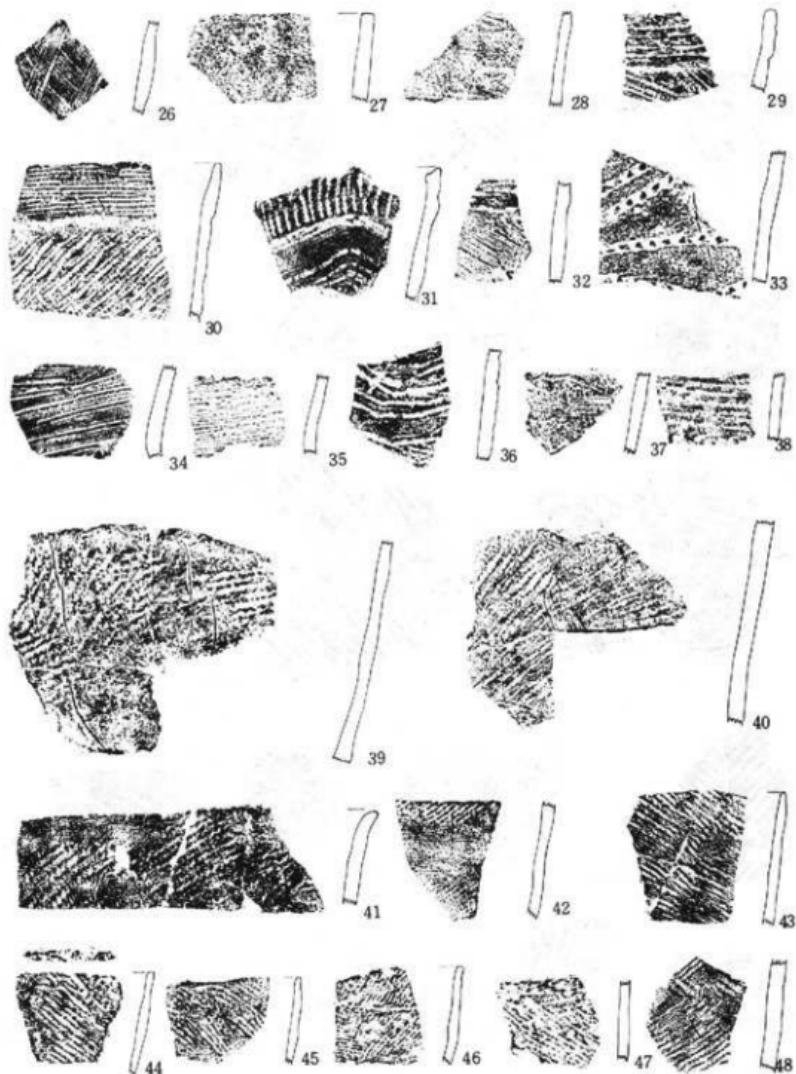
11は厚手で三角形状断面を持つ紐帯が2本横走し一部工字文風となる。その下には羽状繩文がみられる。

これらの土器は繩文早期末神の木台式に比定されるものであろう。

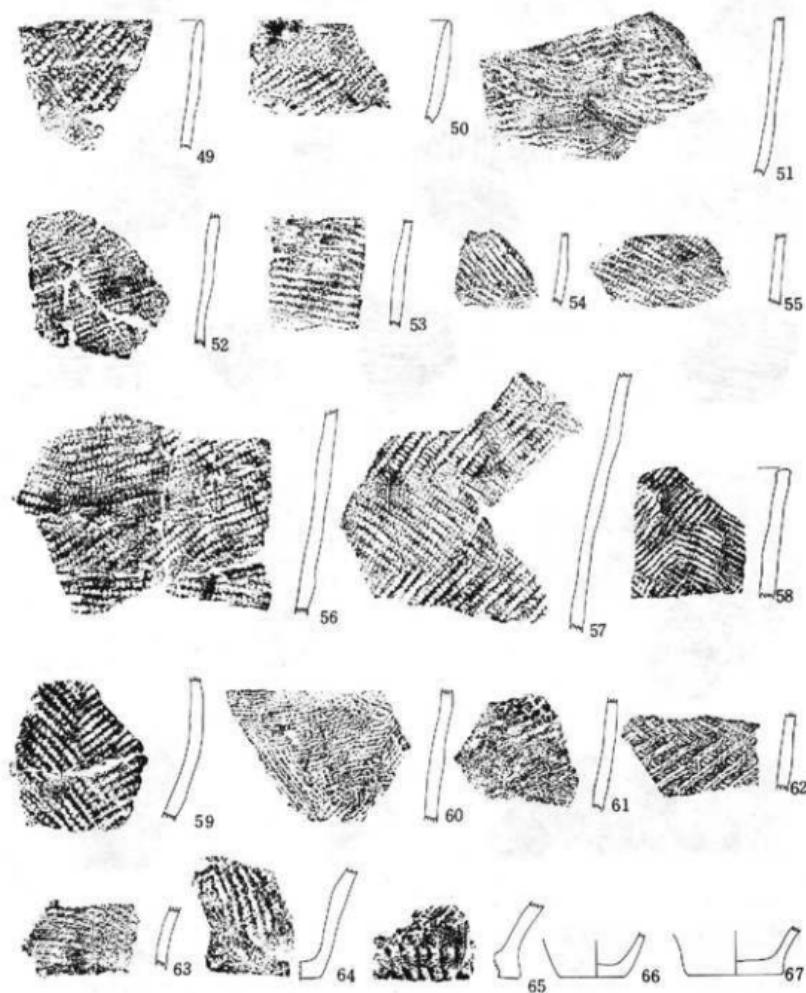
3は黒色堅敏で、纖維がサンドイッチ状に混入されている。口縁はゆるやかな波状をなし頂点



第415図 第23号住居址出土遺物 (1 / 3)



第416図 第23号住居址出土遺物（1/3）



第417図 第23号住居址出土遺物（1/3）

に刻みが施されている。内外面とも擦痕がある。爪形文が表には2段、裏には1段みられる。粕烟式に比定できるものである。

4~10、12、13は胎土に纖維を混入するもので第II類に包含されるものである。他に同種破片が40片ほど出土している。条痕を持つもの（4~10）、縄文のもの（12、13）とがある。

14~26は第III類土器である。胎土はa種（4~16、18、19、21、26）、b種（17、20、22~25）である。他に出土する第III類も半々である。

19は他に胸部、口縁部破片があるが復元できなかったものである。有段口縁を有し貝殻腹縁文を矢羽状に施すもので第15号住居址出土例と同種である。横走区画帯を持たない点が異なる。

21は口縁部に連続刺突によって擦糸侧面圧痕状文様をモチーフしている。b種貝殻腹縁文をもつものは19、22、23である。

27、28は第IV類土器である。他址に比べ多く出土しており、10個体ほどに分類できると思われる。

29~31は第V類神の木式土器である。

32~38は第VI類有尾式土器の範疇に入るものである。33以外は平行沈線のものである。纖維の混入はみられない。

39~65は第VII類である。44~47、51~54のようにやや薄手のものもみられる。61は異条斜縄文、62・63は付加条縄文の2段である。

65は底ぎわに櫛歯文を持ち神の木式である。

66・67は薄手の底部である。底が全部で42点出土している。

出土土器は縄文施文第VII類とともに第III類が多く、第IV類も他址に比べ多い。

石器は99点出土している。内訳は石椎58、削器・搔器27、小形石匙・石錐各5、敲打器・特殊磨石各2点である。

⑪ 第24号住居址（第418・419図）

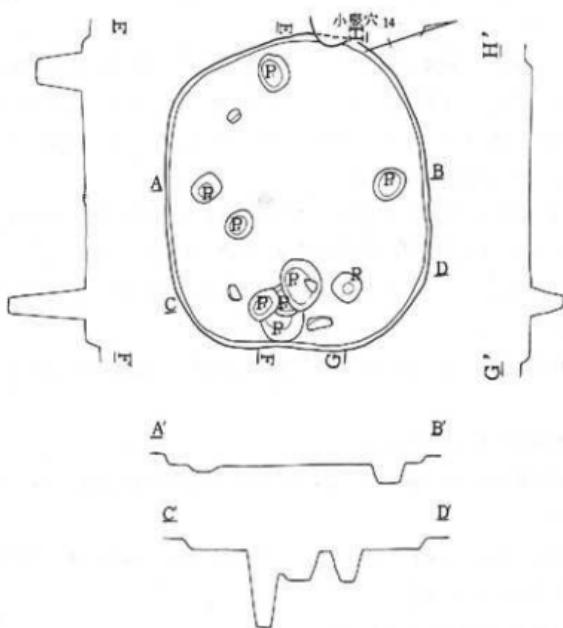
遺構 本住居址は第20号住居址の北にあり、東には第25号住居址がある。

プランは楕円形で規模は3.8×4.5mを測る。主軸方向はS-20°-Wである。

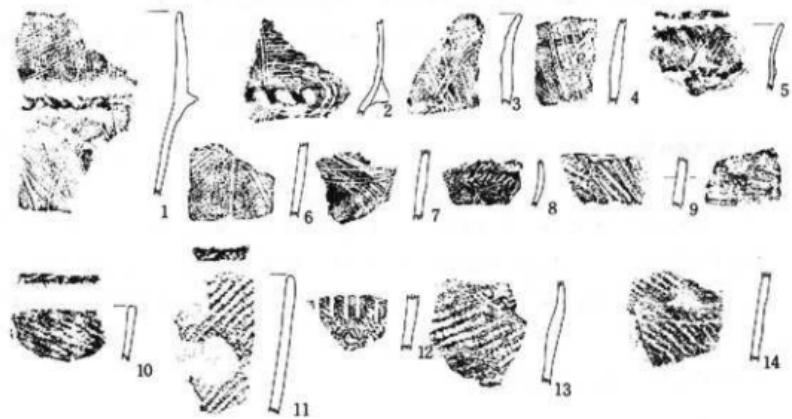
壁高は15~20cmである。床面は中央部には良くタタキがみられるが、壁ぎわは軟弱である。

P₅の北にわずかに床面を掘りくぼめて焼土が検出されており、地床炉と考えられる。柱穴はP₁、P₂、P₆・P₇、P₉の4本であろう。

遺物はまとまった出土はみせていない。



第418図 第24号住居址実測図 ($S = 1/80$)



第419図 第24号住居址出土遺物 (1/3)

遺物 土器は少ない。12を除けば第III類とVII類土器だけである。

1～9は第III類土器で8はc類他はすべてa類である。図示しなかったものもすべてa類である。胎土は2・8はb種他はa種である。2は山形状口縁で口唇部に刻みを持つ。

10～14は縄文施文を持つものである。12は縄文地に列点刺突文を縦に施すもので第V類神の木式土器である。縄文は単節斜縄文である。他に1片羽状縄文がみられる。

石器は8点出土している。内訳は敲打器3、磨石・特殊磨石各2、打製石斧1点である。

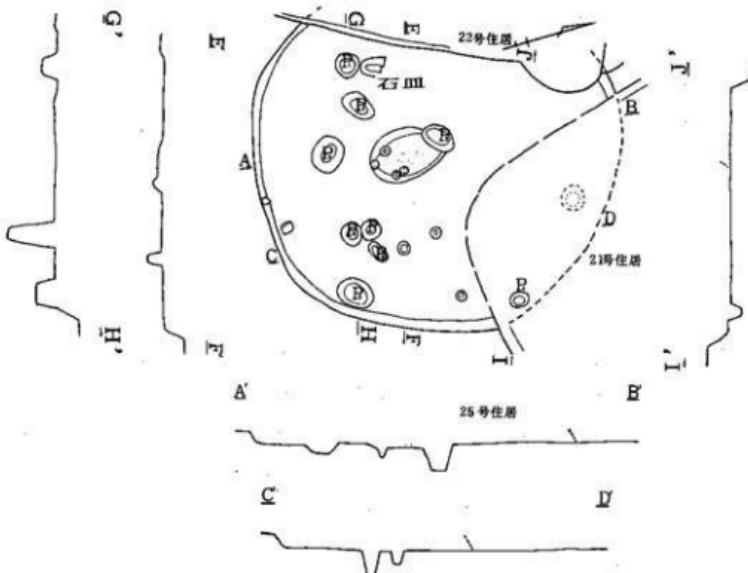
⑫ 第25号住居址（第420・421図）

遺構 本住居址は第24号住居址の東に位置し、北には第26号住居址がある。

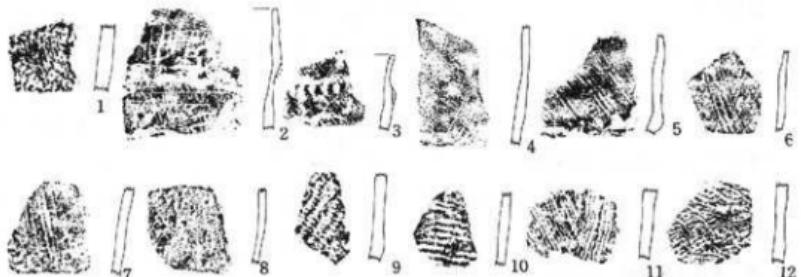
西側は第22号住居址に切られ、北東部は同一床面にて第21号住居址と重複する。

プランは定かでないが橢円形を呈すものと思われる。規模は不明である。壁高は東側で30cm前後、西では15cmほどである。床面は堅く堅緻である。

炉はP₆の北にあり、110×75cmの橢円形に深さ10cmほど掘りくぼめられている。炉石があった可



第420図 第25号住居址実測図 (S = 1/80)



第421図 第25号住居址出土遺物 (1/3)

能性もある。

主柱穴はP₁、P₄の2本が検出された。

P₁の北脇より石皿が床面にすえられている。

遺物 遺物は少ない。胎土に纖維を混入する土器(1)の小破片数点と有尾式の小破片1点を除けば、第Ⅲ類、VII類の土器のみである。量的には第Ⅲ類の方が多い。

1は厚手で胎土に多量に纖維を混入するもので第Ⅱ類に比定される。

2~8は第Ⅲ類すべてa類である。他に出土するものもa類のみである。胎土はほとんどがa種である。

8~12は第VII類に含まれるものである。11は無節の羽状である。12には撚糸側面圧痕文がみられる。

石器は7点と少ない。内訳は敲打器2、磨製乳棒状石斧・磨石・特殊磨石・石皿・石礫1点である。

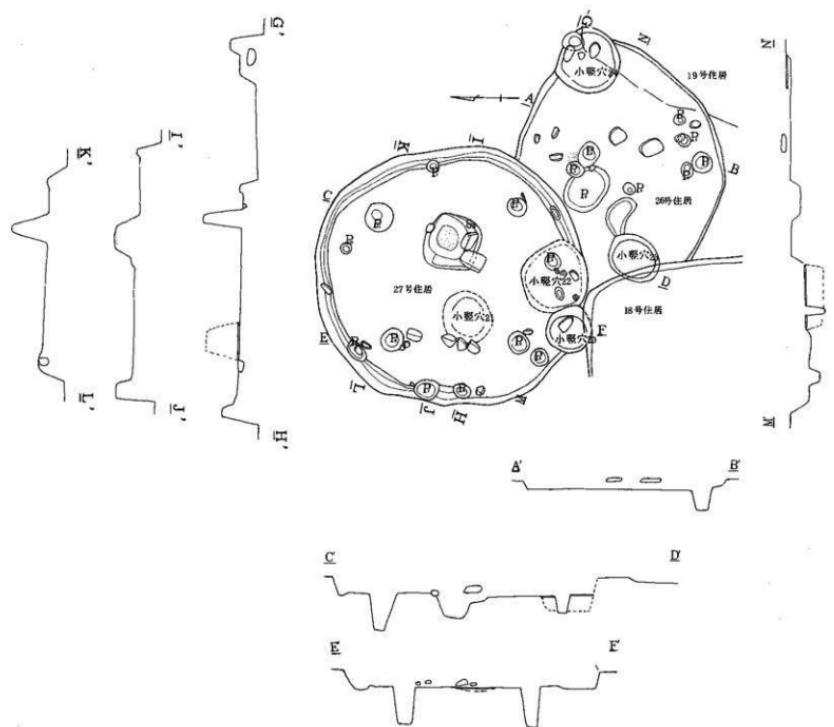
⑩ 第26号住居址 (第422・423図)

遺構 本住居址は第25号住居址の北にあり、今回検出された縄文前期の住居址の中では最も北に位置している。北西部は第27号住居址に、南西部は第18号住に切られ、東は第19号住居址に貼床されている。さらに東には第24号小竪穴、西には第23号小竪穴がある。

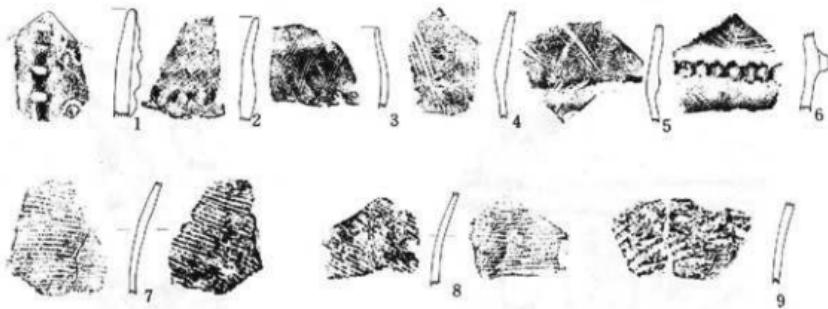
プランは残存状況からすると梢円形を呈すと思われる。規模は略東西4.2m、南北は不明である。主軸方向はN-24°-Eである。

壁高は15cmほどである。床面は南東にやや傾き全体に堅緻である。

炉は中央北寄りに床面をわずかに掘りくぼめた地床炉がある。主柱穴はP₃、1本が検出されただけである。



第422図 第26号・27号住居址実測図 ($S = 1/80$)



第423図 第26号住居址出土遺物（1/3）

遺物 遺物は少ない。縄文時代前期の土器に混じって小量中期後葉のものがみられる。混在と考えられる。主体は前期第Ⅲ類である。

厚手の織維土器が1点出土している。

1～6は第Ⅲ類土器である。胎土はa種である。他のものも同様である。2～6はa類、1は中厚手、山形状突起を持つ口縁で頂部から紐帯を垂下され刻みを施す。器面はナデがみられ、半截竹管による刺突文がみられる。宮田村中越遺跡前期出土土器の主体となるものと同一である。在地系の可能性が強い。

7・8は白黄色堅緻で長石粒を含んでいる。器内外面には貝殻条痕がきれいに施される。羽島下層II式に併行するものである。

縄文施文の土器（9）は少なく6片である。

住居址の時期は地床炉であること、土器の出土量からして前期に属する。

石器は8点出土している。削器一挿器4、石礫3、打製石斧各1点である。

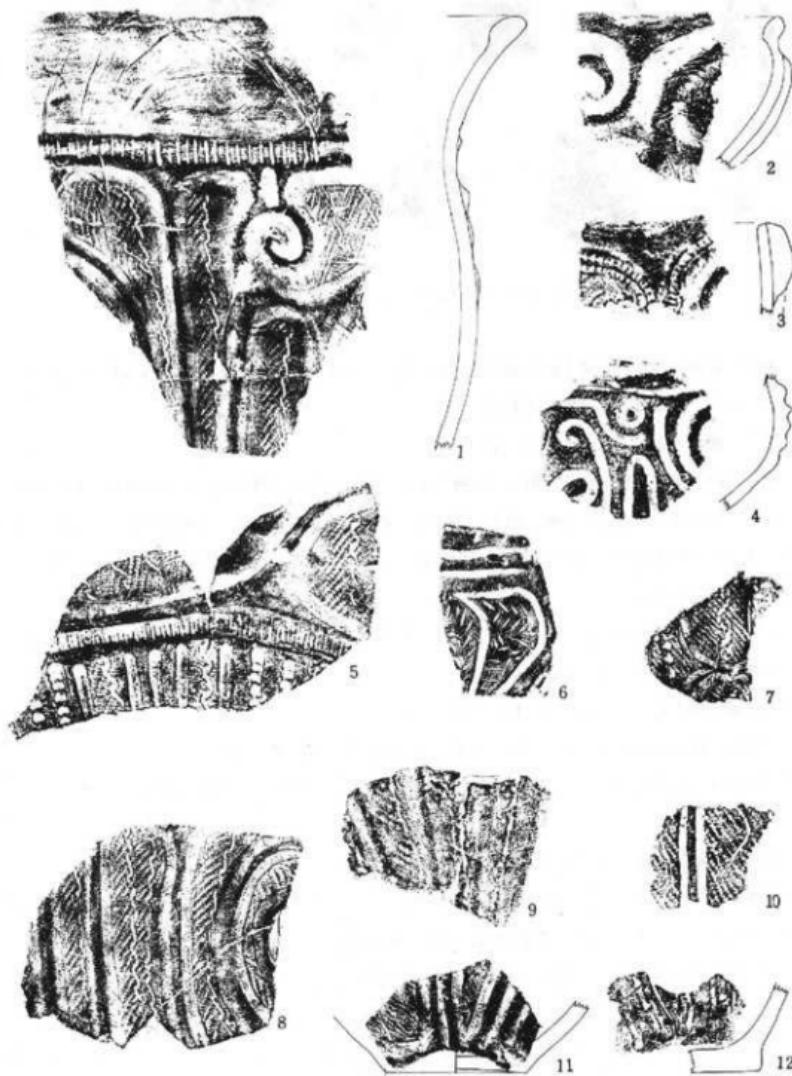
⑩ 第27号住居址（第422・424図）

遺構 本住居址は第34号住居址の南西に位置している。東にて第26号住居址を切っている。床面差は40cmほどである。小窓穴が3基（第20～22号）あり、第21号と22号には明らかに貼床している。

プランはやや多角形ぎみであるが、円形を呈し、規模は $5.2 \times 5.5\text{m}$ を測る。主軸方向はS-85°-Eである。周溝が南西を除きみられる。

壁高は50cm前後である。床面は南にやや傾き、P_s、P_g付近はくぼんでいる。タタキは全体に良くみられ堅緻である。

炉は中央東寄りに位置し、掘炬燵状石畳炉である。炉石は西側一部除いて抜かれている。



第424図 第27号住居址出土遺物（1/3）

主柱穴はP₂、P₅、P₆、P₁₁の4本で、P₆、P₇は入口施設に伴うものと考えられる。壁ぎわにピットがみられる。

床面より20cmほど浮いて多くの自然石が検出されている。

遺物 土器は多くの大形破片が多くあるが復元できるものはない。

出土土器のほとんどが結節縄文を持つものである。

石器は42点と多く出土している。内訳は敲打器12、削器一搔器10、打製石斧8、石礫7、特殊磨石2、大形粗製石匙・磨石・凹石各1点である。

時期は中期後葉IV期である。

⑯ 第28号住居址（第425図）

遺構 本址は第27号住居址の東に位置し、西は炉を含めて第19号住居址に切られている。

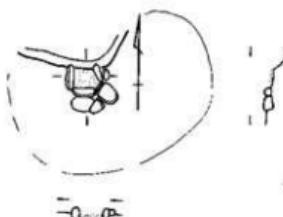
壁は開田時に削られたのか検出されていない。水田地場直下に検出されたものである。

床面は一部タタキがみられたのみである。

プラン・規模は不明である。炉は方形石組炉で、西は切りとられている。南側は平坦な石を2重に据えている。

遺物 遺物は極めて少ない。中期後葉II期の小破片が出土している。

石器は24点出土する。内訳は削器一搔器12、石礫8、敲打器・特殊磨石各2点である。



第425図 第28号住居址実測図
(S = 1/80)

⑰ 第29号住居址（第426・427図）

遺構 本住居址は第32号住居址の南にあり、西は第30号住居址に切られている。

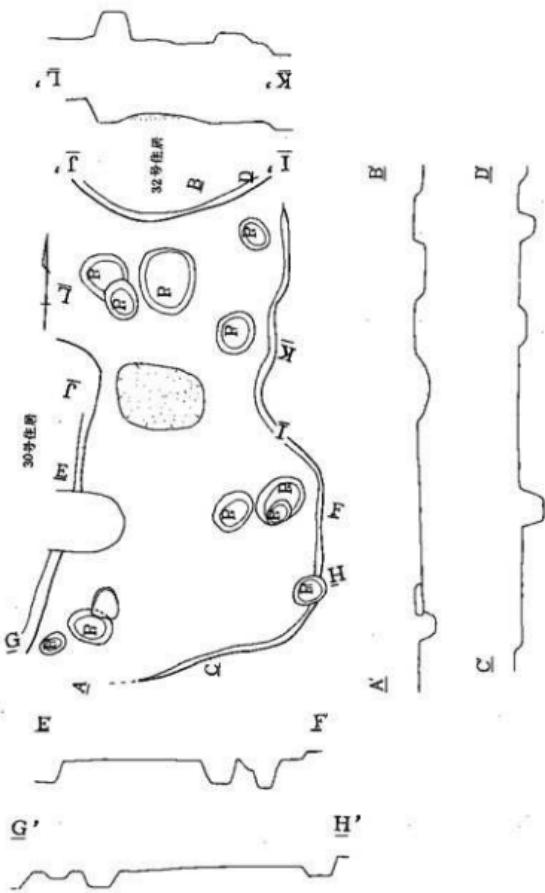
東壁は出入りが激しく南側は西にて消えている。プラン・規模は不明である。壁高は東で15cmほどある。

床面は壁ぎわを除き全体に堅緻である。検出面北寄りに120×90cmの隅丸方形で深さ15cmほどの舟底状の落ち込みがあり5cmほど焼土が堆積している。地床炉か石組炉かは不明である。

主柱穴はP₂、P₄、P₅が考えられる。

遺物 遺物は少なく早期前期と中期の土器が混在している。

1は山形状口縁で口唇に刻みを持つ。黒褐色堅緻で口唇下に爪形文が施される、内面には貝殻状痕がみられる。早期末舶式土器に比定される。



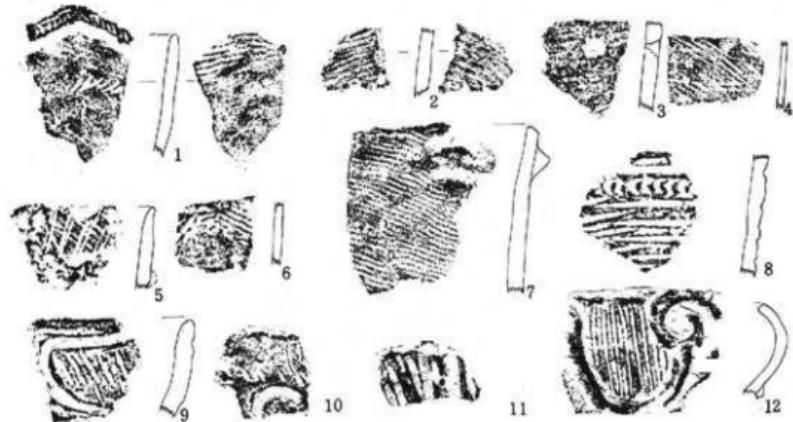
第426図 第29号住居址実測図 ($S = 1/80$)

2～6は前期前半に属する縄文施文を持つものである。5は付加条縄文2段である。8は前期VI類有尾式土器である。

9～12は中期後葉II期に属するものである。

7は口唇下に断面三角形状の突起を持つもので例をあまり見ない。

石器は4点出土している。内訳は磨石2、打製石斧・敲打器各1点である。



第427図 第29号住居址出土遺物（1/3）

住居址の所属時期は前期か中期かは決め難い。炉が大きくやや深いことからすると、中期の可能性が強い。

⑦ 第31号住居址（第428・429図）

遺構 本住居址は第32号住居址の西にあり、同一床面にて重複する。

プランは東側がはっきりしないが隅丸方形を呈すと思われる。規模は5.2×5.2mである。主軸方向はN-67°-Wである。柱穴に重複あり建替の可能性あり

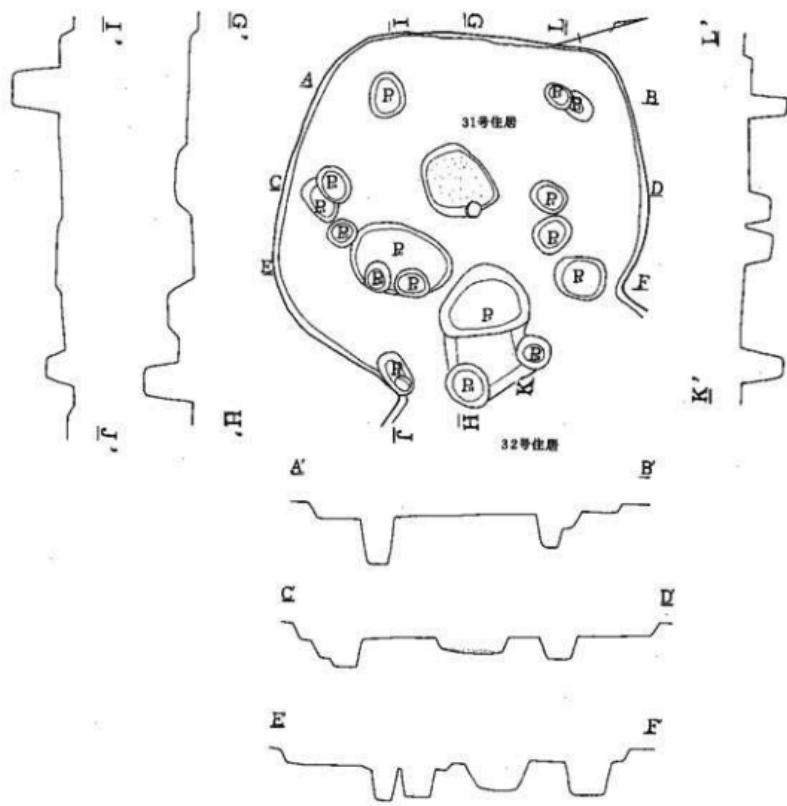
壁高は15~25cmと一定しない。床面は西に傾きタタキが良く行われ堅緻である。

炉は中央やや西寄りに位置し、炉石はすべて抜かれている。石組炉か掘炬燵状石圓炉かは不明である。

柱穴は多くみられ重複するものもある処から建替の可能性が強い。主柱穴は基本的には4本である。東壁ぎわのピットは第32号住居址に伴う可能性が強い。

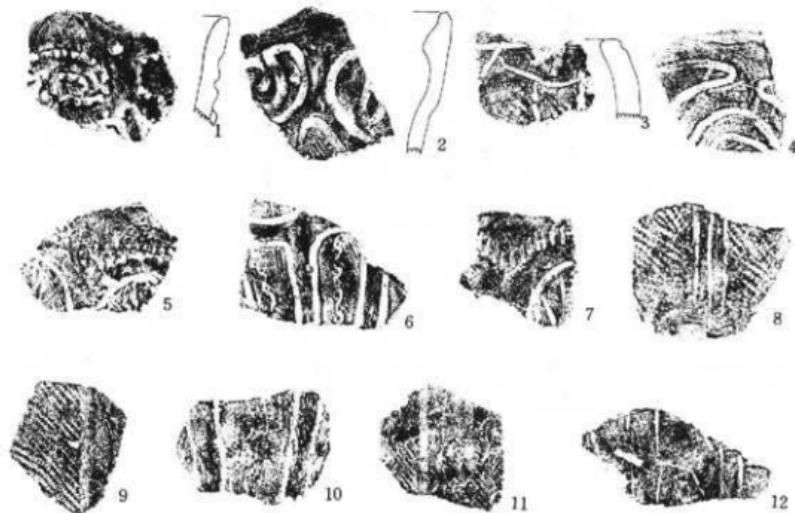
遺物 土器は少ない。主体は結節繩文を持つものである。

石器は26点出土している。内訳は削器・搔器13、石礫6、打製石斧・敲打器・横刃形石器各2、大形粗製石匙1点である。



第428図 第31号住居址実測図 ($S = 1/80$)

時期は中期後葉IV期である。



第429図 第31号住居址出土遺物（1/3）

⑯ 第32号住居址（第430～432図）

遺構 本住居址は第29号住居址の北にあり、西にて第31号住居址と同一床面にて重複している。西側がはっきりしないがプランは隅丸方形を呈すと思われ、規模は 5.6×5.6 mである。主軸方向はN-52°-Eを測る。

壁高は東にて20cmを測る。床面はやや回凸がみえる。全体に固く堅緻である。炉は中央やや北東寄りにあり、小形の掘炬燧状石圓炉である。南側の炉石の下には小石が詰められている。又東隅の外側にはL字形をした花崗岩をコーナーに沿って埋め込んでいる。

主柱穴はP₁・P₂・P₃・P₄・P₆・P₇・P₉の6本である。

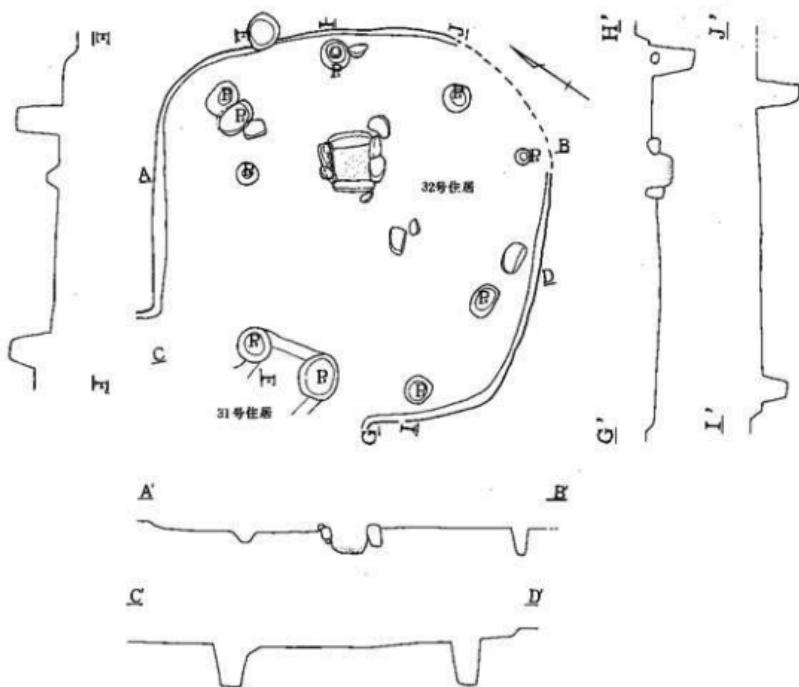
P₃・P₄の中間壁ぎわに床面より10cm浮いて大形の打製石器（第432図-23）が出土している。

遺物 土器は多く大形破片もみられるが、復元できたものはない。

主体は結節縄文を持つものである。13・15・16・18のように古い様相を持つものがある。

石器は37点出土している。内訳は敲打器7、打製石斧・特殊磨石・横刃形石器・削器一括器各6、磨石3、磨製の定角石斧2、乳棒状石斧1点である。

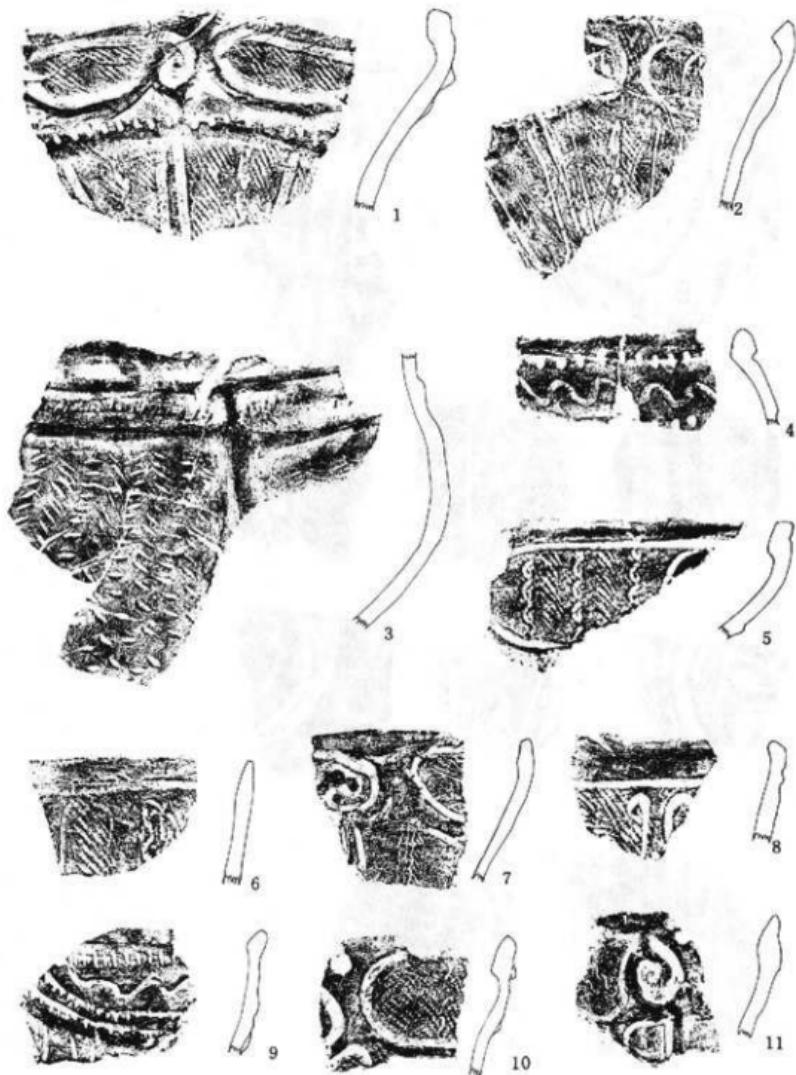
23の石器は全長48cmを測る大形のものである。最大厚は4.5cmを測る。緑色岩の縁辺を打ち欠き、



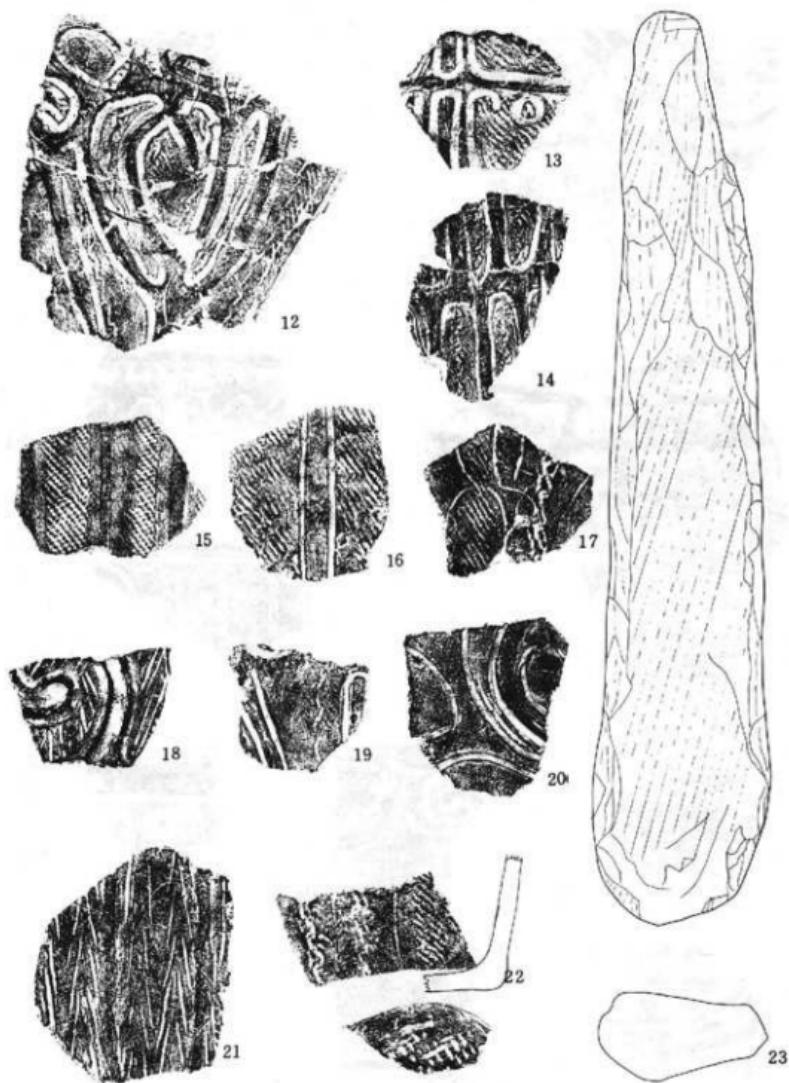
第430図 第32号住居址実測図 ($S = 1/80$)

自然面はわずかに磨かれている。形態は打製石斧であるが、石剣同様の役目を持っていたものと考えられる。

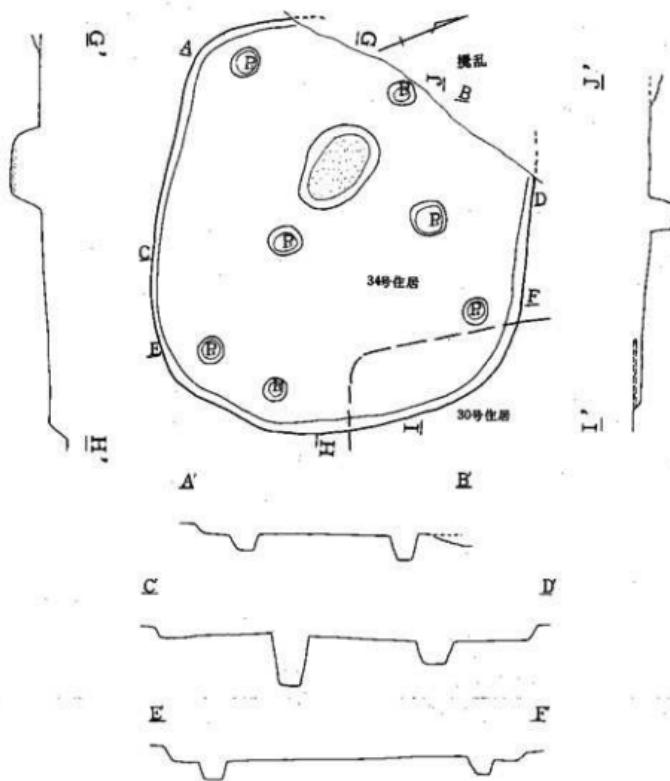
時期は中期後葉Ⅲ期～Ⅳ期の過渡期である。



第431図 第32号住居址出土遺物（1/3）



第432図 第32号住居址出土遺物（1 / 3）



第433図 第34号住居址実測図 ($S = 1/80$)

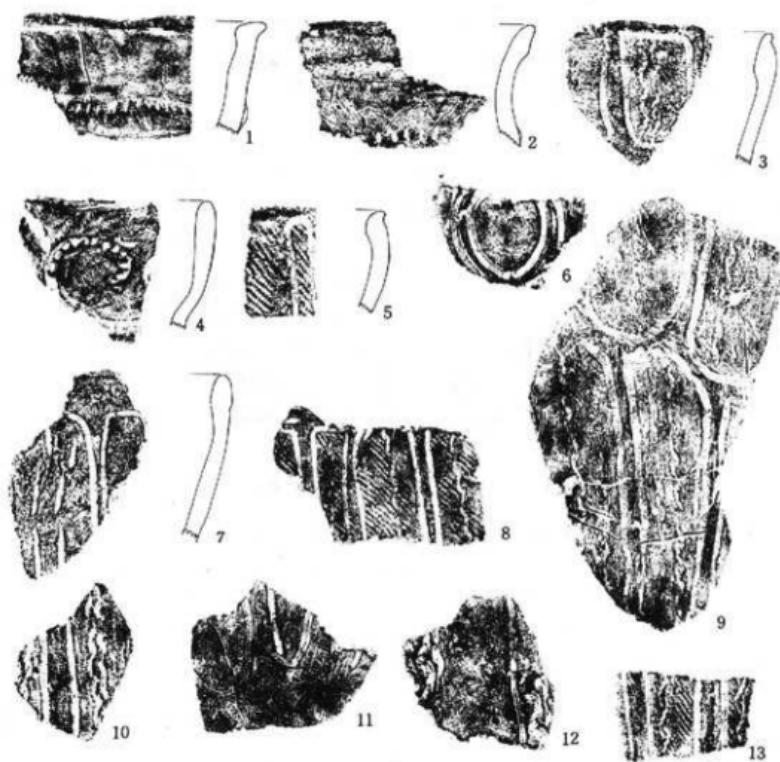
⑩ 第34号住居址実測図 (第433、434図)

遺構 本住居址は第31号住居址の南に位置し、東側は第30号住居址が貼床している。又北側は擾乱を受けている。

北側が定かでないが、プランは隅丸方形を呈すものと思われ、規模は 5.7×5.3 mを測る。主軸方向はN-57°-Wである。

壁高は15~25cmと一定していない。床面は凹凸が激しく、壁ぎわは軟弱である。

炉は西にやや偏し、掘炬燵状石圓炉で炉石はすべて抜かれている。主柱穴はP₁、P₄、P₆、の



第434図 第34号住居址出土遺物（1/3）

3本が考えられる。炉の東に深いピットが2本検出されている。

遺物 土器はあまり多くない。結節縄文を持つものがほとんどである。

石器は10点出土している。内訳は打製石斧3、圓石・横刃形石器・石礫各2、磨製定角石斧1点である。

時期は、縄文を伴わない結節のみのものがみられる処から中期後葉IV期からV期への過渡期である。

㉙ 第36号住居址

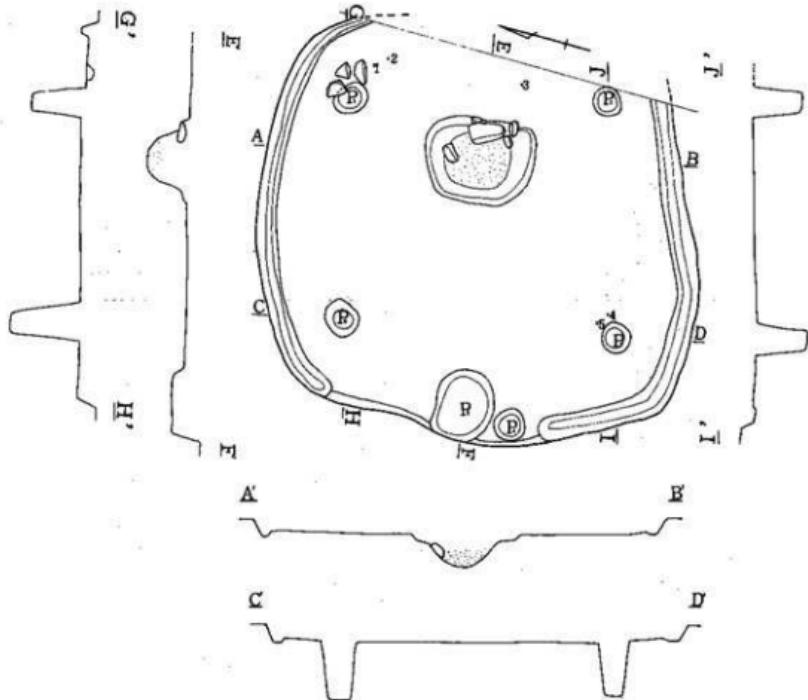
遺構 本住居址は第32号住居址の北に床面のみ部分的に検出されたものである。

第32号住居址に切られていると思われる。

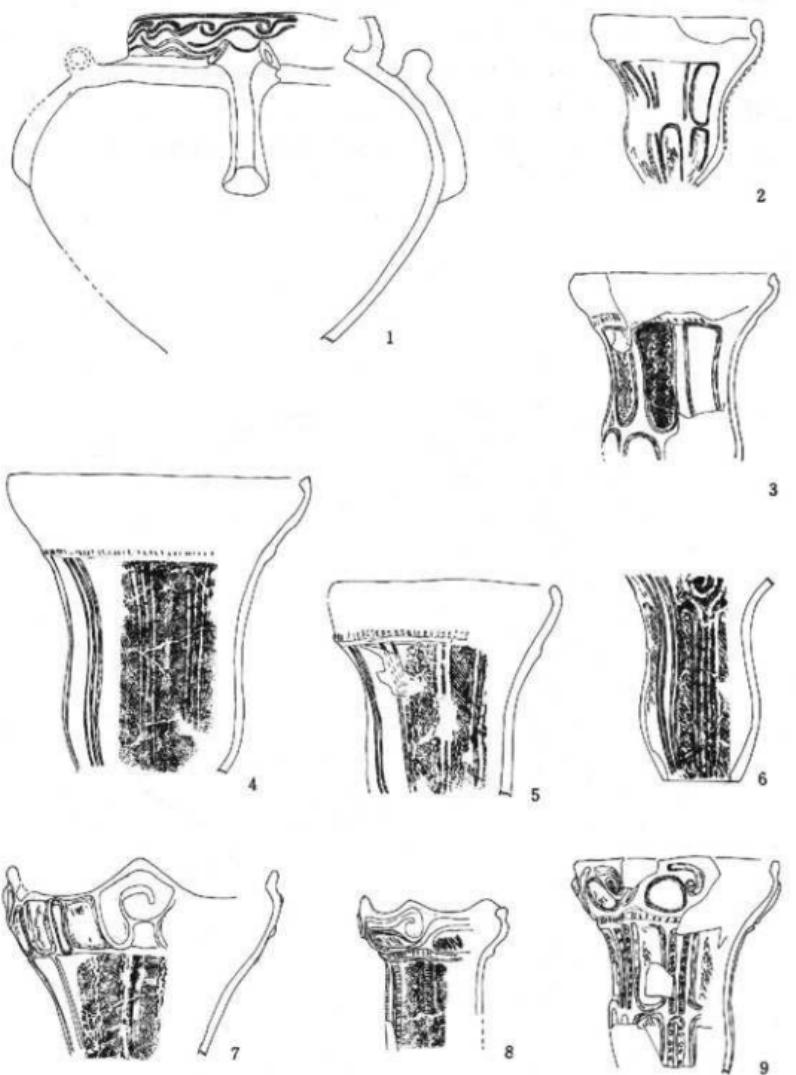
プラン・規模などはまったく不明である。

遺物 土器は中期後葉の小破片がわずかに出土するのみである。

石器は5点出土している。内訳は敲打器2、打製石斧・特殊磨石・石錐各1点である。



第435図 第39号住居址実測図 (S = 1/80)



第436図 第39号住居址出土遺物（1 / 6）



第437図 第39号住居址出土遺物（10～12は1/6他は1/3）

④ 第39号住居址（第435～437図）

遺構 本住居址は他の住居址からやや離れており、今回の調査の中で検出された遺構の中では最も北に位置している。北、西、東は埋立保存地区で東側は未調査となっている。

プランは隅丸方形で規模は5.9×6.3mを測る。主軸方向はN-80°-Eである。

壁高は15～20cmである。床面は全体に固く良好である。周溝が南側中央部を除いてめぐらされる。

炉は中央やや東寄りに位置し、掘炬鍵状石囲炉で東の一部を除いて炉石は抜かれる。

主柱穴は4本で西側のP₄、P₅は入口施設であろう。

土器は炉中心に覆土から床面まで層をなしぴみ捨て場状に堆積していた。

東側中央覆土中より骨片が出土している。

遺物 土器は極めて多い。器形復元できたものが12点あるが、すべて接合資料である。

1・13・14以外は結節縄文を持つものである。総体的にも同様の傾向である。

1は胴部が球状にふくらむもので、口縁は内湾ぎみにつけられる。内部は剥落痕があり、口縁形態は不明である。頸部から胴央部にかけてラッパ状突起を持つ把手が4個つけられる。口縁は入組文がみられる。胴部は無文である。

他の土器に比してやや古い感を受ける。

石器は29点出土している。内訳は打製石斧15、横刃形石器6、敲打器4、磨石2、磨製蛤刃石斧・大形粗製石匙各1点である。

(2) 弥生時代

① 第5号住居址（第438・439図）

遺構 本住居址は第6号住居址の南城に全面貼床して造られており、東側は第2号住居址が貼床している。さらに本址内を方形周溝基が切っている。

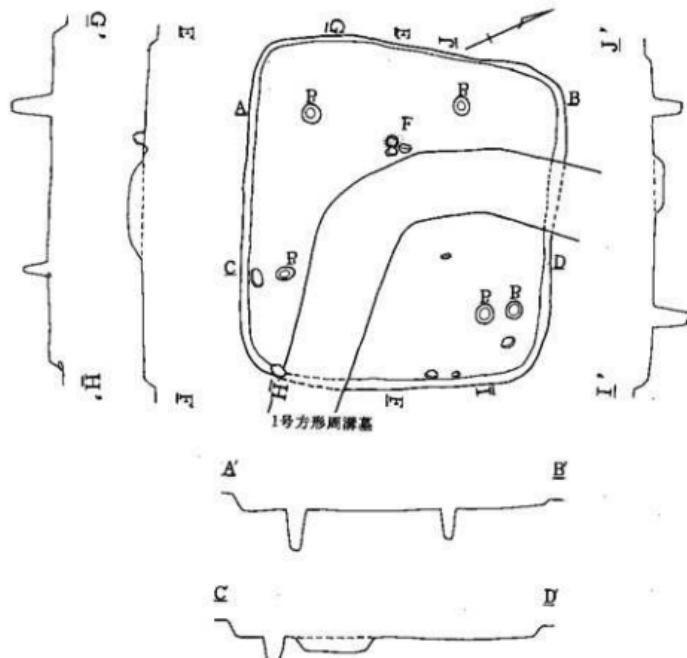
プランは南壁4.9m、北壁4.5m、南北方向4.5mを測る台形を呈している。貼床はロームを2~3cm敷き固くタタキしめており良好である。

炉は西側柱穴線上より内側に位置しており、東側に2個の枕石を持つ埋甕炉である。

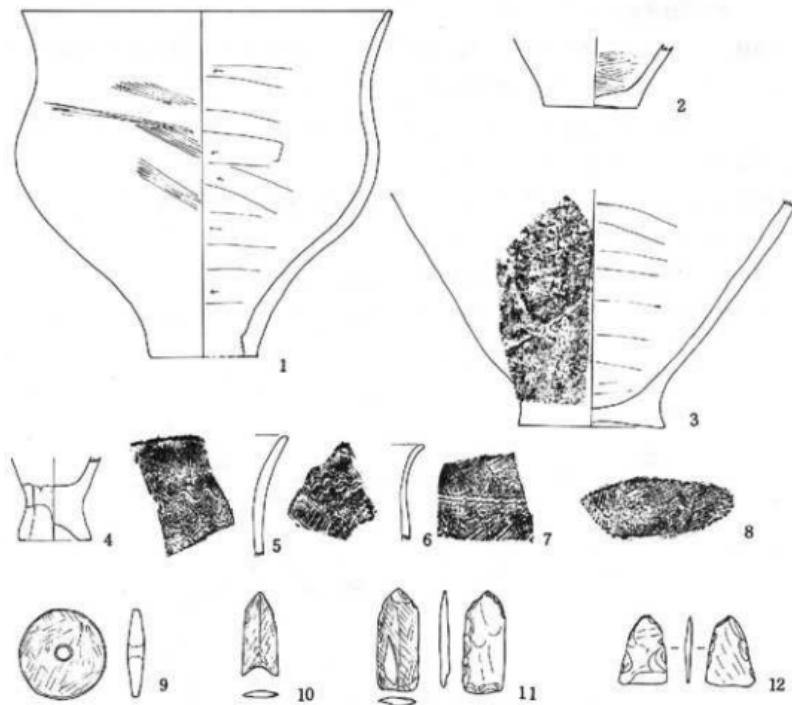
主柱穴は4本である。

遺物 土器は少ない。覆土より縄文前期の土器が出土している。

1は炉の埋甕である。底部は小さく胸部に外反ぎみになっている。口縁の反りはわずかである。



第438図 第5号住居址実測図 (S = 1/80)



第439図 第5号住居址出土遺物（1は炉、1/3）

内外面にハケ目調整がみられる。無文である。

2・3は甌の底部である。4は手づくね土器である。5～8は口縁部及び頭部破片で波状文と斜走短線文がみられる。1同様口縁の反りは少ない。

石器は敲打器4、石錐1点と石製紡錘車（9）が1点、磨製石礫が3点（10～12）出土している。11、12は研磨途中である。

時代は後期前半である。